静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第173集

東　原　遺　跡

平成16～18年度　（国）152号道路改良（交通円滑2B）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第173集

東　原　遺　跡

平成16～18年度　（国）152号道路改良（交通円滑2B）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

遺跡遠景（西より）

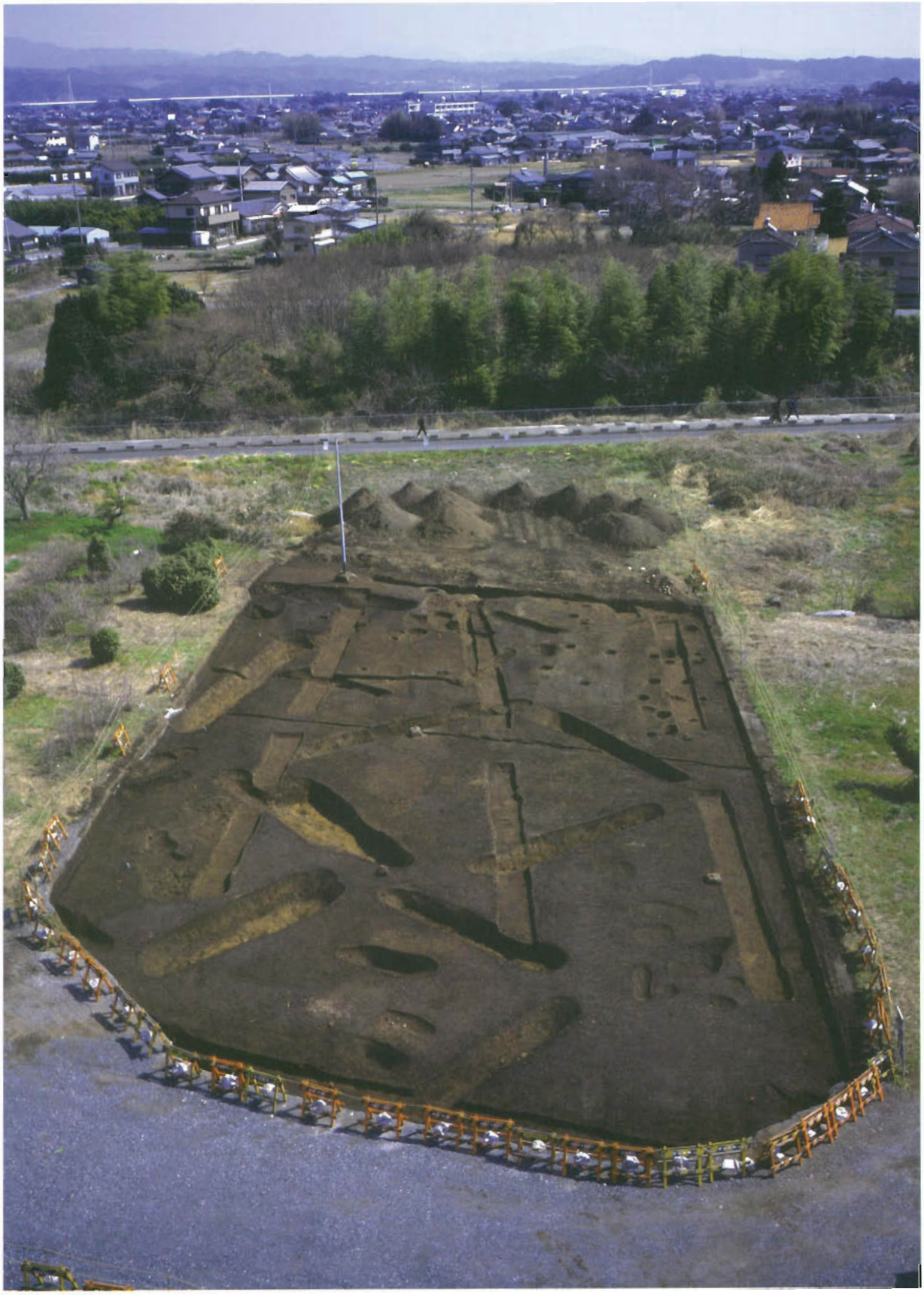
５区 SB562　全景

巻頭カラー2

2区遠景（西より）

２区　SX202 出土土器　集合写真

巻頭カラー４



４区　方形周溝墓・土器棺墓　全景（西より）

4区　方形周溝墓・土器棺集合写真

巻頭カラー6

5区　住居全景（南より）

１区　SB120出土土器　集合写真

巻頭カラー８

２区出土　土製品（土錘・皮袋形土製品・ミニチュア土器）

３区出土　江戸時代　大甕

序

今回、報告する東原遺跡の調査は、（国）152号線改良事業に伴い、平成15年度から平成18年度にかけて確認調査及び本発掘調査が実施された。

当遺跡は、静岡県浜松市（旧浜北市）新原に所在する弥生時代～奈良・平安時代の遺跡である。古くから静岡県立浜名高等学校による数回の発掘調査が行われ、竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などが見つかっており、多くの成果を挙げている。このように天竜川平野北部において様相が明らかになる数少ない遺跡であり、この地域の標識遺跡として周知されている。

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居78軒ほか、方形周溝墓８基、奈良時代の竪穴住居10軒、掘立柱建物１棟、江戸時代の屋敷地などが検出され、特に弥生時代の集落が予想以上に広がっていることが確認された。

また、弥生土器は西遠江以西に分布する山中式土器、欠山式土器を主体としながらも天竜川以東に分布の中心をもつ菊川式土器が出土しており、弥生時代の土器の変化過程や地域間交流の様相を明らかにすることのできる重要な遺跡であろう。

今後はこれまでに調査された地点や芝本遺跡も含めて、地域間交流や天竜川平野における集落構造、墓域との関係など総合的に東原遺跡、芝本遺跡の位置づけについて検討されることを望む。

最後に現地調査並びに資料整理にあたって御援助、御協力をいただいた静岡県教育委員会文化課、静岡県浜松土木事務所、浜松市教育委員会（旧浜北市教育委員会）、浜松市（旧浜北市）新原自治会など、関係諸機関にこの場を借りてお礼を申し上げたい。また、作業にあたった調査員ならびに調査補助員の労を労いたい。

平成19年２月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は静岡県浜松市新原地先に所在する東原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は（国）152号道路改良（交通円滑２Ｂ）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成15年７月に確認調査を行った。さらに平成16年９月～平成18年８月まで当研究所による確認調査及び本発掘調査を実施し、資料整理は平成18年４月から平成19年２月まで研究所本部にて行った。

3．調査体制は次のとおりである。

平成15年度　所長　斎藤　忠　副所長　飯田英夫　常務理事兼総務部長　粂田徳幸
総務部次長兼総務課長　鎌田英巳　総務部副主任　鈴木訓生
調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長兼資料課長　栗野克巳
調査研究三課長　足立順司　調査研究員　高見健司

平成16年度　所長　斎藤　忠　副所長　飯田英夫　常務理事兼総務部長　平松公夫
総務部次長兼総務課長　鎌田英巳　総務部副主任　鈴木訓生
調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克巳　調査研究三課長　足立順司
調査研究員　大谷宏治　白鳥直樹　鈴木昌明

平成17年度　所長　斎藤　忠　常務理事兼総務部長　平松公夫
総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎　総務部主事　望月高史
調査研究部長　石川素久　調査研究部次長　栗野克巳
調査研究部次長兼二課長　佐野五十三　主任調査研究員　足立順司
調査研究員　鈴木昌明　増田充弘　中谷哲久　河合　敦

平成18年度　所長　斎藤　忠　常務理事兼総務部長　平松公夫
総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎　事業担当　望月高史
調査研究部長　石川素久　調査研究部次長　及川　司　調査研究部係長　富樫孝志
調査研究員　中谷哲久　中村雅之　井鍋誉之

4．現地での基準点測量・写真測量・景観写真は（株）中日本航測に委託した。遺物実測の一部は（株）フジヤマに委託した。

5．本書で用いる方位は座標北を示し、座標は日本測地系を用いた。レベル高は海抜である。

6．遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図に明記した。

7．本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。
SB：竪穴住居・竪穴建物　SH：掘立柱建物　SD：溝状遺構　SZ：方形周溝墓　SF：土坑
SP：小穴　SX：不明遺構

8．本文中に用いる色彩の用語・記号は新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修1992）を使用した。

9．鉄製品の保存処理は当研究所保存処理室長　西尾太加二が実施し、遺物の写真撮影は当研究所写真室職員が行った。

10．本書の執筆は第Ⅰ章を中谷哲久、第Ⅱ章を本田祐二、第Ⅲ章第4節の遺物を足立順司、第Ⅴ章を松井一明（袋井市教育委員会）・鈴木京太郎（浜松市教育委員会）それ以外は井鍋誉之が執筆した。

11．発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

目　次

巻頭カラー
序
例　言

第Ⅰ章　調査の概要 ……（中谷哲久）…… 1

第1節　調査に至る経緯 …… 1

第2節　調査の方法と工程 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境 ……（本田祐二）…… 5

第1節　地理的環境 …… 5

第2節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の成果 …… 9

第1節　基本層序 …… 9

第2節　東原1区 …… 10

第3節　東原2区 …… 33

第4節　東原3区 ……（足立順司）…… 59

第5節　東原4区 …… 69

第6節　東原5区 …… 85

第7節　東原6区 …… 136

第Ⅳ章　結　語 …… 142

第Ⅴ章　H地点　第1～6次発掘調査報告 ……（松井一明・鈴木京太郎）…… 146

写真図版

挿　図　目　次

第１図　東原遺跡の位置 …… 1
第２図　東原遺跡調査区配置図 …… 4
第３図　東原遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　周辺遺跡分布図 …… 7
第５図　東原遺跡基本土層図 …… 9
第６図　１区　全体図 …… 10
第７図　１区　SB101～103実測図 …… 11
第８図　１区　SB101・102出土遺物実測図 …… 12
第９図　１区　SB104～109実測図 …… 13
第10図　１区　SB105・106出土遺物実測図 …… 14
第11図　１区　SB110・111実測図 …… 15
第12図　１区　SB110・111出土遺物実測図 …… 16
第13図　１区　SB112・113実測図 …… 17
第14図　１区　SB112・113出土遺物実測図 …… 17
第15図　１区　SB114・115実測図 …… 18
第16図　１区　SB114・115出土遺物実測図 …… 19
第17図　１区　SB116実測図 …… 19
第18図　１区　SB116出土遺物実測図 …… 20
第19図　１区　SB117・118実測図 …… 21
第20図　１区　SB117・118出土遺物実測図 …… 22
第21図　１区　SB119・120実測図 …… 23
第22図　１区　SB120出土遺物実測図（1）…… 24
第23図　１区　SB120出土遺物実測図（2）…… 25
第24図　１区　SB120出土遺物実測図（3）…… 26
第25図　１区　SB120出土遺物実測図（4）…… 27
第26図　１区　SB120出土遺物実測図（5）…… 28
第27図　１区　土坑・不明遺構実測図 …… 29
第28図　１区　小穴・土坑・不明遺構遺物実測図 …… 30
第29図　２区　全体図 …… 33
第30図　２区　SB201・202・203実測図 …… 34
第31図　２区　SB203出土遺物実測図 …… 35
第32図　２区　SB204・205・206実測図 …… 36
第33図　２区　SB204出土遺物実測図 …… 37
第34図　２区　SB206出土遺物実測図 …… 37
第35図　２区　SB208・209実測図 …… 38
第36図　２区　SB208出土遺物実測図 …… 39
第37図　２区　SF297・299実測図 …… 40
第38図　２区　SD201・204実測図 …… 41
第39図　２区　土坑・小穴・溝出土遺物実測図 …… 42
第40図　２区　SX203実測図 …… 43
第41図　２区　SX201出土遺物実測図 …… 44
第42図　２区　SX203出土遺物実測図 …… 44
第43図　２区　SX202実測図 …… 45
第44図　２区　SX202出土遺物実測図（1）…… 46
第45図　２区　SX202出土遺物実測図（2）…… 47
第46図　２区　SX202出土遺物実測図（3）…… 48
第47図　２区　SX202出土遺物実測図（4）…… 49
第48図　２区　SX202出土遺物実測図（5）…… 50
第49図　２区　SX202出土遺物実測図（6）…… 51
第50図　２区　SX202出土遺物実測図（7）…… 52
第51図　２区　SX202出土遺物実測図（8）…… 53
第52図　２区　SX202出土遺物実測図（9）…… 54
第53図　２区　SX202出土遺物実測図（10）…… 55
第54図　２区　SX202出土遺物実測図（11）…… 56
第55図　３区　全体図 …… 59
第56図　３区　屋敷地１実測図 …… 60
第57図　３区　建物１実測図 …… 61
第58図　３区　建物２実測図 …… 61
第59図　３区　屋敷地２実測図 …… 62
第60図　３区　土坑・井戸・不明遺構実測図 …… 63
第61図　３区　出土遺物実測図（1）…… 64
第62図　３区　出土遺物実測図（2）…… 65
第63図　３区　出土遺物実測図（3）…… 66
第64図　４区　全体図 …… 69
第65図　４区　SZ401実測図 …… 70
第66図　４区　SZ401出土遺物実測図 …… 71
第67図　４区　SZ402実測図 …… 72
第68図　４区　SZ402出土遺物実測図 …… 73
第69図　４区　SZ403実測図 …… 74
第70図　４区　SZ403出土遺物実測図 …… 75
第71図　４区　SZ404実測図 …… 76
第72図　４区　SZ405実測図 …… 77
第73図　４区　SZ405出土遺物実測図 …… 78
第74図　４区　SZ406実測図 …… 79
第75図　４区　SZ407実測図 …… 80
第76図　４区　SZ407出土遺物実測図 …… 81
第77図　４区　SF401・402実測図 …… 82
第78図　４区　SF401・402出土遺物実測図 …… 83
第79図　４区　小穴実測図 …… 84
第30図　５区　全体図 …… 85
第81図　５－１区　全体図 …… 86
第82図　５－１区　SB516実測図 …… 87
第83図　５－１区　SB516出土遺物実測図 …… 88
第34図　５－１区　SB517・518実測図 …… 89
第35図　５－１区　SB517・518出土遺物実測図 …… 90
第86図　５－１区　SB519実測図 …… 91
第87図　５－１区　SB519出土遺物実測図 …… 91
第88図　５－１区　SB521・522実測図 …… 92
第89図　５－１区　SB521・522出土遺物実測図 …… 93
第90図　５－１区　SB520・523・524実測図 …… 93
第91図　５－１区　SB520実測図 …… 94
第92図　５－１区　SB520出土遺物実測図 …… 94
第93図　５－１区　SB523・524実測図 …… 95
第94図　５－１区　SB523・524出土遺物実測図 …… 96
第95図　５－１区　SB525～530実測図 …… 97
第96図　５－１区　SB527実測図 …… 98
第97図　５－１区　SB528実測図 …… 99
第98図　５－１区　SB525～531出土遺物実測図 …… 100
第99図　５－１区　土坑・小穴・溝・表土出土遺物実測図 …… 101
第100図　５－２区　全体図 …… 102
第101図　５－２区　SE501・504・505・512・513・514実測図 …… 103
第102図　５－２区　SB504出土遺物実測図 …… 104
第103図　５－２区　SB513・514実測図 …… 104
第104図　５－２区　SB513・514出土遺物実測図 …… 104
第105図　５－２区　SB501・512実測図 …… 105
第106図　５－２区　SB501・512出土遺物実測図 …… 106
第107図　５－２区　SB502実測図 …… 107
第108図　５－２区　SB502出土遺物実測図 …… 107

第109図　5－2区　SB503・508実測図 …… 108
第110図　5－2区　SB503出土遺物実測図 …… 108
第111図　5－2区　SB507実測図 …… 109
第112図　5－2区　SB509・510・511・515実測図 …… 110
第113図　5－2区　SB506実測図 …… 111
第114図　5－2区　SH501実測図 …… 111
第115図　5－2区　土坑・小穴出土遺物実測図 …… 112
第116図　5－3・4区　全体図 …… 112
第117図　5－3・4区　SB545・546実測図 …… 113
第118図　5－3・4区　SB545・546出土遺物実測図 …… 113
第119図　5－3・4区　SB554・555・557実測図 …… 114
第120図　5－3・4区　SB554・555出土遺物実測図 …… 115
第121図　5－3・4区　SB556実測図 …… 115
第122図　5－3・4区　SB556出土遺物実測図 …… 115
第123図　5－3・4区　SB544・547・558実測図 …… 116
第124図　5－3・4区　SB559・560実測図 …… 117
第125図　5－3・4区　SB561実測図 …… 118
第126図　5－3・4区　SB561出土遺物実測図 …… 118
第127図　5－3・4区　SB562・563実測図 …… 119
第128図　5－3・4区　SB562出土遺物実測図（1）…… 120
第129図　5－3・4区　SB562出土遺物実測図（2）…… 121
第130図　5－3・4区　SB564・565実測図 …… 122
第131図　5－3・4区　SB564出土遺物実測図 …… 122
第132図　5－3・4区　SF5303出土遺物実測図 …… 122
第133図　5－5区　全体図 …… 123
第134図　5－5区　SB538～541実測図 …… 124
第135図　5－5区　SB539・541出土遺物実測図 …… 125
第136図　5－5区　SB542実測図 …… 125
第137図　5－5区　SB543・548・549実測図 …… 126
第138図　5－5区　SB550・551実測図 …… 127
第139図　5－5区　SB552・553実測図 …… 128
第140図　5－5区　SD501実測図 …… 129
第141図　5－5区　竪穴住居・土坑・小穴・溝・不明遺構出土遺物実測図 …… 130
第142図　5－6・7区　全体図 …… 131
第143図　5－6・7区　SB533・535実測図 …… 132
第144図　5－6・7区　SB533・535出土遺物実測図 …… 132
第145図　5－6・7区　SB534・SX5602実測図 …… 133
第146図　5－6・7区　SB534出土遺物実測図 …… 133
第147図　5－6・7区　竪穴住居・土坑・小穴・包含層出土遺物実測図 …… 134
第148図　6区　全体図 …… 136
第149図　6区　SB601・602実測図 …… 137
第150図　6区　SB603実測図 …… 138
第151図　6区　SB601・603出土遺物実測図 …… 139
第152図　6区　建物1実測図 …… 140
第153図　6区　SF607・608実測図 …… 140
第154図　6区　SF607・SD605出土遺物実測図 …… 141
第155図　東原遺跡の様相 …… 143

芝本遺跡H地点第1次～6次発掘調査報告

第1図　調査位置図 …… 153
第2図　方形周溝墓実測図 …… 153
第3図　H地点全体図 …… 154
第4図　1号方形周溝墓（1号・2号遺構）実測図 …… 155
第5図　1号方形周溝墓（3号・7号遺構）・2号方形周溝墓実測図 …… 156
第6図　2号方形周溝墓（4号・5号・6号遺構・特殊配列実測図 …… 157
第7図　1・2・3号住居跡実測図 …… 158
第8図　4・5・6・7・9号住居跡実測図 …… 159
第9図　8号住居跡実測図 …… 160
第10図　4次（第2遺構）・5・6次調査実測図 …… 161
第11図　土器実測図（1） …… 162
第12図　土器実測図（2） …… 163
第13図　土器実測図（3） …… 164
第14図　土器実測図（4） …… 165
第15図　土器実測図（5） …… 166
第16図　土器実測図（6） …… 167
第17図　土器実測図（7） …… 168
第18図　土器実測図（8） …… 169
第19図　土器実測図（9） …… 170
第20図　土器実測図（10） …… 171
第21図　土器実測図（11） …… 172
第22図　土器実測図（12） …… 173
第23図　土器実測図（13） …… 174
第24図　土器実測図（14） …… 175
第25図　土器実測図（15） …… 176
第26図　土器実測図（16） …… 177
第27図　土器実測図（17） …… 178

挿　表　目　次

表1　東原遺跡の調査一覧 …… 2
表2　東原遺跡の工程表 …… 3
表3　周辺遺跡地名表 …… 7
表4　東原遺跡の基本層位 …… 9

図　版　目　次

巻頭カラー１　東原遺跡　遠景（西より）　5区　SB562全景
巻頭カラー２　東原遺跡２区　遠景（西より）
巻頭カラー３　東原遺跡２区　SX202出土土器集合写真
巻頭カラー４　東原遺跡４区　方形周溝墓・土器棺墓全景（西より）
巻頭カラー５　東原遺跡４区　方形周溝墓・土器棺集合写真
巻頭カラー６　東原遺跡５区　住居全景（南より）
巻頭カラー７　東原遺跡１区　SB120出土土器集合写真
巻頭カラー８　東原遺跡２区　出土土製品（土錘・皮袋形土製品・ミニチュア土器）　3区　出土江戸時代大甕

図版１　１．１区　SB101・102完掘状況　２．１区　SB104・105完掘状況
図版２　１．１区　SB110完掘状況　２．１区　SB110遺物出土状況
　　３．１区　SB110炭化材出土状況
図版３　１．１区　SB111完掘状況　２．１区　SB112完掘状況
図版４　１．１区　SB117・118完掘状況　２．１区　SB117遺物出土状況
　　３．１区　SB118炉跡検出状況
図版５　１．１区　SB120遺物出土状況全景　２．１区　SB120遺物出土状況近景（1）
　　３．１区　SB120遺物出土状況近景（2）
図版６　１．１区　SF156遺物出土状況　２．１区　SF133遺物出土状況
　　３．１区　SF147遺物出土状況　４．１区　SP118遺物出土状況
図版７　１．２区　SB203完掘状況　２．２区　SB202完掘状況
図版８　１．２区　SB204完掘状況　２．２区　SB205完掘状況
図版９　１．２区　SB206完掘状況　２．２区　SB208完掘状況
図版10　１．２区　SD201・SD202完掘状況　２．２区　SX203遺物出土状況
　　３．２区　SF2246遺物出土状況
図版11　１．２区　SF202完掘状況　２．２区　SF297遺物出土状況
　　３．２区　SF299遺物出土状況
図版12　１．２区　SX202遺物出土状況全景　２．２区　SX202遺物出土状況近景（1）
　　３．２区　SX202遺物出土状況近景（2）
図版13　１．３区　屋敷地１　全景　２．３区　屋敷地1　完掘状況
図版14　１．３区　SD305完掘状況　２．３区　屋敷地2　完掘状況
図版15　１．３区　SE301検出状況　２．３区　SE302検出状況
　　３．３区　SF302遺物出土状況　４．３区　SF308内漆喰出土状況
図版16　１．３区　SF312完掘状況　２．３区　SD304内礫出土状況
　　３．３区　SF307内漆喰出土状況　４．３区　SF311完掘状況
図版17　１．３区　SF310・SD308完掘状況　２．３区　SD304・305完掘状況
　　３．３区　SD304かわらけ出土状況　４．３区　SD302・303完掘状況
図版18　１．４区　SZ401完掘状況　２．４区　SZ401周溝内遺物出土状況（1）
　　３．４区　SZ401周溝内遺物出土状況（2）
図版19　１．４区　SZ402完掘状況　２．４区　SZ402周溝内遺物出土状況（1）
　　３．４区　SZ402周溝内遺物出土状況（2）
図版20　１．４区　SZ403完掘状況　２．４区　SZ403周溝内遺物出土状況（1）
　　３．４区　SZ403遺物出土状況（2）
図版21　１．４区　SZ404完掘状況　２．４区　SZ405完掘状況
図版22　１．４区　SZ407完掘状況　２．４区　SZ407周溝内遺物出土状況（1）
　　３．４区　SZ407周溝内遺物出土状況（2）
図版23　１．４区　SF401検出状況　２．４区　SF401完掘状況
　　３．４区　SF402検出状況　４．４区　SF402完掘状況
図版24　１．４区　小穴群全景　２．４区　SP405根石検出状況
　　３．４区　SP401根石検出状況
図版25　１．５－１区　SB517・518完掘状況　２．５－１区　SB519完掘状況
　　３．５－１区　SF5125遺物出土状況　４．５－１区　SB516完掘状況
図版26　１．５－１区　SB525～530完掘状況　２．５－１区　SB521・522完掘状況
図版27　１．５－１区　SB520遺物出土状況　２．５－１区　SB520遺物出土状況近景（1）
　　３．５－１区　SB520遺物出土状況近景（2）
図版28　１．５－１区　SB523遺物出土状況　２．５－１区　SB524遺物出土状況
図版29　１．５－２区　SB501完掘状況　２．５－２区　SB502完掘状況
　　３．５－２区　SB503・508完掘状況
図版30　１．５－２区　SB504完掘状況　２．５－２区　SB512遺物出土状況
　　３．５－２区　SB507完掘状況
図版31　１．５－２区　SB509～511完掘状況　２．５－２区　SB513完掘状況
　　３．５－２区　SB505完掘状況　４．５－２区　SP556・557完掘状況
図版32　１．５－２区　SH501完掘状況　２．５－２区　SP554完掘状況
　　３．５－２区　SP555完掘状況　４．５－２区　SP553完掘状況

図版33	1．	5－3・4区　SB554・555・557完掘状況	2．	5－3・4区　SB558完掘状況
図版34	1．	5－3・4区　SB561遺物出土状況全景	2．	5－3・4区　SB561遺物出土状況近景（1）
	3．	5－3・4区　SB561遺物出土状況近景（2）		
図版35	1．	5－3・4区　SB562遺物出土状況全景	2．	5－3・4区　SB562遺物出土状況近景（1）
	3．	5－3・4区　SB562遺物出土状況近景（2）		
図版36	1．	5－3・4区　SB565完掘状況	2．	5－3・4区　SB564完掘状況
図版37	1．	5－3・4区　SB547完掘状況	2．	5－3・4区　SB545・546完掘状況
	3．	5－3・4区　SB544完掘状況	2．	5－3・4区　SF5303遺物出土状況
図版38	1．	5－5区　SB543・548・549完掘状況	2．	5－5区　SB539・541完掘状況
	3．	5－5区　SB550・551完掘状況		
図版39	1．	5－5区　SB552完掘状況	2．	5－5区　SB554・555完掘状況
図版40	1．	5－6・7区　SP5562遺物出土状況	2．	5－6・7区　SF5502遺物出土状況
	3．	5－6・7区　SB533完掘状況	4．	5－6・7区　SX5601遺物出土状況
図版41	1．	6区　SB601遺物出土状況	2．	6区　SB603遺物出土状況
図版42		1区　出土遺物（1）		
図版43		1区　出土遺物（2）		
図版44		1区　出土遺物（3）		
図版45		1区　出土遺物（4）		
図版46		1区　出土遺物（5）		
図版47		2区　出土遺物（1）		
図版48		2区　出土遺物（2）		
図版49		2区　出土遺物（3）		
図版50		2区　出土遺物（4）		
図版51		2区　出土遺物（5）		
図版52		2区　出土遺物（6）		
図版53		2区　出土遺物（7）		
図版54		2区　出土遺物（8）		
図版55		3区　出土遺物（1）		
図版56		3区　出土遺物（2）		
図版57		4区　出土遺物集合写真（1）		
図版58		4区　出土遺物（2）		
図版59		4区　出土遺物（3）		
図版60		4区　出土遺物（4）		
図版61		5区　出土遺物集合写真（1）		
図版62		5区　出土遺物（2）		
図版63		3区　出土遺物		
図版64	1	第1・2次調査地点調査風景	2	1号方形周溝墓1号遺構（完形率の高い土器が上層から出土した。北より）
	3	1号方形周溝墓2号遺構（上層は破片が多く出土する。西より）		
図版65	1	2号方形周溝墓4号遺構（完形率の高い土器が下層から出土した。北より）	2	2号方形周溝墓4号遺構（完形品はまとまって廃棄されている。西より）
	3	2号方形周溝墓4号遺構土器（壺形土器が主体である。北より）		
図版66	1	2号方形周溝墓5号遺構（破片が多い。南東より）	2	2号方形周溝墓6号遺構土器棺（壺形棺で蓋も同規模の壺胴部下半を使用している。直立埋葬である。南より）
	3	4号住居跡（隅丸方形の竪穴住居である。南より）		
図版67	1	6号住居跡（隅丸方形の小型の竪穴住居である。南より）	2	8号住居跡（隅丸長方形の大型の竪穴住居である。南東より）
	3	8号住居跡土器出土状況（埋土上層より土器が大量に廃棄されていた。東より）		
図版68	1	8号住居跡土器出土状況（破片が主体で高坏なども見られる。北より）	2	9号住居跡・溝状遺構（住居と溝は切り合うが新旧関係は不明である。東より）
	3	溝状遺構（住居群を区画する濠であるが、規模も小さく浅いため環濠ではない。西より）		
図版69	1	5次調査区北半分（複数の竪穴住居が重複する。南より）	2	5次調査区南半分・16号住居跡（隅丸方形の竪穴住居か。南より）
	3	16号住居跡土器出土状況（北より）		
図版70	1	6次調査作業風景（北東より）	2	6次調査全景（土器棺が点在するが溝は近世である。西より）
	3	1号土器棺（蓋に小型の土器を使用している。横向き埋葬である。東より）		
図版71	1	1号方形周溝墓出土主要土器	2	2号方形周溝墓出土主要土器
	3	6号住居跡出土主要土器・6次調査土器棺1		

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

本書で報告する東原遺跡は浜松市北部（旧浜北市）の新原に所在する。この周辺では1950年代より浜名高等学校史学クラブにより小規模な調査が行われ、多くの成果を挙げている。近年では（旧浜北市教育委員会）により調査が行われており、隣接する芝本遺跡と東原遺跡は一体であることが判明し、天竜川平野北部の弥生時代後期を代表する標識遺跡として周知されている。

現在の天竜川平野の北部地域には国道152号線、遠州鉄道西鹿島線が縦貫し、北側には天竜浜名湖鉄道、国道362号線が東西に通っている。東名高速道路浜松インターチェンジからは約20分の距離にあり、天竜川には浜北大橋が架けられ、天竜川南部、天竜川東部地域との交流が盛んである。

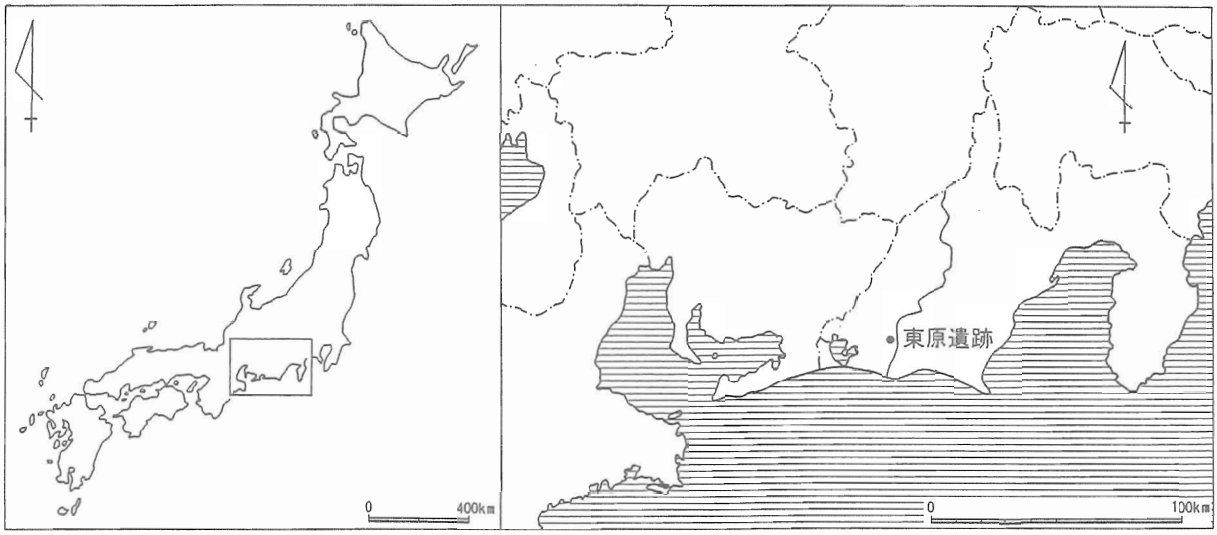
国道152号線は長野県上田市を起点に静岡県浜松市に至る道路で、県内の延長距離が82㎞ある。

近年、東名高速道路の交通量の増加から第二東名高速道路の路線が浜松市北部に決定され、さらに第二東名高速道路浜北インターチェンジが建設されることになった。それに伴い、周辺道路には交通量の増加、両高速道路を利用する大型車の増加が予想された。しかし、こうした交通量の増加は152号線の交通渋滞を引き起こし、歩行者の安全確保の観点から道路の拡幅が必要となり、天竜市山東から浜松市新原までの7.9㎞が浜北～天竜バイパスとして整備されることになった。

このため、静岡県浜松土木事務所では、152号バイパス建設予定地内の遺跡の有無を静岡県教育委員会に照会した。県教育委員会は遺跡地図に基づき、路線内の浜松市新原地区に東原遺跡が存在し、調査が必要であると回答した。

この後、静岡県浜松土木事務所と静岡県教育委員会で断続的な協議を行い、路線内に所在する東原遺跡の確認調査及び本発掘調査を実施することとなった。

このように東原遺跡の確認調査及び本発掘調査は静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成15年度～平成17年度の３ヵ年にわたり調査を行った。資料整理作業は平成18年度に実施した。



第１図　東原遺跡の位置

第２節　調査の方法と工程

東原遺跡は確認調査を平成15年度に実施し、ほぼ全域で遺跡が広がることが確認された。このため、本発掘調査は平成16年度から平成18年度の２ヵ年にわたり実施した。調査区は道路及び遠鉄線路沿いで、Ｔ字状の細長い調査区であり、便宜的に東西部分を１～４区、遠鉄路線沿いは５・６区と分け、状況に応じて細分化した。今回の本発掘調査面積合計は10,981㎡である。

表１　東原遺跡の調査一覧

調査次	調査地点	調査年	主な検出遺構	調査主体	調査原因	備考
第1次	F地点	1964	遺構・遺物なし	浜名高校		調査区不明
第2次	D地点	1965	古墳時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校1次	浜名高校1968 浜北市教委1981
第3次	D地点	1968		浜名高校	浜名高校2次	
第4次	B地点	1969	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校3次	浜名高校1970
第5次	B地点	1970		浜名高校	浜名高校4次	
第6次	B地点	1971	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校5次	浜名高校1974・1979
第7次	B地点	1972		浜名高校	浜名高校6次	
第8次	B地点	1973		浜名高校	浜名高校7次	
第9次	B地点	1975		浜名高校	浜名高校8次	
第10次	B地点	1976		浜名高校	浜名高校9次	
第11次	B地点	1977		浜名高校	浜名高校10次	
第12次	B地点	1978		浜名高校	浜名高校11次	
第13次	E地点	1978	江戸時代～明治時代の溝	浜北市教委	152バイパス1次	浜北市教委1983
第14次	B地点	1979	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校12次	浜名高校1983
第15次	C地点	1979	江戸時代～明治時代の溝	浜北市教委	152バイパス2次	浜北市教委1980
第16次	A地点	1980	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校13次	浜名高校1983
第17次	A地点	1981		浜名高校	浜名高校14次	浜名高校1983
第18次	B地点	1981	弥生時代後期	浜北市教委	152バイパス3次	浜北市教委1982
第19次	C地点	1982	遺構・遺物なし	浜名高校	浜名高校15次	
第20次	B地点	1982	弥生時代後期	浜北市教委	152バイパス4次	浜北市教委1983
第21次	A地点	1983	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高校	浜名高校16次	
第22次	A地点	1984		浜名高校	浜名高校17次	
第23次	A地点	1985		浜名高校	浜名高校18次	
第24次	A地点	1986		浜名高校	浜名高校19次	
第25次	D地点	1987	遺構・遺物なし	浜名高校	浜名高校20次	調査区不明
第26次	B地点	1988	竪穴住居？	浜名高校	浜名高校21次	
第27次	D地点	1990	古墳時代終末期	浜北市教委	送電線鉄塔建設	浜北市教委1991
第28次	D地点	1994	古墳時代終末期	浜北市教委	県営畑総1次	浜北市教委1994
第29次	A・B地点	2000	弥生時代　竪穴住居16軒 土器集積	浜北市教委	県営畑総2次	浜北市教委2002
第30次	A・E地点	2004	弥生時代　竪穴住居20軒 土器集積1基 方形周溝墓8基 土器棺墓3基 奈良時代　竪穴住居10軒 江戸時代　区画溝 屋敷地	静岡埋文研	152バイパス5次	本書報告2007
第31次	B地点	2005	弥生時代　竪穴住居 53軒	静岡埋文研	遠鉄高架1次	
第32次	B地点	2006	弥生時代　竪穴住居3軒 江戸時代　墓2基　建物跡1棟　区画溝	静岡埋文研	遠鉄高架2次	

調査の方法　全調査区の表土及び撹乱土は重機（バックフォー）を用いて除去した。バックフォーのバケットは平爪を用いて掘削し、排土処理にはクローラーダンプを使用した。表土下は包含層であり、この上面まで重機による掘削を行った。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削　包含層掘削は鋤簾を用いて掘削した。包含層は黒褐色土層で、遺構検出は褐色土層上面であり、検出作業は比較的容易であった。竪穴建物等の遺構の調査にはセクションベルトを設定し、埋土の把握につとめた。残存状況の良好な建物には土層断面図を作成した。特にカマドの検出にはサブトレンチを設定し、カマドの把握につとめた。遺構内の主な出土遺物は出土状況図を作成し、番号を付け、取り上げた。

記録作成　遺構の平面図は1/100の平面図と1/20の図面を作成した。この図面の作成には（株）中日本航空に委託し、ラジコンヘリを用いて作成した。これ以外の遺物出土状況図や断面図等は委託によらず、調査員の指導により現地作業員が作成した。遺構全景撮影はローリングタワー用い、大型カメラを使用した。写真記録は6×7判モノクロ・カラーリバーサル撮影を基本とし、作業工程用には35㎜カラーネガを用いた。なお、現地調査と併行して出土遺物の洗浄作業、注記作業等の基礎整理作業を現地事務所にてすすめた。

資料整理作業　資料整理作業は当研究所本部（静岡市谷田）にて土器の接合作業や金属製品の汚れや錆落としといった1次処理作業をすすめ、順次、出土品の実測作業、写真撮影作業を実施した。さらに報告書刊行に向けて遺構図面の整理作業を行い、版下・トレース作業・原稿執筆作業をすすめた。こうして報告書に掲載された遺物は挿図番号順に収納し、そのほかの図面資料や写真資料は必要に応じて検索できるように収納台帳を作成した。

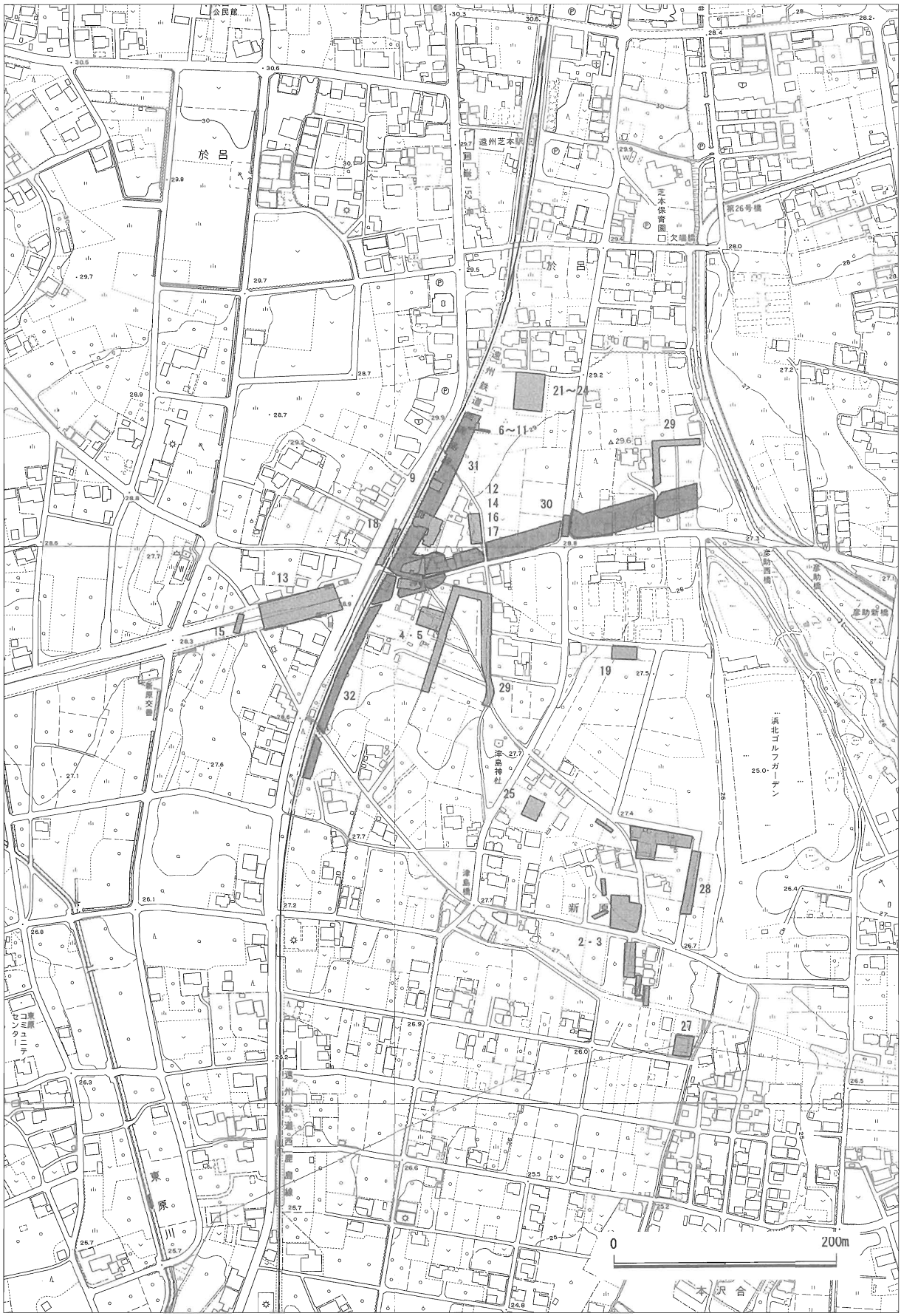
バックフォーによる表土除去作業

人力による平面精査

土器接合作業

表1　東原遺跡の工程表

	面積（㎡）	平成16年度							平成17年度												平成18年度											
		9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1区	1,100																															
2区	1,764																															
3区	2,000																															
4区	825																															
5区	3,896																															
6区	1,396																															
資料整理	10,981																															



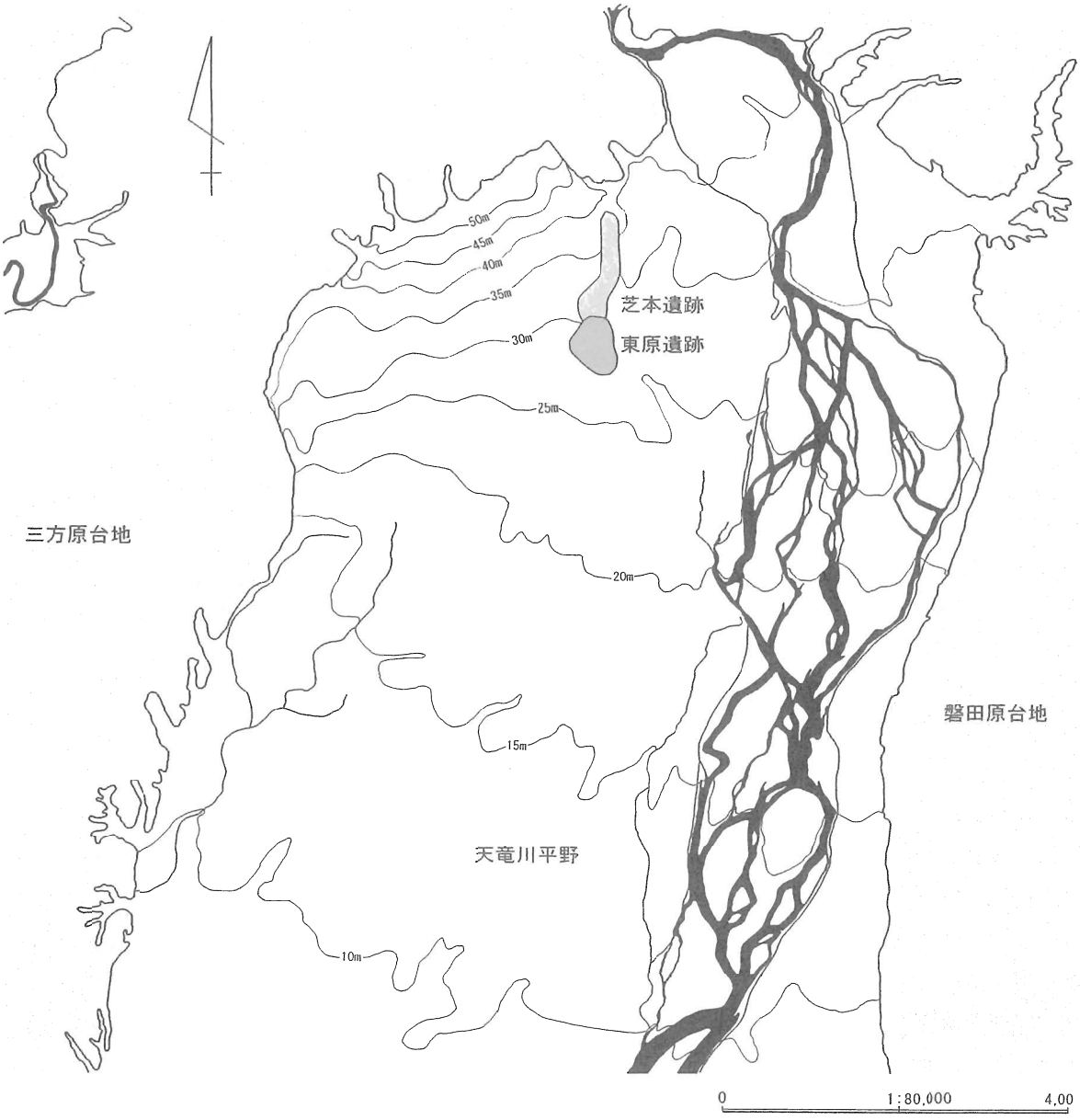
第２図　東原遺跡調査区配置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

浜松市は静岡県西部に位置し、東原遺跡が所在する浜松市新原は、平成17年７月の合併以前は浜北市に属していた。旧浜北市域の地形は北部の山地及び丘陵、三方原台地、河岸段丘、扇状地状の平野部の四つに区分され、それらの形成にはその東側を流れる天竜川が大きく影響を与えている。当遺跡は、三方原台地東縁に位置する河岸段丘の最下面である浜北面の段丘崖沿いに、南北に細長く形成された自然堤防状に立地しており、この自然堤防は南へ行くに従い徐々に低くなり、平野部へとなだらかに接続している。

浜北面は砂礫層を基盤に、その上を砂質土、黒色土、赤褐色土、粘土などが覆っており、なかでも黒色土は通称「黒ボク」と呼ばれる腐植土層で、浜北面の大部分の地域で最上層としてみられる。この「黒ボク」は腐食に富み、水はけも良いため畑作に適しており、遺跡周辺では宅地化が進む一方である。



第３図　東原遺跡周辺地形図

第２節　歴史的環境

旧浜北市域には、北部の丘陵地や三方原台地、河岸段丘上に旧石器時代以来多くの遺跡が分布している。なかでも、東原遺跡が立地する段丘上においては、第二東名高速度道路建設事業に伴う発掘調査において、新たな遺跡の発見が相次ぎ、注目される。

旧浜北市域での旧石器時代の遺跡数は、磐田原台地上に比べその数は少ない。旧石器時代の人骨の出土で知られる根堅遺跡では人工遺物は出土してはいないが、梔池遺跡では黒曜石製のナイフ形石器や細石刃などが出土している。

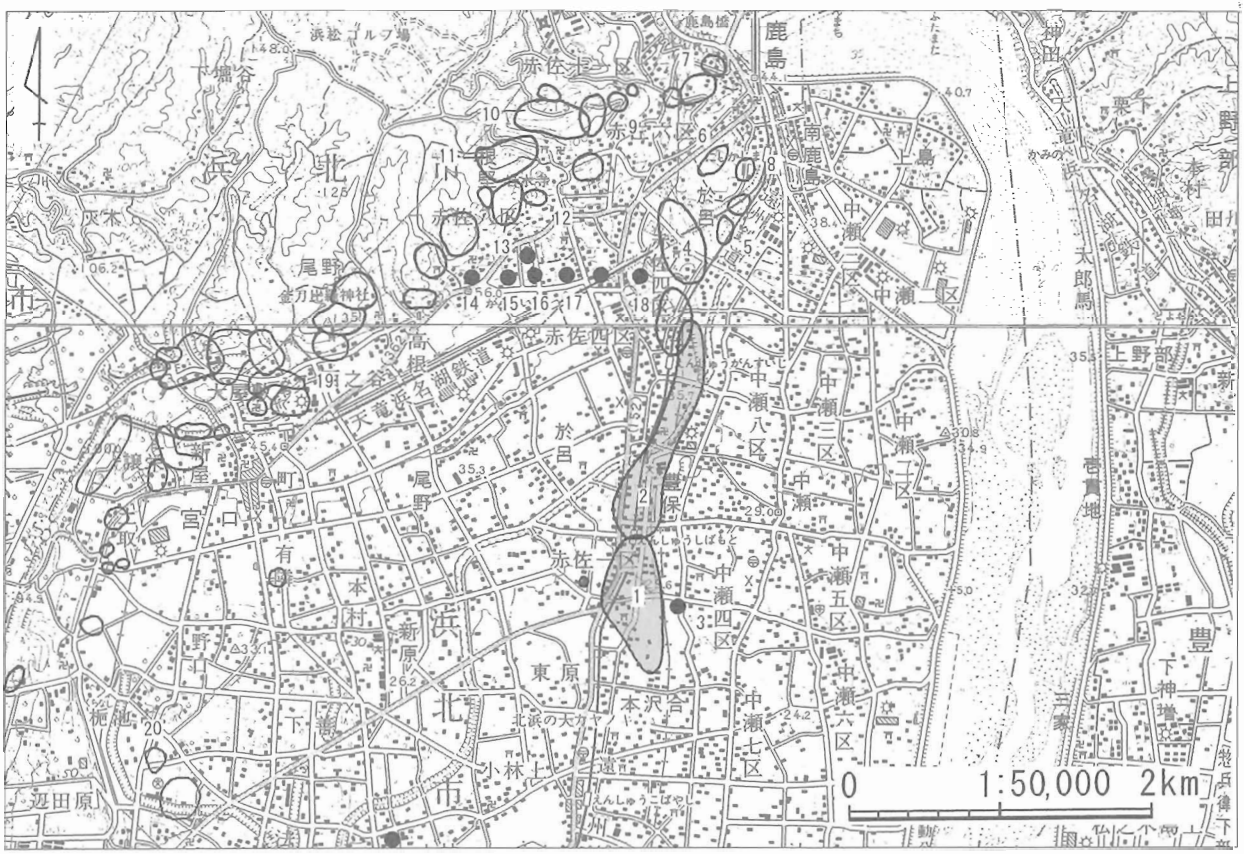
縄文時代になると遺跡数は増加する。北部の丘陵地に面する浜北段丘上に、草創期～早期の炉穴241基と集石炉37基が検出された中通遺跡がある。中期になると、三方原台地上に位置する富岡大谷遺跡や富岡段丘上の染地石遺跡、浜北段丘上の梔池遺跡において住居跡が検出されている。いずれも丘陵や段丘上でも比較的高位の位置に立地する遺跡で、その他遺物が採集されている遺跡も同様に分布する傾向が見られる。

弥生時代の遺跡になるとやや減少し、集落の立地にも変化が見られ、高位段丘から低位段丘へ移動する傾向がある。今回、調査を行った東原遺跡の北側の芝本遺跡は、東原遺跡とともに浜名高等学校史学クラブや浜北市教育委員会により数次に渡り、調査が行われている。芝本遺跡では、包含層や周辺から前期の水神平式土器が出土しているが、遺構に伴うものではない。中期になると後半の時期に比定される瓜郷式土器や嶺田式土器を伴う住居跡がB地点において確認されている。また、芝本遺跡のB・C地点において中期の土器の散布がみられることから、少なくともこの時期から芝本・東原遺跡の集落形成が始まったものと考えられ、遺跡の北側を中心に集落域が形成されていたものと思われる。

後期になると芝本・東原遺跡の集落は南側へと展開、大規模な集落へと発展する。芝本遺跡ではD・F・H地点、東原遺跡ではA・B地点において、調査により当該時期の遺構が確認されている。竪穴住居跡は芝本遺跡D地点で１軒、F地点で１軒、H地点で９軒が、東原遺跡では、A地点で５軒、B地点で59軒が発見されており、この他に、芝本遺跡H地点では方形周溝墓２基と土器棺墓３基、溝状遺構１条、遺物が集中する特殊配列２列、不明遺構などが、東原遺跡A地点では方形周溝墓２基、B地点では円形周溝墓の可能性が考えられる遺構１基、土器集積１基などが検出されている。東原遺跡、芝本遺跡ともに狭い範囲での部分的な調査が行われているだけであるため、集落の詳しい様相については不明な点が多い。現在のところ、集落を取り囲む環濠の存在は確認されていないが、芝本遺跡H地点では住居跡を取り囲むように掘削された溝状遺構が検出されており、集落内部を区画する溝であると考えられる。また、東原遺跡A地点では方形周溝墓が発見されているが、その周囲では現在のところ竪穴住居跡が見つかっていないことから、集落内部において居住域と墓域が明確に分けられている可能性も考えられる一方で、芝本遺跡H地点においては方形周溝墓と竪穴住居跡が隣接して存在しているなど、集落内部の構造の解明については今後の調査、研究の進展に期待がかかる。

芝本・東原遺跡ではこれまでに多数の後期弥生土器が出土しているが、それらは主に壺・甕・高坏などの器種である。静岡県西部地域はこの時期、天竜川を挟み東と西で土器の様式圏が異なる。天竜川以東は菊川様式土器分布圏として把握され、東原遺跡のある天竜川以西は、伊勢湾沿岸を広く包括する後期前半の山中様式、後期後半の欠山様式の土器分布圏として認識されている。なかでも、芝本・東原遺跡の位置する天竜川平野北部地域は、東に広がる菊川様式土器分布圏と天竜川を境として接していることから、その影響を強く受けた形態の土器が多くみられることが指摘されていて、両者の交流が活発であったと考えられている。

遺構より出土している土器で、これまでのところ芝本遺跡B地点で出土している中期後半の時期に後



第４図　周辺遺跡分布図

表３　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	東原遺跡	2	芝本遺跡	3	彦助堤	4	御馬ヶ谷古墳群	5	向山B古墳群
6	向山A古墳群	7	向野古墳群	8	向野Ⅰ遺跡	9	勝栗山A古墳群	10	勝栗山B古墳群
11	泉A古墳群	12	根堅遺跡	13	泉B古墳群	14	中通遺跡	15	寺海土遺跡
16	中屋遺跡	17	大門西遺跡	18	篠場瓦窯	19	興覚寺後古墳	20	梔池遺跡

続する、後期前葉の土器は確認されていない。出土している土器の多くは後期中葉に比定されるものであり、後葉のものになると減少する。このことは芝本・東原遺跡の集落規模が後期中葉に最盛期を迎え、後葉になると縮小していき、その後は継続して集落が営まれることなく、何らかの理由により途絶えてしまったことを示すものと考えられている。

古墳時代になると旧浜北市域では多くの古墳が、北部の山地や丘陵部、西部の三方原台地縁辺部などに築造される。前期後半に全長56.3mの前方後円墳である赤門上古墳が築造されたのをはじめとして、中期から終末期にかけて多くの古墳群が造営される。東原遺跡が立地する浜北段丘の北に位置する北部の丘陵では向山古墳群や向野古墳群、勝栗山古墳群、泉古墳群などが、浜北段丘上では御馬ヶ池古墳群や新原古墳群といった古墳時代後期から終末期にかけての群集墳が多数築かれた。これら多くの古墳の存在にも関わらず、古墳時代の集落の様相は判然としない。前期から後期の集落跡は確認されておらず、７世紀代の集落跡が浜北段丘上に位置する大門西遺跡や東原遺跡B地点、D地点などで発見されている。律令体制の成立に伴い、中央による地方支配体制の整備が進められると、西部地域は遠江国とされ十郡が設置された。旧浜北市域は麁玉郡・磐田郡・長田郡（709年に長上・長下の二郡に分割）の三郡に含まれていたとされる。官衙や集落の様相は調査があまり進んでいないが、浜北段丘上に立地する向山Ⅰ遺跡と清水遺跡があげられる。向山Ⅰ遺跡では住居跡と溝が検出されている。清水遺跡は発掘調査が行

われてはいないものの奈良～平安時代の土器などが発見されており、遺跡の立地状況や採集土器から麁玉郡衙の推定地の一つとされている。

当地域は古代になると窯業生産が盛んに行われ、篠場瓦窯跡群は浜北段丘の東斜面に立地する白鳳時代の瓦窯で、３基の瓦窯跡が検出されている。その後は北部の丘陵を中心に生産は展開され、平安時代から中世にかけて灰釉陶器や山茶碗などの生産が行われていた。

天竜川は当時「荒玉河（麁玉川）」と呼ばれ、段丘崖線に沿って南下していたとされる。洪水を引き起こしていたことが史料から伺われ、道本に現存する天宝堤はその当時に修築されたと伝えられている。

中世に入ると浜北段丘上に遺跡数が増加する。中屋遺跡は鎌倉時代の居館跡である。この地は豊橋と天竜二俣を結ぶ交通の要衝に位置することから、当地域を治めていた領主の居館跡と推測されている。また、西側には寺海土遺跡、中通遺跡が存在し、祭祀土坑や掘立柱建物跡が確認されている。

近世になると当地域は、新原村として旗本近藤氏の領地となる。今回、調査した南東側には、延宝三年（1675）に築かれたといわれる彦助堤が現存する。近世初頭の天竜川は現在の西鹿島付近で本流の大天竜と小天竜の二筋に分かれ、そのうち小天竜が東原遺跡の付近を流れていたと考えられている。天竜川はしばしば洪水を引き起こし、小天竜による増水氾濫は周囲の村々に大きな被害をもたらしていた。そのため、新原村の庄屋、松野彦助の提案により堤が築かれたといわれている。

参考文献

静岡県西部農林事務所・浜北市教育委員会　1994『東原遺跡D地点』

静岡県西部農林事務所・浜北市教育委員会　2002『東原遺跡A地点・B地点』

浜北市　1988『浜北市史』浜北と天竜川

浜北市　1989『浜北市史』通史上巻

浜北市　2004『浜北市史』資料編　原始・古代・中世

浜北市教育委員会　1978『東原遺跡（１）』

浜北市教育委員会　1980『浜北市東原遺跡（Ⅱ）』

浜北市教育委員会　1981『浜北市東原遺跡D地点』浜北市史資料３

浜北市教育委員会　1982『浜北市東原遺跡（３）』

浜北市教育委員会　1983a『浜北市東原遺跡（４）』

浜北市教育委員会　1983b『浜北市東原遺跡B地点（Ⅰ）』浜北市史資料４

浜北市教育委員会　1985『浜北市芝本遺跡B地点』

浜北市教育委員会　1991『東原遺跡D地点』

浜名高等学校史学クラブ　1969『伎部』第２号

浜名高等学校史学クラブ　1970『伎部』第３号

浜名高等学校史学クラブ　1974『伎部』第５号

浜名高等学校史学クラブ　1979『伎部』第６号

浜名高等学校史学クラブ　1983『伎部』第11号

松井一明・鈴木京太郎　2004「芝本・東原遺跡群より見た弥生後期集落と土器」『浜北市史』資料編　原始・古代・中世

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　基本層序

浜松市の東側を流れる天竜川は「あばれ天龍」と呼ばれる東海型河川である。流域の大部分は山岳地帯に属し、天竜市以南から河口までの狭い範囲に沖積平野を形成してきた。

このように周辺の地形形成には、天竜川の影響を大きく受けており、三方原台地東縁部から東側にかけて旧天竜川の形成した河岸段丘が大きく３面確認され、上位から富岡面、姥ヶ谷面、浜北面と呼称されている。東原遺跡はその浜北面の南北２㎞に連なる自然堤防の微高地上に立地する。

この微高地上には「黒ボク土」と呼ばれる腐食に富む有機質土が堆積しており、本遺跡においても表土下に20～50cmの厚さで暗黒褐色土が堆積している。この層位は大部分が弥生時代後期の遺物包含層にあたり、一部の調査区で奈良時代前半～中葉の遺物が認められた。

遺構面の確認には数次にわたる以前の調査において黒ボク下の暗褐色土上面が遺構面であると指摘されているが、検出段階では明瞭に判別できなかったため、４層の黄褐色土上面で確認した。今回、報告する東原遺跡の基本層序は旧浜北市が調査を実施した（浜北2002）の基本土層と整合性を持たせたが、本調査区が東西・南北に細長く連なっており、層位的に細部の違いが生じている。これらの状況をふまえ、ここでは東原５区の土層堆積状況を基本に模式化した。

１層　暗褐色土

調査以前の畑地であった耕作土の厚さは5～10センチ程度である。この層からは弥生～近世にかけての遺物が表面採集できた。

２層　暗黒褐色土

最大で50cmの厚さがあり、炭化物や黄褐色の砂礫を若干含み、粘性・しまりとも弱い。この層からは弥生～古代の遺物を包含する層である。調査区によってはこの層は消滅している。

３層　暗褐色土

漸移層である。本来の遺構の掘り込みはこの面であると指摘されるが、ほとんどの調査区で明瞭に判別できなかったため、4層上面で遺構を確認した。

４層　黄褐色土

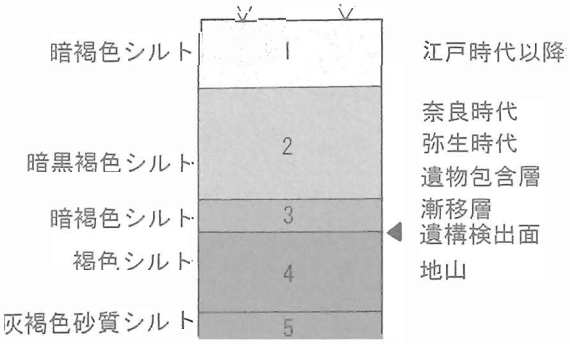
50cm前後の厚さがあり、地山である。

５層　灰褐色砂質土

５～30cmの円礫が多く堆積する層である。

表４　東原遺跡の基本層位

東原遺跡A・B地点（浜北市2002）	本報告（2007）	備　考
表土	1層（暗褐色土）	江戸時代以降
黒色土（黒ボク土）	2層（暗黒褐色土）	奈良時代 弥生時代 遺物包含層
暗褐色土	3層（暗褐色土）	漸移層
明黄褐色土	4層（褐色土）	遺構検出面
	5層（灰褐色砂質土）	



第５図　東原遺跡基本土層図

第２節　東原　１区

１区の検出遺構（第６図）

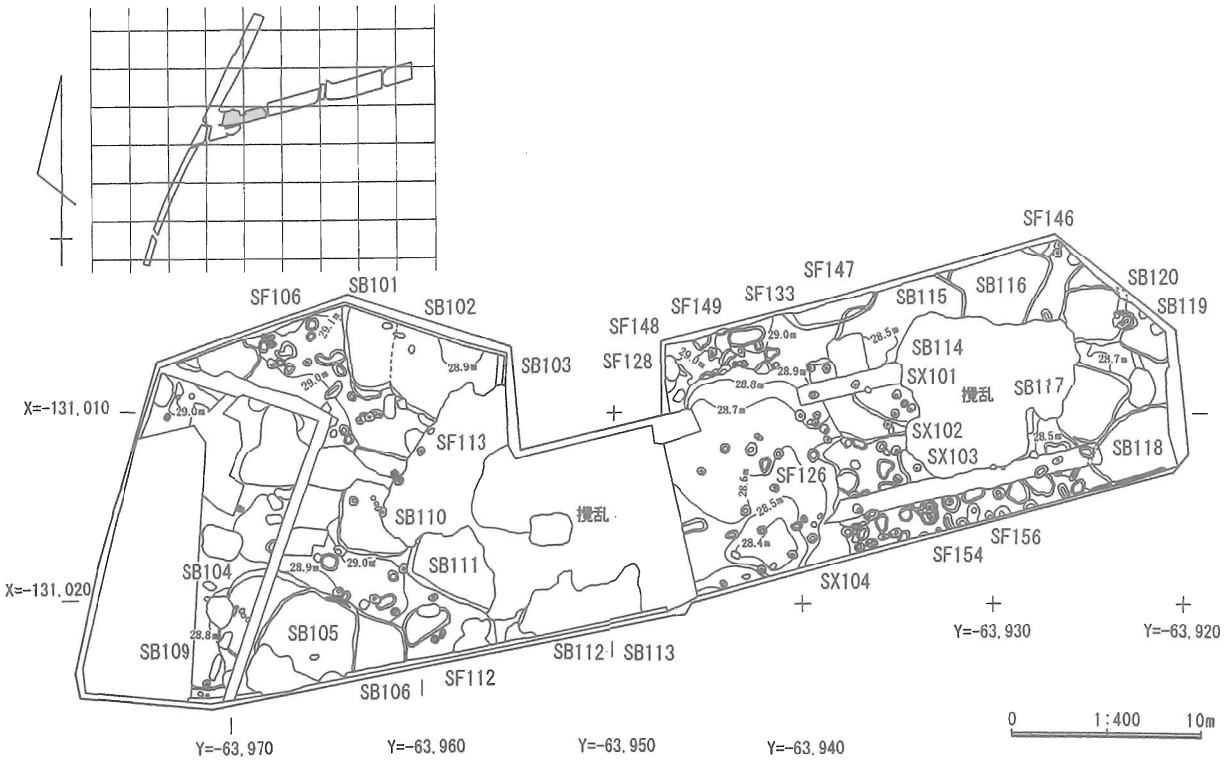
概　要

今回の調査地点は東原B地点のやや西側に属し、東原遺跡の中では最も多く調査が実施されているところである。これまでに浜名高等学校による調査や旧浜北市教委による152号バイパス関連、県営畑地体総合整備事業による発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴建物が40軒近く検出されていることから島状の微高地に大規模な集落が展開していることが判明している。

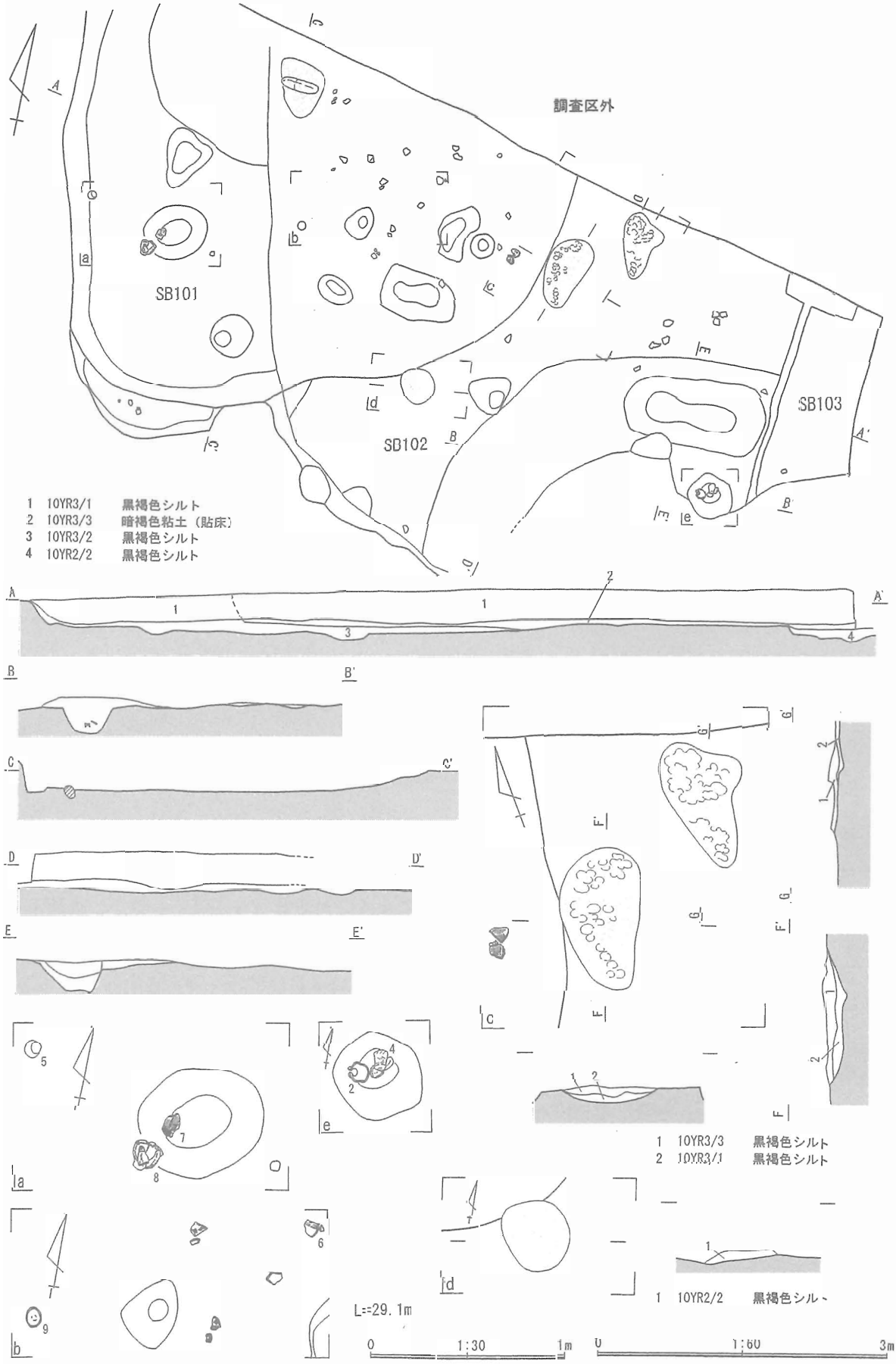
今回の調査も同様の成果が予想され、１区は竪穴住居20軒、多数の土坑、小穴が検出された。調査区の西端は東原遺跡20次調査（152号バイパス４次調査）を行っている箇所と重複しており、ここからは竪穴住居は６軒ほど確認されている。このため、本来は30軒近くの住居が立地していると考えられる。東原遺跡の検出されたほとんどの住居は重複関係をもち、数度に及ぶ柱の建て替えが認められる。しかしながら、撹乱の影響もあって全体像が判明しているものは少ない。

奈良時代前葉～中葉の建物は1棟確認されており、カマドは東壁につく。29次調査では奈良時代の竪穴建物１棟が検出されており、建物の基数は少ないもののB地点において奈良時代の集落の広がりが確認された。この建物の特徴として建物内から出土しているほとんどの土器には２次的な被熱を受けており、火災住居であった可能性が高い。特に須恵器の出土量は少なく、土師器の坏が大半を占める。

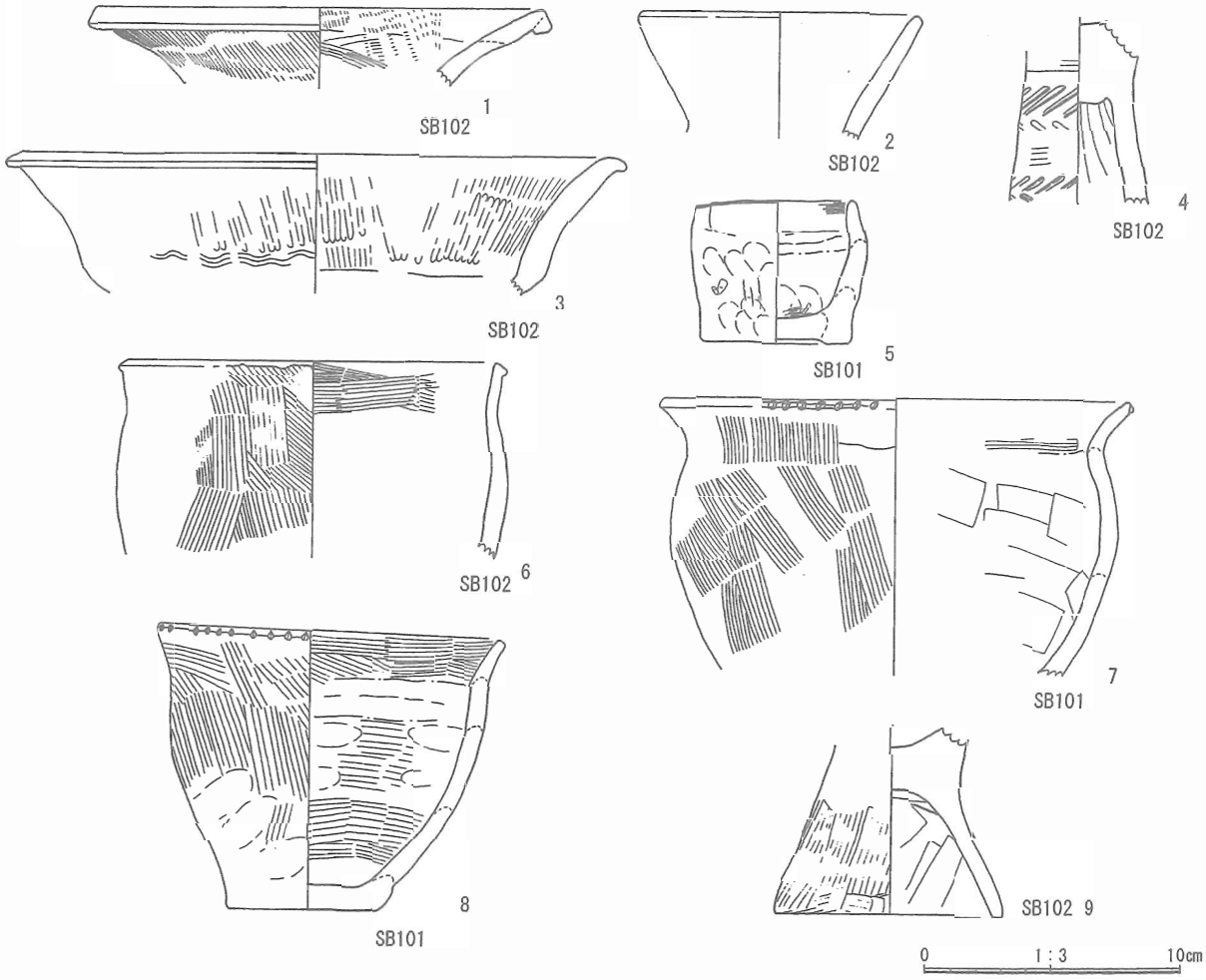
奈良時代以外の建物はすべて弥生時代後期に比定される。住居の形状は方形、隅丸方形が多く認められる。住居の規模は径３～４ｍ代が多い傾向がある。炉の位置はほぼ中央に位置するものから住居の隅のやや偏った位置で検出される例もみられた。炉の特徴としては通有の地床炉のほかに炉の一端部に細長



第６図　１区　全体図



第７図　１区　SB101～103実測図



第8図　1区　SB101・102出土遺物実測図

い石を置くものがみられた。

そのほか遺構として掘立柱建物や集落を区画する溝等は確認できなかった。弥生時代の遺構から出土する土器は小破片が多いうえに出土量はきわめて少ないことから時期認定は困難であるが、後期中葉～後期後葉のものがほとんどであった。

竪穴住居

SB101～103（第7図　図版1）

調査区西側の北壁部分に位置する。3棟の住居が切り合い、構築順序は明確ではないが、SB101・SB103の後にSB102が構築されている。SB101には小穴が複数検出されているが、柱穴であるか不明であった。炉はほぼ中央に設置され、不整形な楕円形内に細長い礫が含まれていた。SB102には少なくとも3基の炉が確認されており、住居の切り合い、あるいは貼床の貼り替えが想定される。長楕円形の炉は熱を強く受け、硬化していた。遺物は床面や小穴からまんべんなく出土している。

時　期　弥生時代後期中葉

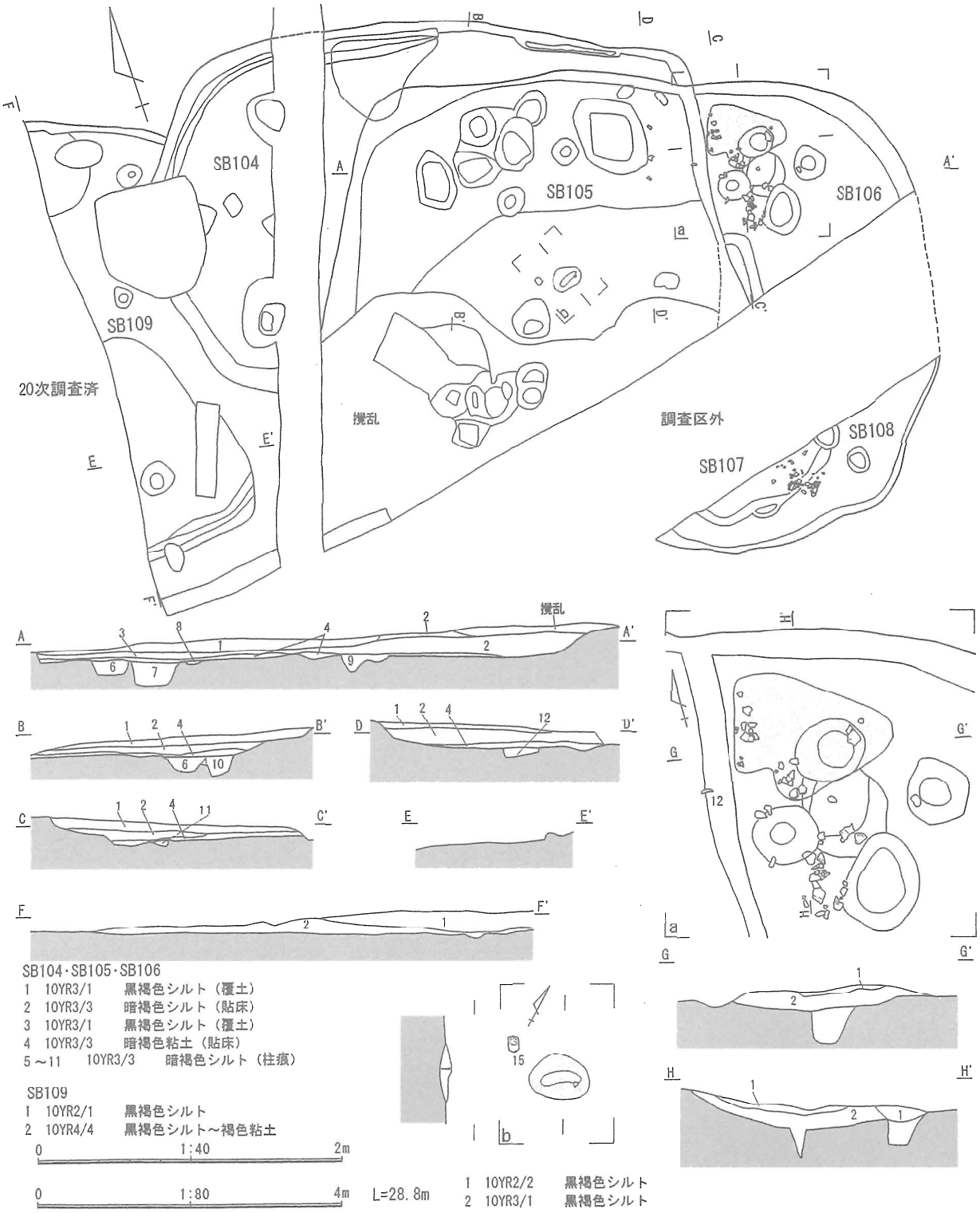
SB101出土遺物（第8図　図版42）

5は小型の壺である。口縁部はやや内湾し、底部は上げ底である。内外面との指頭圧痕が観察される。8は小型の鉢で、口縁部の屈曲は弱い。胴部最大径は上部にある。外面は斜めハケ、内面は横ハケである。7はやや球胴状を呈した台付甕である。口縁部の屈曲は弱い。外面は胴部が斜めハケ、頸部が縦ハ

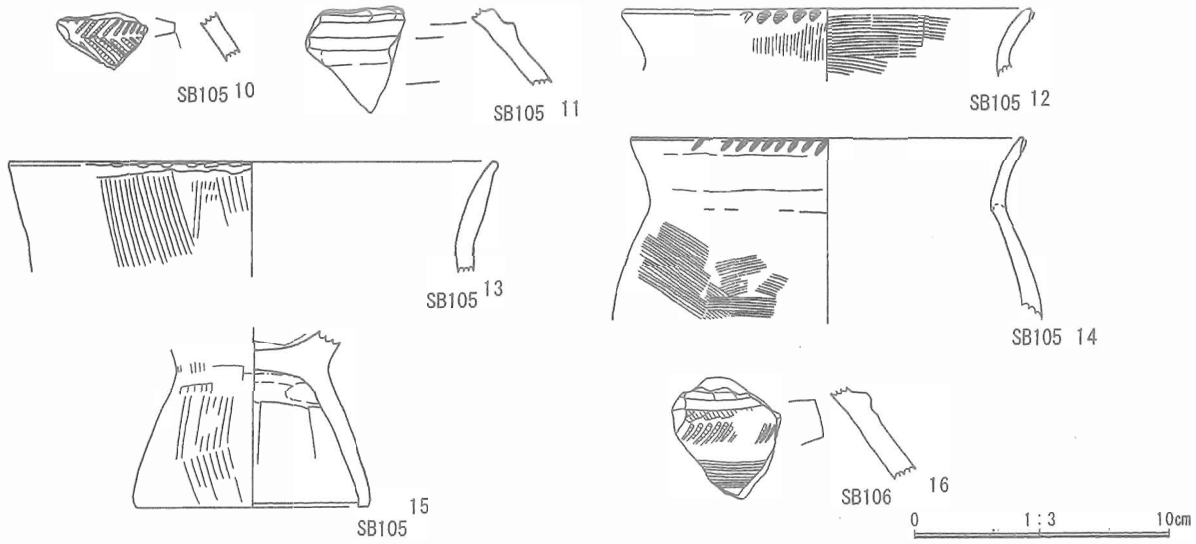
ケである。内面は板ナデが施される。9は台付甕の脚部である。

SB102出土遺物（第8図）

1は折返口縁壺で、内外面ともハケ調整がみられる。端部は断面方形に近い形状である。2は単純口縁壺である。3は高坏で、口縁部はわずかに外方へ張り出す。坏部の屈曲部分に櫛描波状文が巡る。内外面とも縦方向のミガキがみられ、特に内面は3段階に分けて施される。4は高坏の脚部である。櫛描直線文間には櫛刺突文が入る。6は屈曲の弱い甕である。端部はわずかに張り出し、比較的薄手である。



第9図　1区　SB104～109実測図



第10図　1区　SB105・106出土遺物実測図

SB105・106出土遺物出土遺物（第10図）

10は壺の肩部で櫛描刺突文がつく。11は壺肩部で、1条の突帯が巡る。12は小型の台付甕で、端部に刻みがつく。13はくびれの弱い台付甕で、外面は縦方向のハケ調整が施される。14は台付甕で、端部に刻みがみられる。15は台付甕で、やや内湾する脚部である。16は壺肩部で、1条の突帯下に櫛刺突文がつき、その下には櫛描直線文が施される。

SB104～109（第9図　図版1）

調査区の南西側で検出された。少なくとも3棟は切り合っている。SB104は楕円形の住居で長軸4m、短軸2.75mである。壁溝や貼床が一部みられた。柱間間隔は1.8mである。SB105・SB106は長軸4.6mの楕円形の住居である。主柱穴部分はいずれも多数切り合っており、抜き取り穴も含めて複数の建て替えが想定できる。炉もしくは焼土は2箇所確認しており、建物の中央部に位置する。遺物は柱穴付近から集中的に出土した。

SB107・SB108は5区調査時で検出しており、図面上で合成し検討したが、SB108とSB106が同一住居の可能性もあったが、床面レベルが若干異なることから別の住居とした。SB107に関してもSB104と同一住居の可能性がある。

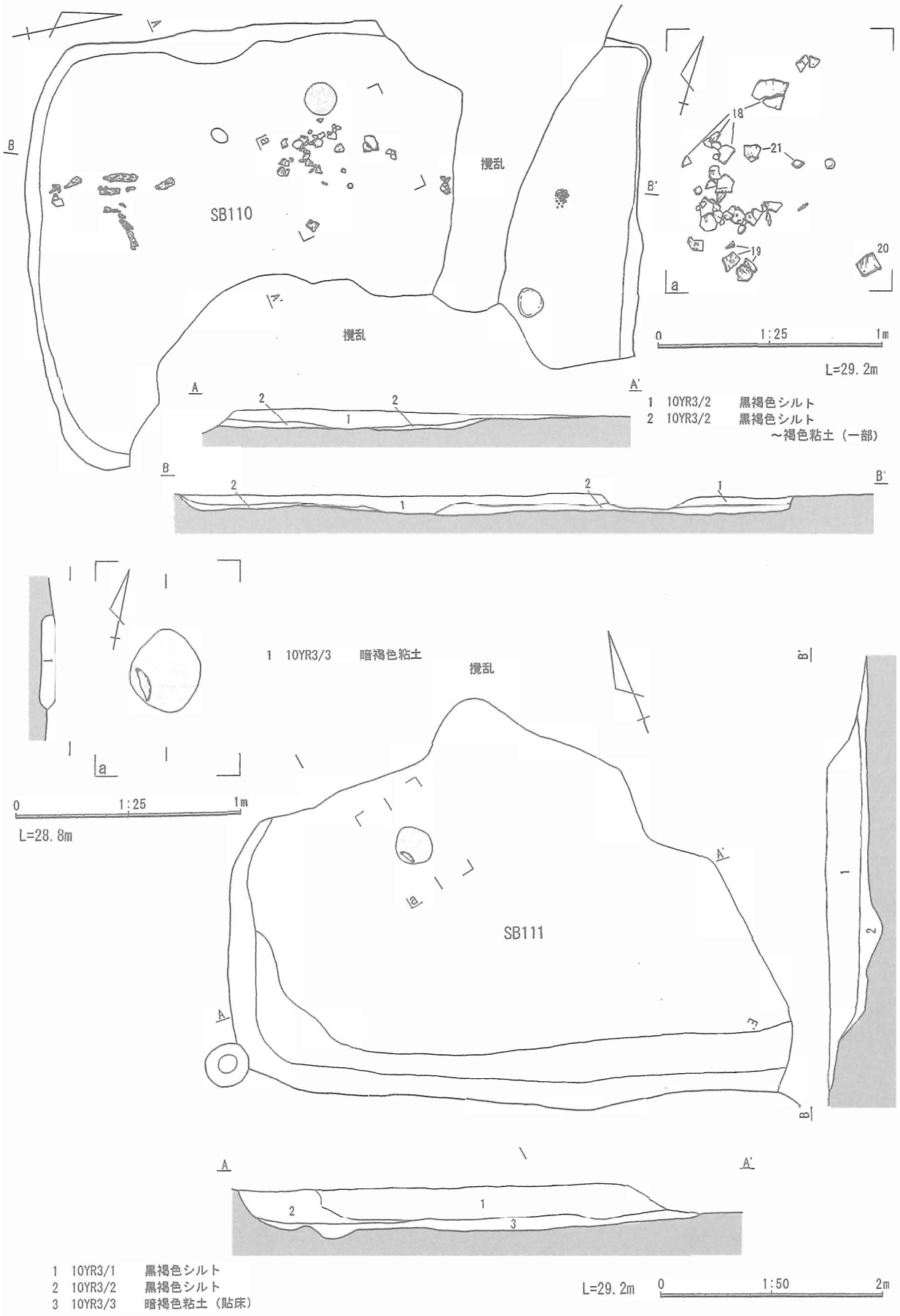
SB109はSB104に切られており、全体像は不明であるが住居の掘り込み、小穴、貼床が一部みられたことから住居とした。炉は確認されなかった。

時　期　弥生時代後期後半

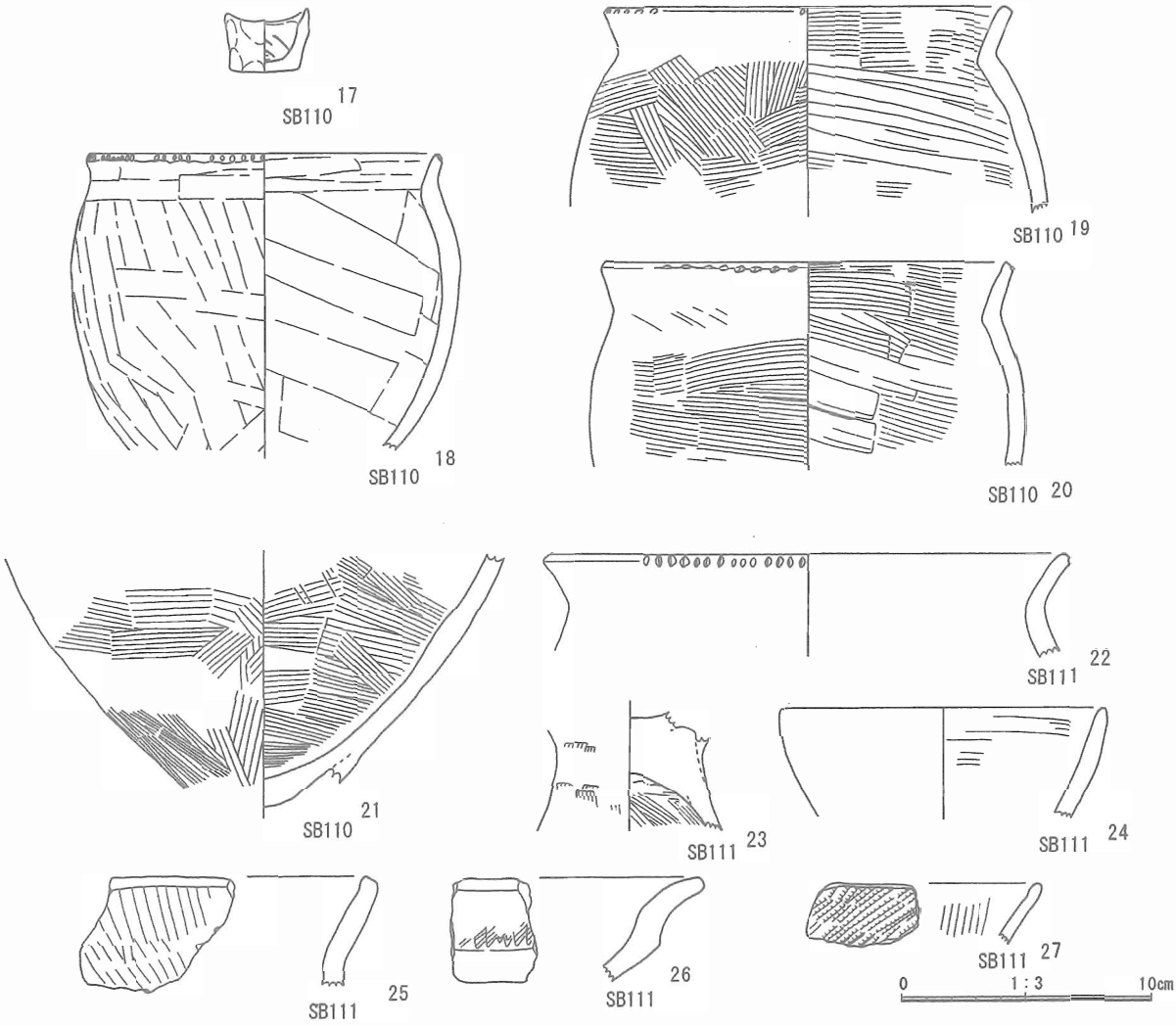
SB110（第11図　図版2）

調査区西側の中央に位置する。撹乱により遺構の1/3が欠失しているが、長軸5.5m、短軸3.8mの隅丸方形を呈する竪穴住居である。浅い掘り込みで床下から小穴が検出されているが柱穴かどうかは不明であった。焼土は住居の中心より北側へずれた位置で検出された。住居の南壁寄りから垂木材と思われる炭化材が出土し、焼失住居の可能性がある。遺物は焼土付近からまとまって出土した。

時　期　弥生時代後期後半



第11図　1区　SB110・111実測図



第12図　1区　SB110・111出土遺物実測図

SB111（第11図　図版3）

SB110の東隣で検出された。竪穴住居の一部を検出したにすぎないが、隅丸方形を呈すると思われる。柱穴等は検出されなかったが、炉は建物の中心からやや北西寄りで検出された。炉は楕円形の掘り込みをもち、細長い礫が1個付いていた。

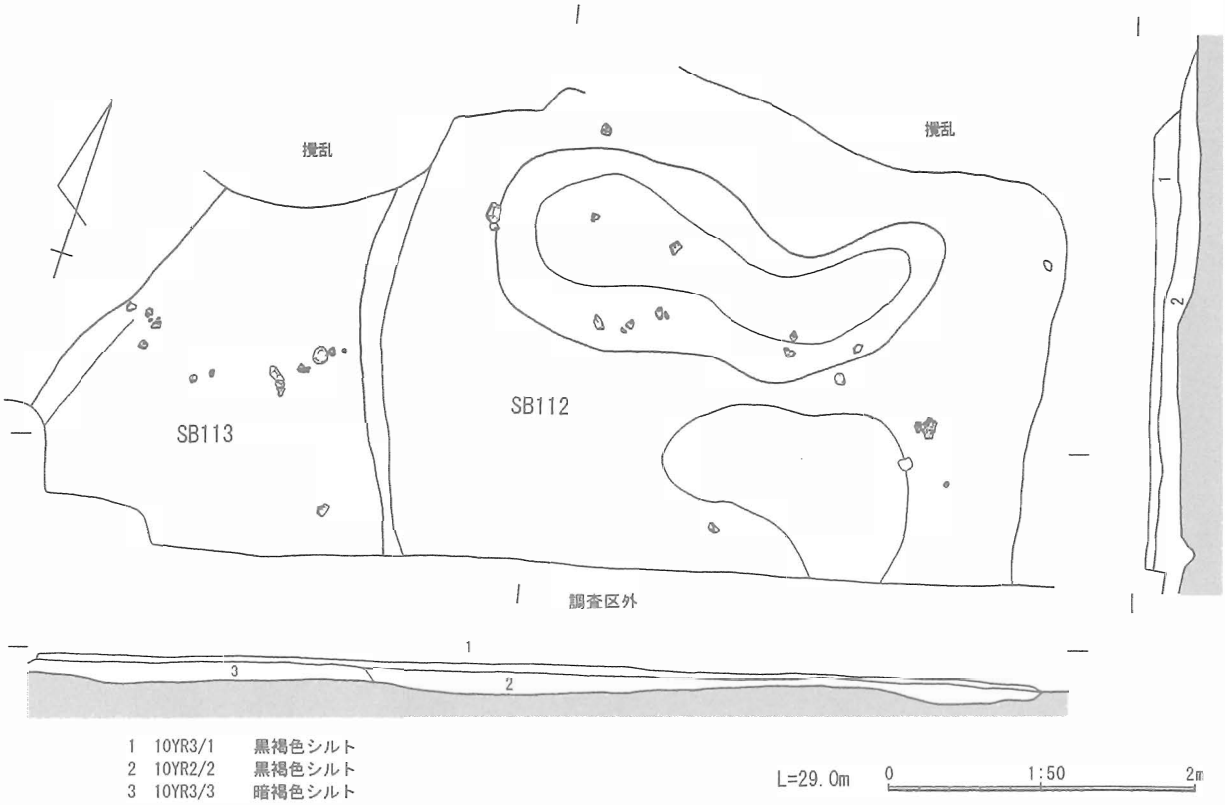
時　期　弥生時代後期後半

SB110出土遺物（第12図　図版42）

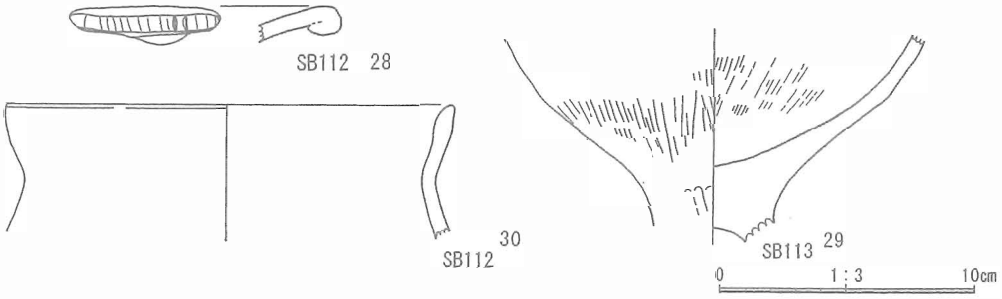
17はミニチュア土器である。18は屈曲の弱い甕で、内外面とも板ナデが施される。19・20は台付甕である。口縁端部に刻みを有する。21は台付甕の体部下半である。先細りしており、長胴状であろう。

SB111出土遺物（第12図）

22は甕で、口縁端部に刻みがつく。23は台付甕の脚台部である。24はやや内湾する直口壺である。25は甕である。刻みはみられない。26は高坏で、屈曲部に波状文がつく。27は壺の口縁部片である。櫛刺突文が斜位につく。



第13図　1区　SB112・113実測図



第14図　1区　SB112・113出土遺物実測図

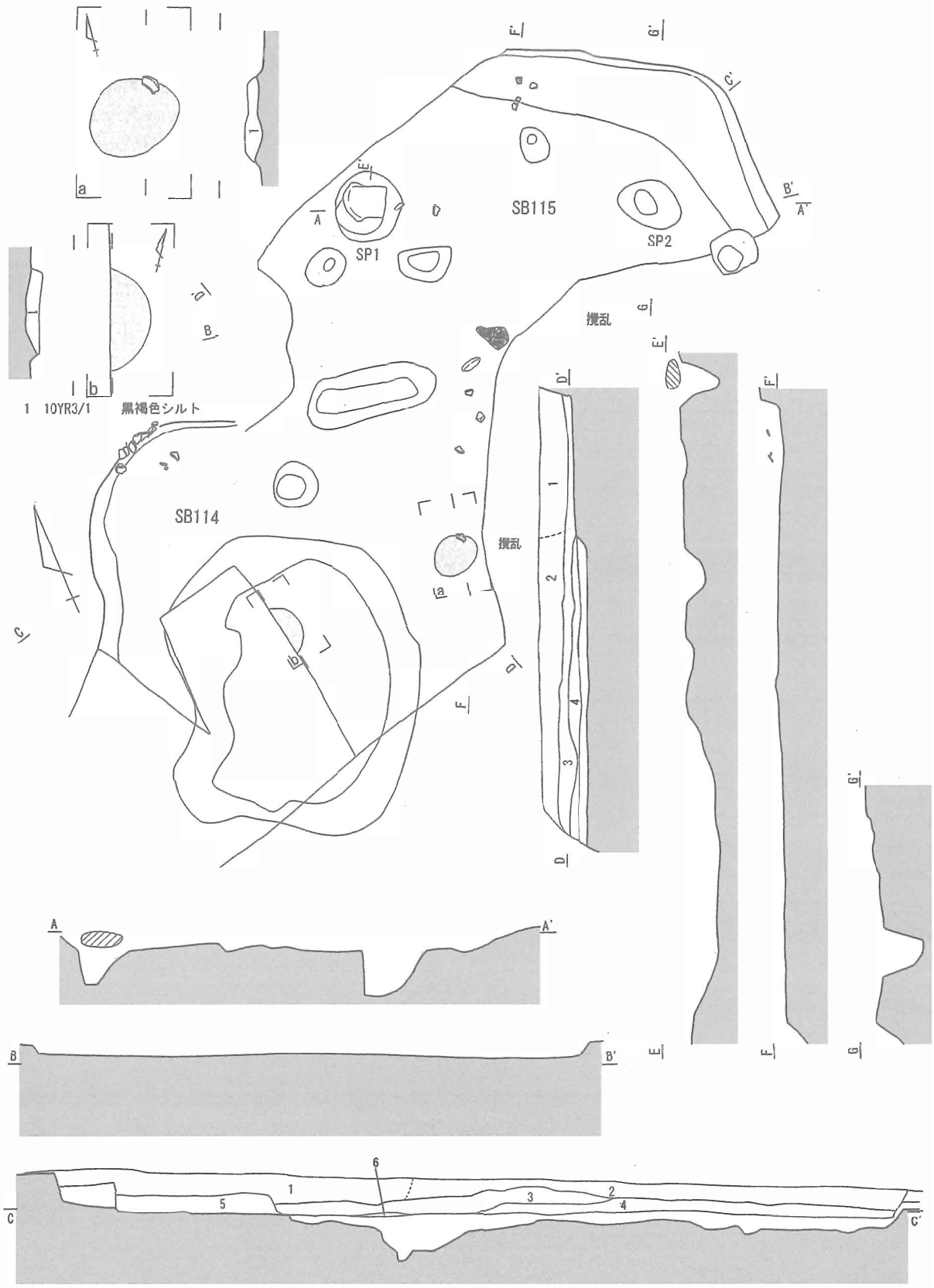
SB112・113（第13図　図版3）

調査区のほぼ中央に位置する。北側は撹乱によりほとんど破壊され、南側は調査区外へ延びているが、2棟切り合っていると考えられる。SB112は浅い掘り込みを有し、一部貼床が確認されている。柱穴は確認されていないが、不整形な長楕円を呈する土坑が検出されている。そこから少量の弥生土器片が出土している。SB113はSB112により切られている。掘り込みを有し、底面が平坦であることからとし住居とした。遺物は少量の弥生土器片が出土している。

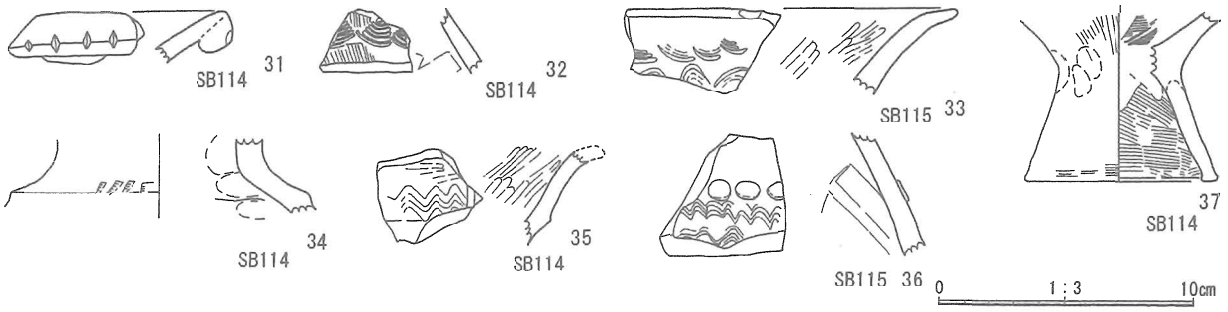
時　期　弥生時代後期後半?

SB112出土遺物（第14図）

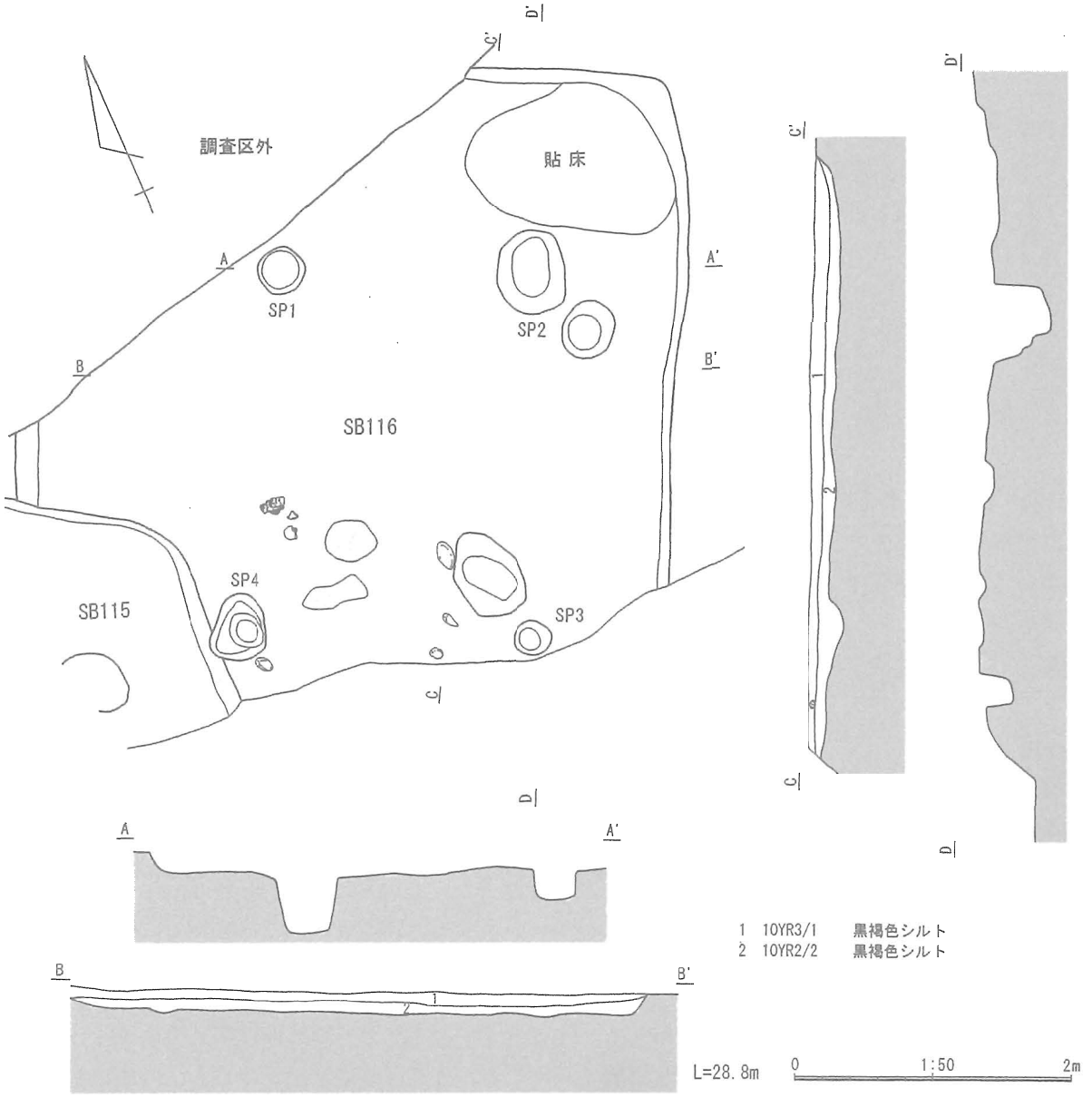
28は折返口縁壺で端部に縦方向の刻みが施される。29は高坏で、坏部内面にミガキがみられる。30はくびれの弱い甕である。刻みは入らない。



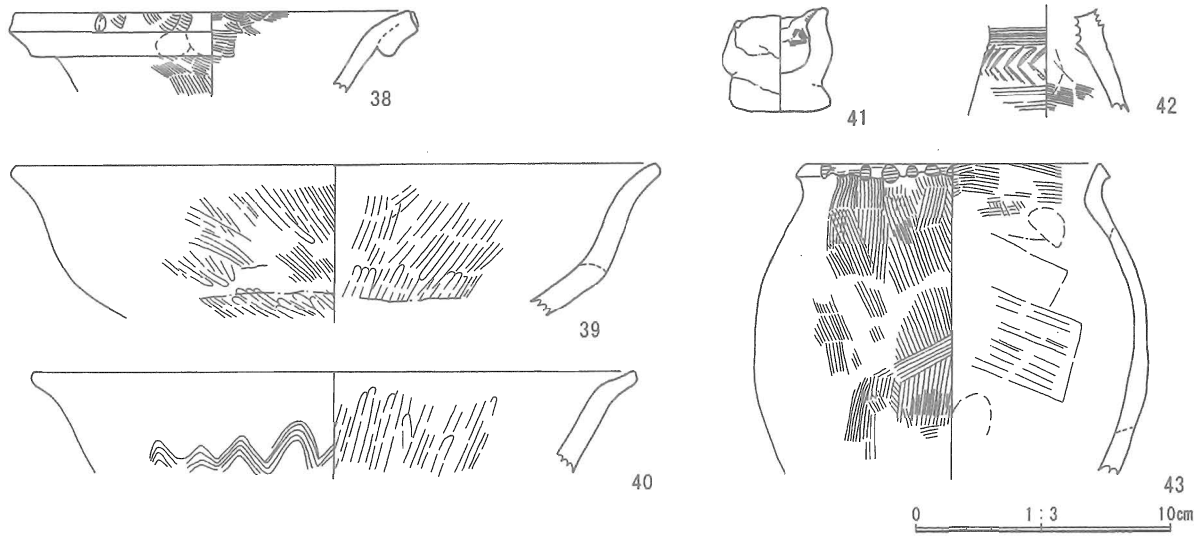
第15図　1区　SB114・115実測図



第16図　1区　SB114・115出土遺物実測図



第17図　1区　SB116実測図



第18図　1区　SB116出土遺物実測図

SB114・115（第15図）

SB116の西隣に位置する。住居の全体は不明であるが、形状から2棟切り合っていると考えられる。いずれも方形を呈する竪穴住居で、切り合い関係は明確にし得なかった。SB114の中央部にはトレンチできられているものの炉が残存していた。遺物は北西隅から少量出土した。

SB115の主柱穴は2基確認し、柱間間隔は2.5mである。その主柱穴上には径0.7mほどの扁平な石が載っており、表面に磨痕が残っていた。SB115に伴う炉であるか明確でないが、建物中央部よりずれた位置から楕円形の炉が確認された。床面からは少量の炭化材が出土している。浅い掘り込みを有し、上面には遺物がみられた。**時　期**

SB114・SB115出土遺物（第16図）

31は折返口縁部壺で、ややふくらみのある折返部の端部に刻みが施される。32は壺の胴部片で、扇形文がつく。33は高坏で、口縁部は外反する。波状文と扇形文がつく。34は壺胴部片である。ハケ状工具による刺突文がつく。35は高坏で、外面に櫛描波状文、内面に斜め方向のミガキが施される。36は壺の胴部片で、櫛描波状文の上部に円形貼付文が3単位でつく。37は台付甕の脚部である。

SB116（第17図）

調査区北東隅に位置する。長さ4.7mの方形を呈する竪穴である。掘り込みは浅いものの主柱穴が4基確認された。柱筋はずれるが、柱間間隔は1.8m、2.2m、2.6mである。貼床は建物の北東隅の一部で認められた。建物内の南側では焼土が2箇所確認された。

時　期　弥生時代後期中葉

SB116出土遺物（第18図）

38は折返口縁壺で端部外面に扇形文が巡る。39は外反する高坏で、内外面に斜め方向のミガキ調整が施される。40は外反する高坏で、口縁部が短く外反する。外面は櫛描波状文がつき、内面は斜め方向のミガキ調整が施される。41はミニチュア土器である。口縁部は短く外反する。42は高坏脚部で、外面は直線文間に矢羽状の櫛刺突文がつく。43は台付甕で、口縁部の屈曲は弱く、胴部の張り出しも弱い。端部は刻みが施される。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデがみられる。

SB117　（第19図　図版４）

SB120の南側に位置する。長さ3.7ｍで隅丸方形を呈する。掘り込みは浅く、厚さ貼床が１面確認された。建物の南壁で焼土を確認した。床下には浅い長楕円形の土坑が南壁に沿って検出された。遺物量は少ない。

時　期　弥生時代後期

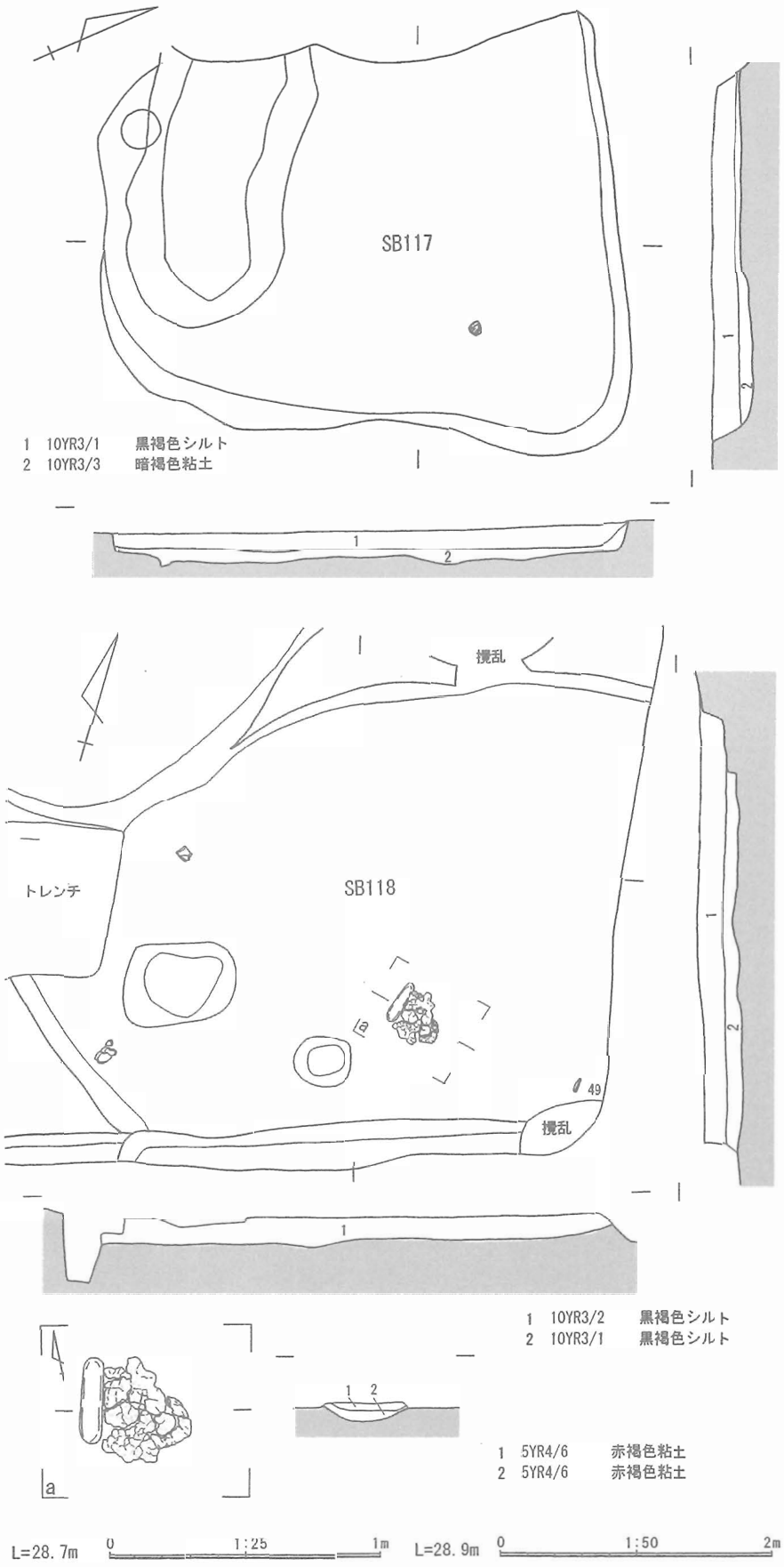
SB118（第19図　図版４）

調査区の南東隅で検出された。トレンチできられているが、楕円形を呈する竪穴建物である。掘り込みは段掘り状であるが、貼床で平坦に施されていた。建物内には小穴、土坑が検出されているが、柱穴かどうかは不明である。炉は中心よりずれた位置で検出されている。浅い掘り込みを有し、細長い礫が1個置かれていた。粘土は火化を受け、固く締まった状態であった。

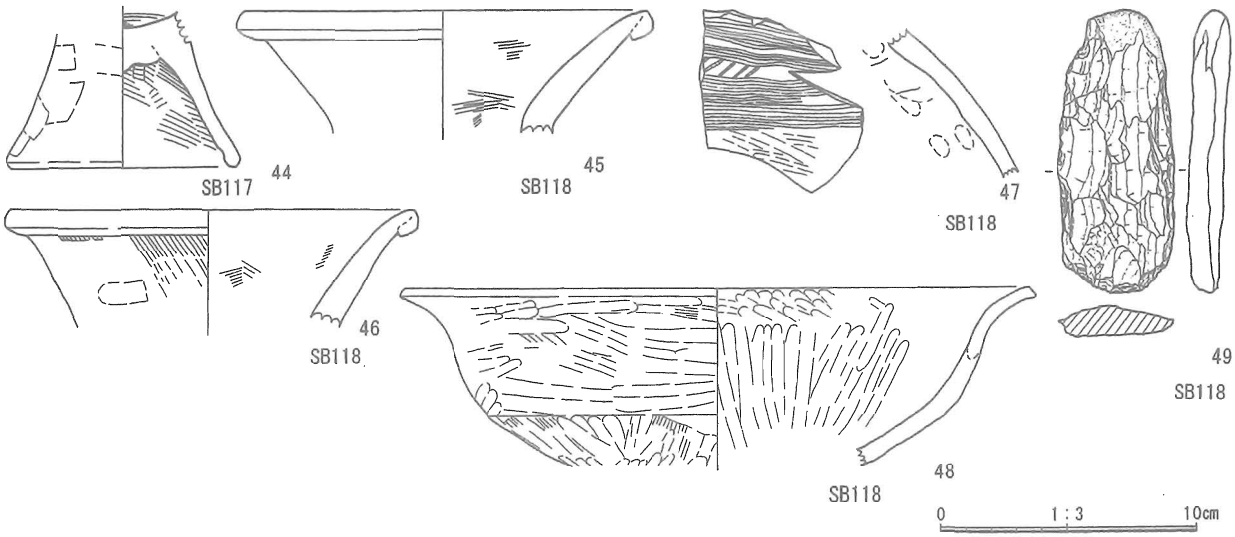
時　代　弥生時代後期中葉～後半

SB118出土遺物（第20図）

44は脚台部である。45は折返口縁壺である。47は壺の胴部片で櫛描直線文が巡る。46は折返口縁壺である。48は高坏で、外反する。端部は外傾面をもつ。外面に横、縦方向のミガキ調整、内面は縦、斜め方向のミガキが施される。49は打製石斧で、先端部は磨耗痕が観察される。石材は結晶片岩である。



第19図　１区　SB117・118実測図



第20図　1区　SB117・118出土遺物実測図

SB120（第21図　図版5）

調査区の東端に位置し、少なくとも3棟の竪穴建物が検出されている。そのうちSB120はカマドをもつ竪穴建物である。少なくとも古代の東原遺跡はこのあたりまで広がる可能性がある。長辺3.2m短辺3mのやや長方形を呈する。カマドは東壁やや南寄りに設置されている。

カマドの残存状況は良好ではなく、形状等は不明であるが、カマドは粘土と礫から構成されていると思われる。袖内には礫がみられず、細長い礫が浮いた状態であることから少なくとも天井部に細長い礫が架けられていた可能性がある。煙道と思われる立ち上がりは急角度で立ち上がり、それほど建物外側へは張り出さない。

焼土が多くみられる燃焼室内には甕の破片を中心に多量の土器がみられた。また、建物内には多量の土器が出土している。建物の北壁寄りと南壁寄りからの出土が多く、床面からレンズ状の覆土にかけてまんべんなく出土している。これら出土遺物には供善具、貯蔵具、煮沸具などほぼ揃っているが、土師器坏が最も多く出土しており、出土量の7割ほどを占める。遺物の出土状況は床面に近いほどほぼ完形の土師器坏が重ねられた状態で出土している例もみうけられた。さらに炭化材の存在や床面から出土している土器のほとんどが2次的な火化を受けており、焼失建物であった可能性が高い。覆土からは土師器の細片が多く出土していることから建物廃絶後に投棄されている可能性もある。柱穴や壁溝は確認できなかった。

時　期　8世紀前半～中葉

SB120出土遺物（第22～26図　図版43～46）

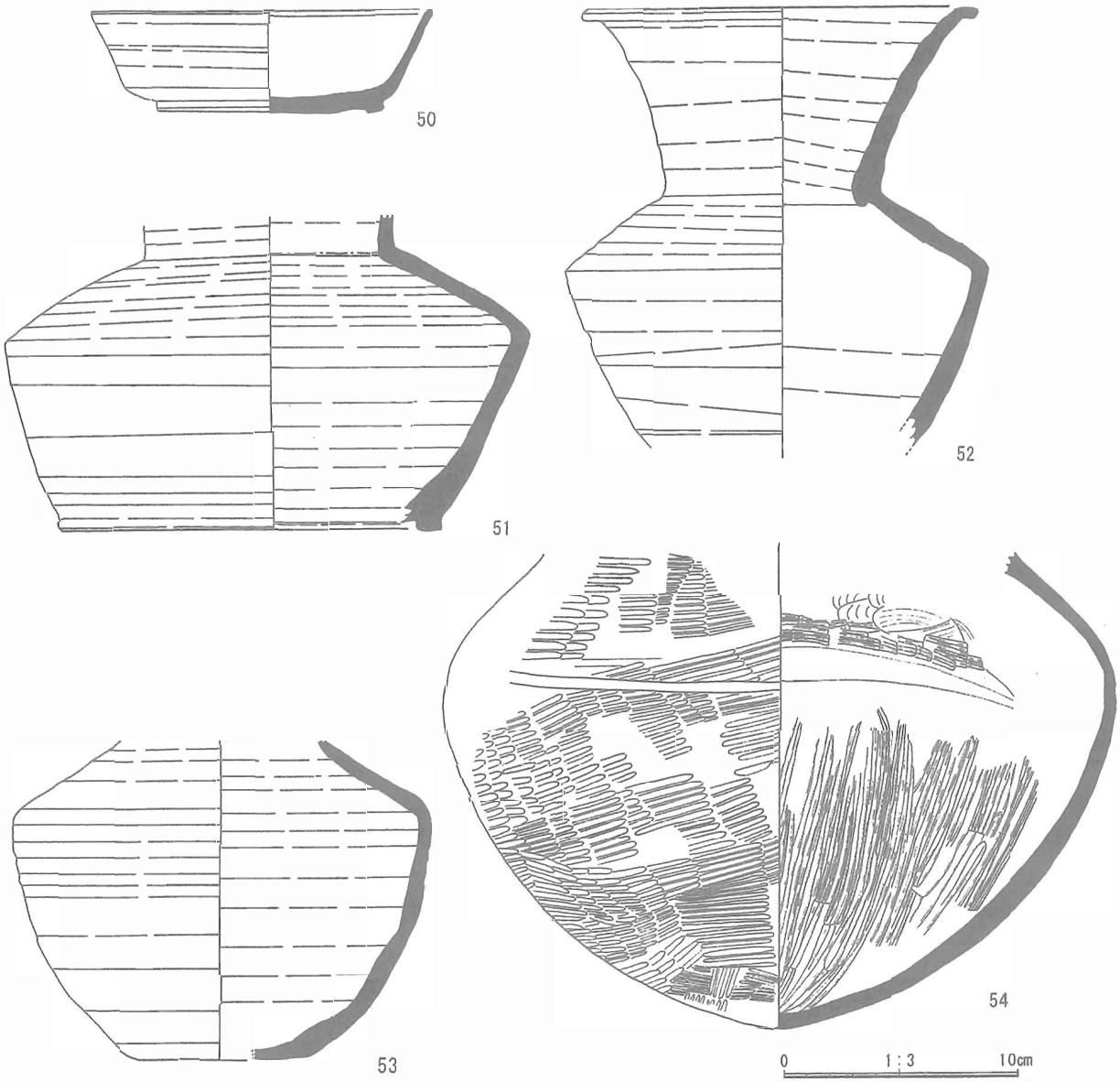
50は須恵器高台付坏である。平底の底部から緩やかに屈曲し、外方へ延びる。断面方形の低い高台がつく。51は広口壺で、底部から体部下位にかけてヘラケズリが認められた。高台は低く、断面は方形である、52・53は須恵器長頸壺である。52の口縁部は外反し、端部は外方へ屈曲する。口径と胴部最大径はほぼ同じである。体部下位にはヘラ削りが施される。53は平底で、高台がつかない。体部は緩やかに立ち上がり、屈曲は丸味を帯びている。2次焼成を受けている。54は須恵器甕である。底部は尖底状で外面は平行タタキが残り、体部最大径付近には凹線が1条巡る。内面は底部から体部中位にかけて縦位のケズリが施される。上位には青海波状のタタキが観察された。

第21図　1区　SB119・120実測図

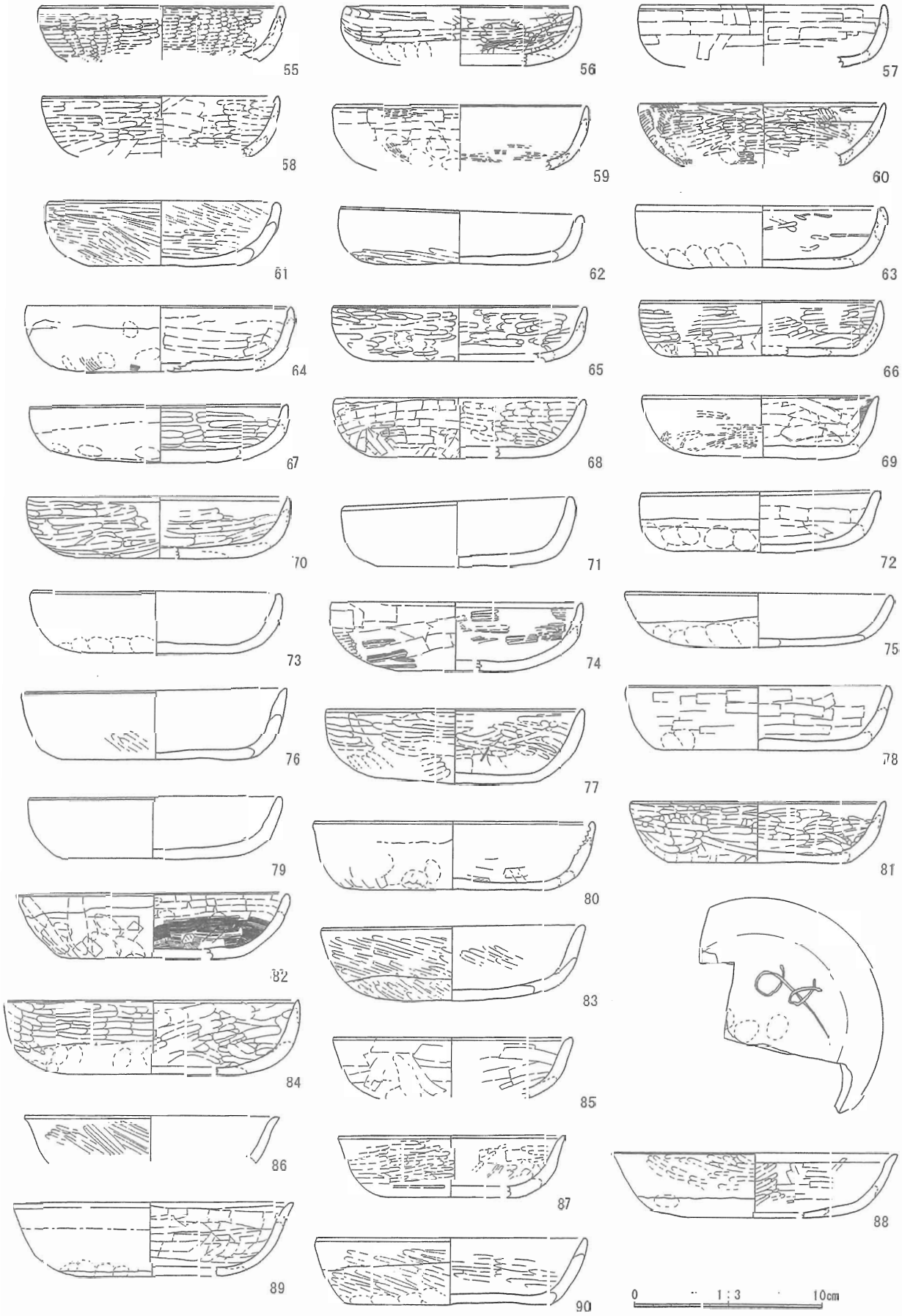
55～96は土師器坏である。55～73は内湾する坏である。口径13～17cmで、器高3～4.8cmである。内外面とも横方向のミガキが顕著に施されている。69の内面は被熱により、黒色化している。不定方向の板ナデが顕著に残る。74は口縁部が直立ぎみに立ち上がる。81の底部裏には刻みがみられた。文字であるかどうかは不明である。83は斜位のミガキが残る。84は表面の赤彩は剥落し、外面の粘土接合痕が顕著に残る。85～88は強い横ナデにより口縁端部がわずかに外反する。

92は端部に丸味を帯びた内傾面をもつ。93は内湾しながら立ち上がる。94は平底で、口縁部は緩やか外反する。95・96は皿に近い形状である。

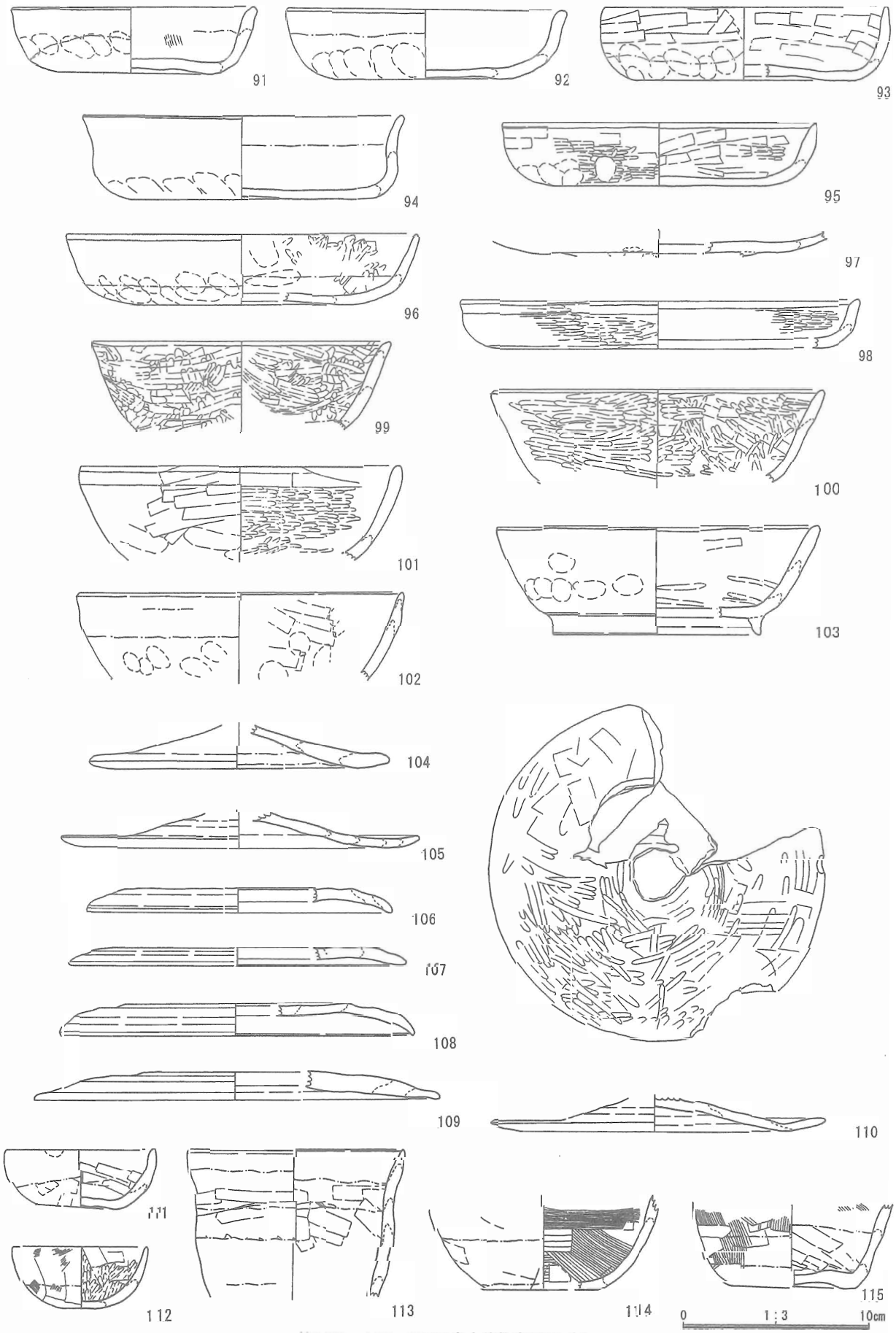
97は土師器高盤である。平底で、脚部との接合痕が残る。98は土師器無台皿である。平底から短い口縁部がつく。端部は内傾面をもつ。内外面とも横方向のミガキが残る。



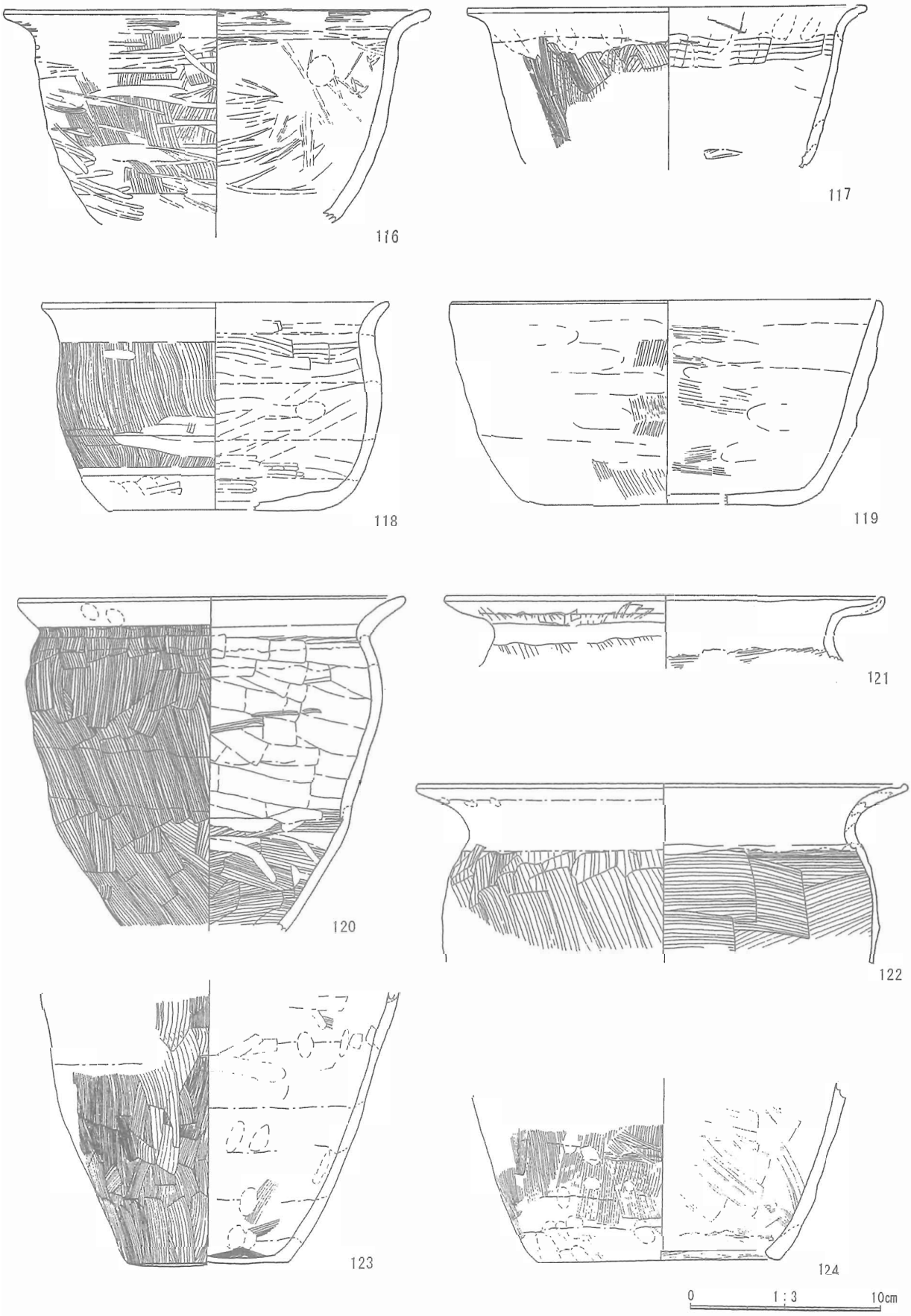
第22図　1区　SB120出土遺物実測図（1）



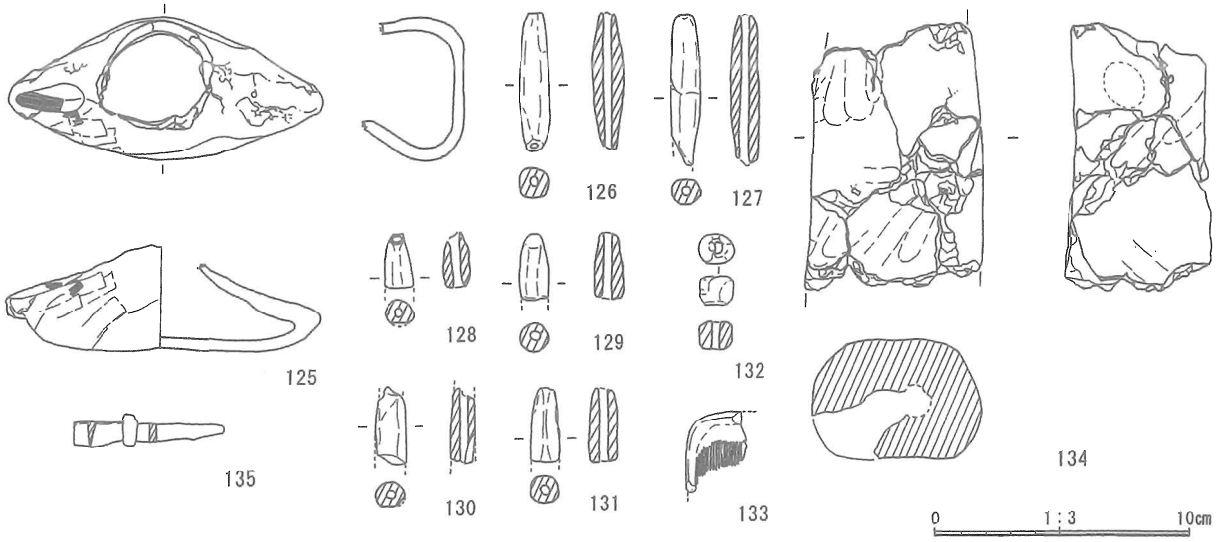
第23図　1区　SB120出土遺物実測図（2）



第24図　1区　SB120出土遺物実測図（3）



第25図　1区　SB120出土遺物実測図（4）



第26図　1区　SB120出土遺物実測図（5）

99～102は土師器坏でやや深い器形である。99は直線的に延び、口縁端部はやや外反する。内外面とも不定方向のミガキが顕著である。100は直線的に延び、外面は横方向のミガキ、内面は不定方向のミガキがみられた。101は内湾しながら立ち上がる。内面は横方向のミガキが顕著である。102は横ナデにより口縁部が先細りする。外面に接合痕がみられた。

103は土師器高台付坏である。平底・体部間で丸味をもちながら屈曲し、口縁部は外上方へ延びる。高台はやや外反する。内面に横方向のミガキがみられた。

104～110は土師器蓋である。104は直線的に傾斜する。口縁部は外反し、肥厚する。105は外反しながら外方へ延びる。106～108は扁平な天井部をもち、端部をやや下方へ延ばす。109は直線的に傾斜し、端部は先細くなる。

111～115小型土器で、これらはほぼ同じ胎土である。111・112は小型土器の碗形である。113～114は小型土器の甕である。113は口縁部が緩やかに外方へ外反する。粘土紐接合痕が明瞭である。113・114は底部からゆるやかに立ち上がる。

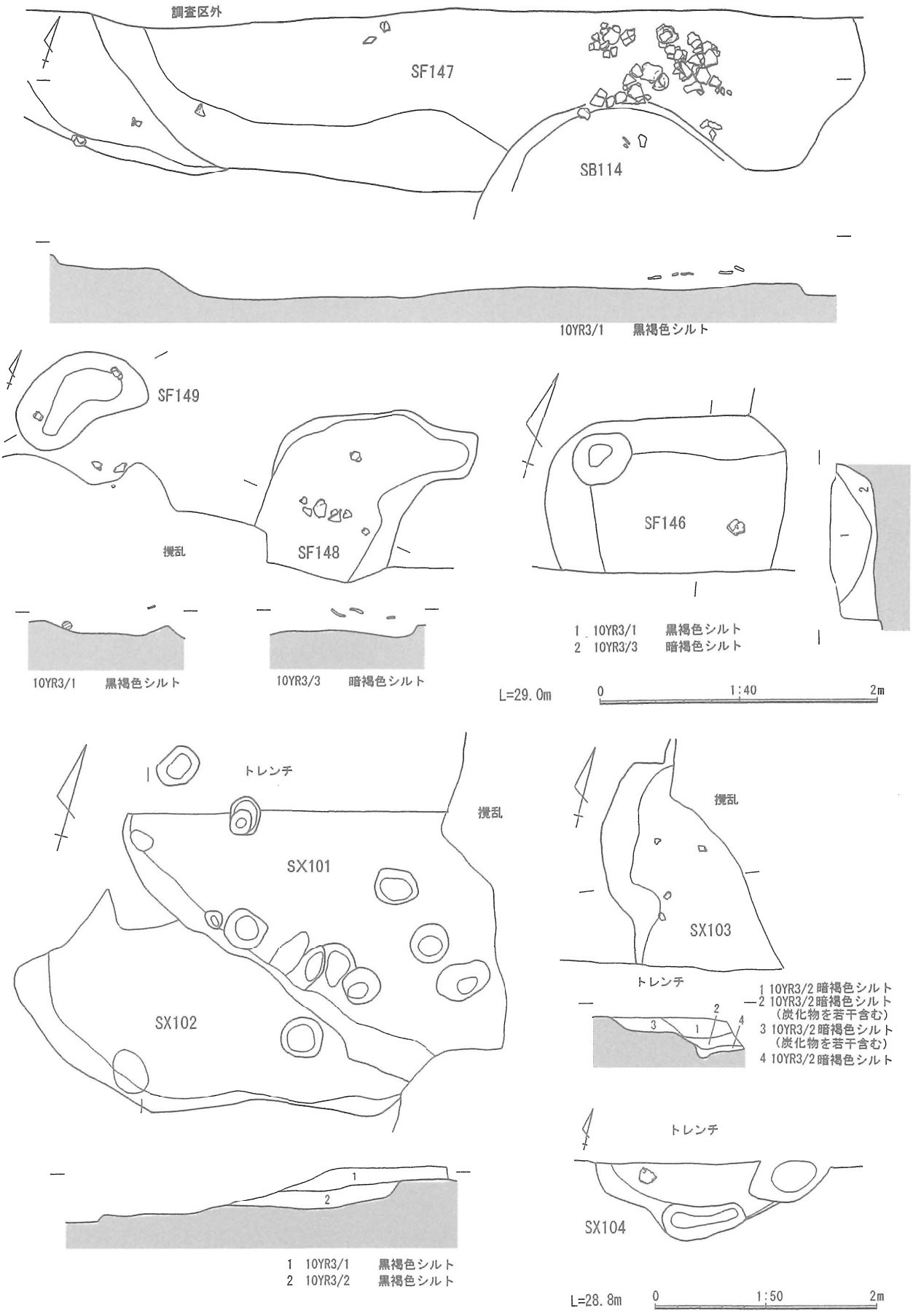
116～119は土師器鉢である。116は口縁部が外反し、内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。117は口縁部がやや外反し、外面は縦位、斜位のハケ調整である。118は平底の鉢で、口縁部は短く緩やかに屈曲する。外面はハケ、内面横方向のミガキが残る。119はバケツ形を呈し、口縁部は外上方へ延びる。外面は斜位、内面は横位のハケ調整が残る。

120～123は土師器長胴甕である。120の頸部は屈曲し、口縁部は外方へ延びる。121は口縁部が水平で端部がつまみ上がる。122は口縁部が外反し、外方へ延びる。端部はつまみ上がる。胴部最大径より口径が上回る。123は長胴甕の底部片である。124は甑である。孔は1穴で、端部はやや内湾する。外面はハケ、内面は板ナデ調整である。

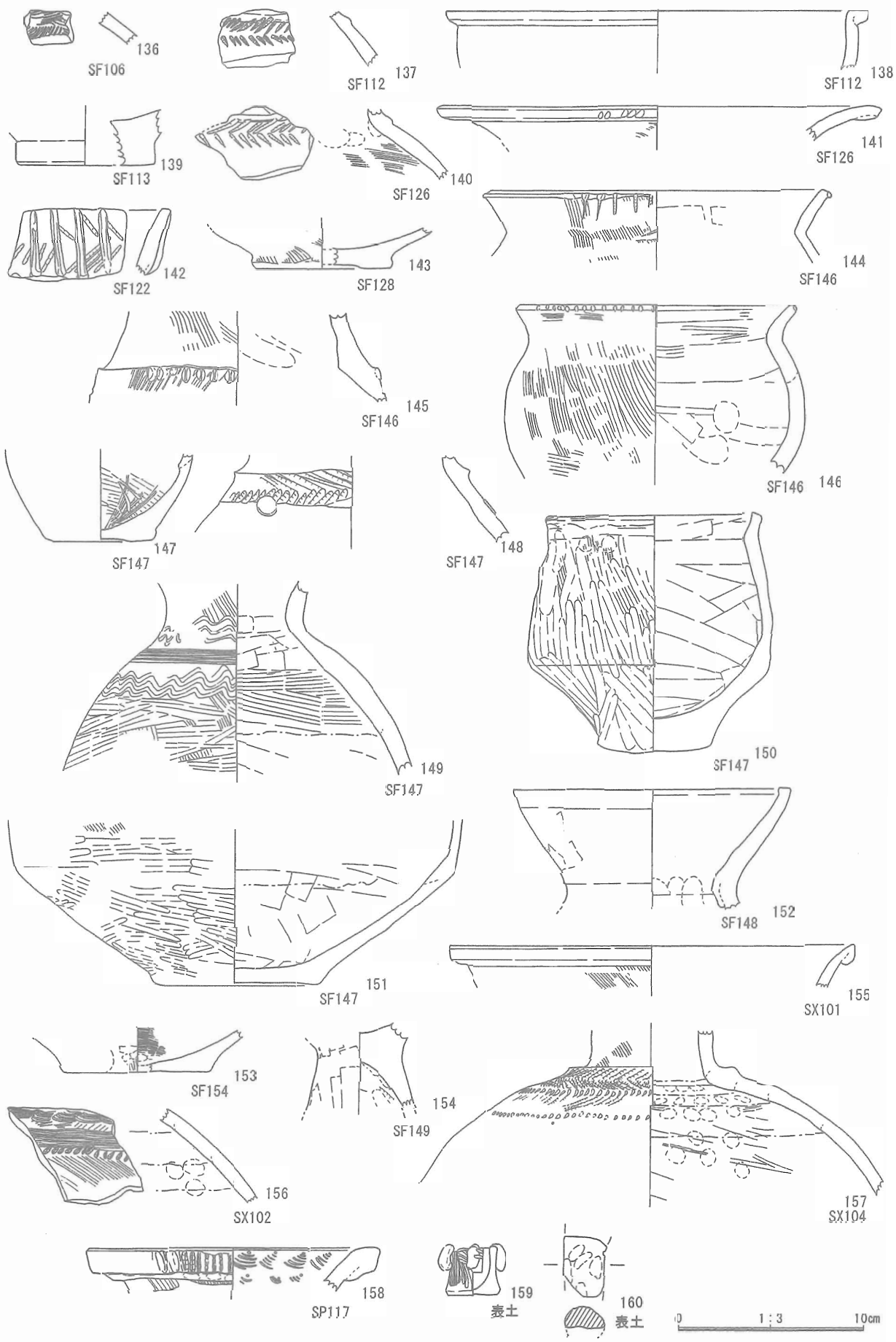
125は皮袋形土製品である。胴上部に接合痕が観察され、粘土を巻き上げるように貼り合わせている。

126～131は土錘である。紡錘形をなし、端部は面取りされる。132は土玉である。土錘と同じような胎土が用いられている。建物内の祭祀行為に伴うものであろう。133は横櫛である。炭化しており、先端部は欠損している。櫛歯は17本残存していた。

134は土製支脚である。カマド内の出土ではなく、建物内から出土している。両端部は欠損し、熱を受けているため、残存状況は良好ではない。小石を多く含む。外面はナデにより整形し、断面形は楕円形である。135は刀子である。



第27図　1区　土坑・不明遺構実測図



第28図　1区　小穴・土坑・不明遺構遺物実測図

SB119（第21図　図版５）

SB119はSB120により切られている。方形を呈する建物と考えられるが、遺物が出土していないため時期は不明である。柱穴や壁溝は検出されていない。

時　期　不明

SB121（第21図　図版５）

SB121はSB120により切られている。遺構の大半は調査区外へ延びており、遺構の平面形は不明である。覆土から土師器の細片が出土している。

時　期　奈良時代?

土坑・小穴

SF147（第27図　図版６）

調査区北壁中央に位置し、SB114によりきられる。遺構は調査区外へ延びており、長軸7.5mである。掘り込みは段掘りになっているが、底面は比較的平坦であるため、竪穴建物の可能性もある。遺物は東側で出土しており、大半が覆土からの出土である。

SF148・149（第27図）

SF147の西側に位置する。不整形な楕円形の土坑である。土坑内から弥生土器片が出土している。SF148は不整形な土坑で覆土内から土器片が出土している。

SF146（第27図）

調査区北東隅に位置する。SB116により切られ、遺構は調査区外へ延びる。隅丸のコーナーをもち、弥生土器片が出土している。竪穴建物の可能性もある。

SX101・102（第27図）

SX101・102は1区東側中央部に位置する。トレンチ及び撹乱により全体像が不明であるため、不明遺構とした。しかしながら、小穴や焼土が掘り込み内で検出されていることから竪穴住居の可能性が高い。SX102に関しても小穴、焼土がみられることから竪穴住居の可能性を指摘しておく。

SX103（第27図）

SX101・102の南側に位置する。トレンチや撹乱の影響により全体像を窺がい知ることは難しい。不整形な掘り込みをもつものの弥生土器片が出土している。

SX104（第27図）

トレンチや土坑により切られているが、弥生土器片が出土している。

土坑・小穴・不明遺構・包含層出土遺物（第28図　図版42）

136は扇形文がつく。137は櫛刺突文がつく。138は鉢で、口縁部は短く外方へ屈曲する。139は厚い壺底部片である。140は櫛刺突文がつく。141は折返口縁壺である。低い折返部で端部に刺突文がわずかに残る。142は複合口縁部壺である。側面には櫛刺突文がつき、棒状浮文がつく。143は壺底部片である。144は台付甕である。屈曲は強く、端部には長い刻みが入る。145は壺で櫛刺突文に楕円形の浮文が連続

してつく。146は台付甕で、球胴状を呈する。端部に刻みが入る。147は小型の鉢である。148は櫛刺突文に円形浮文がつく。149は壺胴部片で直線文、波状文がつく。頸部は細い。150は鉢で底部は厚く、胴部下半は屈曲する。口縁部は短く外方へ延びる。外面は縦位。斜位のミガキが施される。151は壺底部片である。横位のミガキが施される。152は内湾口縁壺である。端部は面取りされ、平坦である。153は壺底部片である。154は高坏である。155は折返口縁壺である。156は壺胴部片である。直線文、刺突文、波状文がつく。157は壺胴部片である。球胴状の胴部で櫛刺突文がつく。158は折返口縁壺で、端部外面に刺突文がつく、内面には扇形文が施される。159は装飾の付いた小型土器である。外面はハケで口縁部に豆粒大の貼付文が装飾的に施される。160は土馬の脚部と思われる。

第３節　東原　２区

２区の検出遺構（第29図）

概　要

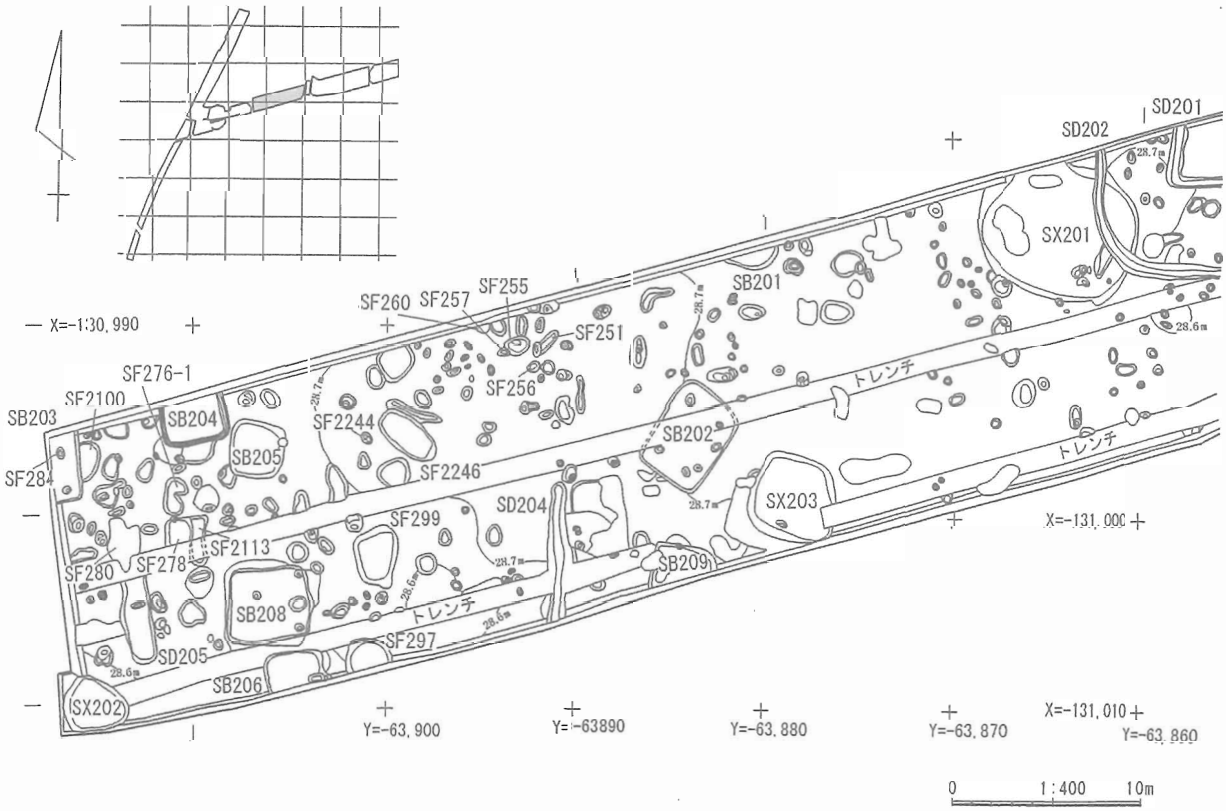
２区は１区東側に隣接する調査区である。検出された弥生時代の遺構は竪穴住居、土坑、小穴、不明遺構が検出されている。弥生時代の遺構配置はさらに東側へ向かうに従い、遺構の密度は低くなっていく傾向がある。

特に２区西側には不明遺構（SX202）が存在し、そこから大量の土器が出土している。29次調査（県営畑総２次）においても径２ｍの土器集積遺構が検出され、竪穴住居廃絶後の窪地を利用して大量の土器が投棄されている。出土した土器の器種比率は29次調査のSX01と異なるものの、今回検出されたSX202の規模や遺物の出土状況から同様の性格と考えられる。特にSX202より東側では弥生時代の竪穴住居は認められないことから集落の縁辺付近には土器集積が点在している可能性がある。

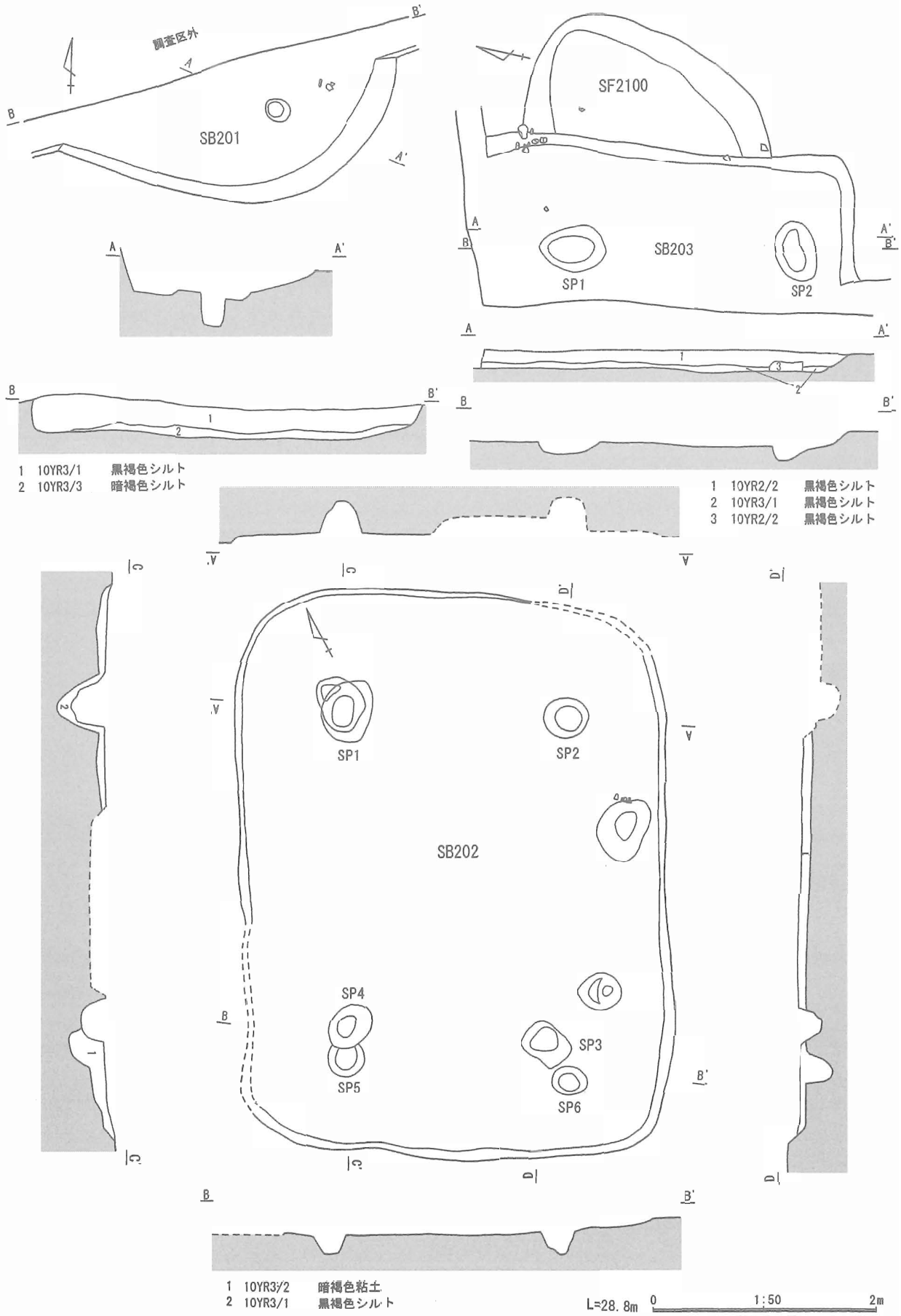
古代の遺構はカマドをもつ竪穴建物、土坑、小穴、溝状遺構がみつかっている。そのほとんどが奈良時代前半～中葉に比定される。特に竪穴建物は１区東側と２区西側に集中して検出されており、重複関係は認められない。土坑は竪穴建物の周囲に点在して存在する。本遺跡より南東側には東原D地点が存在し、古墳時代後期から奈良時代の集落が認められる。集落は古墳時代にD地点へ移動したと考えられており、本調査区で古代の遺構が検出されたことは古墳時代以降の東原遺跡の範囲が明確になるとともに北端を示すものといえる。

竪穴建物は長方形を呈し、規模は3～4mでカマドは東壁に設置されているものが多い。掘立柱建物はみつかっていない。

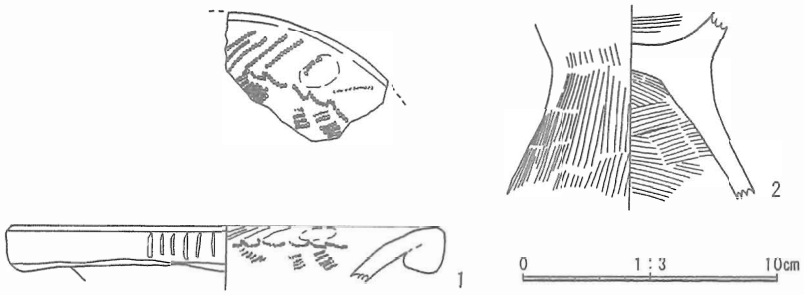
２区東側では３区に続く江戸時代の屋敷地を区画する溝が検出されている。



第29図　２区　全体図



第30図　2区　SB201・202・203実測図



第31図　2区　SB203出土遺物実測図

竪穴建物

SB201（第30図）

調査区北側中央から検出されている。全体像は不明であるが、柱穴・貼床が検出されていることから竪穴建物とした。カマド位置や建物の規模は不明であるが、検出された形状から建物の南東隅部分と思われる。遺物はわずかに土師器の細片が出土しているのみで奈良時代の建物であろう。

時　期　奈良時代

SB202（第30図）

SB202は長辺5.2m、短辺3.9mで長方形を呈する建物である。カマド位置は不明であるが、奈良時代の建物と考えられる。掘り込みは浅く、床面からの遺物量は少ない。主柱穴は4本確認し、柱間間隔は2.9m1.75～2mであった。柱穴には切り合った小穴があることから柱の抜き取りあるいは建て替えがあったと考えられる。

時　期　奈良時代

SB203（第30図　図版7）

SB203は調査区の北西隅で検出された。方形を呈する建物と考えられ、南東隅のみの検出であった。建物内には柱穴と思われる小穴が2基検出されており、この間隔は2mである。遺物は弥生土器の出土がみられるものの形状から奈良時代の遺構と考えられる。SF2100からは弥生土器が認められる。

時　期　奈良時代

SB203出土遺物（第31図）

1折返口縁壺である。口縁部内面に面は持たないが、結節縄文が施される。端部には縦位の沈線がつく。2は台付甕の脚台部である。

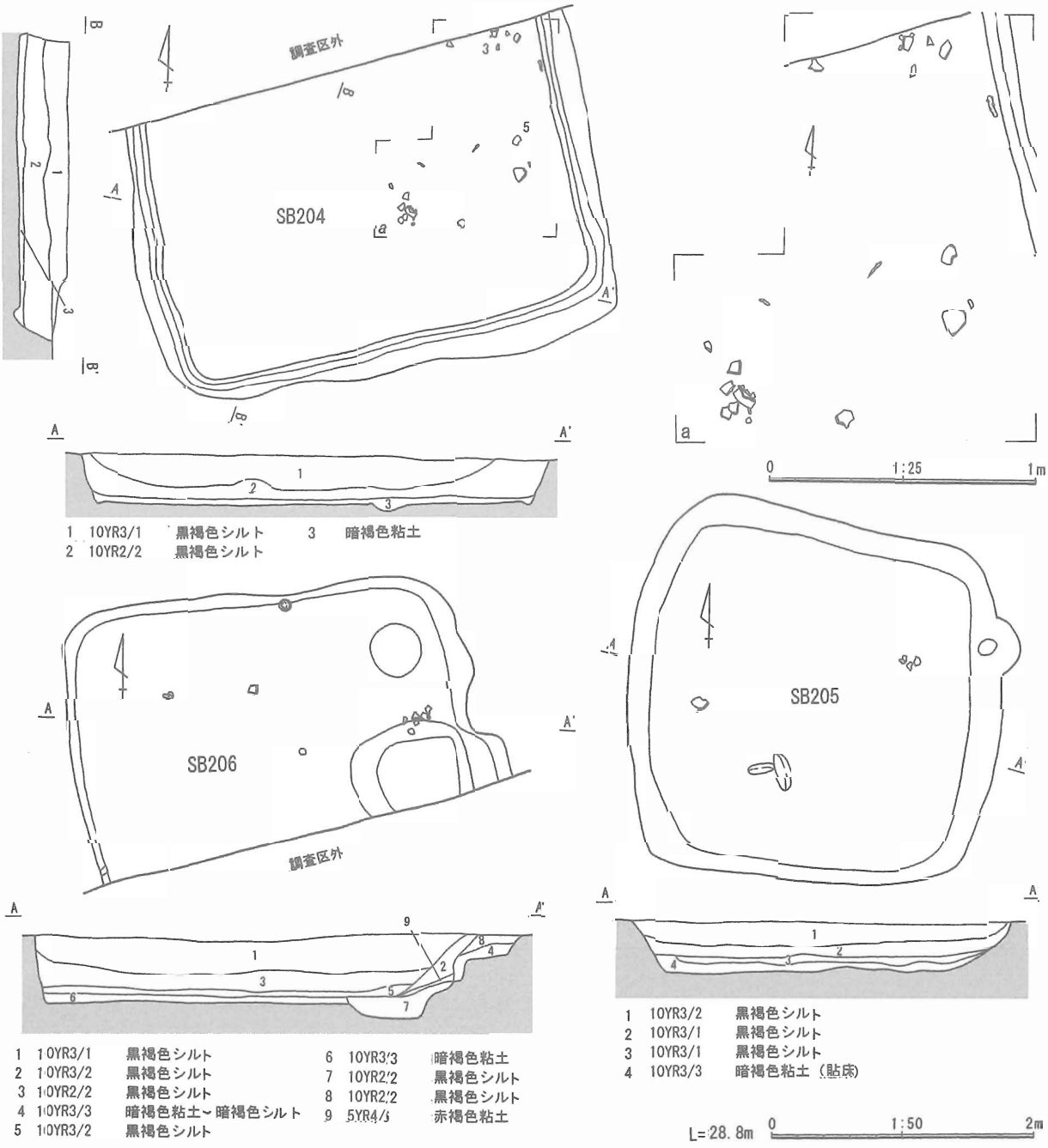
SB204（第32図　図版8）

調査区北西隅のSB203より5m東側で検出された。建物北半は調査区外のため不明であるが、方形を呈する竪穴建物である。長さ3.6mで、カマド位置は不明であるが、周囲には壁溝がほぼ全周する。覆土はレンズ状の堆積を示し、貼床は1面確認された。床面あるいは掘り方上からも柱穴は確認できなかった。床面上から土師器坏、土師器鉢、皮袋形土製品、土錘、鉄釘、刀子などが出土している。

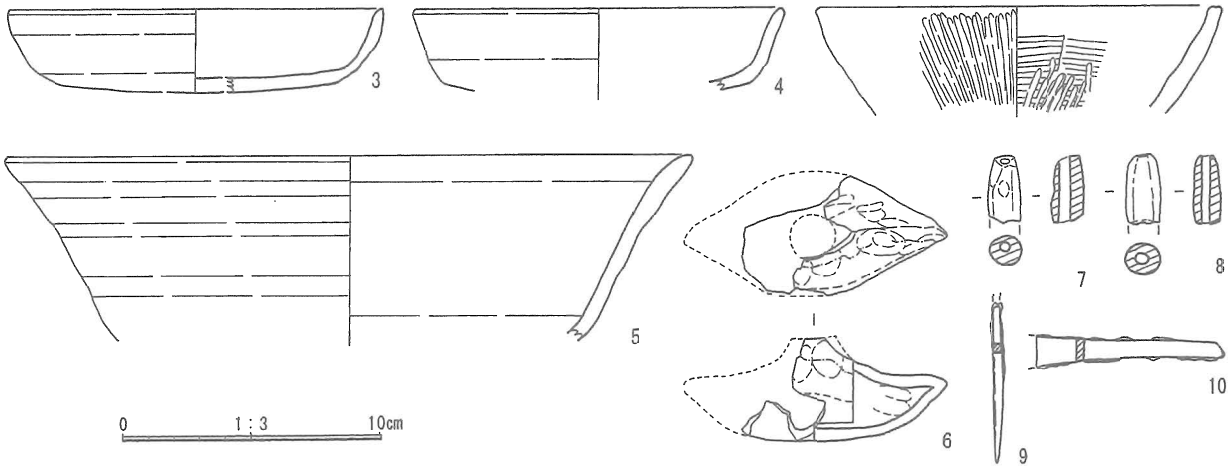
時　期　8世紀前半

SB204出土遺物（第33図　図版47）

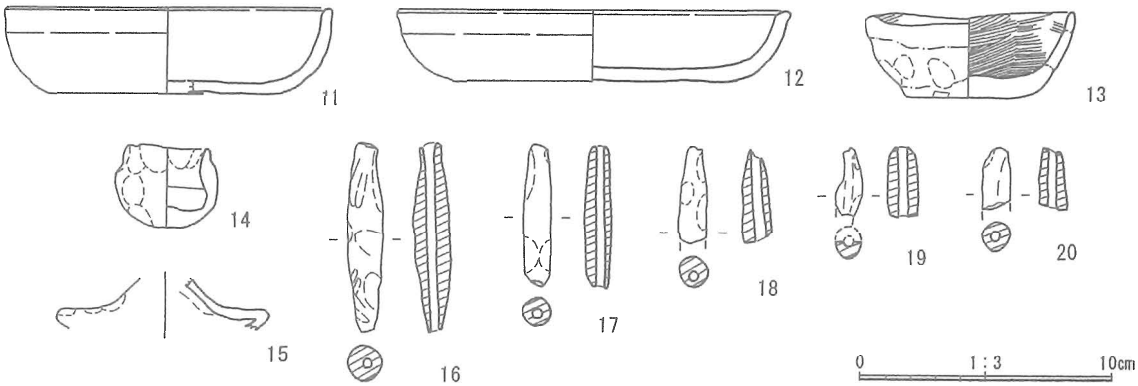
3・4は土師器坏である。赤彩が施される。5は黒色を呈した土師器坏である。内外面とも丁寧な縦位のミガキが施される。6は土師器鉢である。口縁部は外方へ延び、端部はやや肥厚する。赤彩が施される。7は皮袋形土製品である。胴上部に接合痕が観察され、粘土を巻き上げるように貼り合わせている。口縁部は斜め上方へ立ち上げている。8・9は土錘である。片側が欠損しており、端部は面取りされている。10は鉄鏃の茎部と思われる。11は刀子である。



第32図　2区　SB204・205・206実測図



第33図　2区　SB204出土遺物実測図



第34図　2区　SB206出土遺物実測図

SB205（第32図）

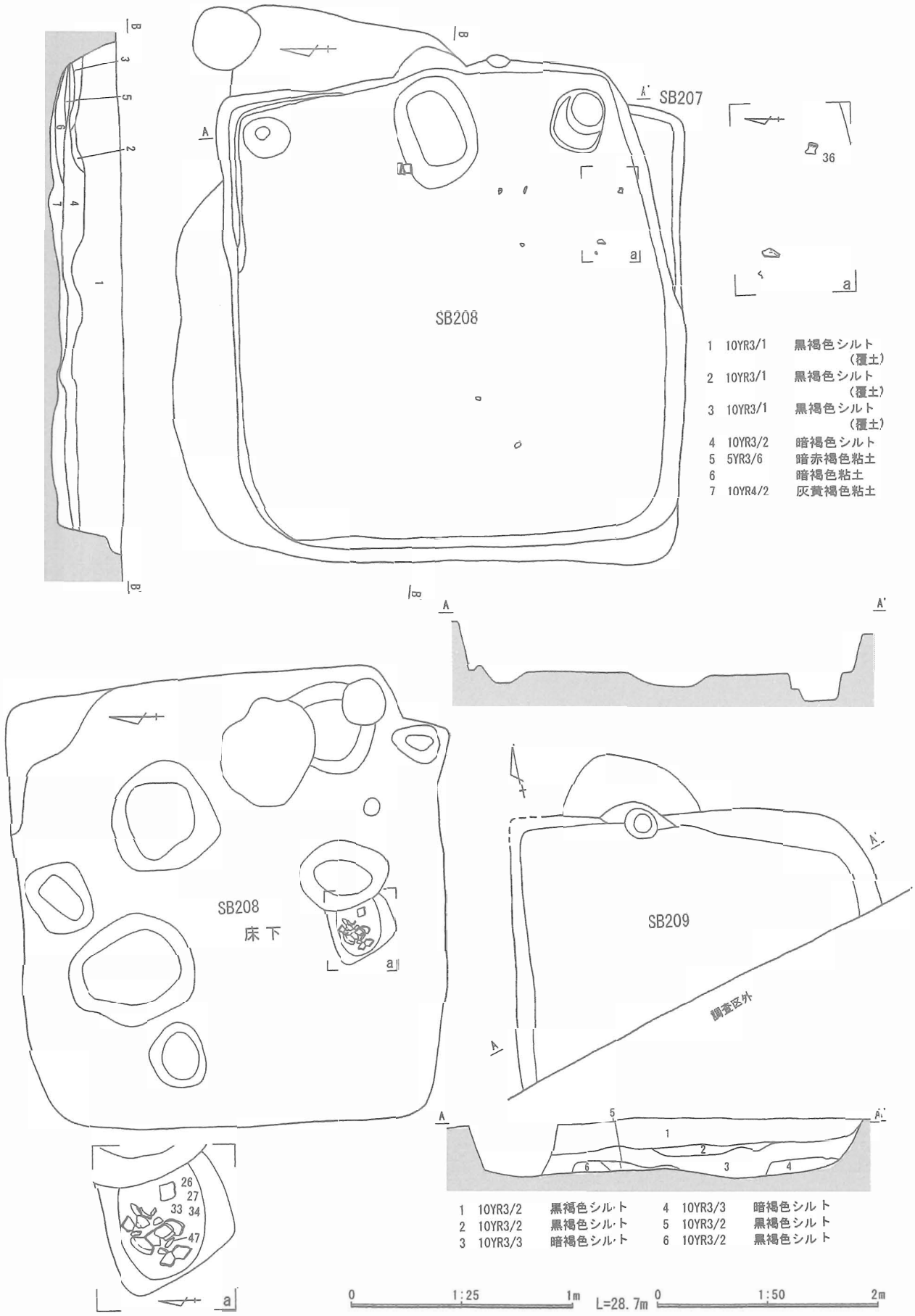
SB204より南東側で検出された。長辺2.85m短辺2.75mのほぼ方形を呈する建物である。カマド位置は不明であるが、東壁北寄りから半円形の張り出しがみられる。覆土はレンズ状の堆積を示し、床面は1面あると思われる。柱穴や壁溝は確認できなかった。床面からは細長い石が2個出土しており、カマドを構築する石材の可能性がある。遺物は土師器の細片が出土しているが図示できなかった。奈良時代の建物と考えられる。

時　期　奈良時代

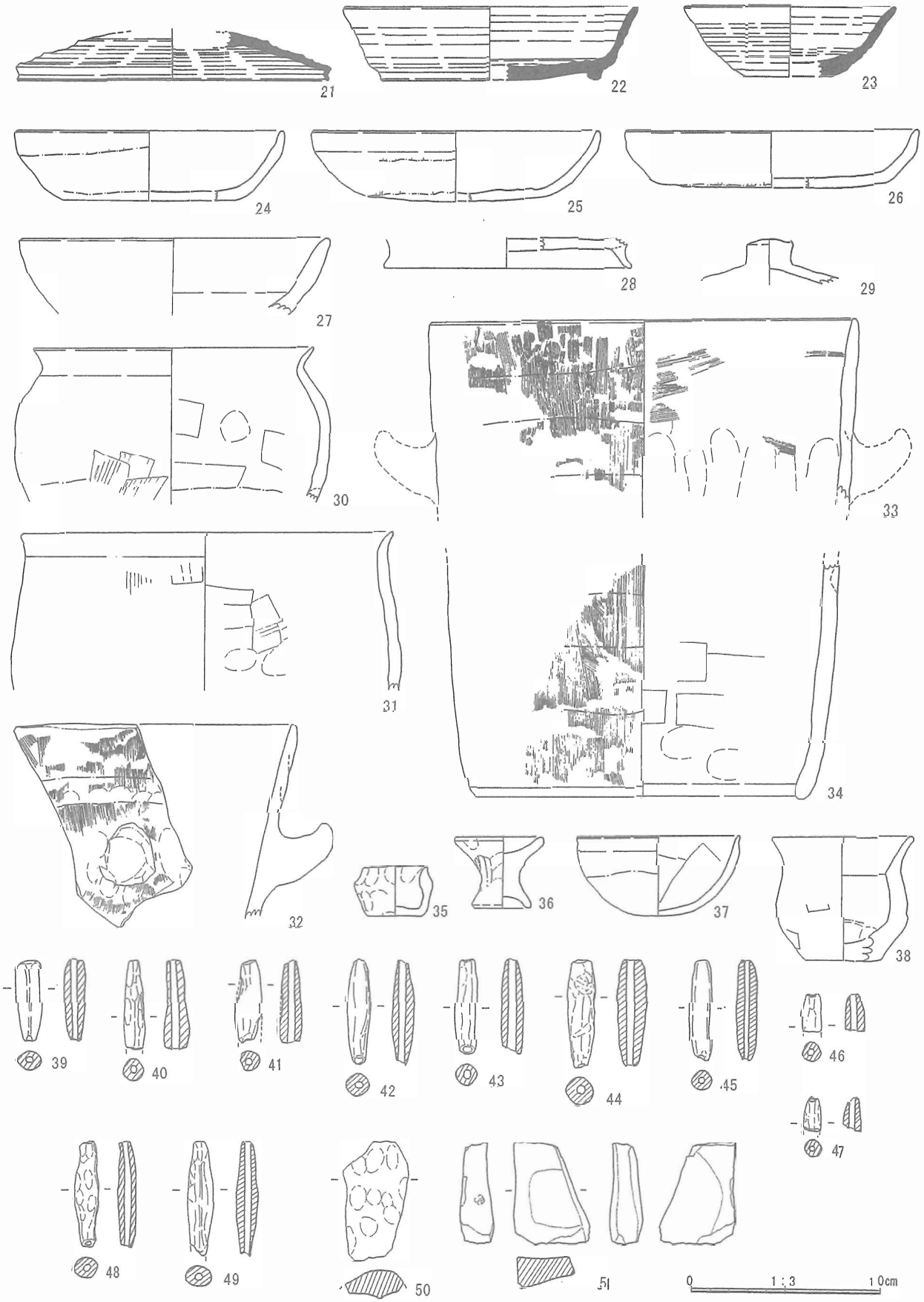
SB206（第32図　図版9）

調査区南西側で検出された。建物は北半のみの検出であったが、方形を有する竪穴建物である。東壁中央には段掘り状に掘りこまれており、焼土があることからこの部分がカマドであった可能性がある。カマドを構成する粘土や構築材としての石材などは残存しておらず、掘り方のみの検出であった。遺物は手捏ね土器や皮袋形土製品などが床面から出土しており、カマド破壊に伴う儀礼の痕跡の可能性がある。

時　期　奈良時代中葉



第35図　2区　SB208・209実測図



第36図　2区　SB208出土遺物実測図

SB206出土遺物（第34図　図版47）

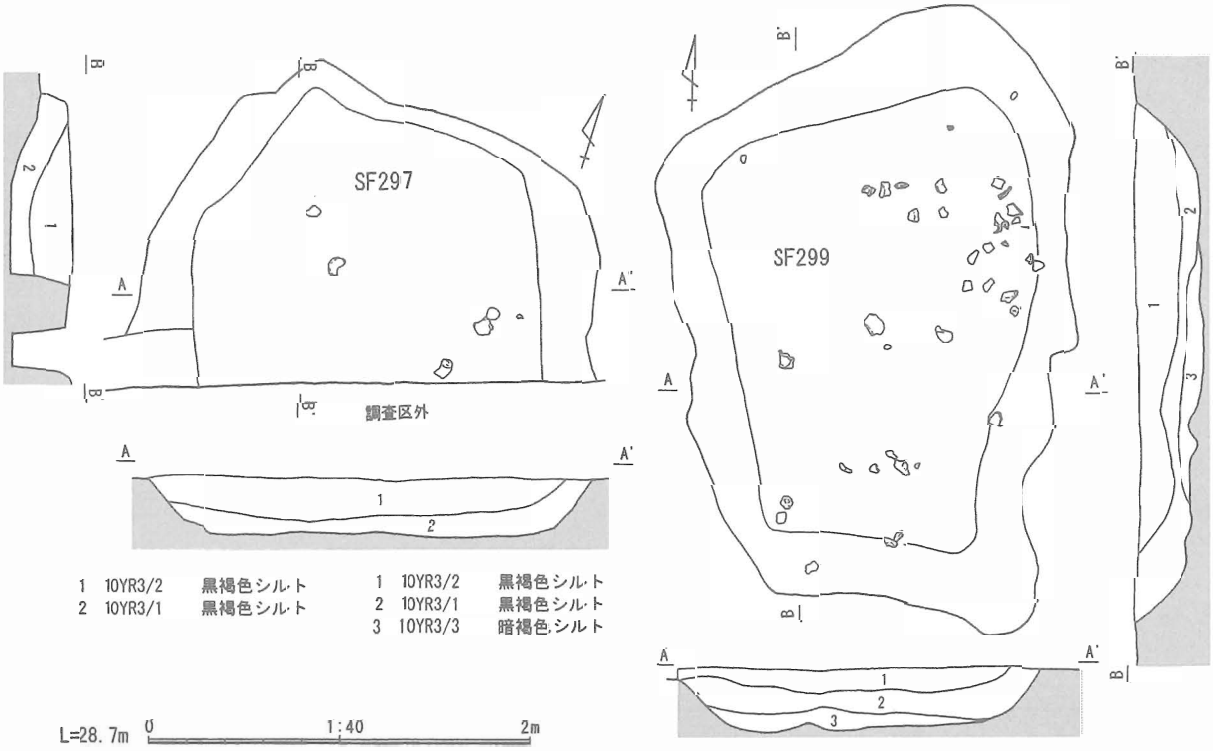
12・13は土師器坏である。14は平底の土師器小碗である。内面はハケ調整が残る。15は丸底の碗である。指頭で口縁部を摘み上げている。16は皮袋形土製品である。小型の製品である。色調は灰白色を呈する。皮袋形土製品と小型の坏がセットで出土することが多いとされており、（浜松市1999）建物内においても皮袋形土製品と坏を用いた何らかの儀礼行為を示すものといえよう。土錘は5点出土しており、17は長さ7.5cmで、径1.3cm、重さ7.3ｇである。完形で、土錘の形状は両端が細く、中央部が太い紡錘形をなしている。

今回、出土している土錘は、長さ7㎝前後のものと5㎝前後のものに大きく分けられる。形状はほとんどが紡錘形をなしている。重さは5～8ｇが中心となっている。

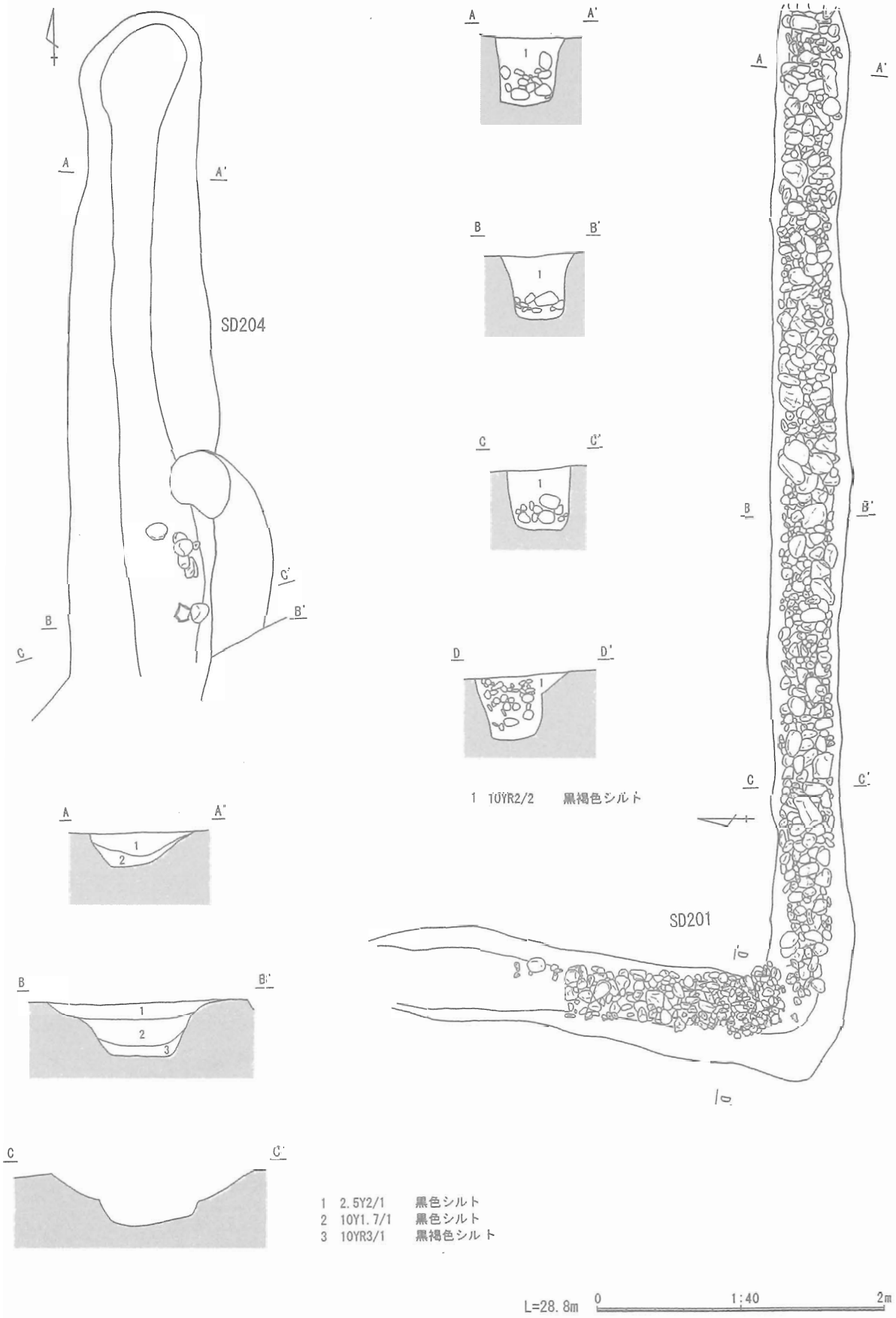
SB207・208（第35図　図版9）

SB206の北側に位置する。SB208は長辺4.3m、短辺3.9mの長方形を呈する竪穴建物で、SB207とは切り合っている。焼土や炭化物の散布はみられず、カマド位置は不明であるが、東壁中央の張り出しと土坑状の掘り込みがあることから東壁に設置されていたと推測される。主柱穴は2本確認し、建物の壁際で検出された。柱間間隔は3ｍである。壁溝は北西隅付近で一部確認した。SB208下から床下土坑を検出している。遺物は甑や土師器坏などが出土している。出土遺物はほとんどが覆土からで、須恵器摘蓋、高台付坏、無高台坏、土師器坏、手捏土器、土錘、土馬、砥石など多種にわたる遺物が出土している。特に土錘が11点出土し、今回、検出されている奈良時代の建物の中で最も多い出土量である。

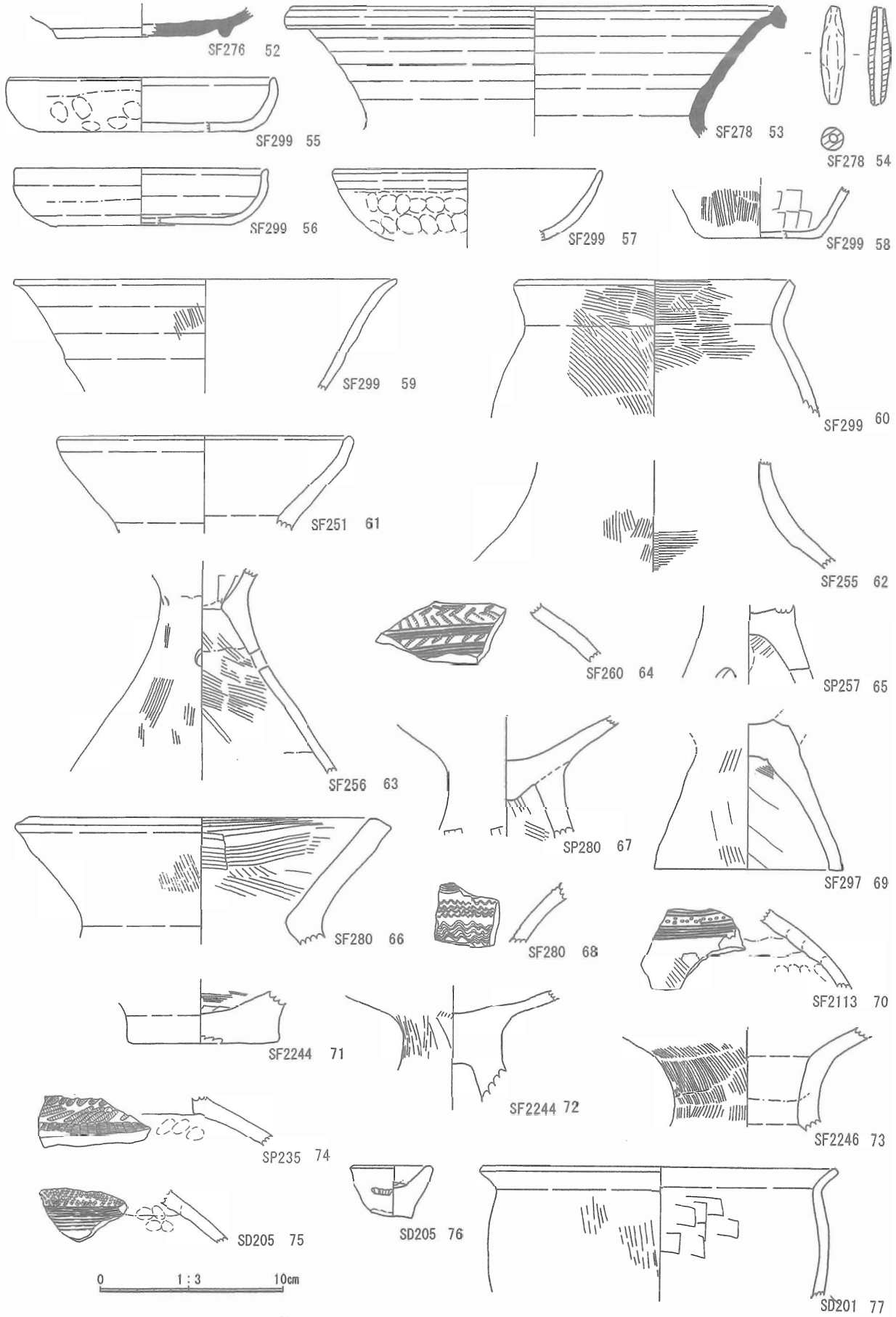
時　期　SB207・SB208の時期差は明確ではないが、SB208は8世紀中葉と考えられる。



第37図　2区　SF297・299実測図



第38図　2区　SD201・204実測図

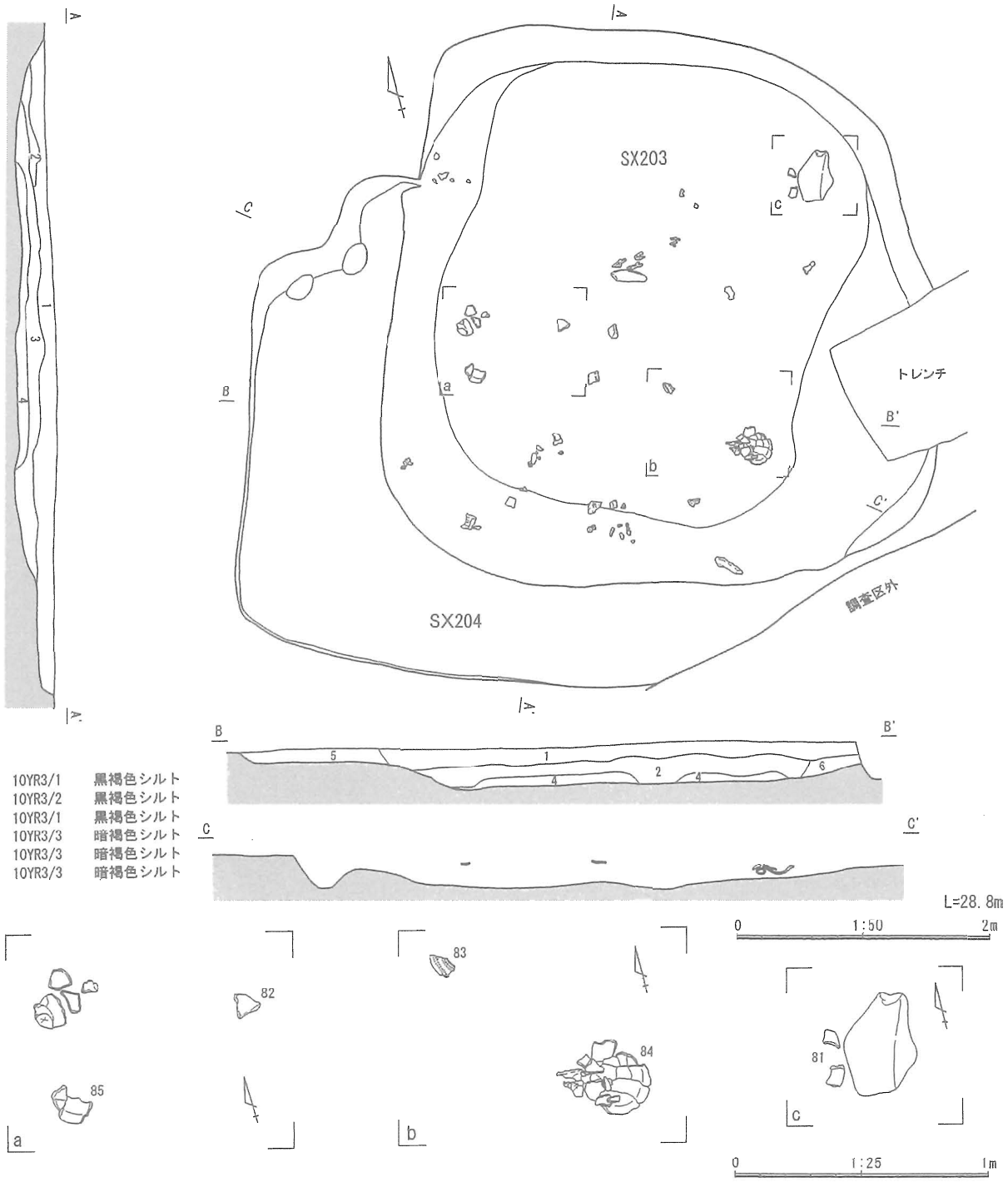


第39図　2区　土坑・小穴・溝出土遺物実測図

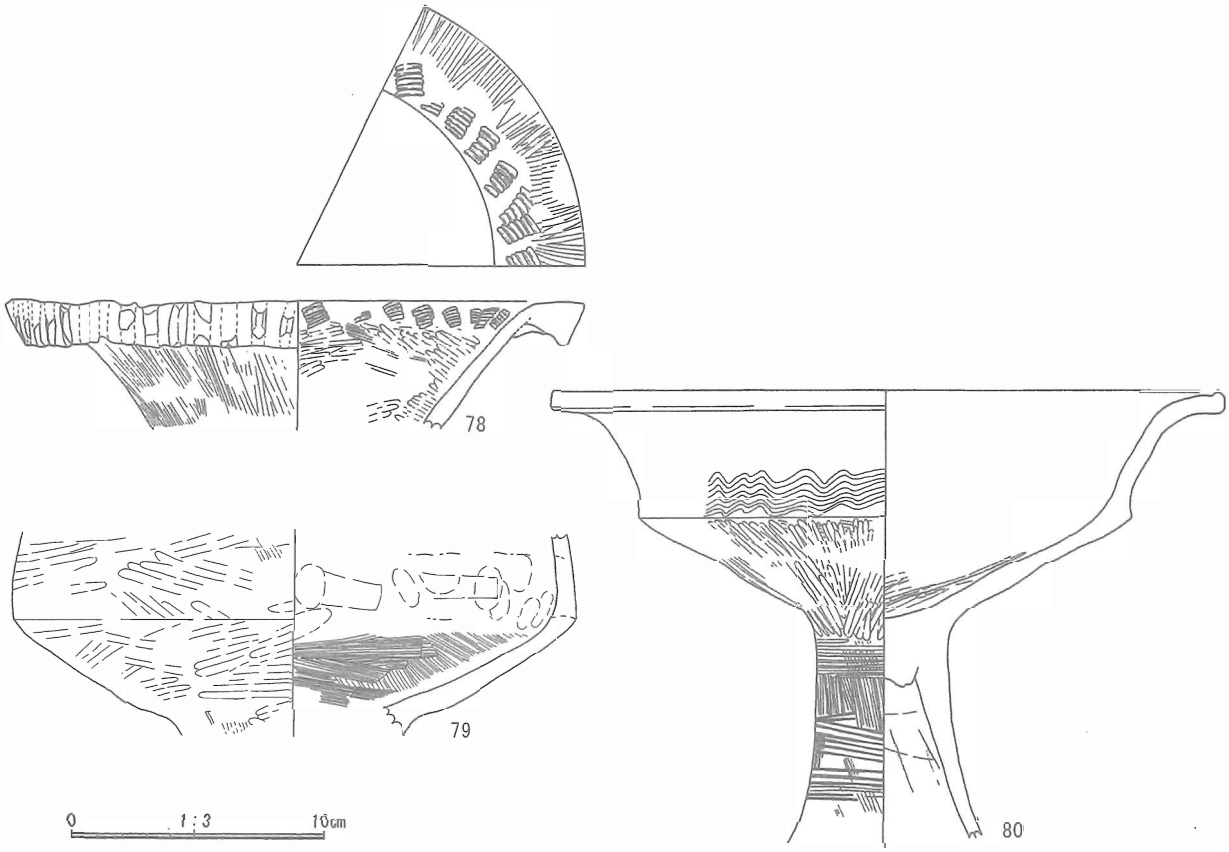
SB208出土遺物（第36図　図版48）

21は須恵器摘蓋である。摘みは欠損しているが、天井部はヘラ削りが残る。端部は屈曲しながら立ち上がる。22は須恵器高台付坏である。平底の底部から強く屈曲し、外方へ延びる。底部はヘラ削りが残り、断面はやや丸みを帯びた低い方形状の高台がつく。23は無高台坏である。口縁部は外方へ延び、底部はヘラ削りが残る。

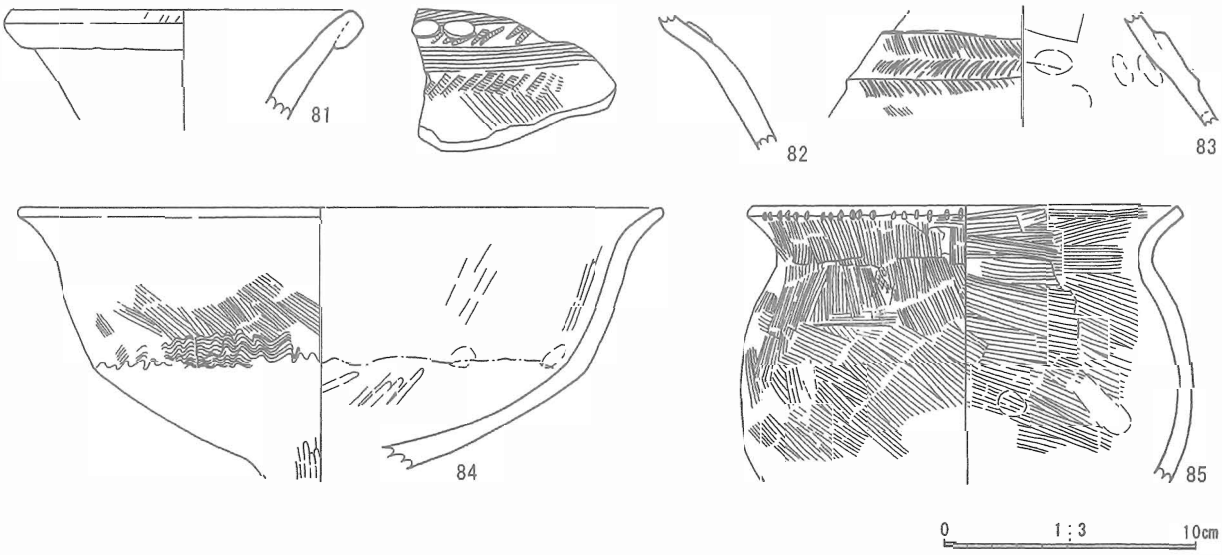
24～27は土師器坏である。28は土師器高台付坏である。高台は外方へ張り出す。29は土師器摘蓋である。30は球胴状を呈した甕である。31は土師器鉢である。赤彩が施される。32～34は甑である。外面は細かいハケ調整が施される。



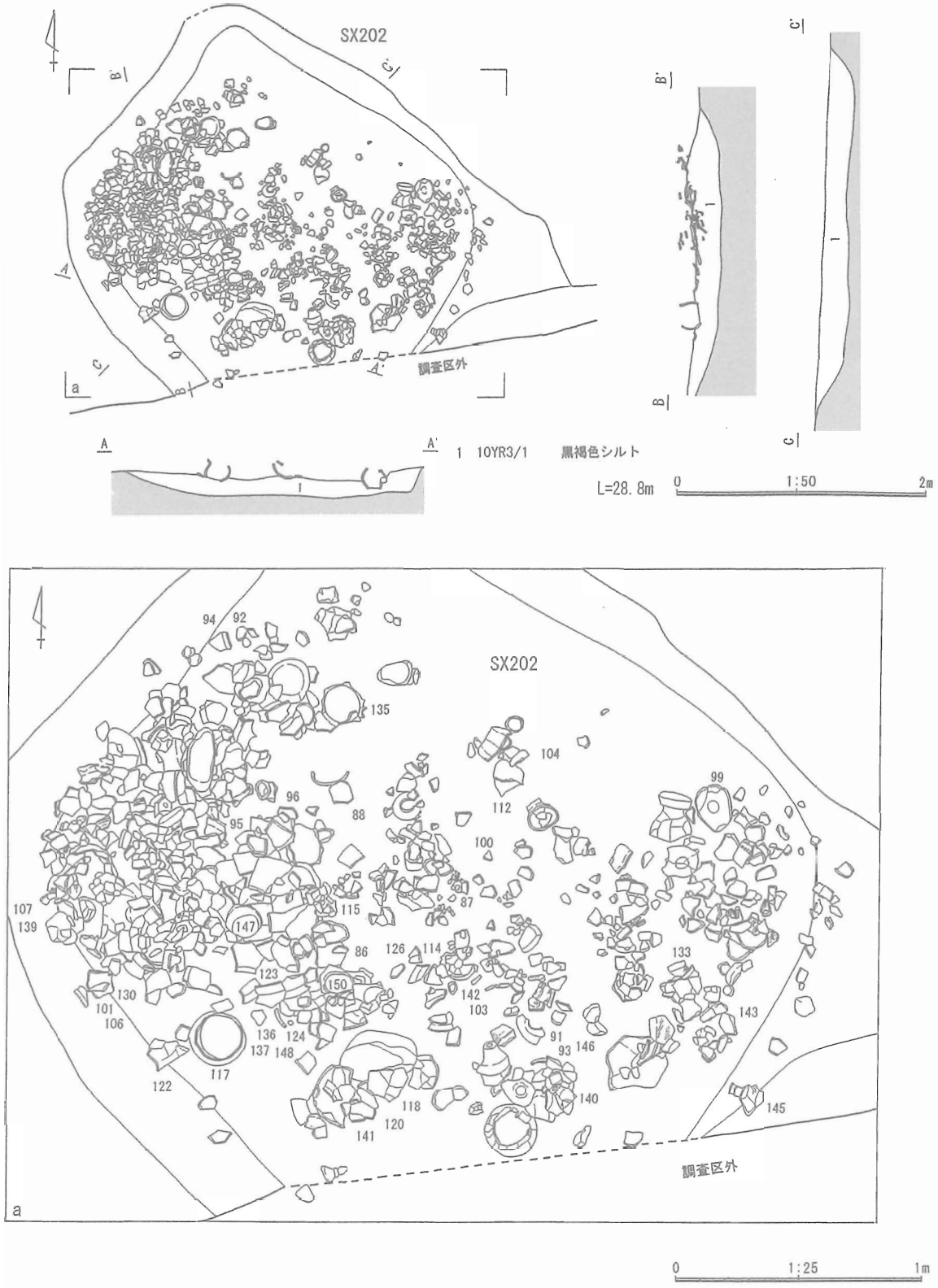
第40図　2区　SX203実測図



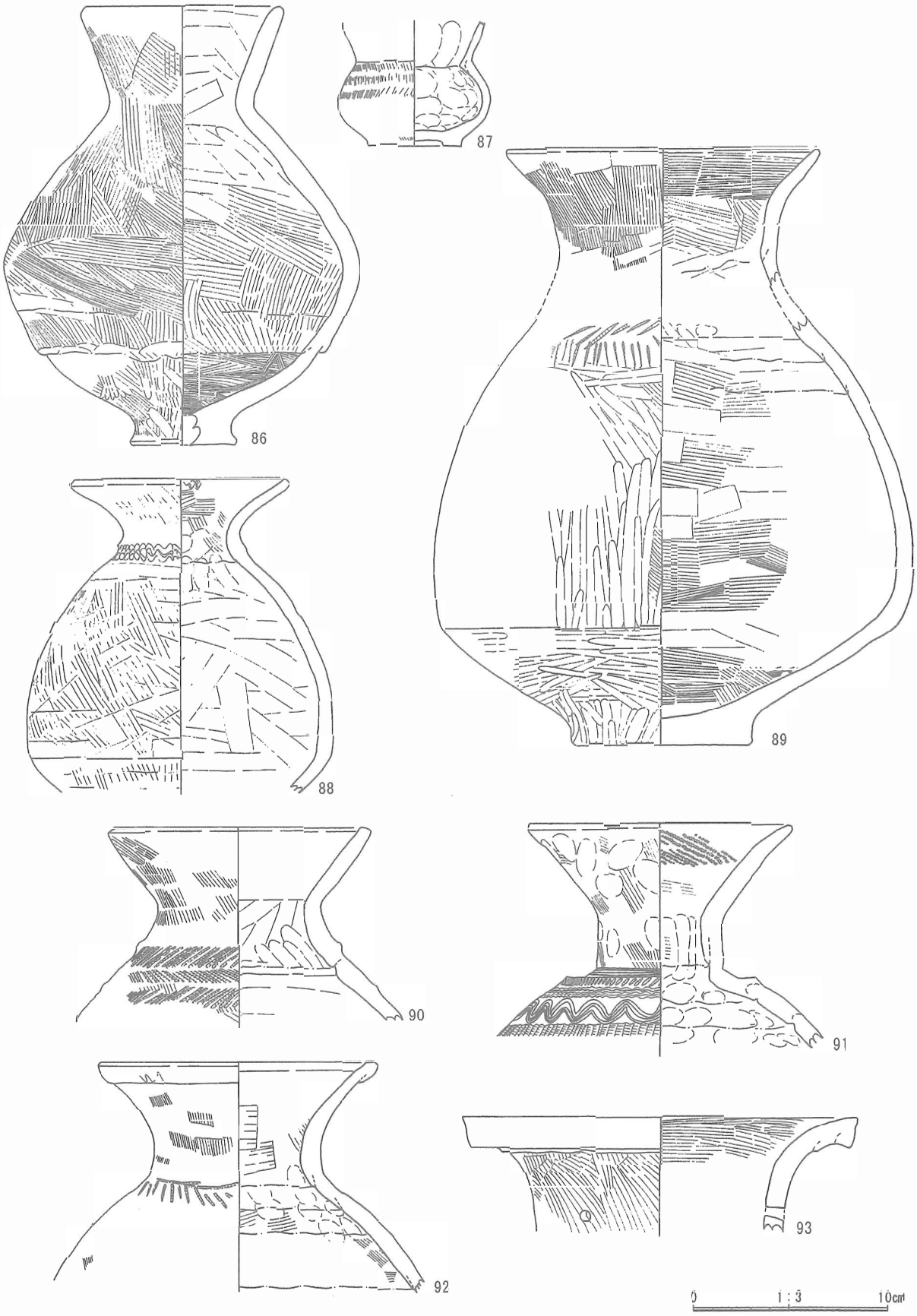
第41図　2区　SX201出土遺物実測図



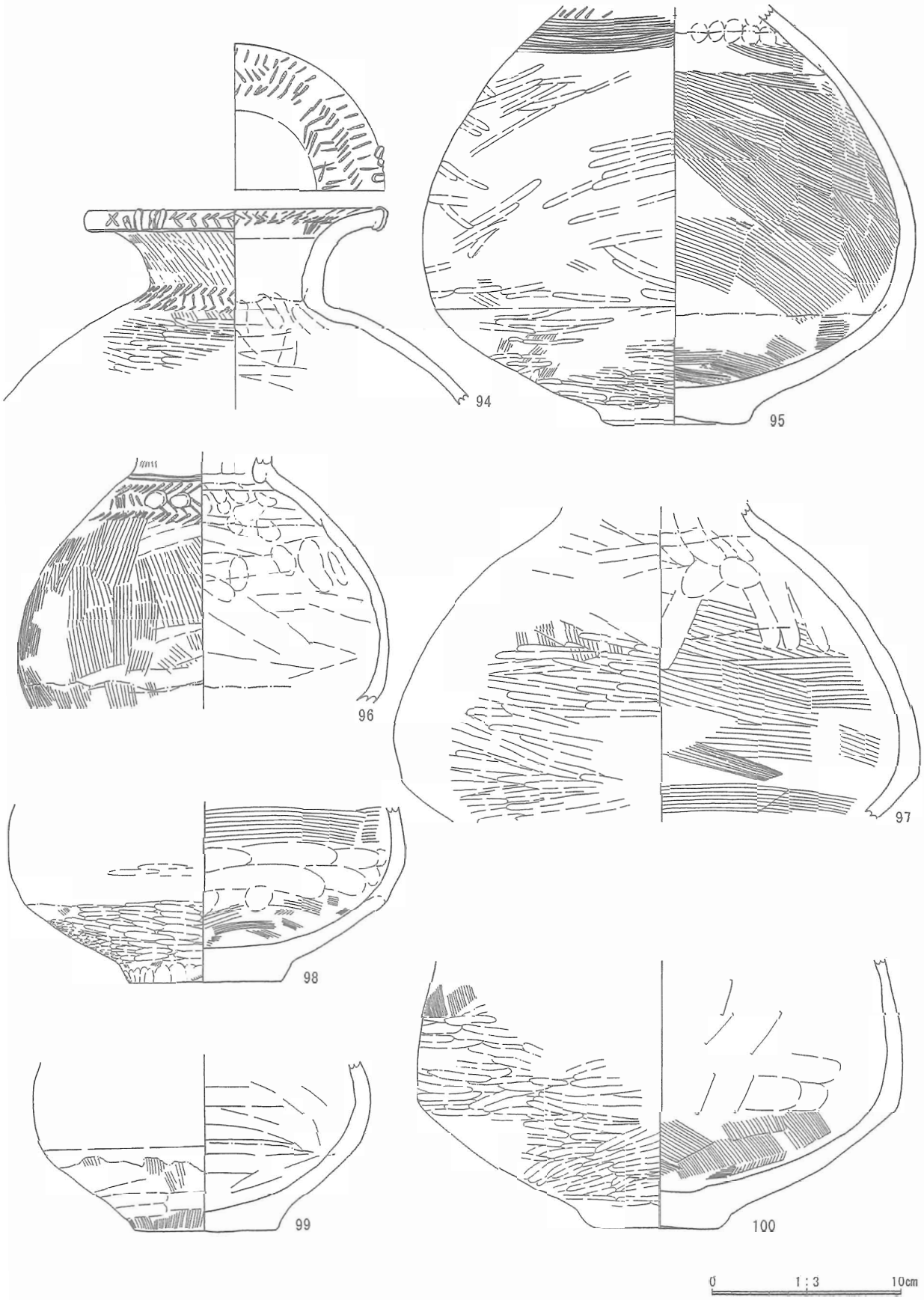
第42図　2区　SX203出土遺物実測図



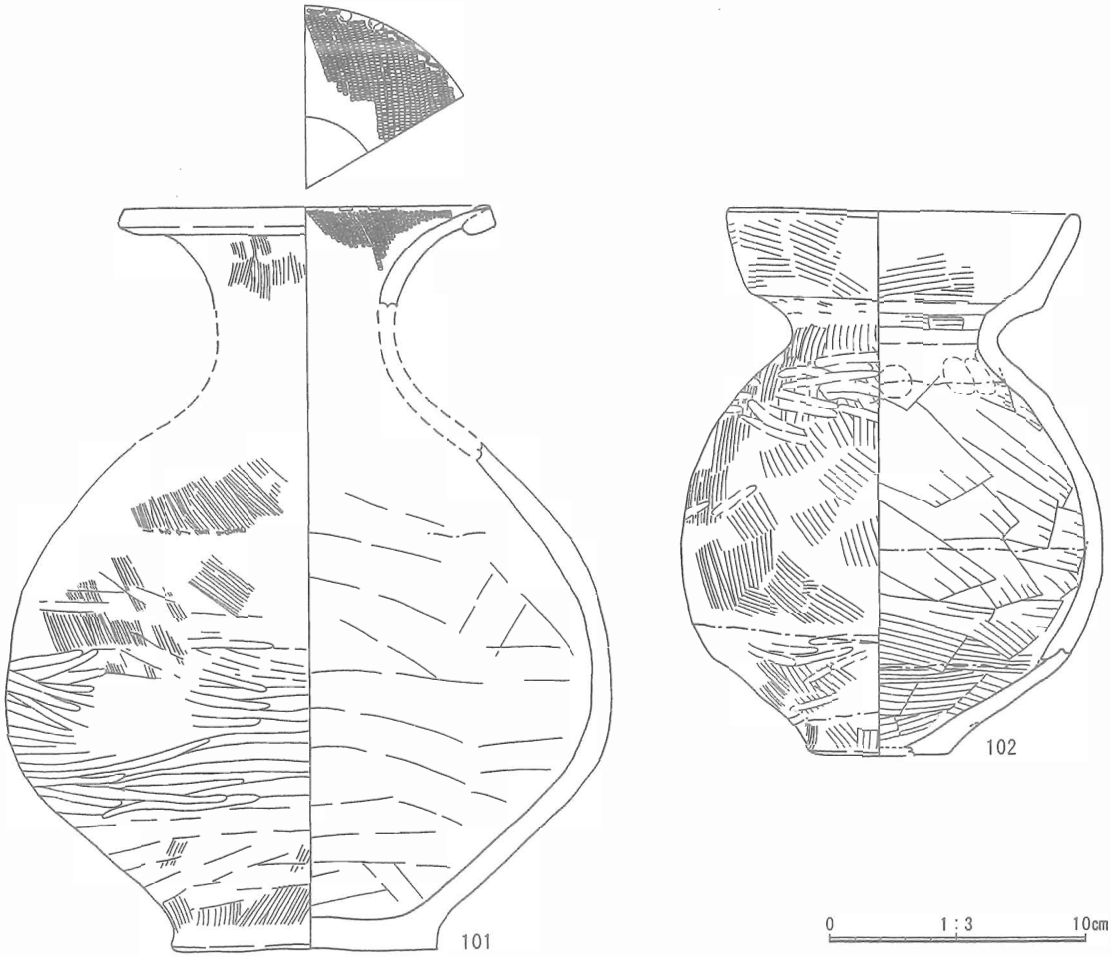
第43図　2区　SX202実測図



第44図　２区　SX202出土遺物実測図（１）



第45図　２区　SX202出土遺物実測図（２）



第46図　2区　SX202出土遺物実測図（3）

35は小型土製品の碗形である。36は小型土製品の高坏形である。37は丸底の小碗である。口縁部は横ナデ、内面は板ナデが施される。38は小型壺である。39～49は土錘である。ほとんどが完形もしくは片側の先端部を欠損しているに過ぎない。形状は紡錘形や円筒形に近い形状である。50は土馬の脚部と考えられる。51は砥石である。4面に磨面が認められる。砂岩である。

SB209（第35図）

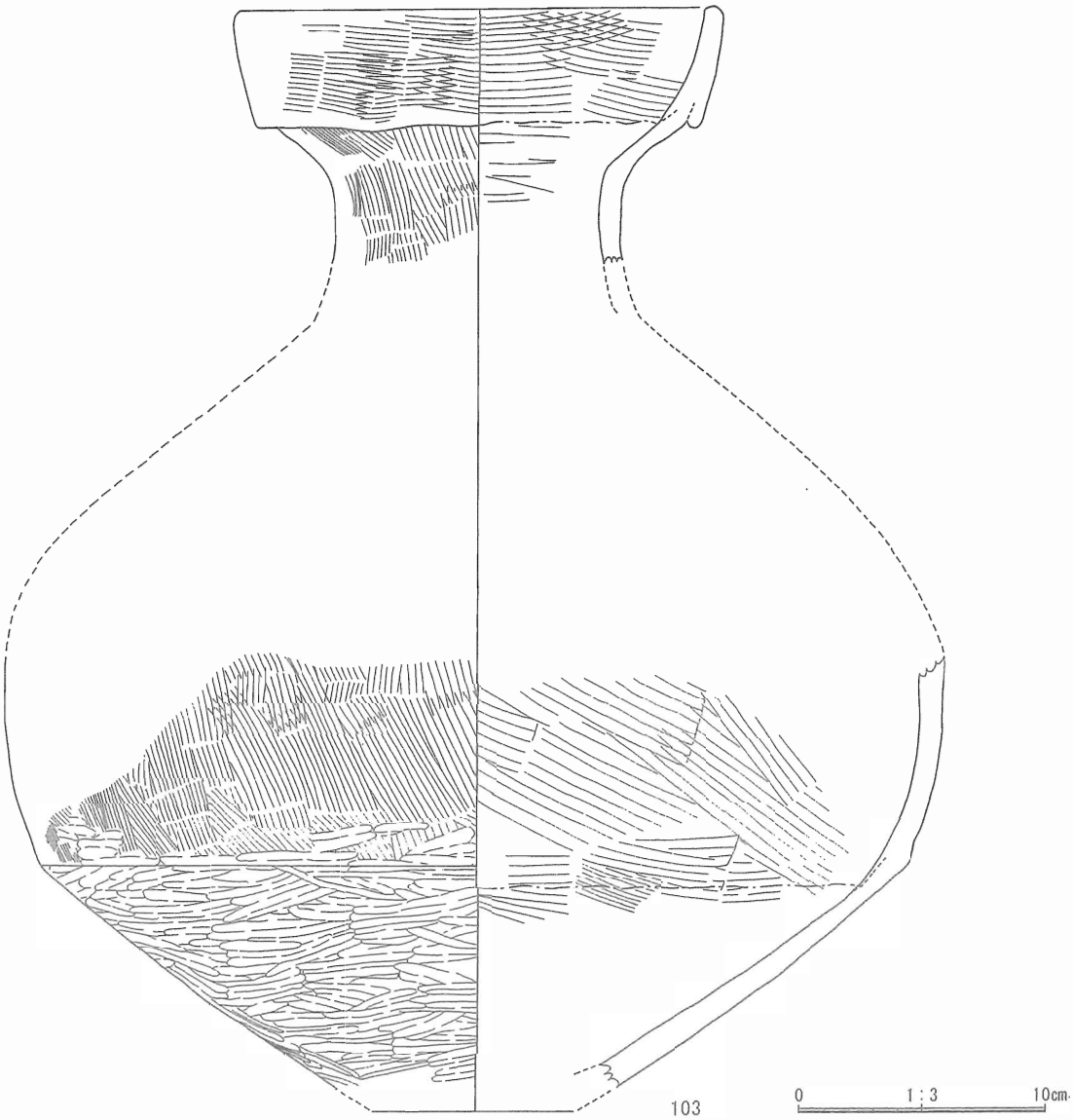
調査区中央部の南端に位置する。北半部の検出のみで南半部は調査区外へのびる。方形を呈する建物で柱穴や壁溝は確認されなかった。カマドを構成する粘土等の痕跡は明確ではないものの北壁には半円形の張り出しや小穴状の掘り込みがあることからこの場所がカマド位置であったと推測される。平面的にも土層断面からも貼床は明瞭ではなかった。

時　期　奈良時代

土坑・小穴（第37図）

SF297（第37図　図版11）

北半部の検出のみであったが、不整形な土坑である。遺物は1層からの出土が多く、弥生時代後期である。



第47図　2区　SX202出土遺物実測図（4）

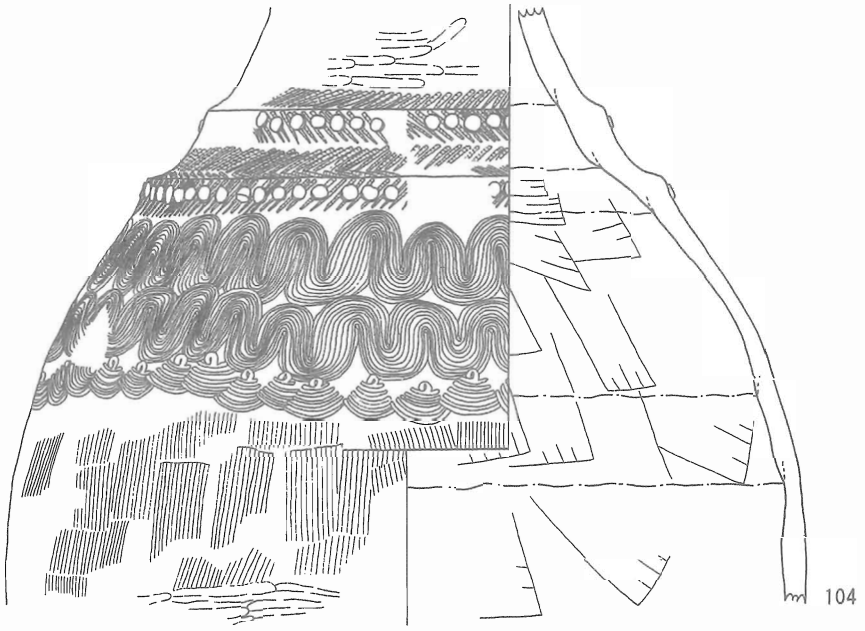
SF299（第37図　図版11）

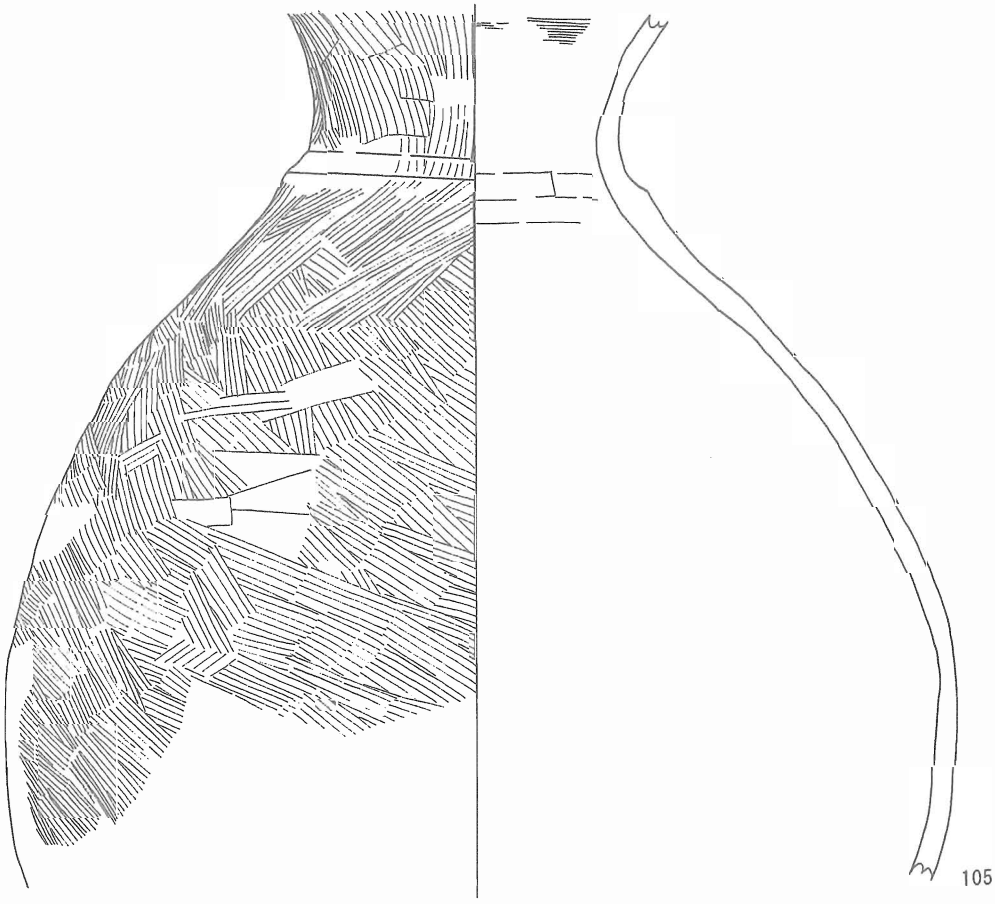
SB209の東側に位置する。不整形な方形を呈している。長軸3.15m、短軸2.2m、深さは0.3mである。底面は一定せず、断面はレンズ状の堆積を示す。遺物の多くは2層からの出土が多い。弥生後期の遺構である。

溝状遺構

SD201（第38図　図版10）

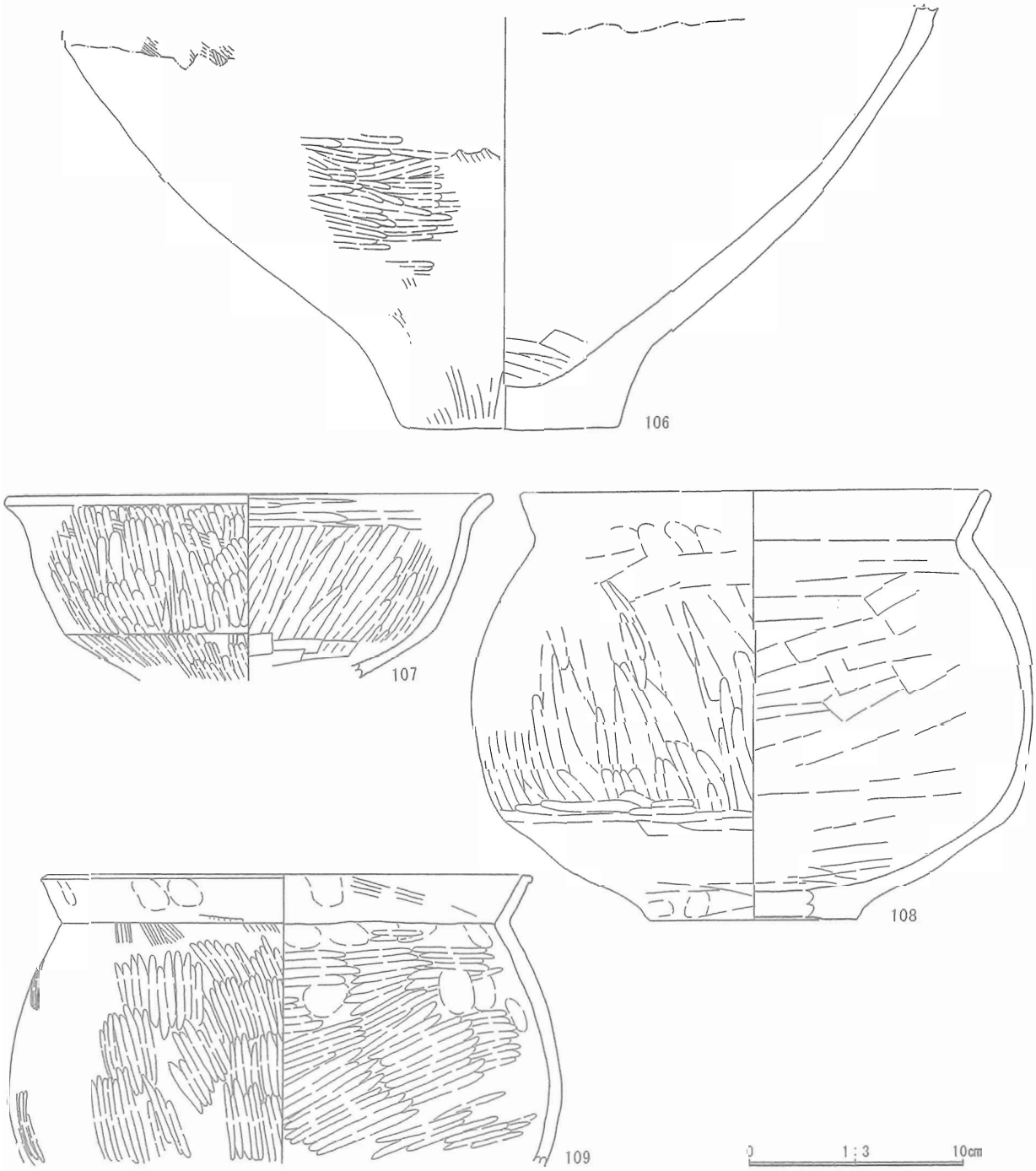
調査区東側で検出されている。3区からの溝状遺構で、江戸時代の屋敷地を区画するL字状の溝である。溝内には大量の礫が出土している。礫はほとんどが河原石で、人頭大の礫から拳大の礫までさまざまな大きさがみられる。敷石状に石を詰めている状態ではないが、厚さは0.3mほどある。



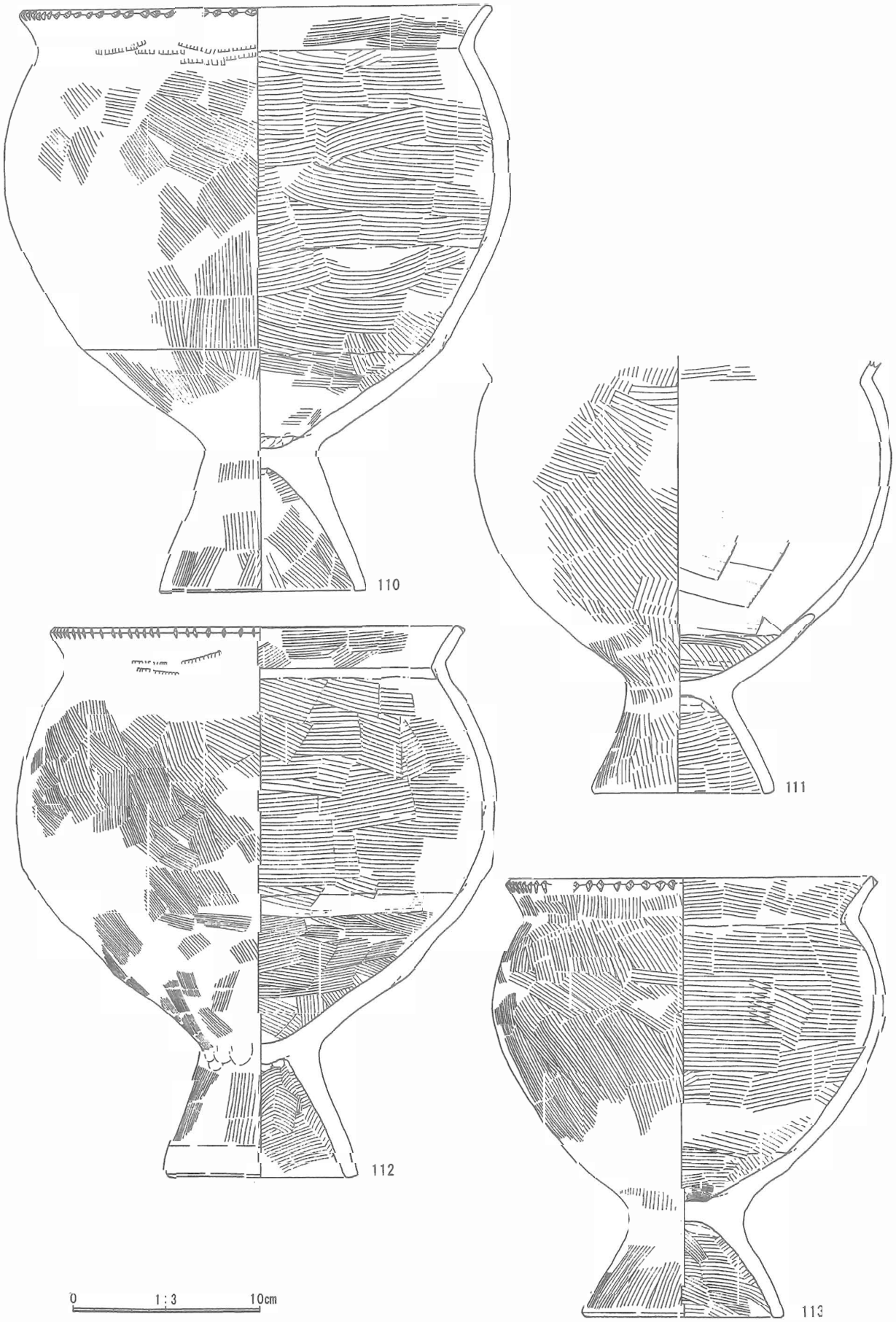


0　1：3　10cm

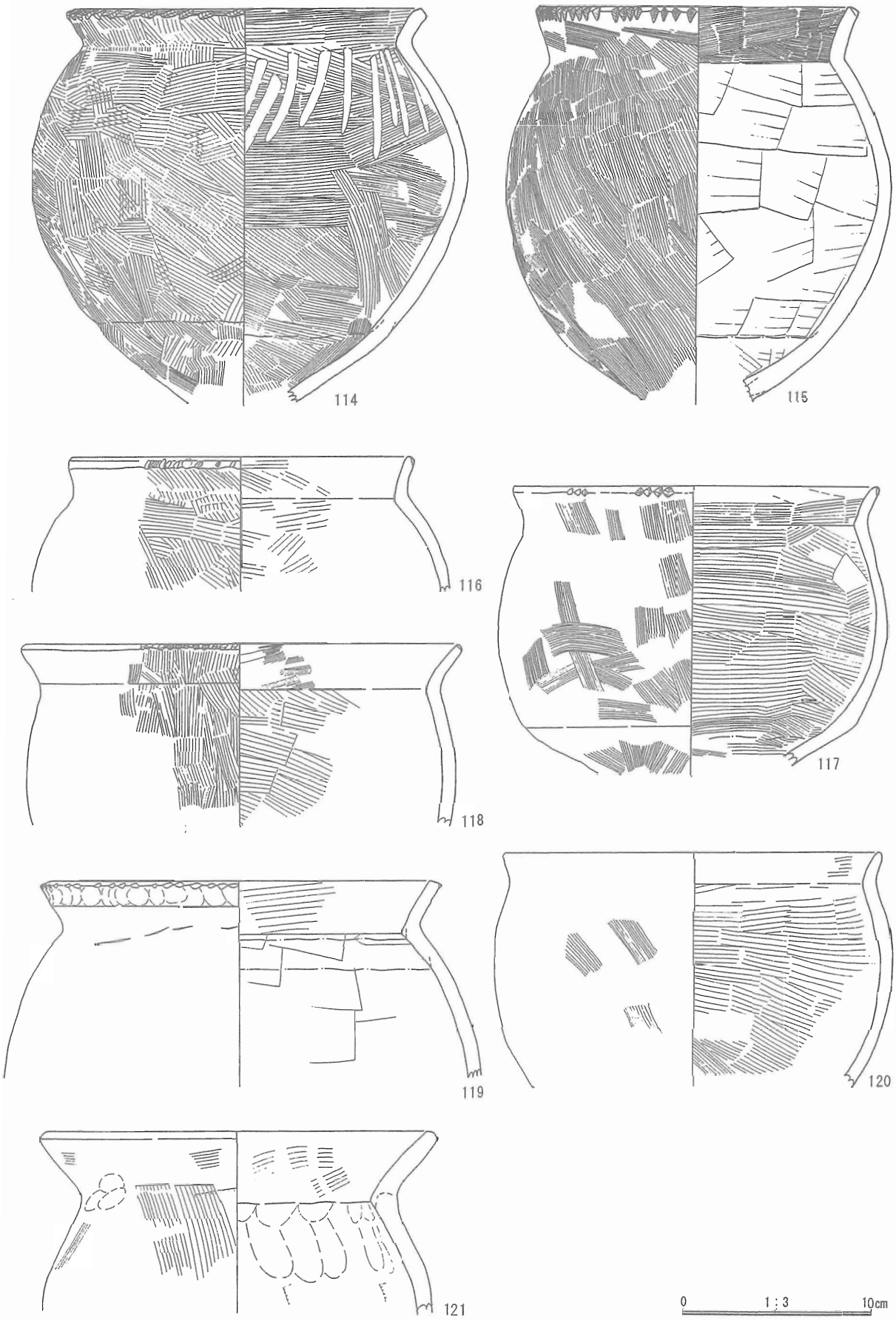
第48図　2区　SX202出土遺物実測図（5）



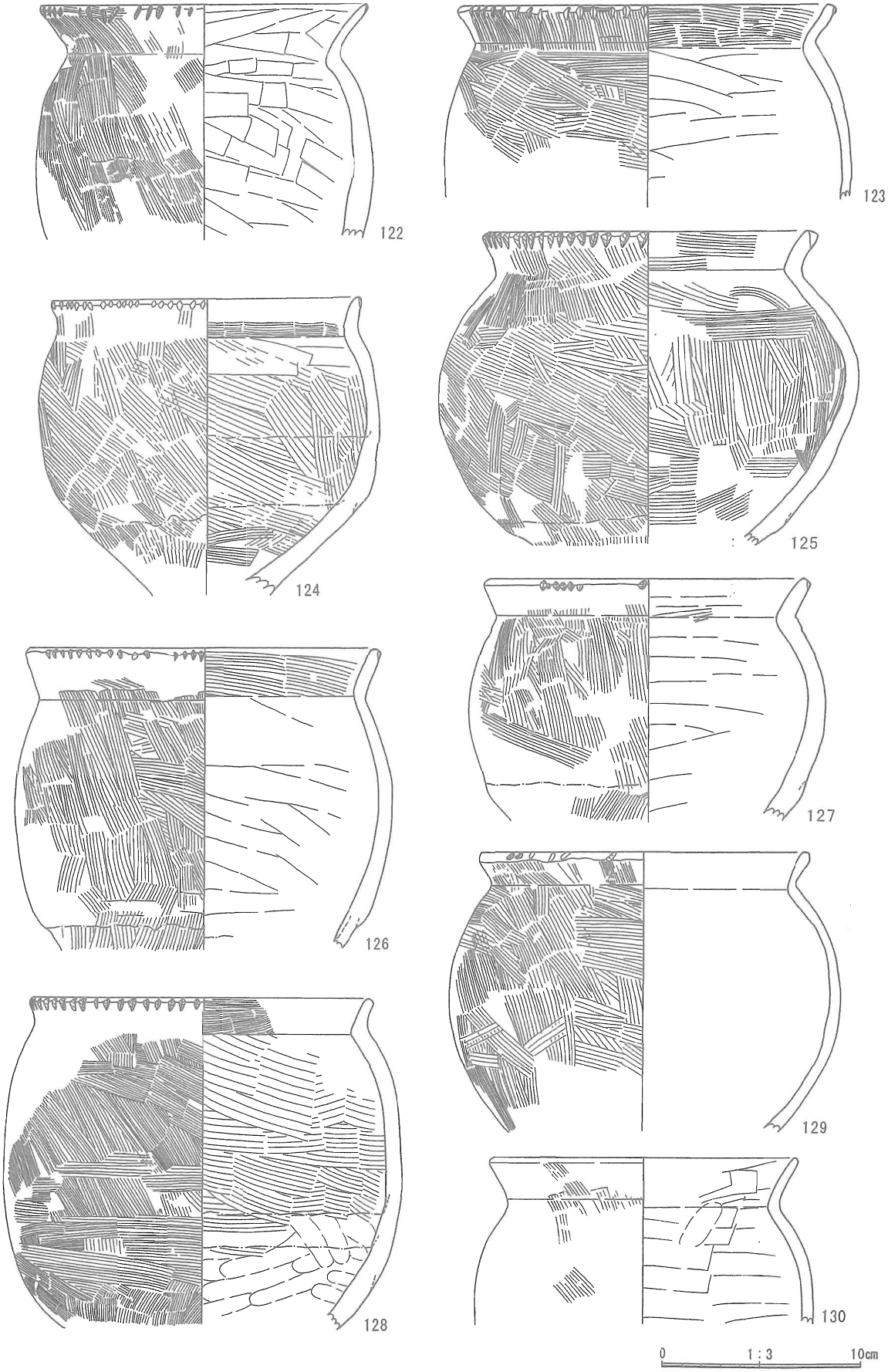
第49図　2区　SX202出土遺物実測図（6）



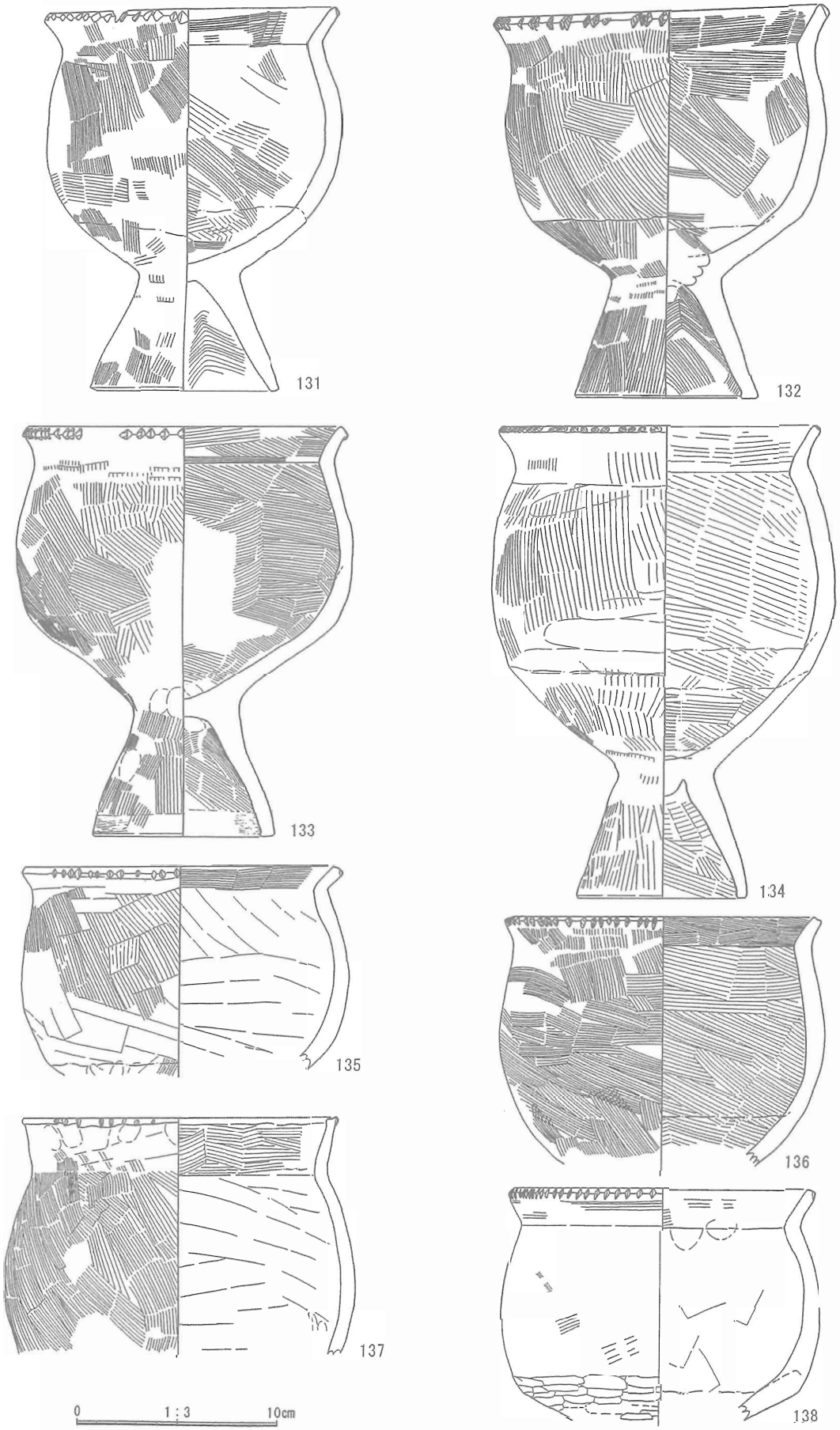
第50図　2区　SX202出土遺物実測図（7）



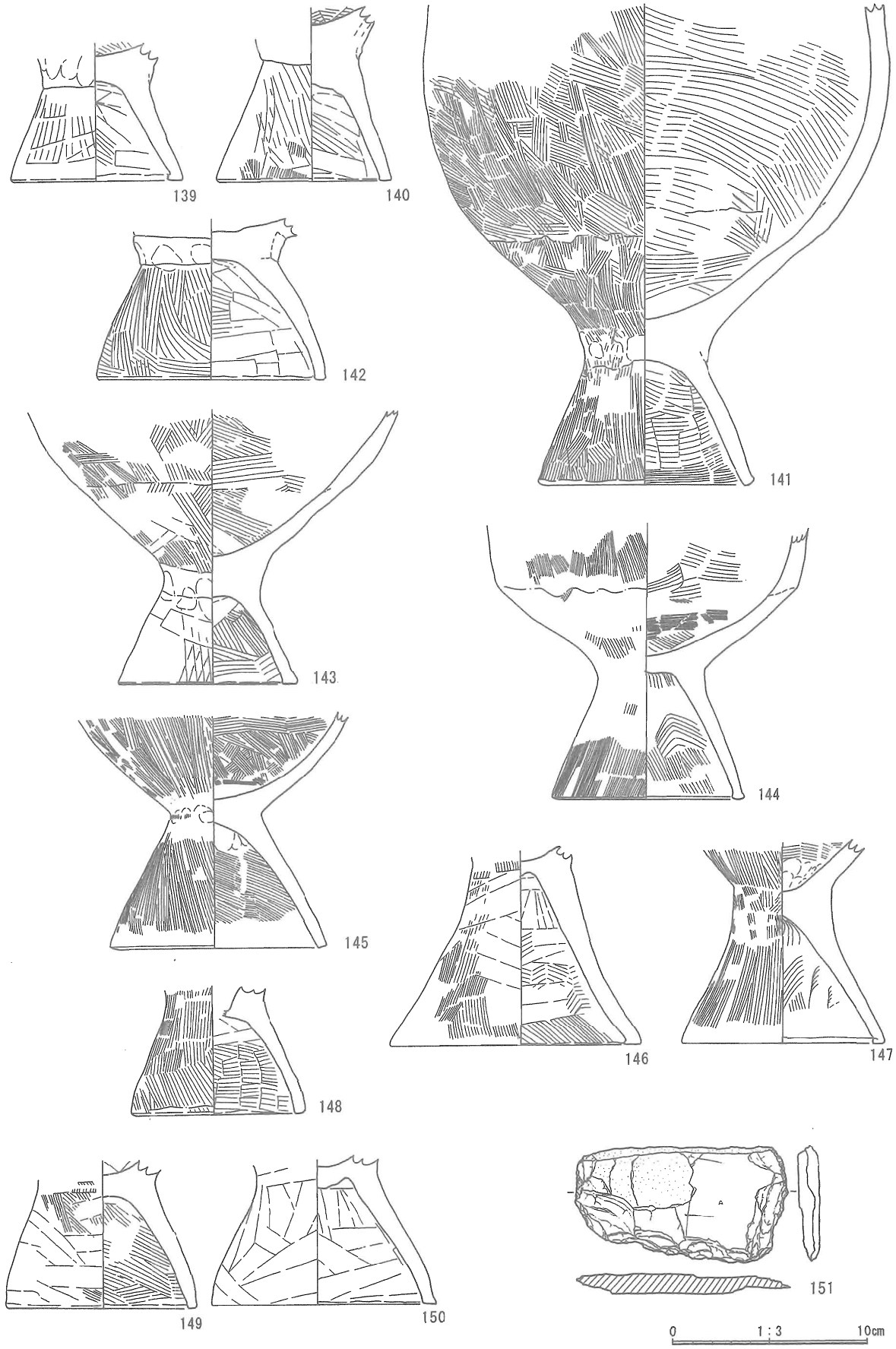
第51図　2区　SX202出土遺物実測図（8）



第52図　２区　SX202出土遺物実測図（９）



第53図　2区　SX202出土遺物実測図（10）



第54図　2区　SX202出土遺物実測図（11）

SD204（第38図）

調査区のやや西寄りで検出され、南北方向に延びる溝である。調査区中央で途切れているが、南の調査区外へ延びていく。遺物は古代の遺物が少量出土している。なんらかの区画を意図する溝であるかは不明である。

土坑・小穴・溝出土遺物（第39図　図版47）

52は須恵器高台付坏である。やや丸みを帯びた低い高台がつく。53は須恵器甕である。端部は垂下し、断面三角形状を呈する。54は土錘で、紡錘形を呈する。55～57は土師器坏である。55はやや口縁部が内湾する。56は口縁部の横ナデが顕著である。58は長胴甕の底部である。59は土師器鉢である。赤彩が施され、口縁部は外反する。60は台付甕である。端部に刻みがないタイプである。61は内湾口縁部壺である。口縁部端部は内傾面をもつ。62は壺頸部で、扁平である。63は器台の脚台部である。脚台部は長く、貫通孔をもつ。64は壺胴部片である。櫛描直線文間に刺突文がつく。65は高坏の脚台部である。66は直口壺である。厚手で、端部は面取りされる。67は台付甕である。68は壺の口縁部片で、扇形文と波状文が巡る。69は台付甕の脚台部である。やや内湾気味である。70は壺胴部片で、直線文間に刺突文がつく。71は壺底部である。平底で、木葉痕はみられない。72は高坏である。外面はミガキが縦位に施される。73は壺である。74・75は壺胴部片である。74は櫛工具による押引きが巡り、刺突文がつく。75は直線文間に縄文が施される。76は小型土製品の坏形である。口縁部は横ナデが施される。77は長胴甕である。口縁部は外方へ延びる。

不明遺構

SX201（第29図）

調査区の東半で検出された。江戸時代の溝に切られている。楕円形を呈し、竪穴状であることから竪穴住居の可能性が指摘できるが、床面が一定でないこと焼土、炉がみられないこと、さらに弥生時代後期の竪穴住居は西側の１区で途切れることから不明遺構とした。遺物量は少ない。

SX203・SX204（第40図　図版10）

SX203は楕円形を呈しており、長径4.4m短径4.2mである。SX204と切り合っている。隅丸方形を呈しており、竪穴建物の可能性もある。貼床、焼土、炉跡はみられなかったが、遺物は比較的多く出土している。中央部には細長い石や置砥石のような石材が出土している。

SX203出土遺物（第42図）

81は折返口縁壺である。折り返し部は丸みを帯びる。82・83は壺胴部である。82は櫛描直線文間に櫛刺突文がつき、2個1単位の円形浮文がつく。83は突帯の側面から多段の刺突羽状文が施される。84は有稜高坏である。やや深い坏部で稜はゆるく、口縁部は外反する。稜の上部に櫛描波状文が巡る。内面はわずかではあるがミガキが残る。85は台付甕である。口縁部端面に刻みを有する。

SX202（第43図　図版12）

調査区の南西隅で検出された。楕円形を呈しており、長径3.1m、短径2.9mである。遺物は大量に出土しており、そのほとんどが覆土からで、底面より浮いた状態で出土している。特に土器は西側で集中的に出土している。土器以外にも大型の石やみられた。柱穴等は底面から出土していないが、建物廃絶時の窪みを利用して土器が廃棄された可能性が高い。時　期　弥生時代後期後半である。

SX202出土遺物（第44～54図　図版49～54）

86は単純口縁壺である。体部最大径に対して、底部径が小さい。体部下位には接合痕が明瞭に残る。87は小型の壺である。体部上位には刺突文がつく。88は単純口縁壺である。頸部には波状文がつく。端部は面取りされる。胴部下位で屈曲し、無花果形を呈する。89は単純口縁壺で、直立する頸部をもち、口縁部は外反する。体部上位には櫛刺突文が巡る。91は単純口縁壺である。頸部は直立し、口縁部は外反する。頸部と体部の段差は明瞭に残る。上位には櫛刺突文、波状文、櫛状工具による押引き文がつく。

92は折返口縁壺である。低い折返部がつき、体部上位に櫛刺突文が施される。93は折返口縁壺である。やや直立ぎみに立ち上がる頸部には穿孔が1穴確認された。94は折返口縁壺である。端部側面には刺突文がつき、棒状浮文が貼付される。口縁部内面や体部上位に櫛刺突文が施される。95は体部下位の屈曲は緩やかである。上位には直線文、櫛刺突文がつく。斜位、横位のミガキが施される。96は内面の頸部と体部の境は残り、2点1対の円形浮文がつく。直線文、刺突文が上位に施される。97は扁平な形態で、体部下位の屈曲は強い。98～100は壺の底部片である。98は屈曲部に横位のミガキが施される。100は下位の屈曲は強く、やや直立ぎみに立ち上がる。

101は折返口縁壺で、球胴状を呈する。口縁部は断面方形の折返部がつく。口縁部内面には縄文がつき、2点1対の円形浮文が貼付される。体部中位よりやや上には縄文が施される。

102は複合口縁壺である。短い頸部をもち、口縁部は外上方へ開く。粗いハケ調整が残る。103は複合口縁壺である。直立ぎみに立ち上がる頸部をもち、内湾しながら立ち上がる。体部最大径は下位で明瞭に屈曲する。下位には横位のミガキが施される。104は2段の突帯に櫛刺突羽状文がつき、連続して円形浮文がつく。その下部には櫛状工具による波状文が2段つき、扇形文が施される。105は外反する頸部下に無文の突帯がつく。荒い斜めのハケが施される。106は底部片である。底部径に対して、やや広がる形態である。外面には横位のミガキが残る。

107は高坏である。端部は短く屈曲し、外方へ延びる。内外面とも斜位のミガキが顕著である。108は単純口縁の鉢である。口縁部は短く屈曲し、体部最大径は下位に位置する。外面は横位、斜位のミガキが施される。109は球胴状を呈する鉢である。口縁部は短く屈曲し、端部は外へ小さく張り出す。

110～150は台付甕である。SX202から最も多く出土している器種である。114は口縁部が短く屈曲し、球胴状を呈する。胴下半には接合痕が残る。115は長胴状を呈する。116は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部に刻みが入る。117は胴下半で屈曲し、球胴状を呈する。119の端部は面取りされ、刻みが入る。端部下には指ナデが残る。120・121は口縁端部に刻みが入らない。

122は口縁部が外方へ屈曲し、長胴状の甕である。124は直立ぎみに立ち上がり、胴下半で緩やかに屈曲する。下半には接合痕が残る。125は球胴状の甕で口縁部は短く屈曲する。126は胴部下半の接合痕が残る。128は口縁部が短く屈曲し、やや長胴状の甕である。129は球胴状で、胴部最大径が口径より上回る。130は刻みがつかない。

131～138は口径15cm前後の小型の台付甕で、口径と体部最大径はほぼ同じである。131は球胴状の甕である。132・133は体部下位で屈曲する甕である。134はやや長胴化した甕である。胴下半の接合部の稜が認められる。135・136は口縁部が短く屈曲する。135は胴下半の接合部の稜が残る。137は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端面は上方へ向く。

139～142は脚台部に粘土帯が貼られる。141は長胴化した甕である。143は脚台部の境には粘土帯が貼付された痕跡が残る。144はやや長い脚台部を有し、体部下位で屈曲する。146・147は脚台部がやや長い形態である。

151は打製石包丁?である。打製石斧の可能性もあるが、長辺部、短辺部ともに磨耗痕が観察されている。石材は結晶片岩で、重量は108.77gである。

第４節　東原　３区

東原遺跡３区の検出遺構（第55図）

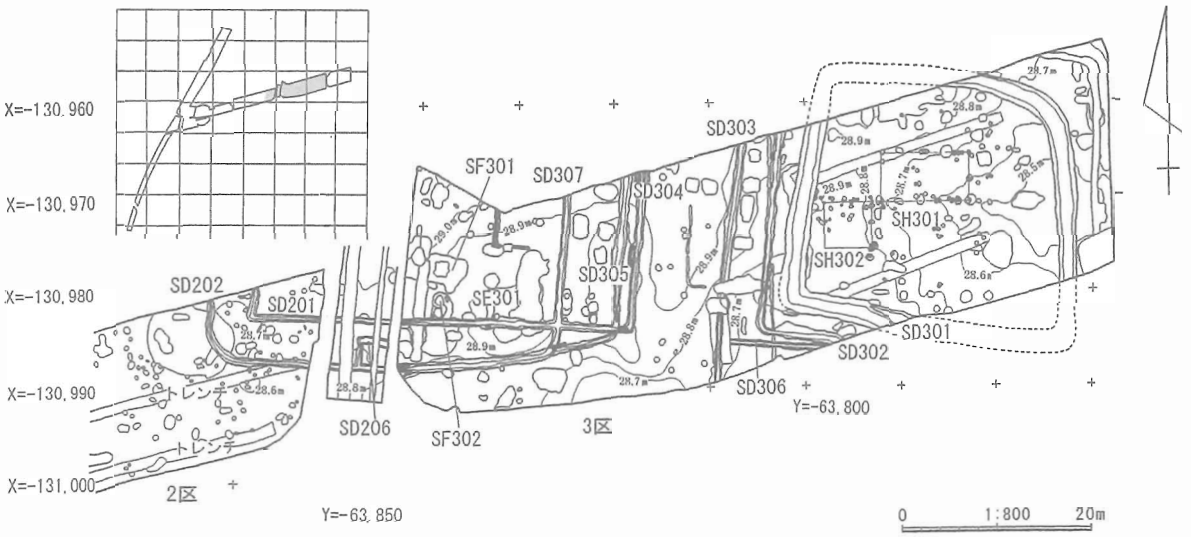
概　要

３区は２区の東側に位置し、検出された遺構は屋敷地１、屋敷地２、区画溝、建物２棟、トイレ遺構、井戸、土坑、小穴で、弥生時代の遺構、奈良時代の遺構は皆無であった。

そのほとんどが江戸時代の遺構で、18世紀後半～19世紀前半に比定できる。幅2.5ｍの堀状を呈する区画溝内には多数の小穴が検出され、その内部の屋敷地１には母屋、納屋といった建物が想定できた。瓦の出土量は極めて少なく、建物の一部に瓦に葺かれていた可能性はあるものの、ほとんどが茅葺きあるいは柿葺きであった可能性が高い。この屋敷地内からはそのほか建物に関連する遺構は確認されなかった。

広い屋敷地を有することからこの時期の建物は掘立柱建物ではなく、おそらく礎石建物や石場立建物であること考えられる。したがって、これらの建物は礎石据え付け痕跡のみの検出で、礎石や礎石下の根石はほとんどみられなかった。おそらく移転に伴い持ち去られたものであろう。出土遺物は白色のかわらけ、瀬戸・美濃産の陶磁器、常滑産の大甕、肥前産の磁器、志戸呂産の陶器などがある。

このさらに隣接する西側には数条の区画溝が切り合いながら検出されている。この屋敷地２は少なくとも３時期に分けられ、その内部には建物は検出されなかったが、井戸、厠遺構が検出されており、この区画溝内も屋敷地としての性格が考えられる。特に厠について常滑産の大甕が埋置されており、廃棄する際、甕の破片をそのままの状態で埋めていることから糞尿溜と考えられる。この屋敷地２は東西39ｍで、溝幅は屋敷地１と比較すると幅狭であるが、面積は屋敷地２のほうが広いと考えられる。この区画溝の隅から堰状の石組遺構がみつかっている。しかしながら土層の堆積状況から水が流れた痕跡は明確に認められず、用途は不明である。



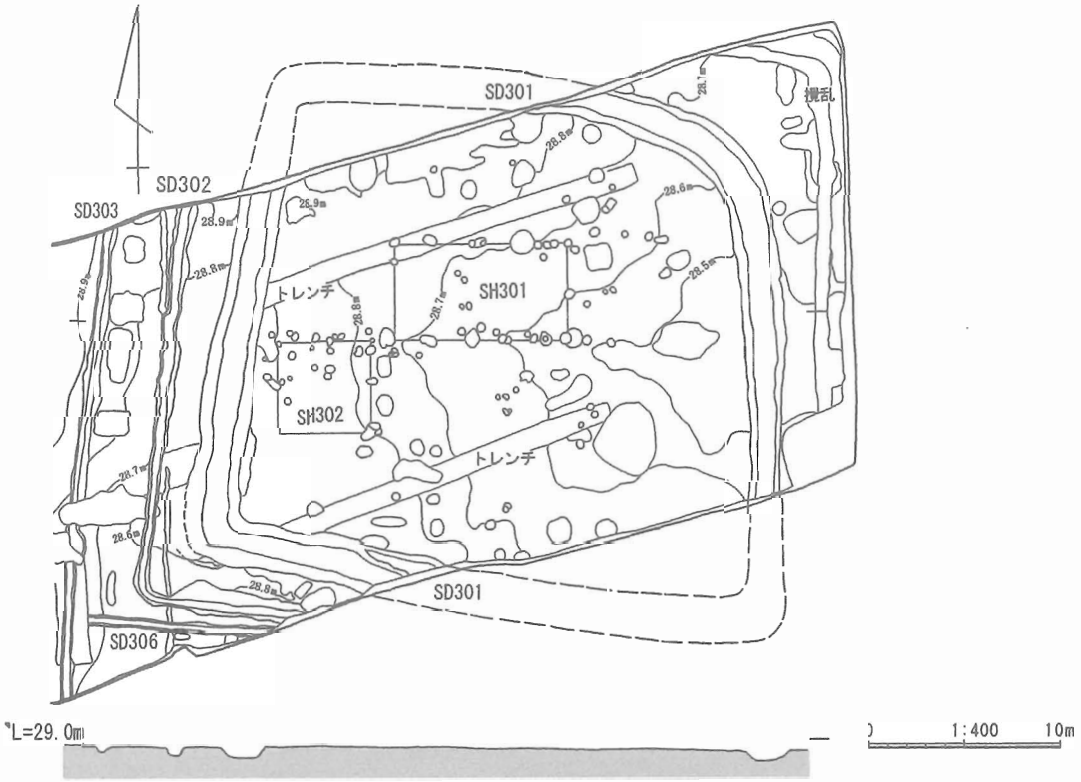
第55図　３区　全体図

屋敷地１（第56図　図版13）

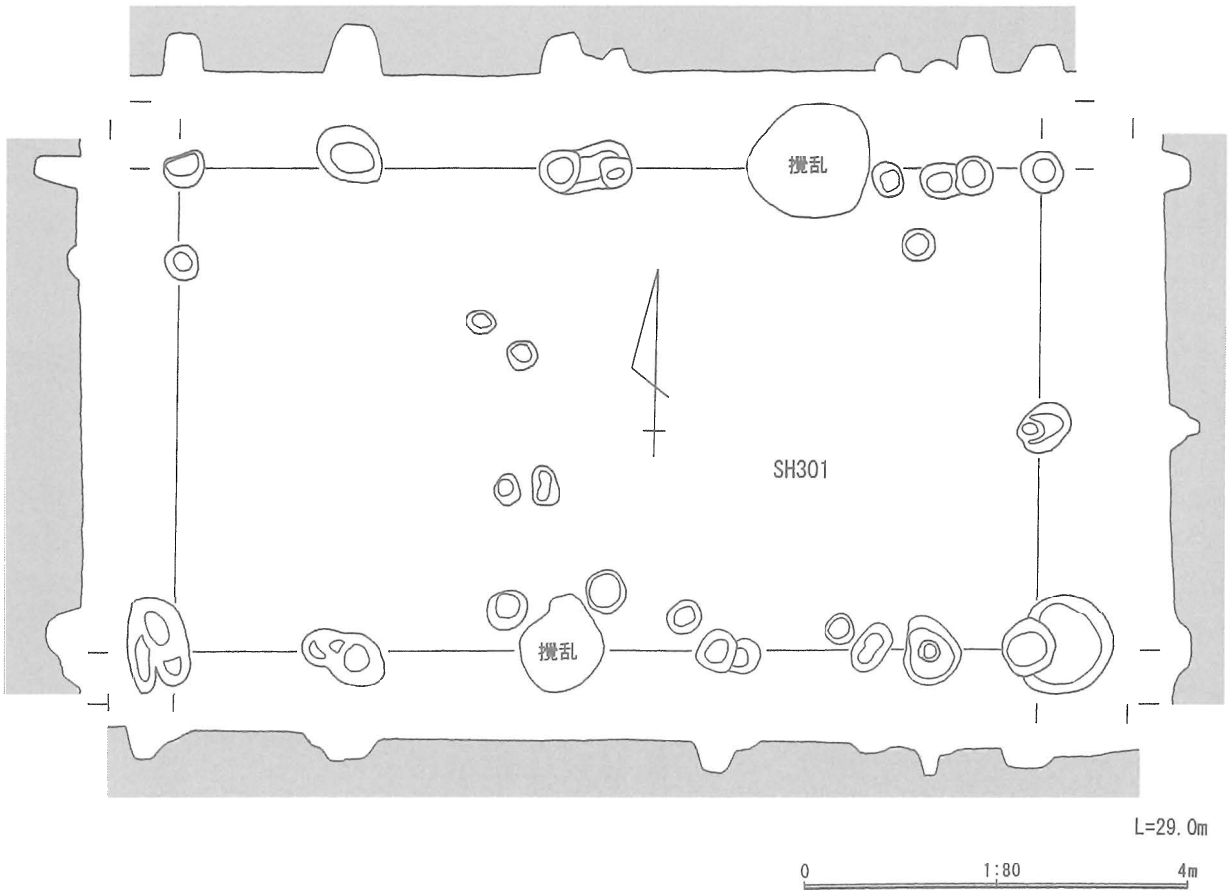
幅２ｍの溝で区画された範囲が江戸時代の屋敷地と推定される。区画溝は南西隅と北東隅が今回の発掘調査で検出されている。特に南西隅は屈曲が強く、北西隅は隅丸状である。これらから推定すると屋敷地の範囲は東西26ｍ、南北24ｍのほぼ方形区画を呈する。溝の断面形は箱形で、今回検出されている他の区画溝と比べても大規模である。しかしながら、その屋敷地内には建物は想定されたものの、生活の痕跡を示す井戸やトイレ遺構等は検出されなかった。その区画溝の周りを区画する幅0.8ｍの屈曲するSD302が巡り、南北と東西が連結しないものの、さらにその周囲を区画する細長い溝がみられる。この溝内の遺物から時期差を明確にはできなかったが、概ね18世紀後半～19世紀前半と推定される。

建物１（第57図　図版13）

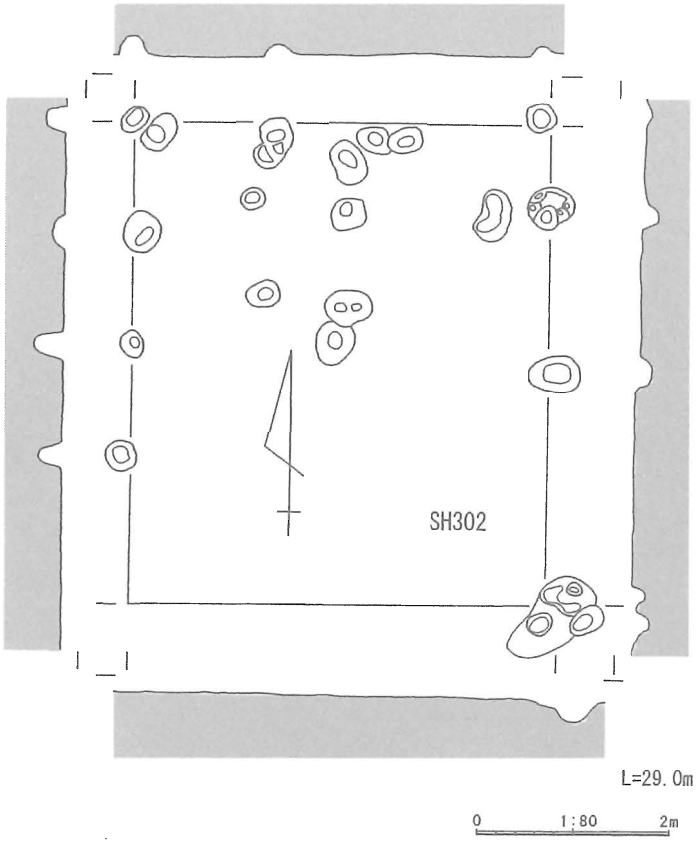
区画溝の中心に位置する。４×２間の建物と推定され、桁行９ｍ、梁行５ｍである。礎石または栗石はみられず、掘り方のみであった。建物方位は桁行を東西方向としている。しかしながら近世の建物であること、位置関係から屋敷地内の母屋と考えられるため、掘立柱建物というよりは石場立建物と推定される。また、今回発掘調査では瓦の出土量は非常に少なく、建物の一部に瓦に葺かれていた可能性はあるもののほとんどが茅葺きあるいは?葺きであった可能性が高い。18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



第56図　３区　屋敷地１実測図



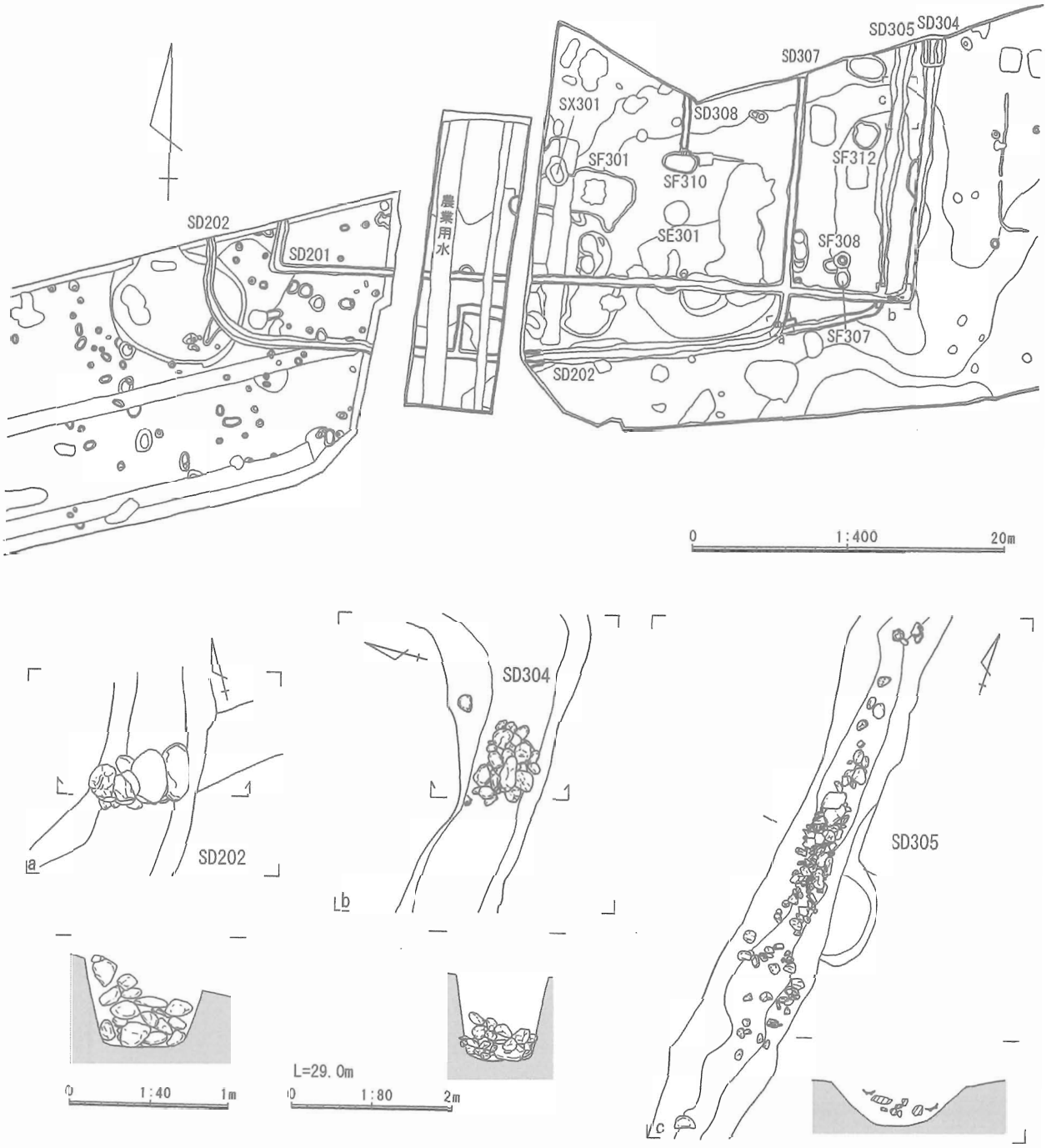
第57図　3区　建物1実測図



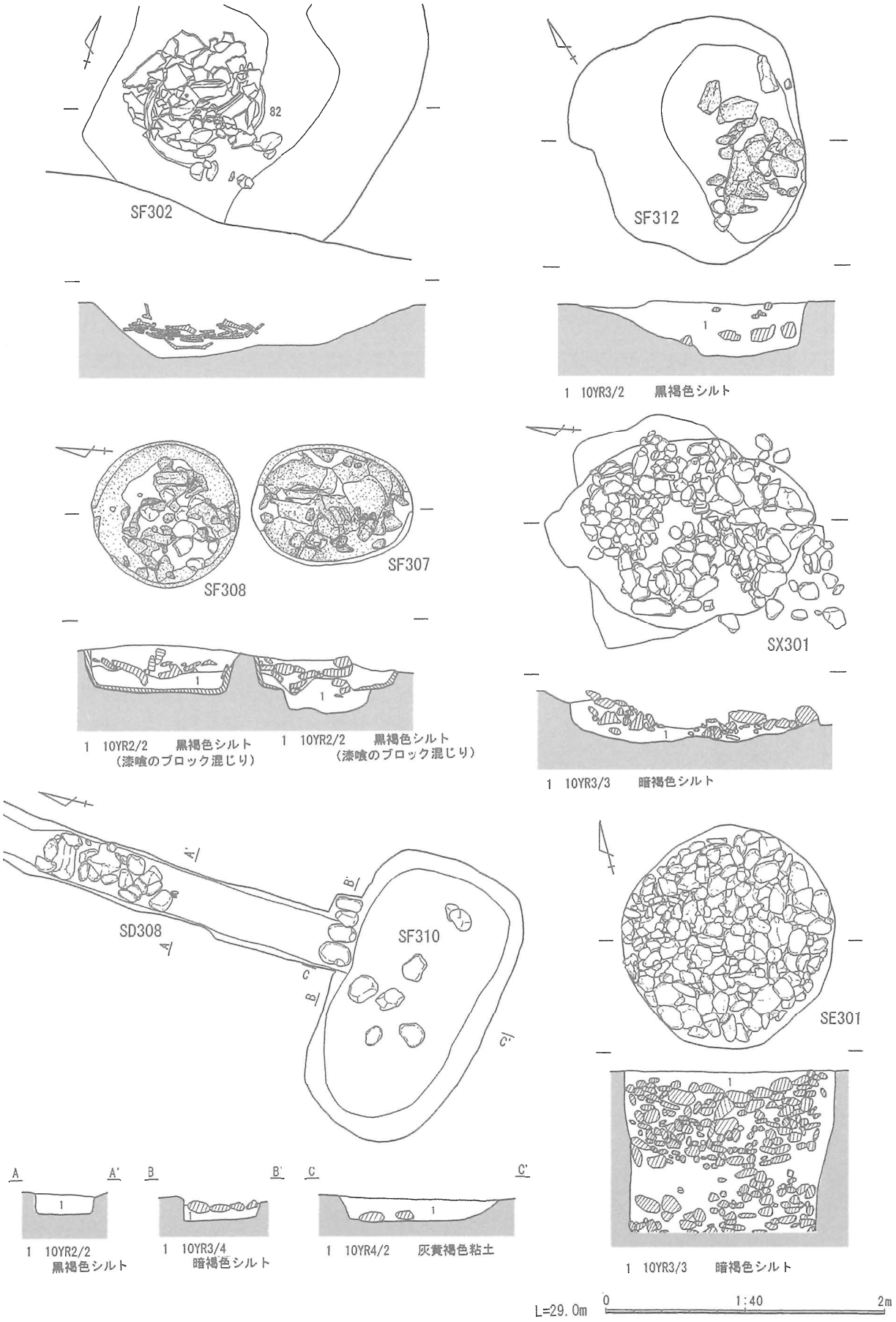
第58図　3区　建物2実測図

建物２（第58図　図版13）

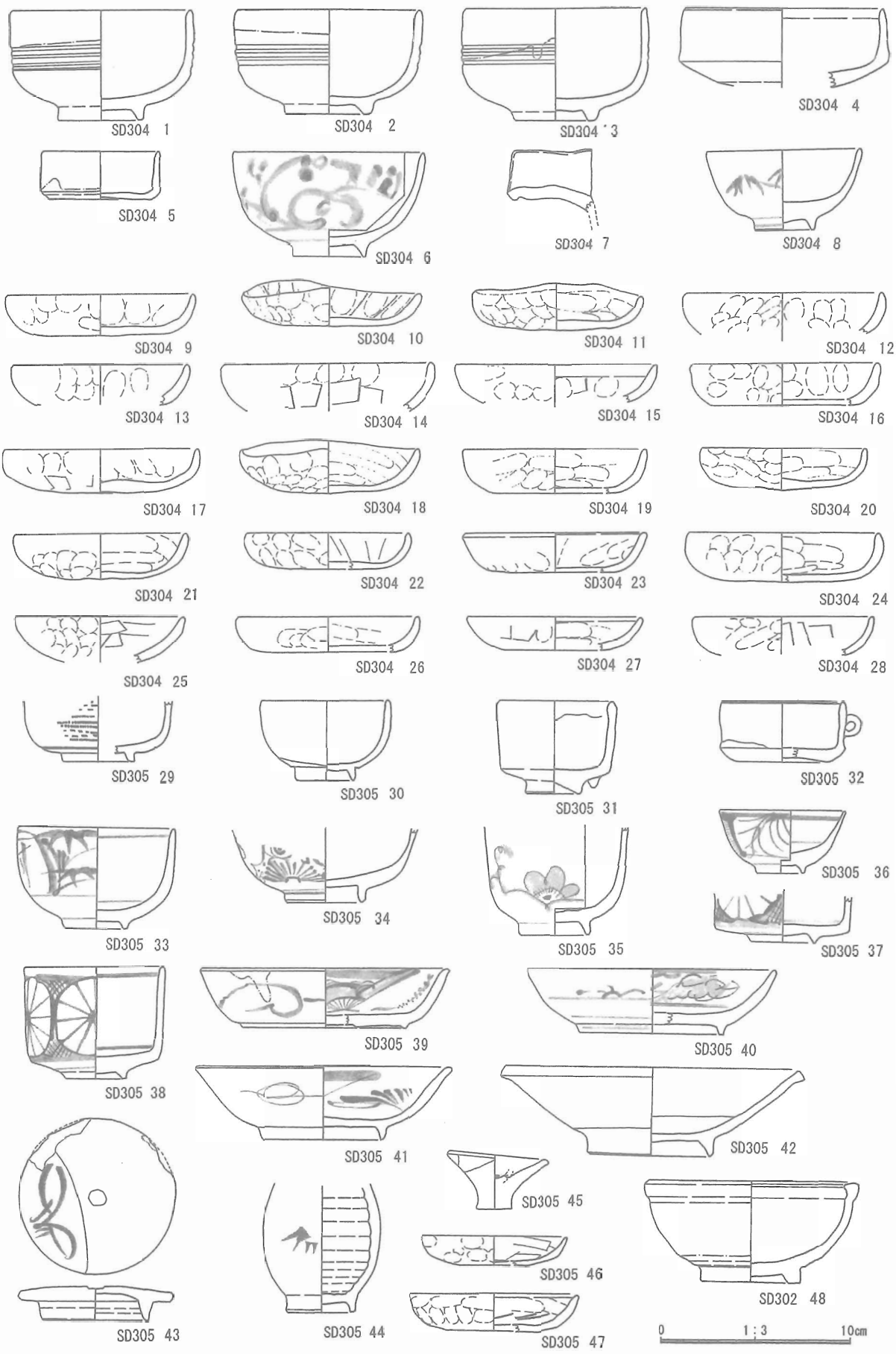
建物１の西隣に位置する。４×２間の建物と推定され、桁行５ｍ、梁行4.4ｍである。建物１と主軸を同方向とすることから同時期のものと推察される。建物１との位置関係から納屋のような性格を有していたと考えられる。この建物も掘り方のみの検出で、礎石あるいは栗石等はみられなかった。掘立柱建物あるいは石場立建物であるかは不明である。



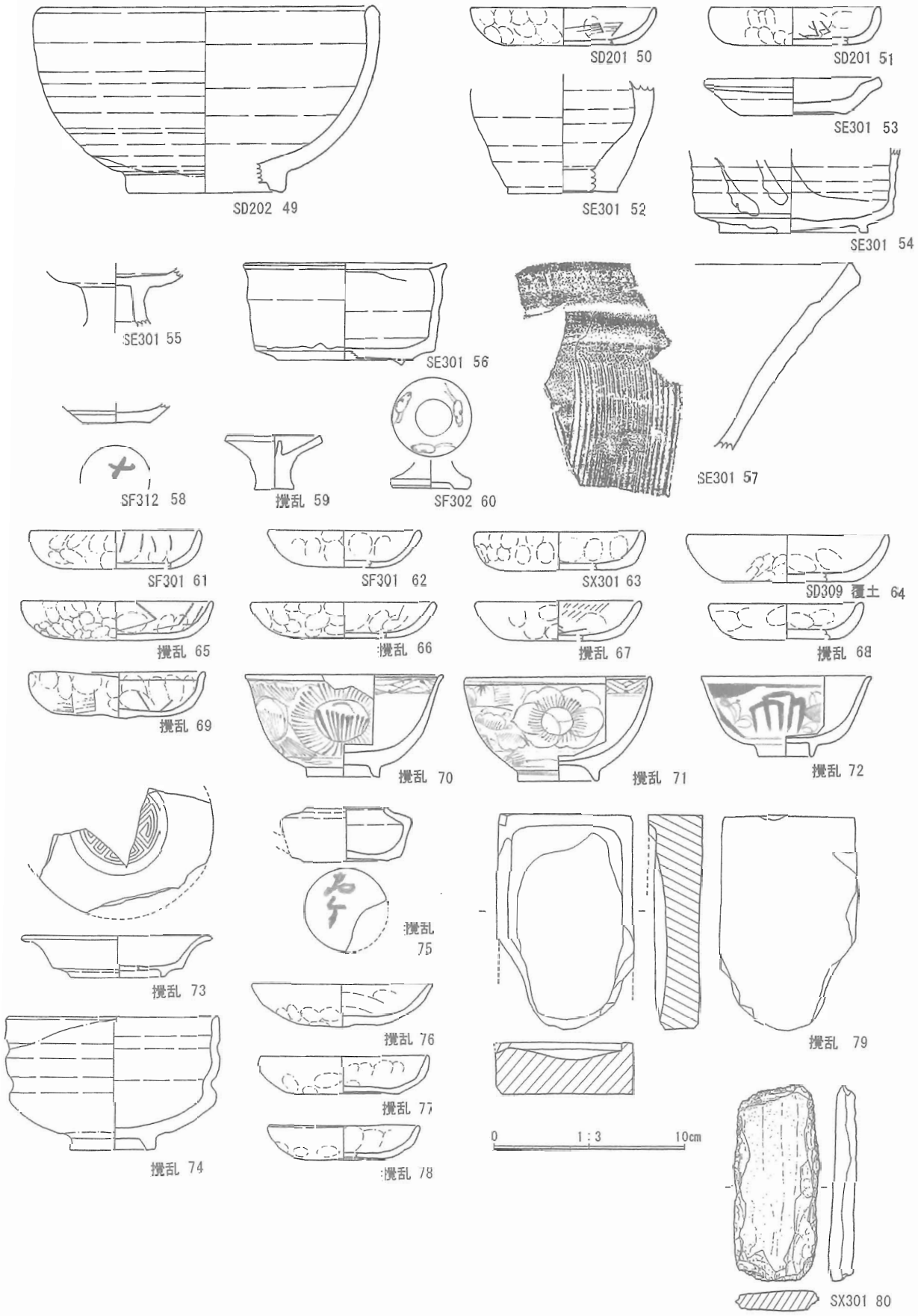
第59図　３区　屋敷地２実測図



第60図　3区　土坑・井戸・不明遺構実測図



第61図　3区　出土遺物実測図（1）



第62図　3区　出土遺物実測図（2）

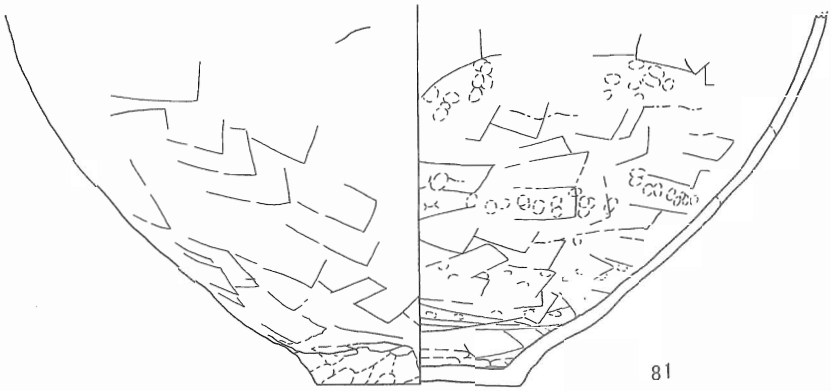
屋敷地2（第59図　図版14）

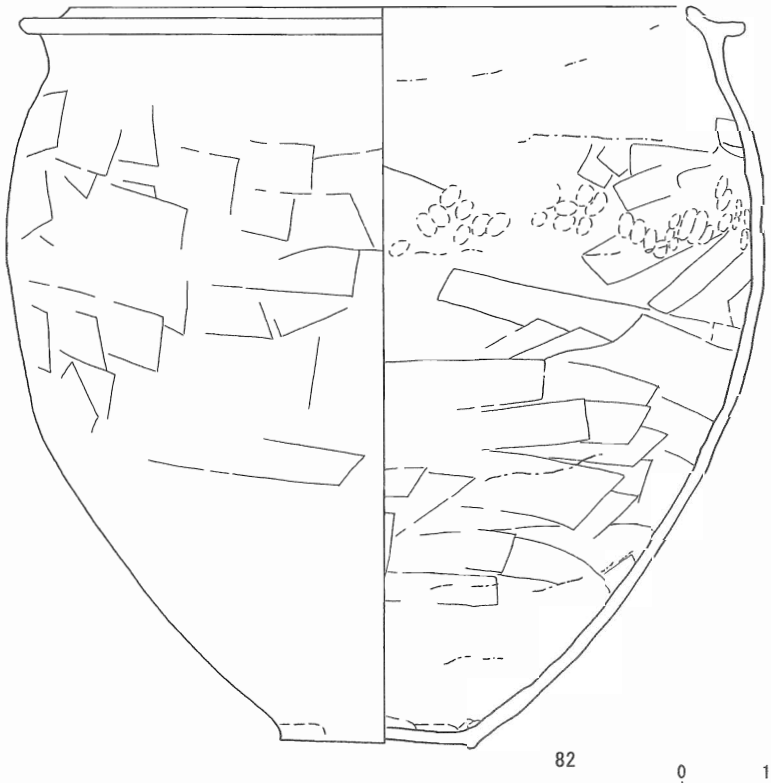
屋敷地2は屋敷地1より15mに西隣で検出され、その範囲は2区にまで及ぶ。溝の切り合い関係から少なくとも3時期あると思われ、SD305→SD307・202→SD304・201の順に構築されている。SD304・201の区画溝は東西40m、SD202・307は東西36mでいずれも同じ方位である。SD304とSD307の南東隅の溝内には石組による堰状遺構がみられた。南北方向は明確ではないが、方形区画に近い形状であったと考えられる。特にSD201・304は直線的で屈曲が強い。しかしながらこの区画溝内からは建物跡は検出されず、井戸あるいはトイレ遺構、導排水施設が検出されている。これらの遺構がどの区画溝に対応するか時期は明確ではなかった。

土坑・井戸・不明遺構

SF302（第60図　図版15）

SD201に切られているものの不整形な土坑である。土坑内からは常滑産の大甕が1個体分出土した。大甕の底部は土坑底部に据え置かれており、埋甕として埋置されていたと考えられる。この大甕はほぼ完形に近い状態で、復原でき、径0.8m、深さ0.8mであった。





第63図　3区　出土遺物実測図（3）

SF312（第60図　図版16）

SD305に隣接する位置で検出された。やや楕円形の土坑で長軸1.75m、短軸1.65m、深さ0.3mである。この土坑内には礫や漆喰の破片が多数出土した。土坑の壁に漆喰がみられないこと、覆土内からの出土から廃棄されたものと考えられる。

SF307・308（第60図　図版15・16）

SF307・308はSD304に隣接する位置で検出された。SF307は円形の土坑で、径1m、深さ0.4mである。底は平らで、壁には厚さ5㎝の漆喰が塗られていた。土坑内には多量の漆喰片や礫が検出された。SF308は長径1.2mで、SF307と同様に壁には漆喰が塗られていた。断面形状は段掘り状であったが、本来は平らであった推定され、SF307・308ともにトイレ遺構と考えられる。

SX301（第60図　図版15）

3区西端に位置する。楕円形の土坑内から拳大から人頭大の礫が充填された状態で検出された。長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.2mで、SE301と比較すると浅いが、井戸としての性格が考えられる。

SF310・SD308（第60図　図版17）

井戸の2m北側に位置し、楕円形の土坑と南北に延びる溝が連結した状態で検出された。楕円形の土坑と溝に連結する部分には扁平な石が並べられていた。この堰状遺構がみられ、なんらかの導排水施設と考えられる。土坑内や溝内にも礫がみられた。

SE301（第60図　図版15）

区画溝内から検出されており、径1.5mの円形の土坑である。屋敷地内で検出されたこと非常に深い大型の土坑であることから井戸としての性格が考えられる。井戸の形状は不明である。土坑内には拳大ほどの礫が充填されており、崩落の恐れがあったため、深さ1.2mで調査を終了した。これは礫を充填して廃棄したものと考えられる。

3区出土遺物（第61～63図　図版55・56）

3区から出土した遺物は陶磁器、かわらけ、石製品、瓦等である。陶磁器やかわらけ以外については、極少量である。

3区西側では、これら遺物は屋敷の区画と考えられる区画溝の内側からの出土が多い。3区東側では一括で取り上げられているため、取り上げ地点や詳しい出土状態は不明であるものの、この調査区が区画溝内であることから3区西側、東側ともに明治以降の攪乱を除くと、3区の出土遺物は、その多くが江戸時代の屋敷跡から出土したものと理解できる。

出土状況がわかる3区西側では、二次焼成を受けている物はほとんどなく、火災に伴って廃棄されたものではないであろう。SD304やSD305など屋敷地の区画溝の北東から、溝が8割ほど埋没した浅い窪みから長径10㎝ほどの礫とともに陶磁器や瓦は破片で出土したが、かわらけは完形もしくは準完形での出土もある。ていねいに置かれたのであろうか。SD305では砥石、一時的に砥石の代用として使われたと考えられる摩耗痕のある礫、瓦が出土しているが、いずれも少量である。ほかに生活に使用された什器などの穴を掘って投棄したと考えられる。出土遺物はほとんどない。

SD304出土陶磁器・かわらけ　1～3は腰錆碗と呼ばれる瀬戸・美濃産の碗である。内面と外面上位は灰釉、外面下位は錆釉を掛ける。

4はせんじ碗である。5は餌入れである。6は陶胎染付で、草花を太い筆で絵付けをする。7は灰釉掛けの片口鉢である。8は小型の碗で、笹文を描く。高台端部のみ釉をぬぐっている。

9～28はかわらけである。いずれも手づくねかわらけである。このかわらけは、江戸中・後期にあっては灯明皿としての使用や、盆供養のかわらけ、さらに盛り塩の容器など神仏に捧げられることがある。もろく壊れやすいため普段使いの生活什器としては使用されていない。3区出土の灯明皿の場合は煤が付着しているため、その用途が確認できる。そのうちわずかではあるが、煤の付着を認められない例もあって、灯明皿以外の用途が考えられる。灯明皿として使用されたかわらけは、使用し破損した陶磁器などとともに浅く窪みになった区画溝に投棄されたと考えられる。

SD305出土陶磁器・かわらけ　29は鎧茶碗である。30は御深井釉をかけた小碗である。31は青磁の小形香炉である。32は御深井釉をかけた餌入れである。33は笹文の描かれた染付磁器碗である。34は見込みに寿の文字を書き、外面は菊文を描く碗である。35は梅花と枝を描く湯飲み碗である。36はわずかに端反させた坏で、花文を半裁したと思われる文様を描く。37・38は菊花の文様を描く筒形碗である。39は内面に菊と扇を組み合わせた文様を描く蛇の目凹形高台の皿である。40は花文を描く。見込みの文様はコンニャク版による花文の一部であろうか。

41は陶胎染付の皿である。42は内面下位を輪禿状に灰釉を剥ぐ鉢である。二次焼成を受けている。43は信楽産の土瓶の蓋である。釉をかき分け、長石釉の上に鉄絵を描く。44は御神酒徳利である。48と49は灰釉をかけた小形と中形の鉢である。46と47はSD304と同様の手づくねかわらけである。

SD201出土かわらけ　50と51は2区からつづくSD201から出土したが、3区の浅い窪みとなった区画溝からの出土である。

SE301出土陶磁器・かわらけ　51・52は中世古瀬戸後期に属する。52は底部糸切りの瓶子、52は折縁小皿である。古瀬戸後期Ⅱ期かⅢ期に属する。江戸時代の井戸埋土からの出土であるので、付近に中世の遺構があったのであろうか。しかしその痕跡は調査区内では認められなかった。54は碗か香炉、火入れであろう。55は仏飯器である。いずれも志戸呂焼である。56は香炉である。志戸呂焼の可能性が高い。57は瀬戸下品野か赤津の擂鉢である。

その他の遺構出土陶磁器・かわらけ　58はSF312から出土した。袋物あるいは小鉢であろうが、器種不明としておく。内面は柿釉をかける。露胎の底部に七と墨書がある。60は器種不明で、ネズミを3匹描く。時期は不明であるが、呉須の色調から江戸時代の磁器と考えられる。61から69のかわらけは攪乱からの出土が多く、時期決定の根拠はないが、形態（口径・器高）からみるとSD304・SD305出土が一致すると考えられる。

3区屋敷地1出土陶磁器・かわらけ　70・71は、ぼたん様の花を線描きするペンシルドロータイプの碗である。清朝磁器の影響を受けたものとされる。72は赤絵である。江戸時代以降の可能性もある。73は木型打ち込みの小皿である。74は灰釉の上に鉄釉を流しかけする。体部上位に2段の段をもつ碗である。75は灯明具のカンテラである。底部に高ケの墨書がある。76・78は手づくねのかわらけである。

3区屋敷地1内出土硯　薄い肌色を呈する砂岩質の硯で、磨った痕と付着した墨が残っている。製品としては下手であろう。

3区屋敷地2出土大甕　81・82は常滑産の大甕である。82はSF302の大型土坑内に設置されており、厠施設に伴うものである。廃棄された状態で出土しており、ほぼ完形に復原できた。口径80㎝器高80㎝で、表面に酸化鉄を塗ったものの焼成がやや不良のため、真焼け状態にならなかったと判断される。口縁がY字状を呈することから18世紀中頃～後半の製品と考えておく。

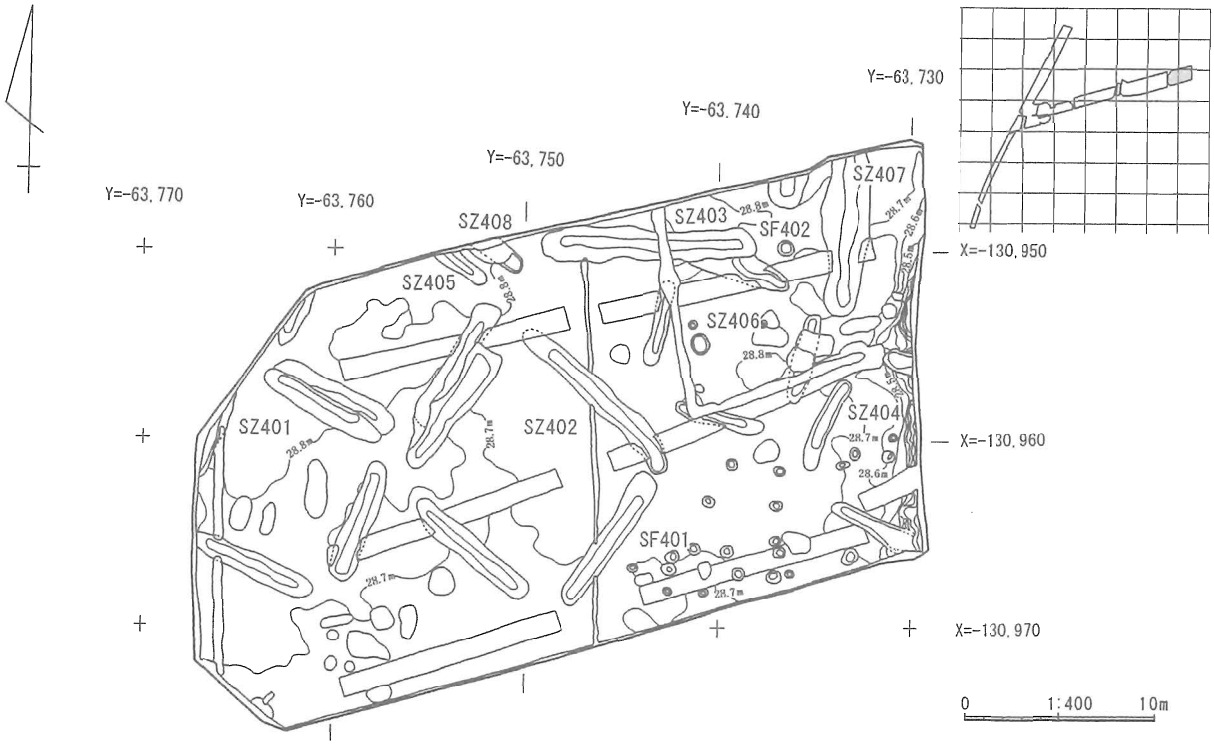
第５節　東原　４区

４区の検出遺構（第64図　図版　巻頭カラー４）

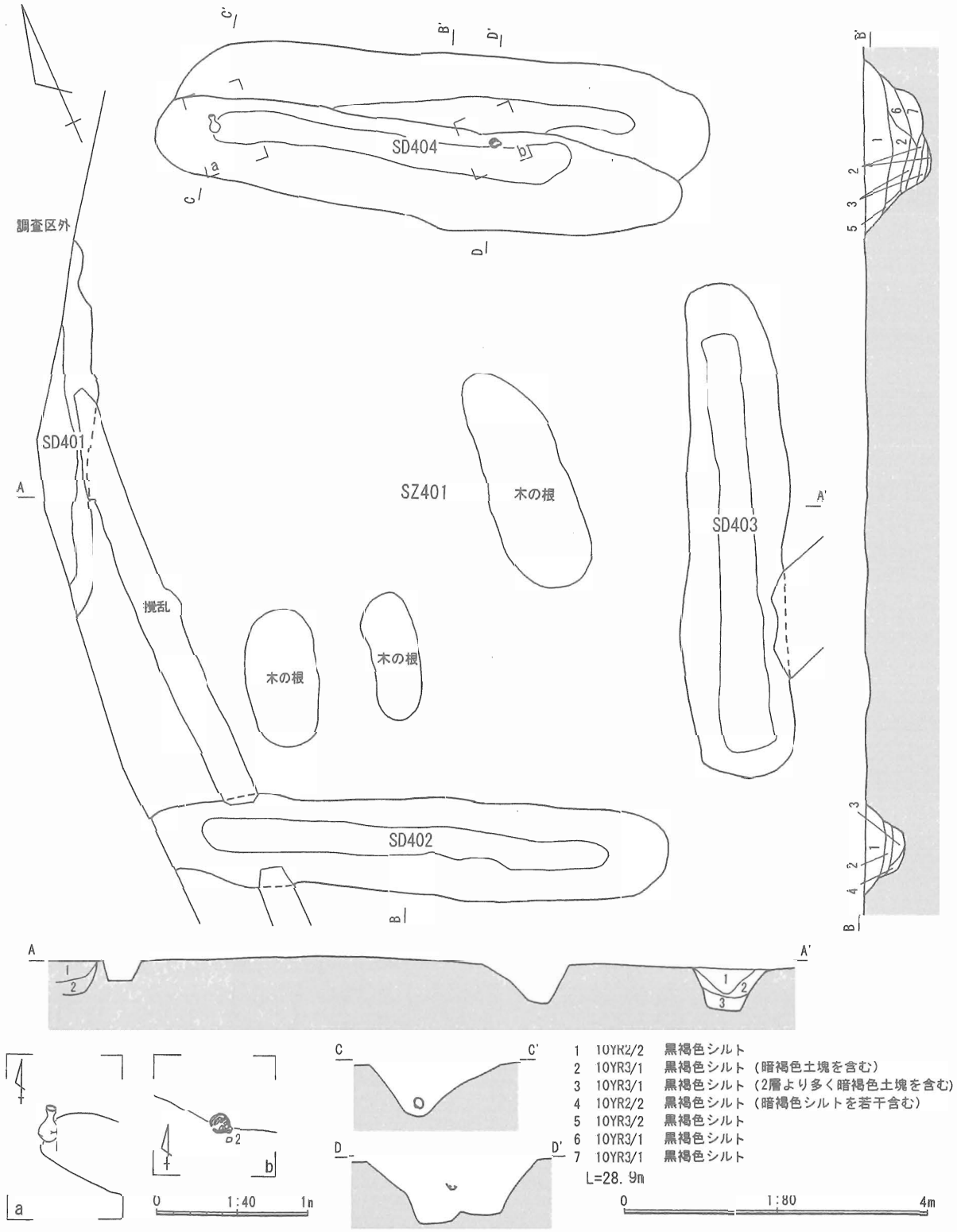
概　要

４区は本遺跡の東端にあたり、東原A地点に属する。ここでは弥生時代中期末～後期前半の方形周溝墓８基、土器棺墓３基、江戸時代の小穴が検出された。遺構は標高28.8m～28.6mの範囲で確認され、調査区北西から南東にかけて低く傾斜している。東側部分は段丘崖で、後世の河道により削られているものの比較的安定した立地環境だったといえる。

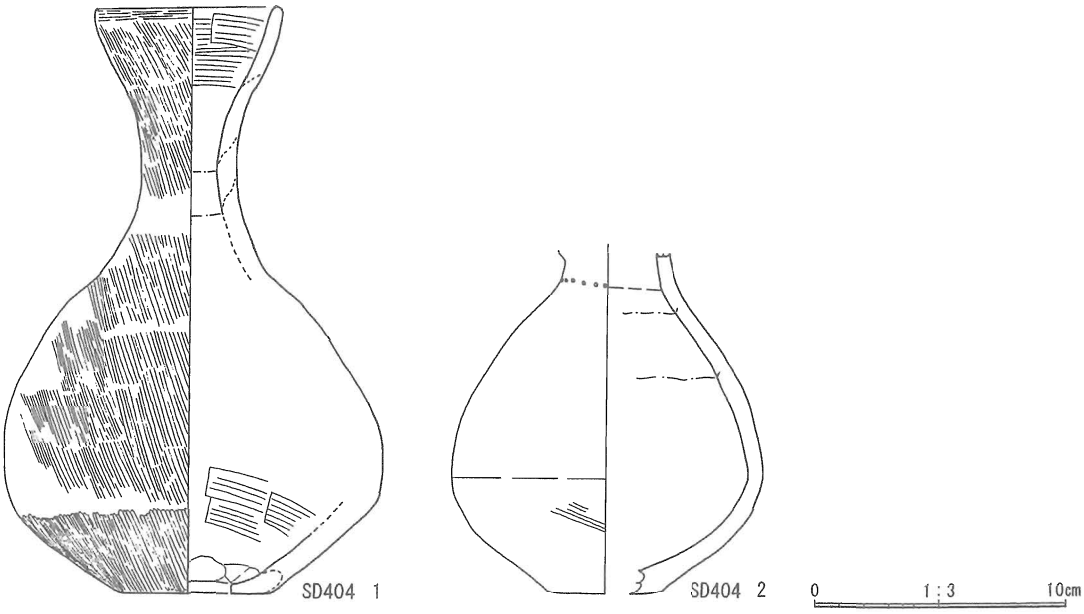
方形周溝墓はSZ02、SZ06で、ほぼ全容をうかがうことがでた。墳丘規模は大きく７ｍクラスと10ｍクラスに分けられる。四隅に陸橋をもち、比較的幅は狭い特徴をもつ。狭い調査区のため、単位群の抽出は困難であるが、あえて大きく分ければ、切り合い関係からSZ401・402・405のグループとSZ406・404・403・407に分けられる。方形周溝墓にはほとんど盛土は認められず、埋葬施設の痕跡を確認することはできなかった。また、弥生時代後期の竪穴住居はみられず、本調査区に隣接する旧浜北市が実施したA地点の調査成果からも方形周溝墓2基、土坑等が検出されていたことから居住域と墓域が明確に区別されていたと考えられる。



第64図　４区　全体図



第65図　4区　SZ401実測図



第66図　4区　SZ401出土遺物実測図

方形周溝墓

SZ401（第65図　図版18）

墳丘規模は9.8m・9.9mで、周溝幅は1.5～1.6mである。溝の深さは検出面から1～0.6mで、溝底面は比較的平らである。SD404はSZ05と共有しているが、新旧関係は不明瞭であった。盛土・埋葬施設の痕跡は確認されなかった。SD401の残存長は5.1mで、SD402は残存長6.7m、幅1.3mである。SD403は6.6m、幅1.34mで、SD404は6.9mである。遺物はSD404の西側隅から長頸壺が横位に出土し、中央やや東寄りからも長頸壺が出土している。いずれも覆土中からの出土である。

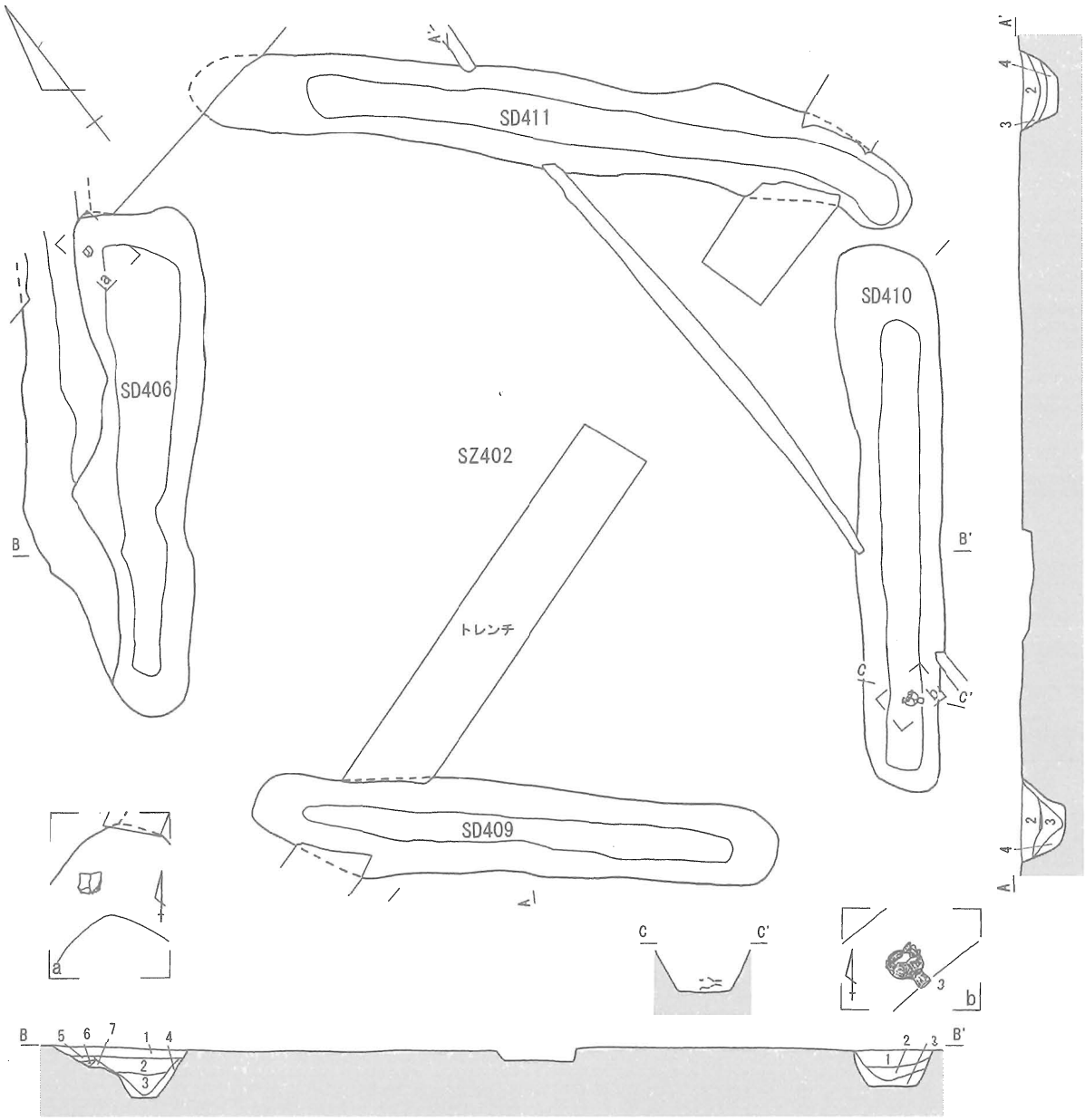
時　期　弥生時代中期末～後期前半

SZ401出土遺物（第66図　図版58）

1は長頸壺で、底部に径1.7cmの穿孔が認められる。焼成前による穿孔と思われる。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、頸部は細い。胴部下半の屈曲は弱く、斜め方向のミガキが密に施される。白岩式土器であろう。2は壺である。胴部には円形の刺突文が巡る。表面は剥離しており調整は不明である。

SZ402（第67図　図版19）

本調査区内で最大規模を有する方形周溝墓である。墳丘規模は裾から計測して9m・9.6mである。盛土・埋葬施設は確認されなかった。周溝幅は1.8～1.2mで、深さは検出面から0.6～0.7mである。底面は比較的扁平で、断面形は箱形を呈する。四隅に陸橋が存在するもののSD410とSD411の間隔は狭い。西側のSD416とSD405は重複している。SD406は7.3m、最大幅1.3mで、SD409は7.6m、幅1.3mである。SD410は8.0m、最大幅1.5mで、SD411は長さ10.0m、幅1.4mである。遺物はSD410の先端部近くから台付甕が横位の状態で出土した。SD406の先端部近くから土器片が出土している。



1　10YR3/2　黒褐色シルト（覆土）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（覆土）
3　10YR3/1　黒褐色シルト（覆土　暗褐色シルトを含む）
4　10YR3/1　黒褐色シルト（覆土　3層より多く暗褐色シルトを含む）
5　10YR3/2　黒褐色シルト（覆土）
6　10YR3/1　黒褐色シルト（覆土　暗褐色シルトを含む）
7　10YR3/3　暗褐色シルト

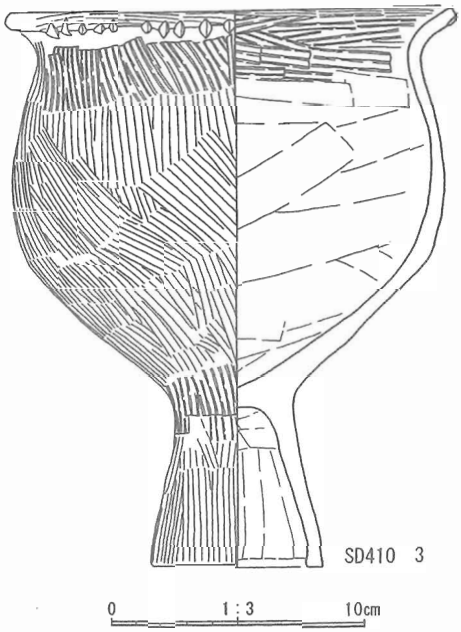
0　1:100　5m

L=28.8m　0　1:40　2m

第67図　４区　SZ402実測図

SZ402出土遺物（第68図　図版59）

3は台付甕である。口縁部はくの字に折れて直線的に短く外反する。端部は面取りされ、外縁に刻みを施す。胴部は扁平なもので器高に対して台部は高く、直線的である。胴部下半は黒変が観察された。



第68図　4区　SZ402出土遺物実測図

SZ403（第69図　図版20）

SZ03はSD417とSD420から構成される。SD417の主軸はほぼ東西方向を指す。そのSD417から東へ1.5mの位置にはSF402（土器棺墓）が存在する。SZ06の溝と切りあうものの、溝幅は2mで、深さは0.8～0.9mである。断面は箱形を呈し、墳丘側の傾斜角度がやや高い。SD411は長さ11m、幅1.7mである。遺物はほとんどがSD417から出土し、溝の西端には長頸壺、さらに1m東側に台付甕が出土した。東寄りでは土器片が集中的に出土した。いずれも溝内覆土からの出土である。

時　期　弥生時代中期末～後期前半

SZ403出土遺物（第70図　図版58）

4は口縁部を欠損しているが、広口の大型壺である。扁平な形状で胴部最大径は48cmである。外面は粗いハケ調整が認められる。体部上位には斜位のハケが認められ、10・11と同様の文様構成である。5は細頸壺である。頸部には櫛描きによる直線文が巡る。胴部最大径は下方にくる。6は細頸壺の頸部である。やや長めの頸部で細い印象がある。7は台付甕である。胴部下位でゆるやかに屈曲する扁平な体部をもち、台部は直線的で長くつく。接合帯はつかない。口縁部は外反し、端部には刻みが認められない。8は打製石斧である。刃部は使用痕が観察される。石材は結晶片岩である。重量は79.86gである。

SZ404（第71図　図版21）

溝は3本確認しているが、四隅に陸橋を持つと思われる。その間隔は比較的広い。東側部分は調査区外であるため、墳丘規模は南北9.5mである。周溝幅は1.5m～1.1mである。SD412は長さ5.2m、幅0.9mで、溝底面は平坦である。断面は緩やかな箱形を呈する。遺物は少なく、SD412から土器片が出土しているに過ぎない。SD412からは扁平な石が検出されている。

SZ405（第72図　図版21）

墳丘規模は南北10m、東西9.1mの方形周溝墓である。周溝幅は1.1～1.4mである。南側・東側の溝は切り合っている。SD404は長さ6.8mで、SD405は7.6mである。遺物はSD405の隅から横位の状態で、壺が出土した。

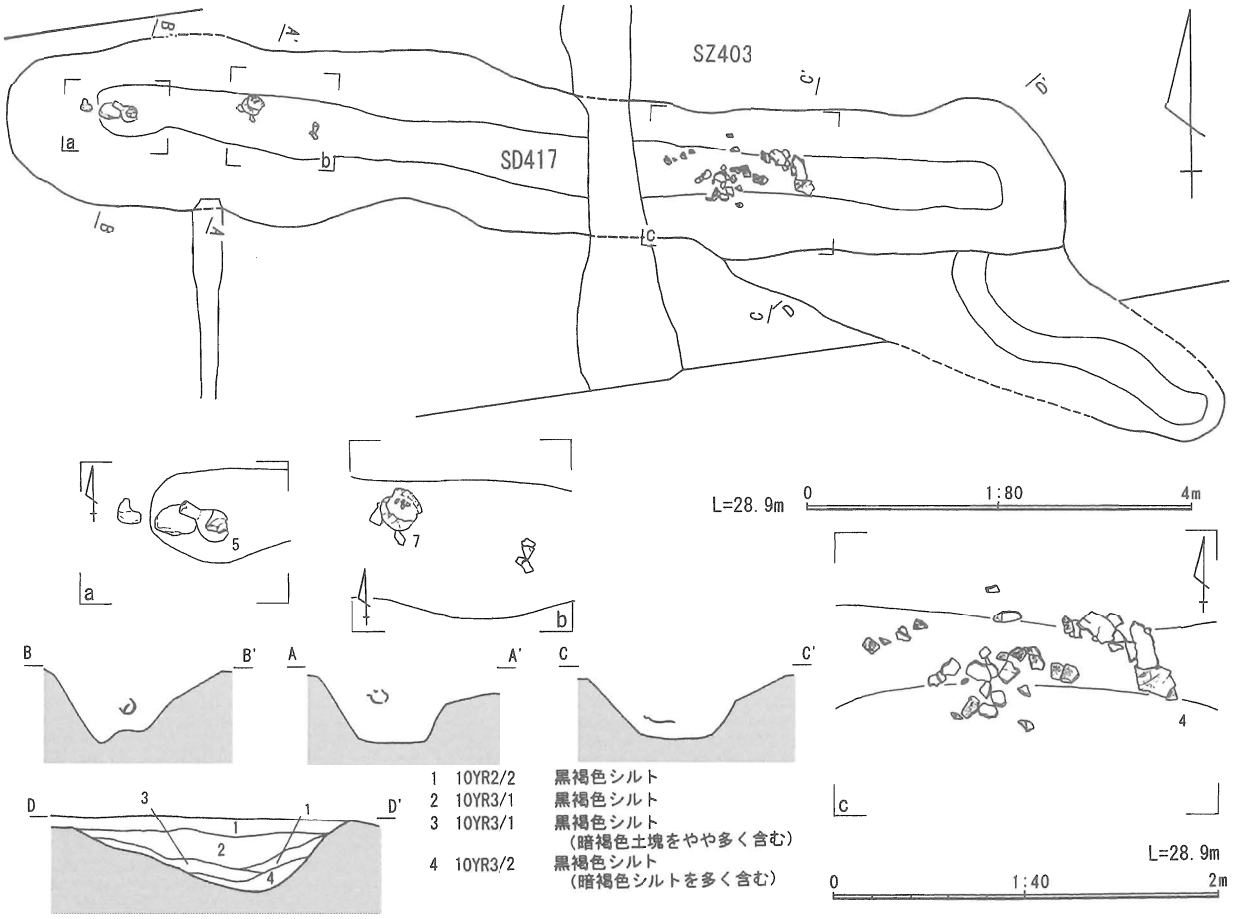
時　期　弥生時代中期末～後期前半

SZ405出土遺物（第73図　図版59）

9は胴部が球胴状を呈する壺である。平底で外面にはミガキが施される。胴部に2個1対の円形浮文がつくが、方向は不明である。10は受口状口縁壺である。やや下膨れの胴部を有し、やや長めの頸部をもつ。受口部には2単位の棒状浮文が8個つく。斜格子文がわずかながら観察される。頸部にも浮文がつき、4方向確認される。櫛による押し引きが横位に巡る。文様はおよそ5本の区画線で分割し、斜格子文が施される。胴部下位には横方向斜め方向のミガキがみられる。

SZ406（第74図）

墳丘規模は南北6.8m、東西6.7mである。北側の溝はSD417と切り合うものの四隅に陸橋をもつ。陸橋の間隔は広い。撹乱の影響を受けているが、溝の断面形は箱形で、底面は比較的平坦である。SD415は長さ4.6m、幅0.95mで、SD416は推定長さ4.5mで、幅0.85mである。SD417は長さ4.7m、推定幅1.1mである。遺物は認められない。墳丘の痕跡は明確でなかったが、南東隅部分がやや地形的に高くなっていた。

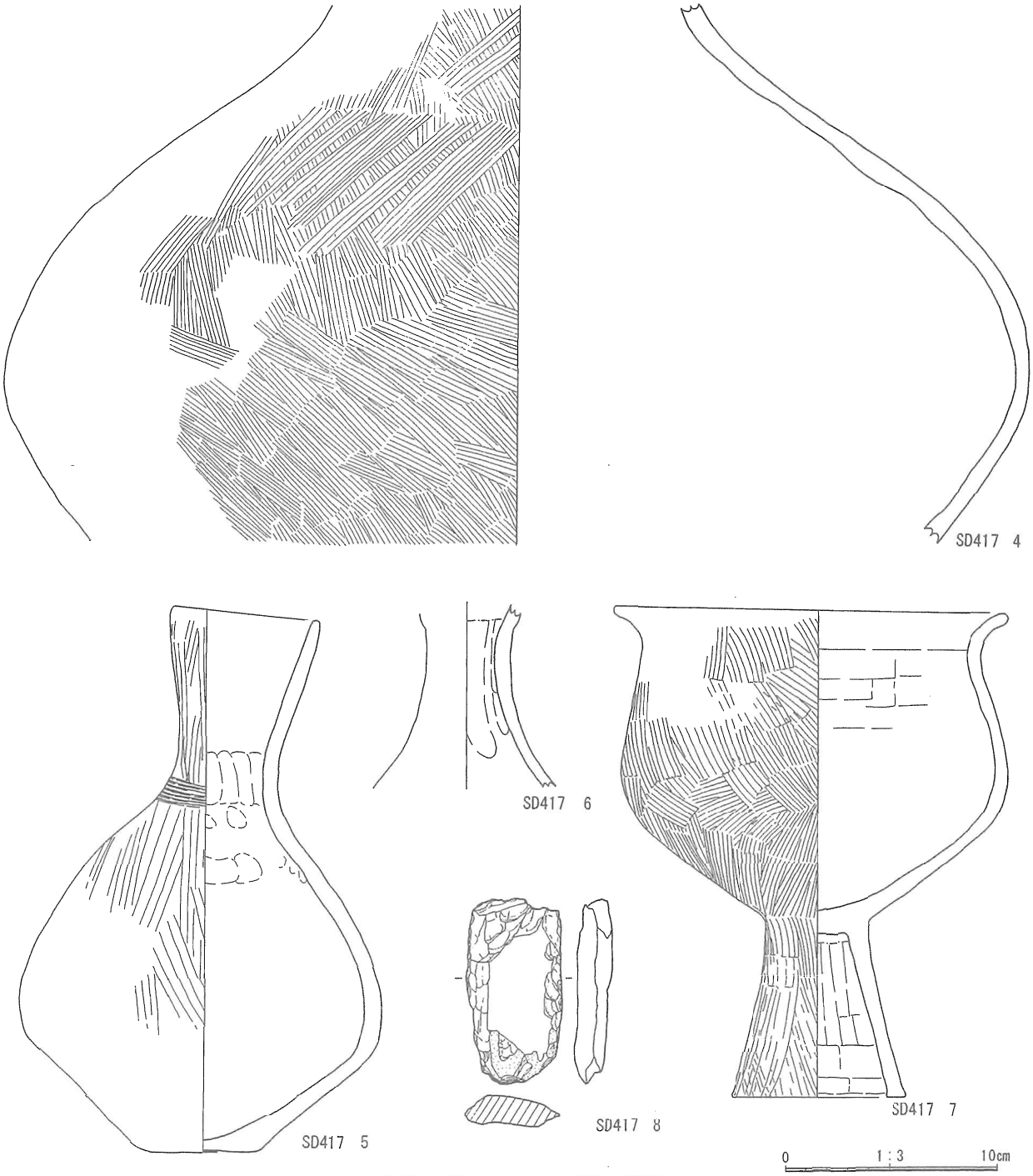


第69図　4区　SZ403実測図

SZ407（第75図　図版22）

調査区の北東隅に位置する。溝は１本確認したに過ぎないため墳丘規模等は不明であるが、周辺の遺構配置状況から墳丘は東側に展開していたと推測される。SD418は比較的大型の溝で、主軸方位は南北を指す。溝の長さは残存長8.6mで、溝幅は最大で2.4m、深さ0.7mである。溝底は平坦である。南側の溝先端部には大型壺が出土した。この大型壺は口縁部を南東方向に向け横位の状態で検出した。堆積状況から３層の埋没段階時に埋設されたと思われる。掘り方は確認できなかったが、口縁部を欠損した壺と合口の状態であったことから土器棺墓と考えられる。ほぼ完形であるが、胴部に穿孔されていたかは不明である。

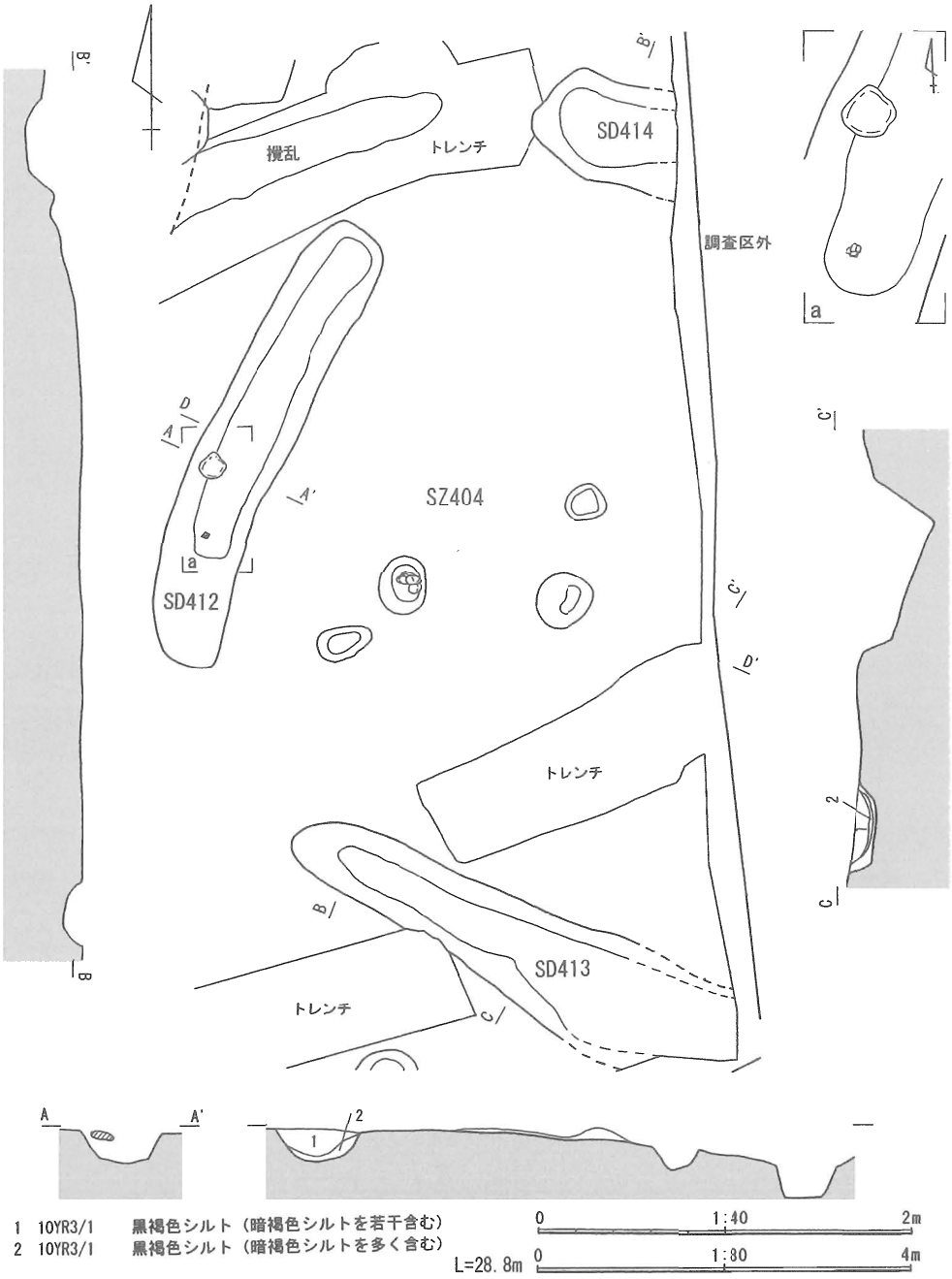
時　期　弥生時代中期末～後期前半



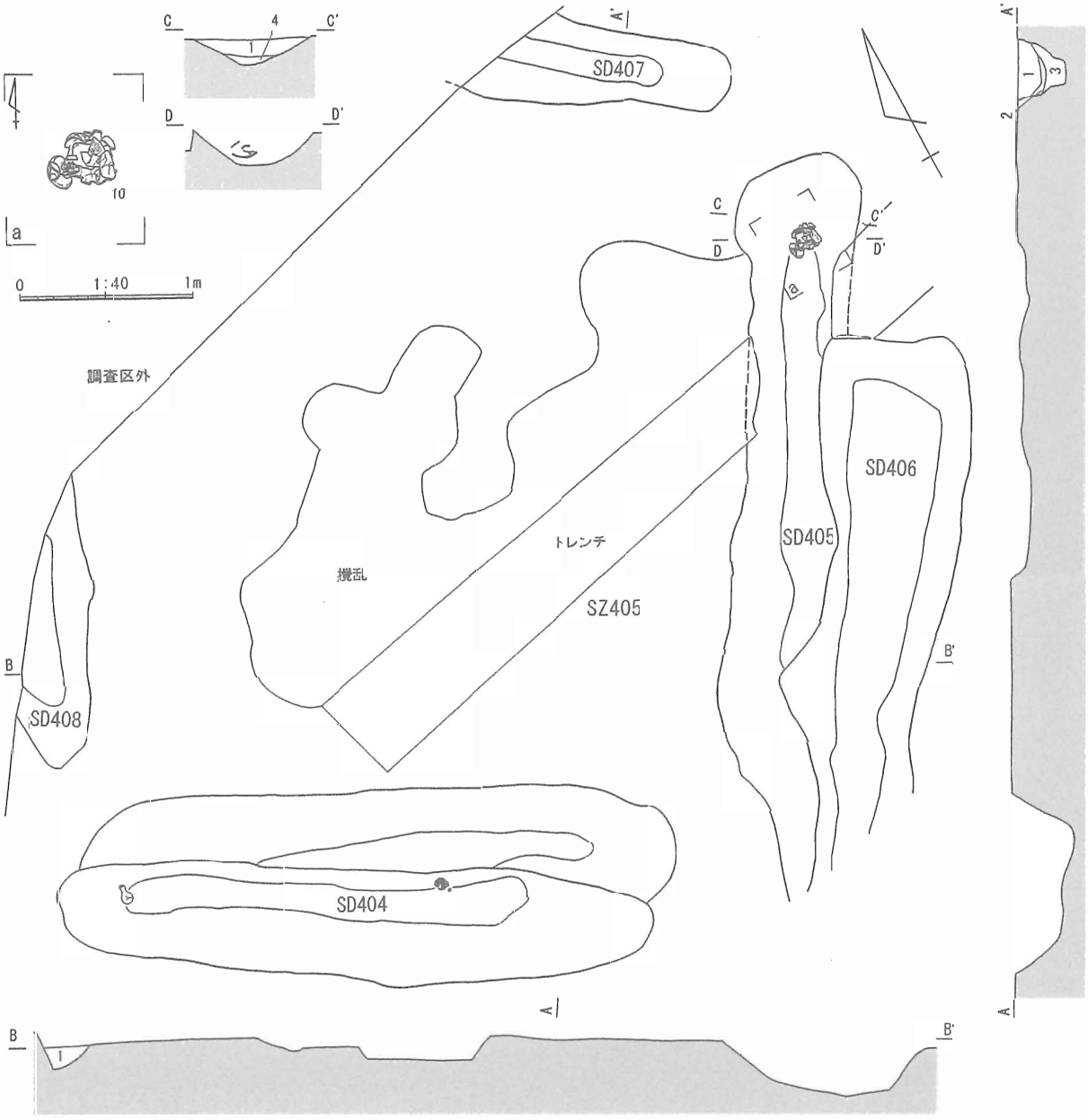
第70図　４区　SZ403出土遺物実測図

SZ407出土遺物（第76図　図版60）

11は大型の単純口縁の広口壺である。口径25.9cm、底径9.6cm、器高64.8cm、胴部最大径52.2cm、頸径13.6cmである。口縁部は外反し、口縁端部はやや肥厚する。その端部には斜格子文が刻まれる。体部は扁平な球胴状で、胴部中位に最大径がくる。頸部中位から胴部中位にかけて櫛描文が縦位に斜格子文に施される。この斜格子は２段階にわたり施文され、それを区画する直線文は施されない。胴部下半はハケ調整が施され、底部はやや上げ底である。土器棺墓として利用された可能性が高い。白岩式土器であろう。12は小型の受口状口縁壺である。受け口の屈曲は弱く、頸部は短い。胴部下半には横方向のミガキが施される。胴部上半部には櫛描波状文がつき、そこから胴部下半に向けて縦位の８本１単位の櫛描き直線文がつき、斜方向の櫛描き文が施される。

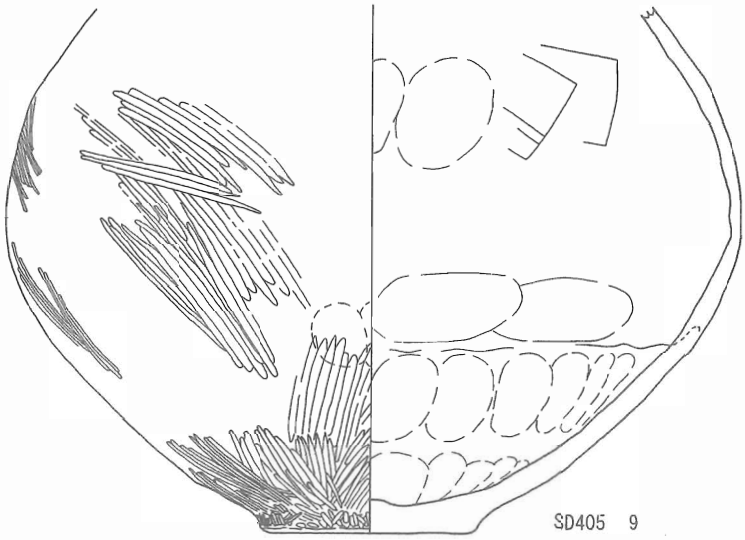


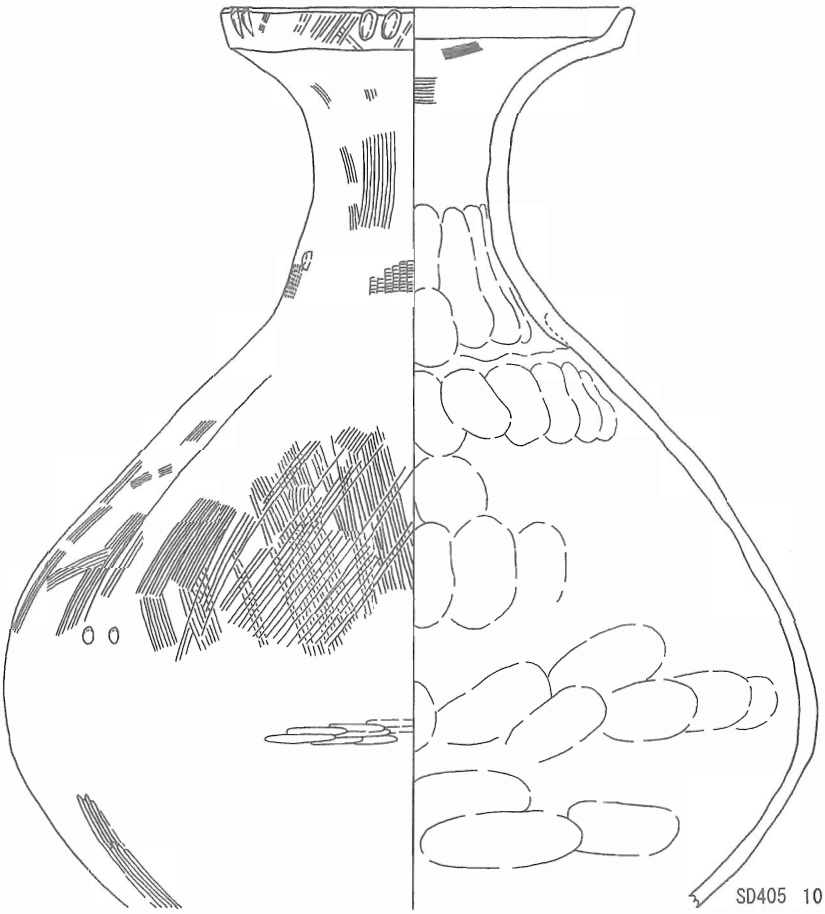
第71図　４区　SZ404実測図



1　10YR3/1　黒褐色シルト
2　10YR3/4　暗褐色シルト
3　10YR3/1　黒褐色シルト（暗褐色土塊を若干含む）
4　10YR3/1　黒褐色シルト（暗褐色土塊をやや多く含む）

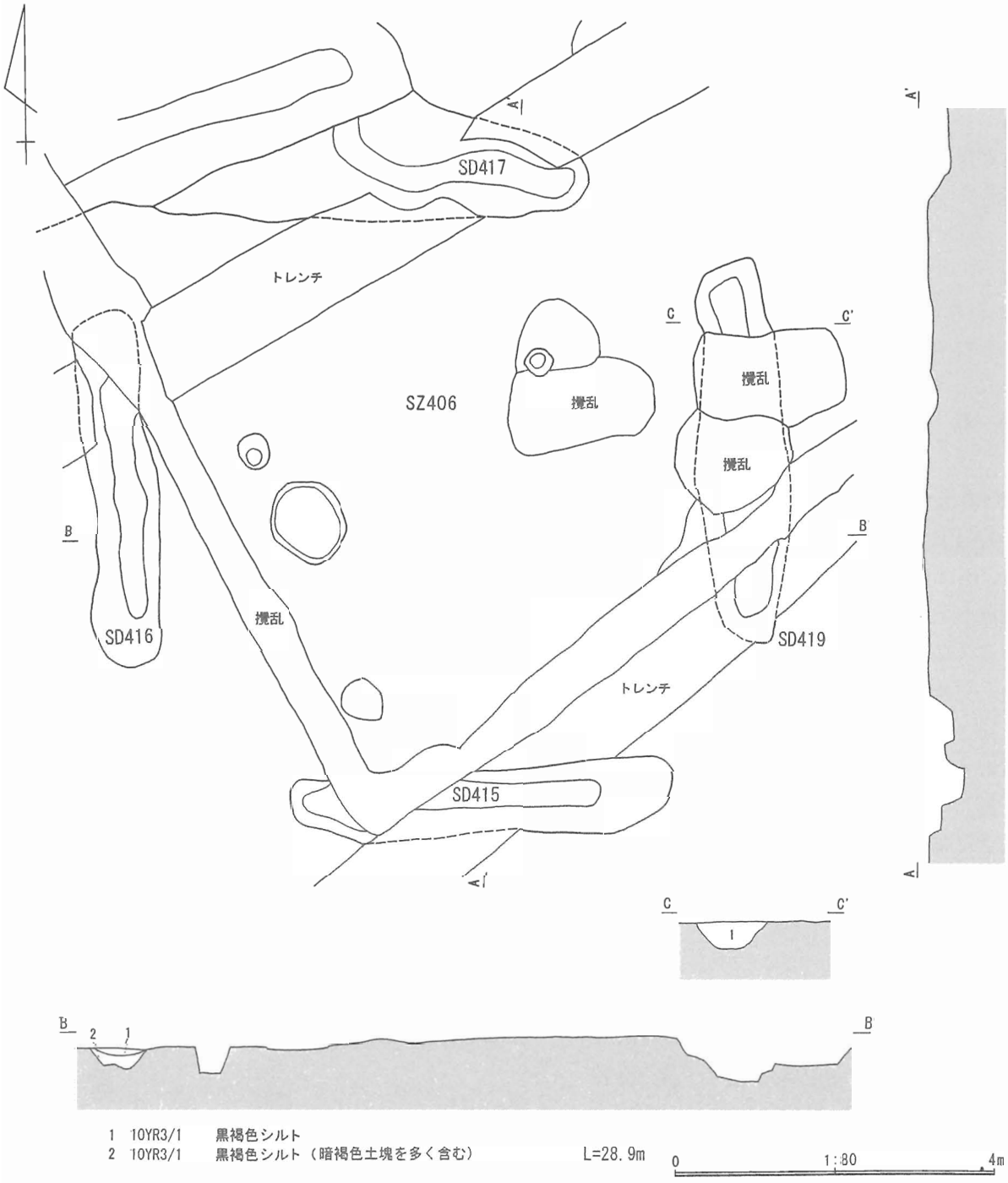
第72図　4区　SZ405実測図





0　1：3　10cm

第73図　4区　SZ405出土遺物実測図



第74図　4区　SZ406実測図

SZ408（第64図）

SZ05とSZ03に挟まれた部分からSD421のみを検出した。SD405の主軸方位と同方位で延びている。調査区外のため全貌は不明であるが、溝の幅からSZ05と同程度の方形周溝墓と考えられる。溝内からの遺物は認められない。

土器棺墓

SF401（第77図　図版23）

SZ02の南東側に位置する。長径0.74m、短径0.64mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.15mである。上半部は欠損しているものの大型の長頸壺で横位に埋設されていたと考えられる。

時　期　弥生時代中期末～後期前半

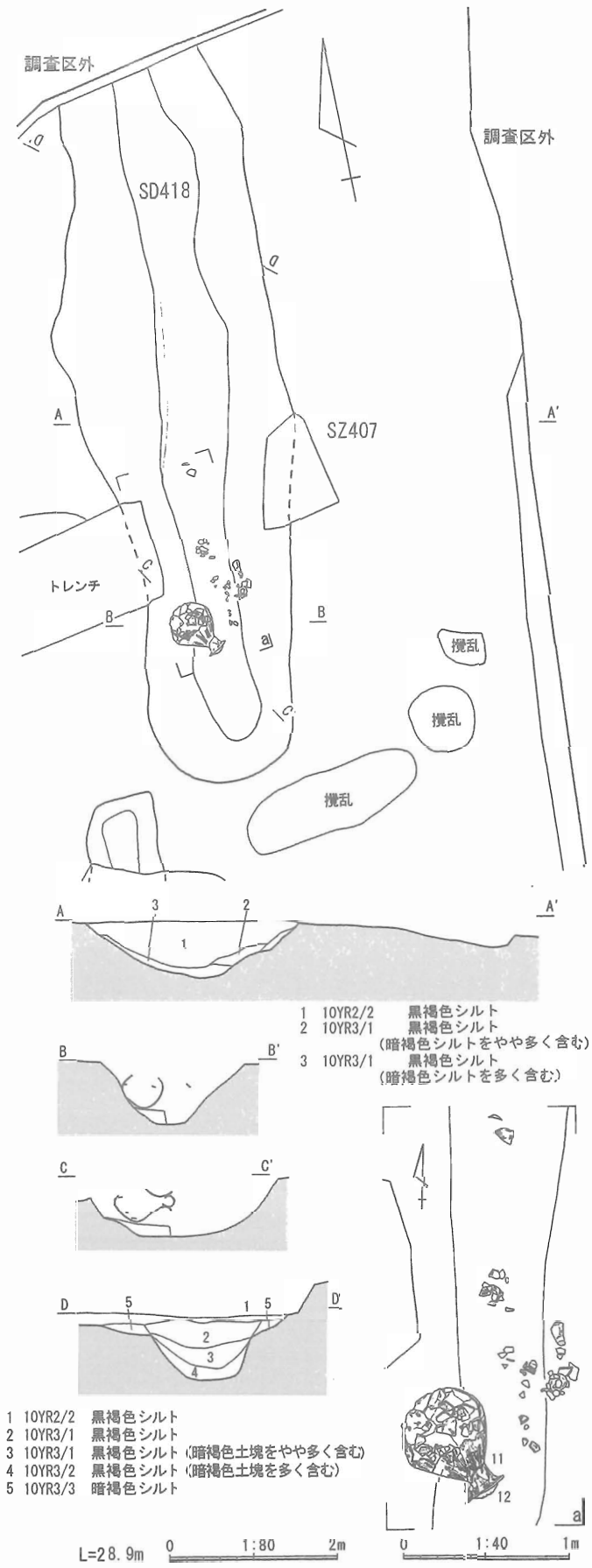
SF401出土遺物（第78図　図版59）

13は甕である。口縁部はゆるやかに外反し、胴部の張りは弱い。端部は刻みが入り、屈曲が強く稜がつく。14は壺である。胴部下半に弱い屈曲をもち、やや球胴状を呈する。文様帯は胴部上半部と中央につき、ヘラ描き直線文間に斜格子文がつく。頸部にはわずかに刺突文が認められる。斜格子文を施した後に直線文で区画している。外面は文様帯下から胴部下半の屈曲部までミガキが施される。色調は赤褐色を呈する。三河地方の系譜をもつ土器であろう。

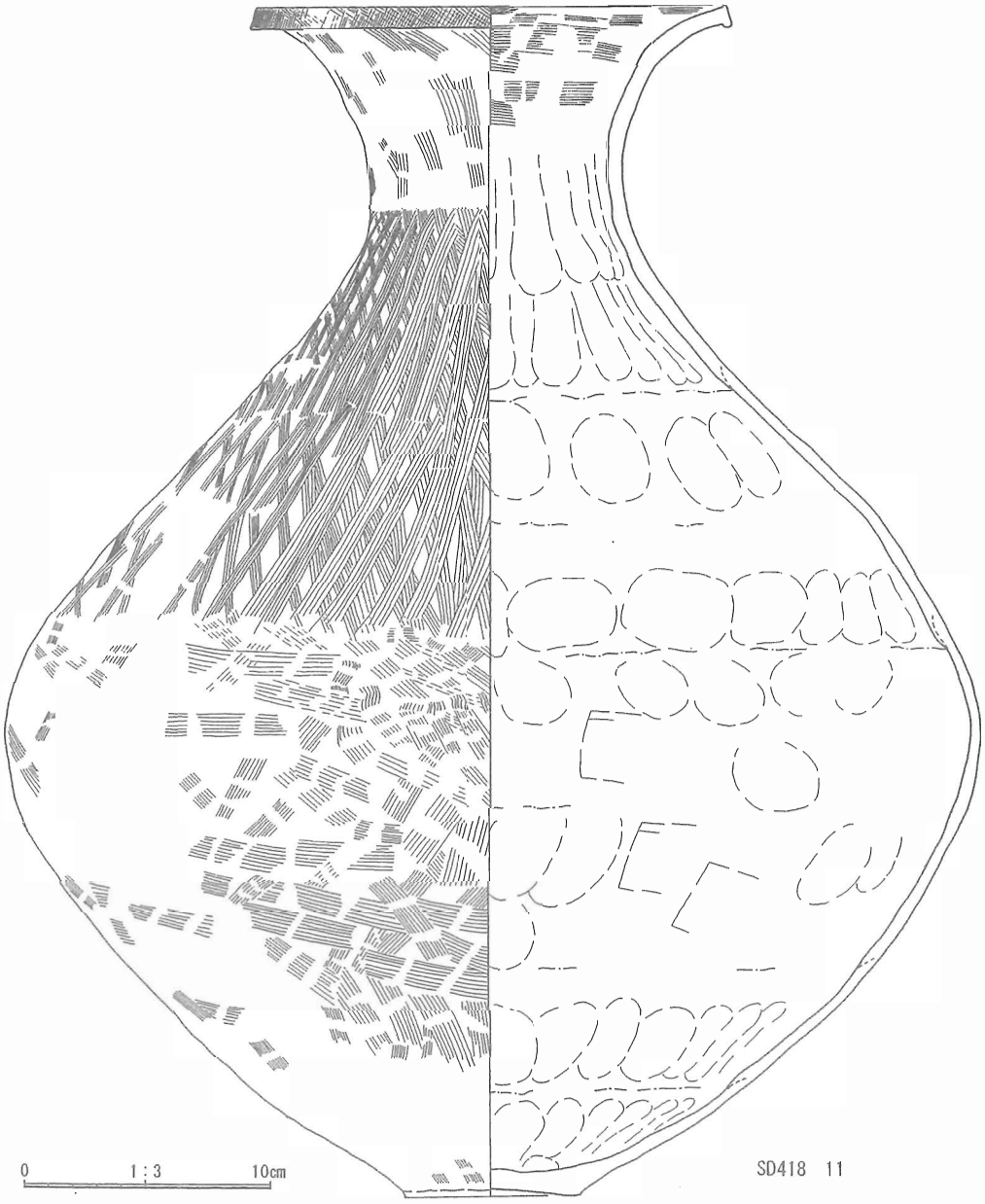
SF402（第77図　図版23）

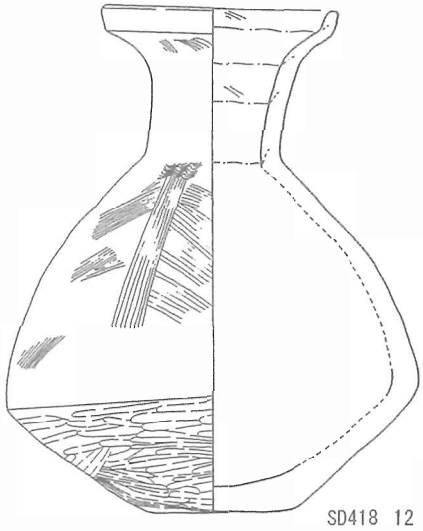
SD417の東側に位置する。長径0.7m、短径0.68mのやや楕円形を呈し、深さ0.15mである。上半部は欠損しているものの大型の長頸壺で横位に設置されていた。

時　期　弥生時代中期末～後期前半



第75図　4区　SZ407実測図





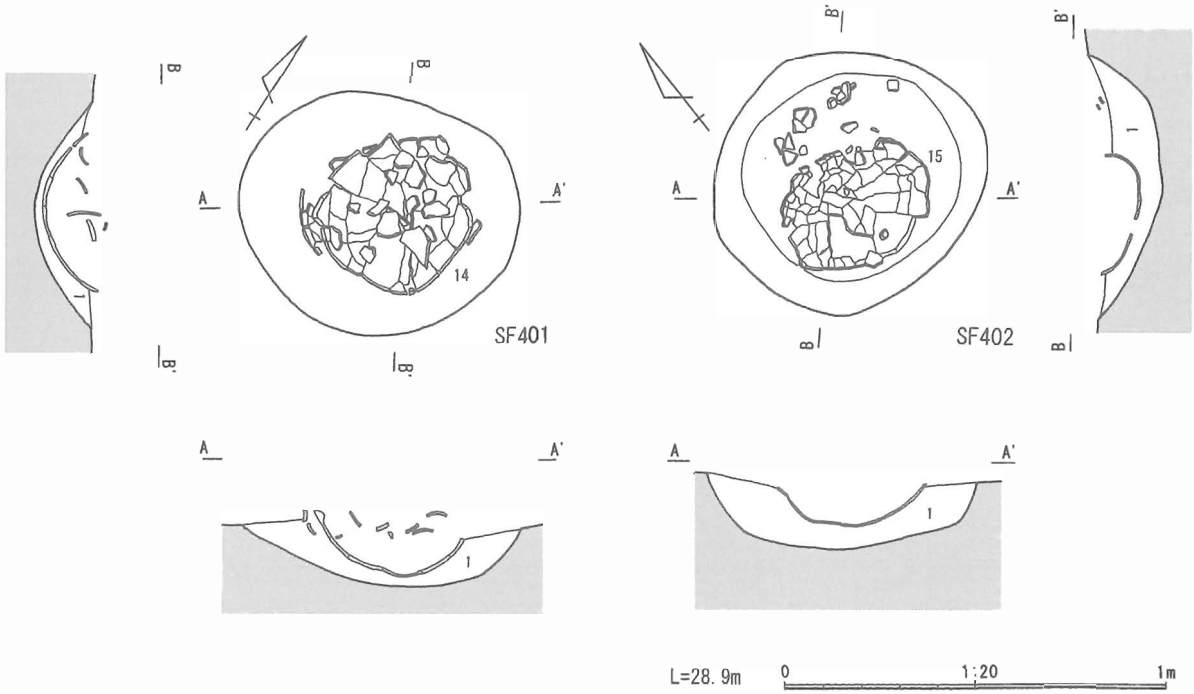
第76図　4区　SZ407出土遺物実測図

SF402出土遺物（第78図）

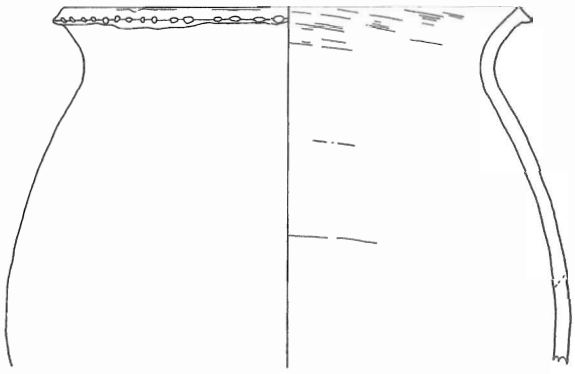
15は壺の底部でやや上げ底である。内外面にハケがみられる。胎土に雲母を含む。SF402では胴部片が出土しているが、接合されず、図化できなかった。

小　穴（第79図　図版24）

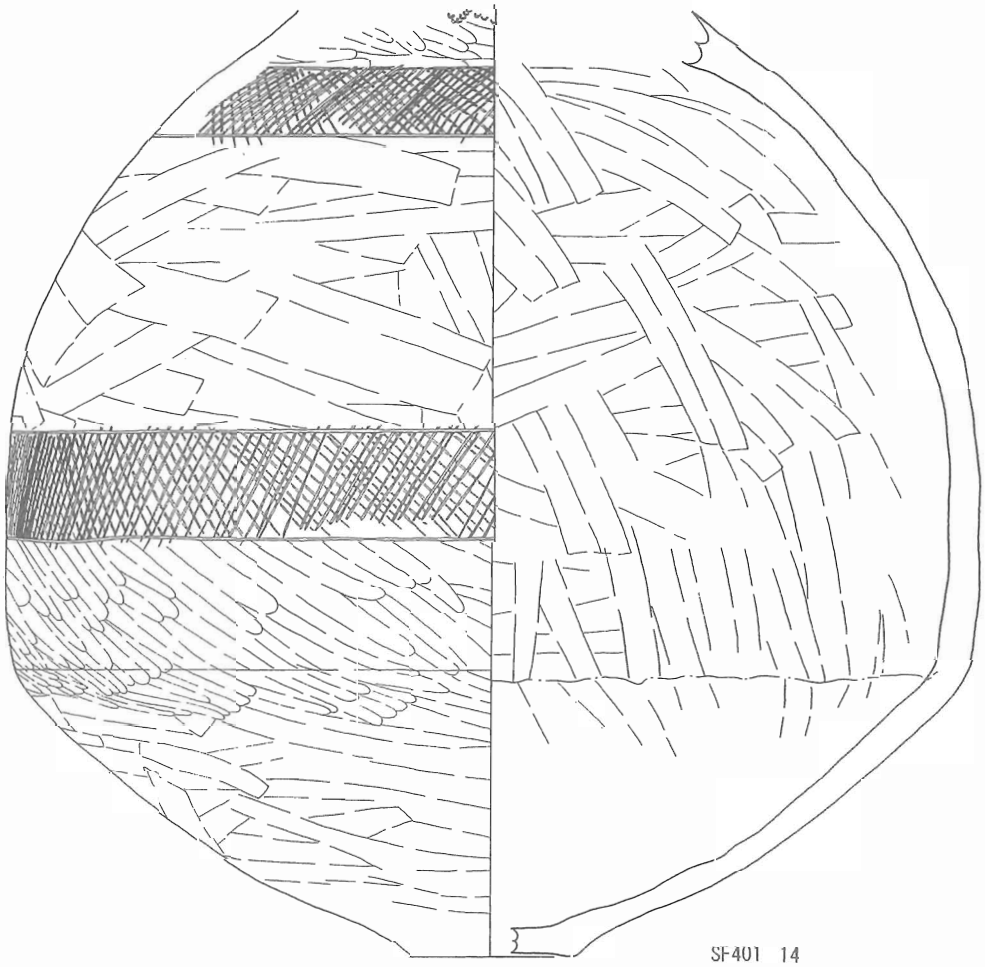
江戸時代の小穴が調査区の南側で6基検出された。建物の規模は不明であるが、これらの小穴には栗石が認められ、おそらく石場立建物であったと推定される。小穴の並びは東西方向で、柱間間隔は1.6、2.7mである。隣接する3区で検出されている建物方位と同様であることから同時存在していた可能性が高い。



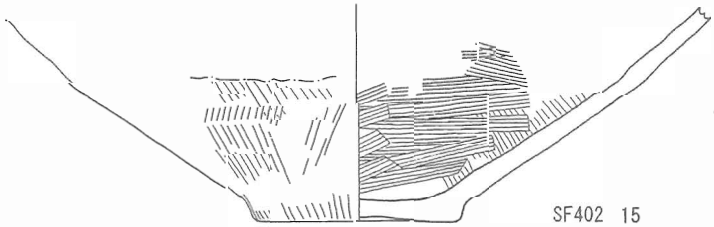
第77図　4区　SF401・402実測図



SF401　13



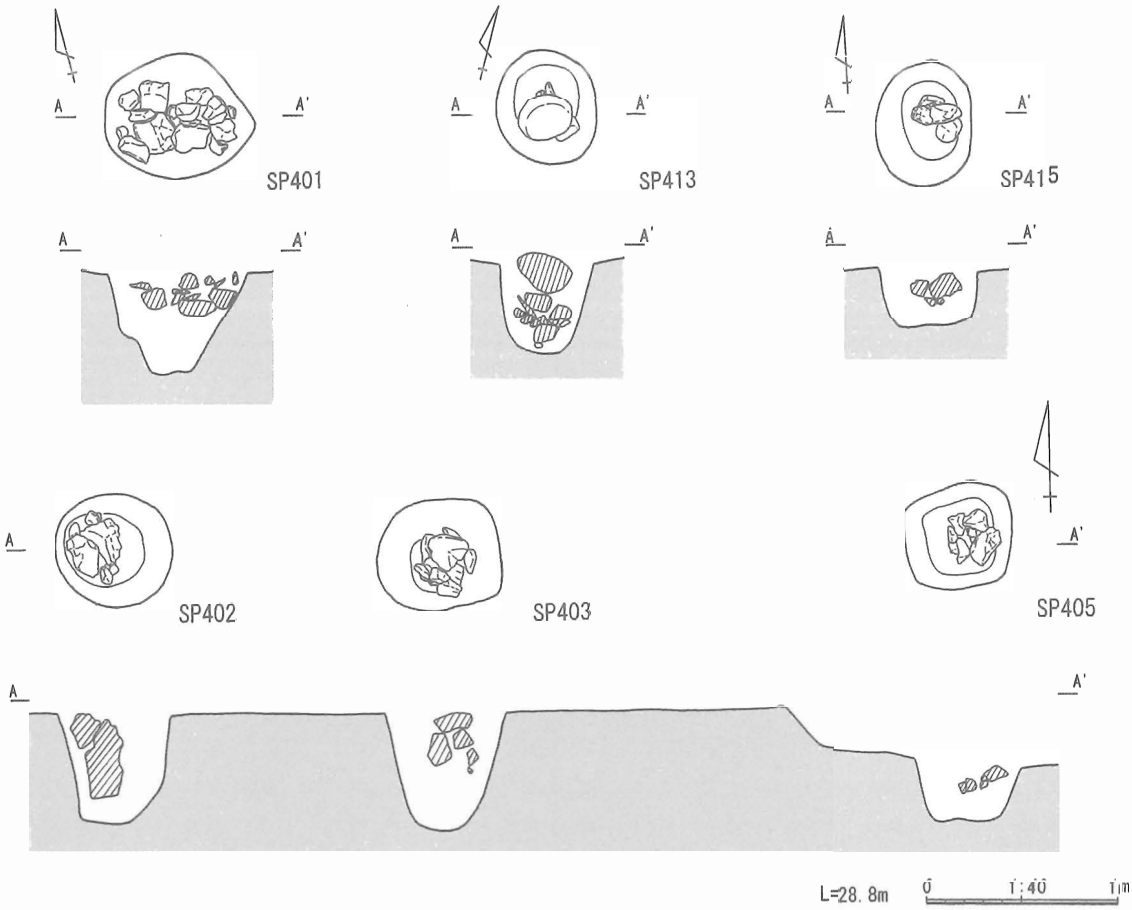
SF401　14



SF402　15

0　1：3　10cm

第78図　4区　SF401・402出土遺物実測図



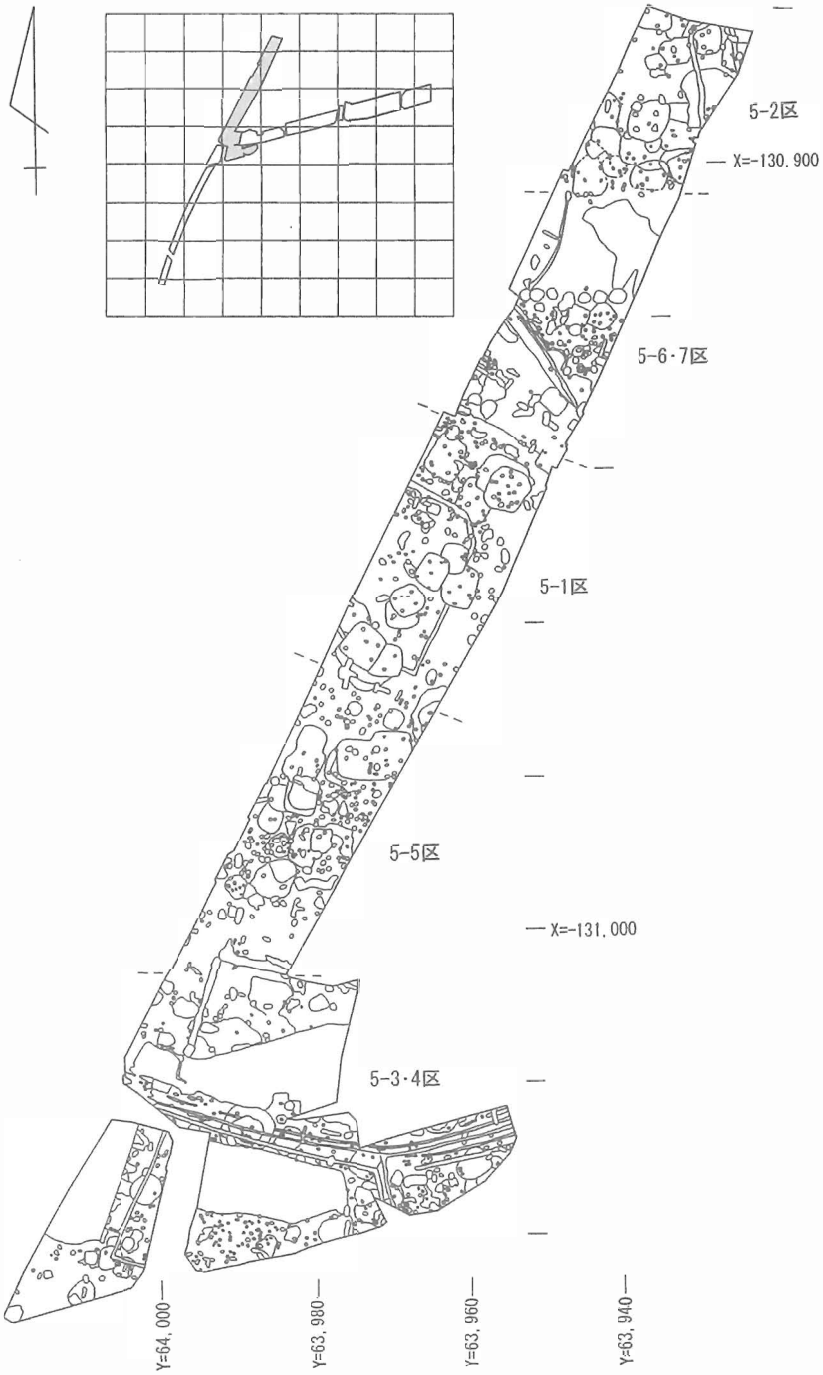
第79図　4区　小穴実測図

第６節　東原５区

５区の検出遺構（第80図）

概　要

５区は遠鉄線に沿った細長い調査区で、南北80ｍに及ぶ。このため、調査区を分割して、調査を行っている。本報告ではこの分割した調査区に合わせて報告する。また、浜名高等学校が調査を行った調査区や旧浜北市が行った調査区と一部重複し、遺構がすでに消失した調査区もあり、判明したものについて明示した。



第80図　５区　全体図

本調査区は弥生時代の竪穴住居が最も密集する区域で78軒、土坑、小穴、溝状遺構が検出されている。旧浜北市調査分と浜名高等学校分を合わせると竪穴住居は80軒以上に及ぶ大規模な集落であろう。それらのほとんどは切り合いを持ち、多いところでは5軒以上の重複関係をもつ。構築された時期は弥生時代後期中葉～弥生時代後期後半で、古墳時代前半の遺構は見当たらない。集落を区画する溝は検出されなかった。

5－1区（第81図）

本調査区では他の調査区と比べて住居の形状が把握しやすく、ある程度、切り合い関係をおさえることができた。ここでは概ね5つの住居群から構成されている。そのほとんどが2軒以上の切り合い関係をもち、住居形態は楕円形、隅丸方形で占め、規模は4～6mクラスである。

SB516（第82図　図版25）

調査区の北西隅に位置する。やや細長い隅丸方形を呈する。長軸5.7m、短軸4.5mである。掘り込みは浅いものの、炉跡や主柱穴は明瞭であった。炉跡はほぼ住居の中央部に位置し、SP1・SP2・SP3・SP4が主柱穴と思われる。柱筋はややずれるが、柱間間隔は2.2m・2.5m・2.7mである。主柱穴は楕円形を呈し、掘り込みも深い。根石等は確認されなかった。炉跡は楕円形の掘り込みに細長い礫が埋め込まれ、そこから北半部分で焼土がみられた。遺物は炉跡付近や北側の小穴付近から出土している。

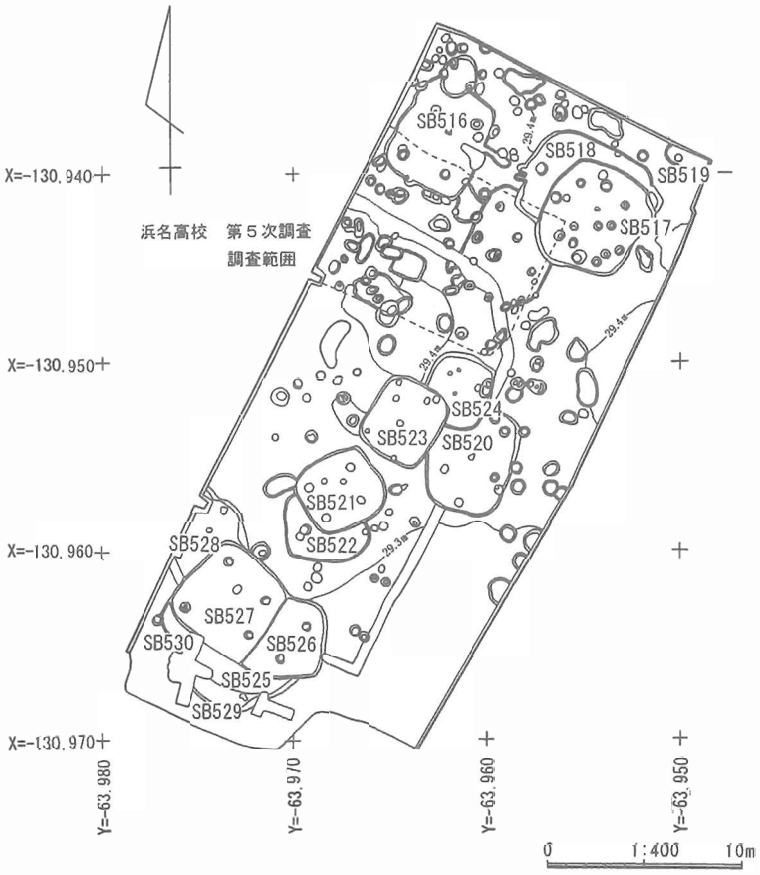
時　期　弥生時代後期

SB516出土遺物（第83図）

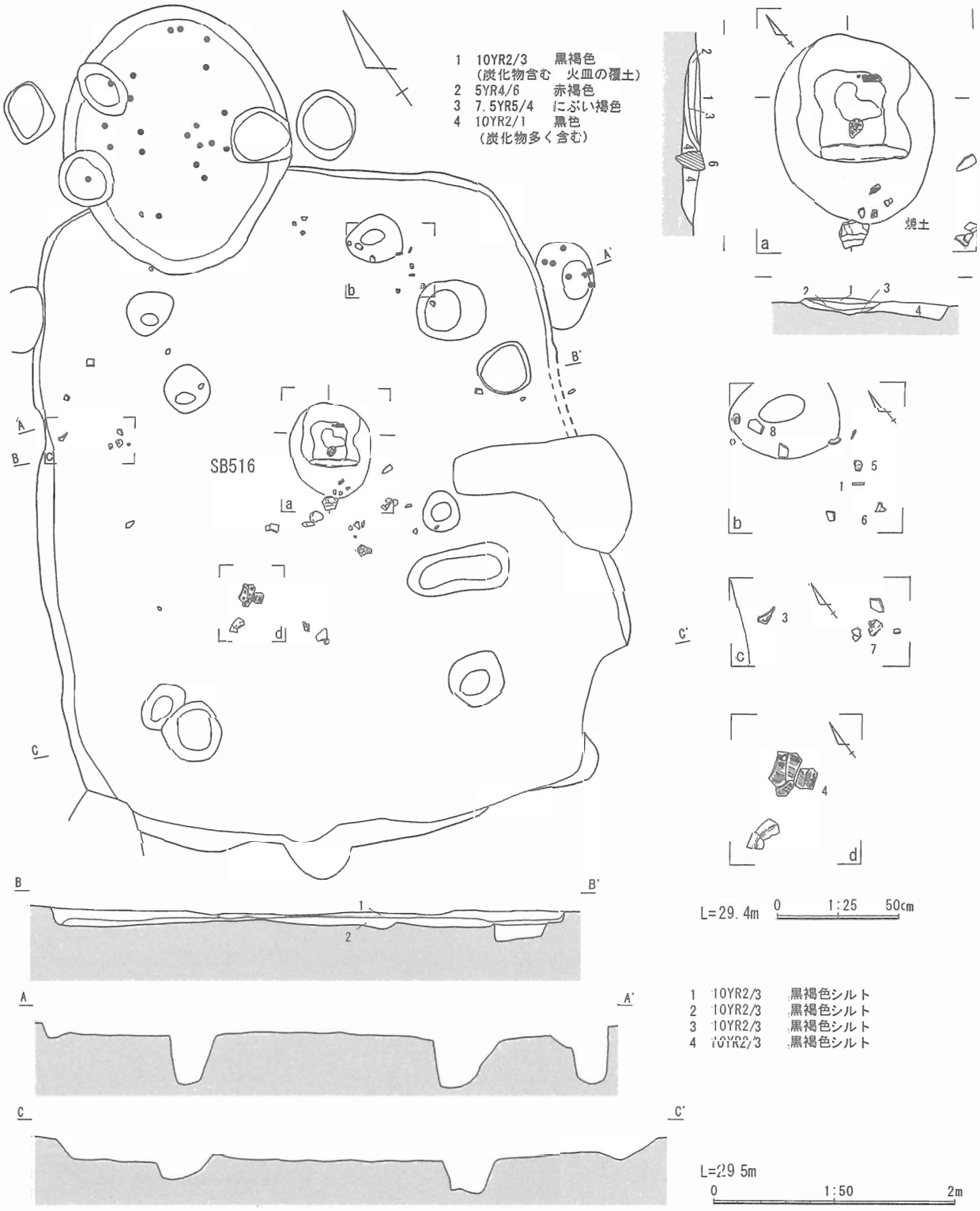
1は折返口縁壺で、磨耗しているため調整は不明瞭であるが、内面は縄文が施される。2は球胴状の胴部に刺突羽状文がつく。3は櫛刺突文がつく。4は下膨れの体部に櫛刺突文が2段つく。3点1対の円形浮文が貼付される。体部下部は横方向のミガキが施される。5は小型高坏の脚部である。6～8は台付甕の脚台部である。

SB517・518（第84図　図版25）

3軒の住居が切り合っているが、ここではSB517とSB518の図を掲載する。SB517は隅丸方形に近い楕円形である。炉跡はほぼ中央に位置する。主柱穴はSP1・SP2・SP3・SP4で、柱間間隔は2.9m・2.8m・2.7m・2.6mである。その他小穴が確認されているが、柱の建て替え等は不明である。SB518は長軸5.5m以上で、



第81図　5－1区　全体図



第82図　5－1区　SB516実測図

短軸5mで隅丸方形を呈する。焼土は住居の北壁際で検出された。主柱穴、炉跡は確認された。

SB517・518出土遺物実測図（第85図）

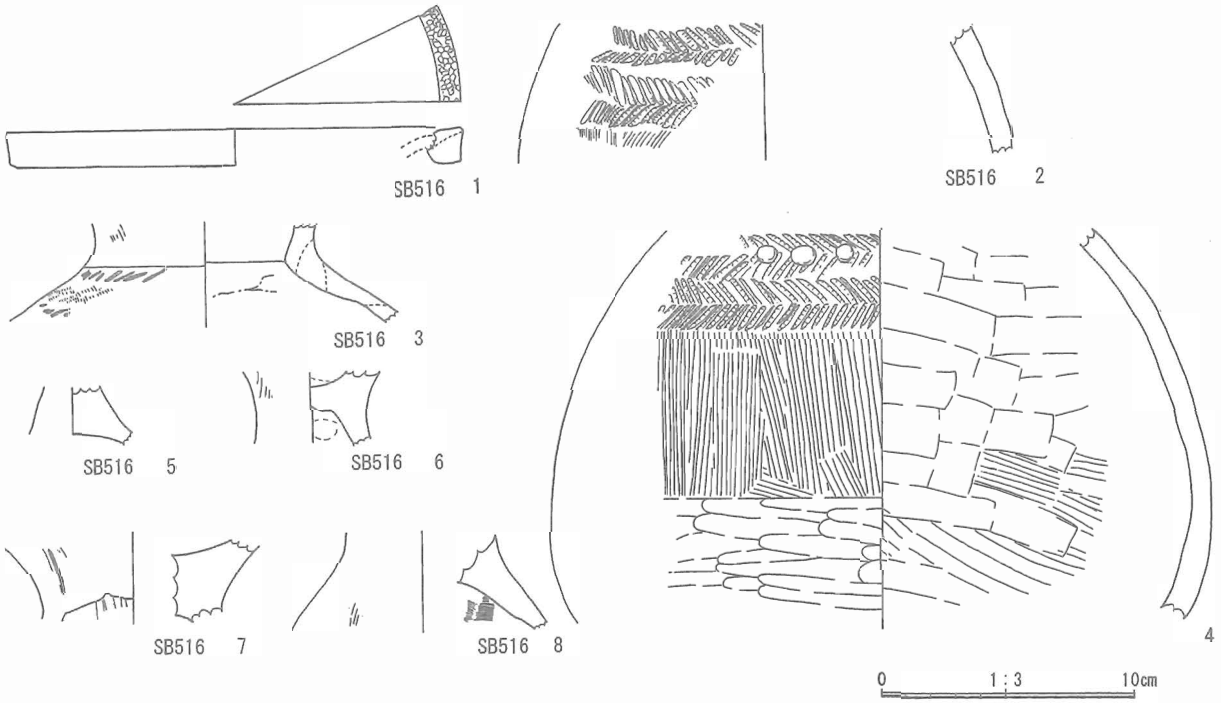
9は細い頸部を有する単純口縁壺である。口縁部は外反し、端部は内側にやや肥厚する。頸部には櫛刺突文がわずかに残る。10は折返口縁壺で、幅広の突帯が低くつく。端部には縦位の刺突文が巡る。11は台付甕である。12は高坏の脚部である。縦位のミガキが施される。13はガラス小玉である。14は砥石である。使用面は2面ある。重さは1641.8gで、石材は砂岩である。15は砥石である。使用面は3面あり、線状痕が残る。重さは1140.3gで、石材は結晶片岩である。

16～23はSB518出土遺物である。17は折返口縁壺で側面に縄文がつく。18は直線文下に櫛刺突文がつく。19は櫛刺突文がつく。20・21・22は台付甕である。23は脚台部である。

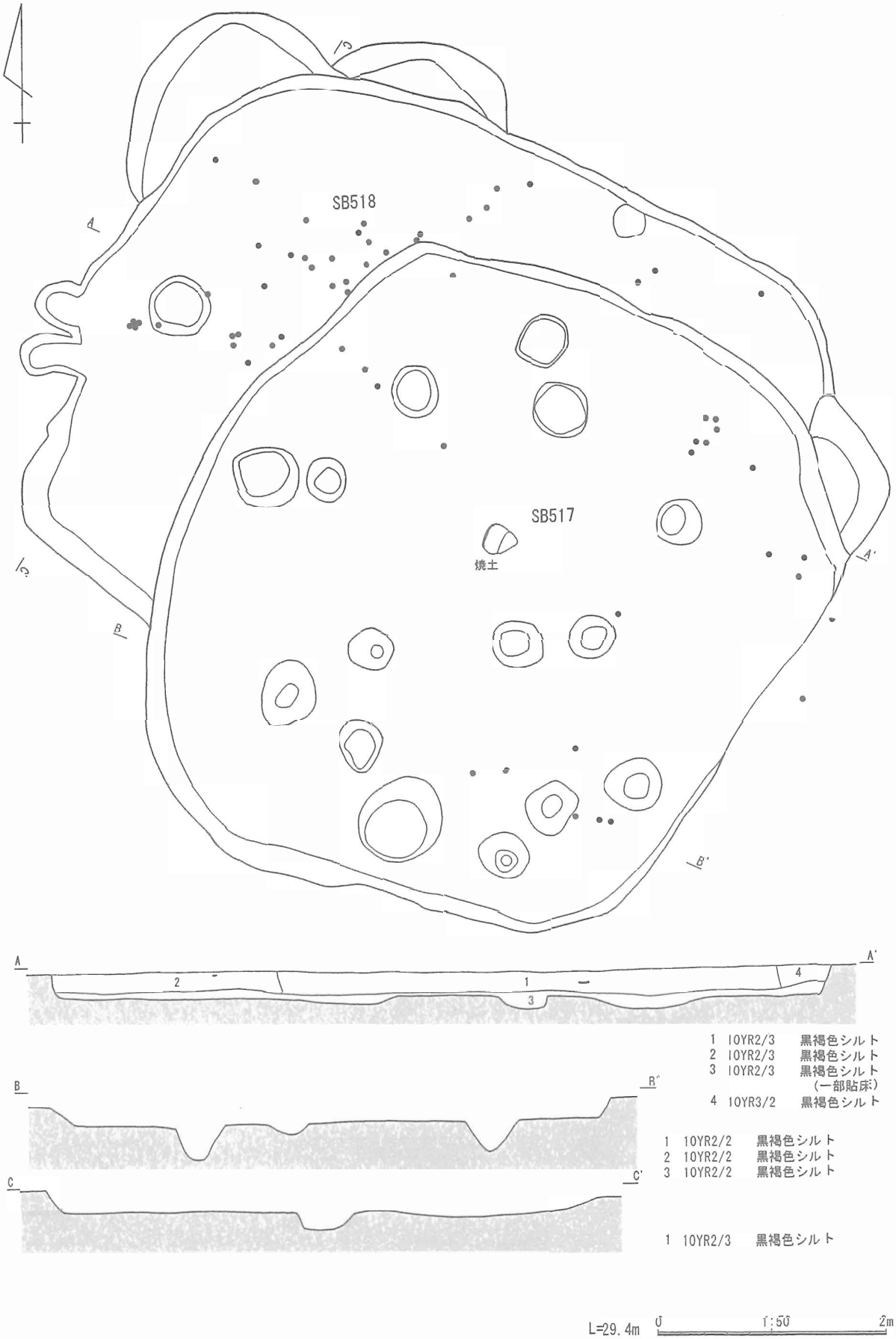
SB519（第86図　図版25）

5－1区と5－6・7区との境で検出されている。方形を呈する住居で、長軸は3.5m以上、短軸2.6m以上ある。主柱穴は2箇所で確認し、柱間間隔は1.8mである。中心部より北東にずれた位置で、炉跡が確認されている。細長い礫が含まれ、掘り込みが2箇所切り合っている。遺物は床面から弥生土器の小片が出土している。

時　期　弥生時代後期後半



第83図　5－1区　SB516出土遺物実測図



第84図　5－1区　SB517・518実測図

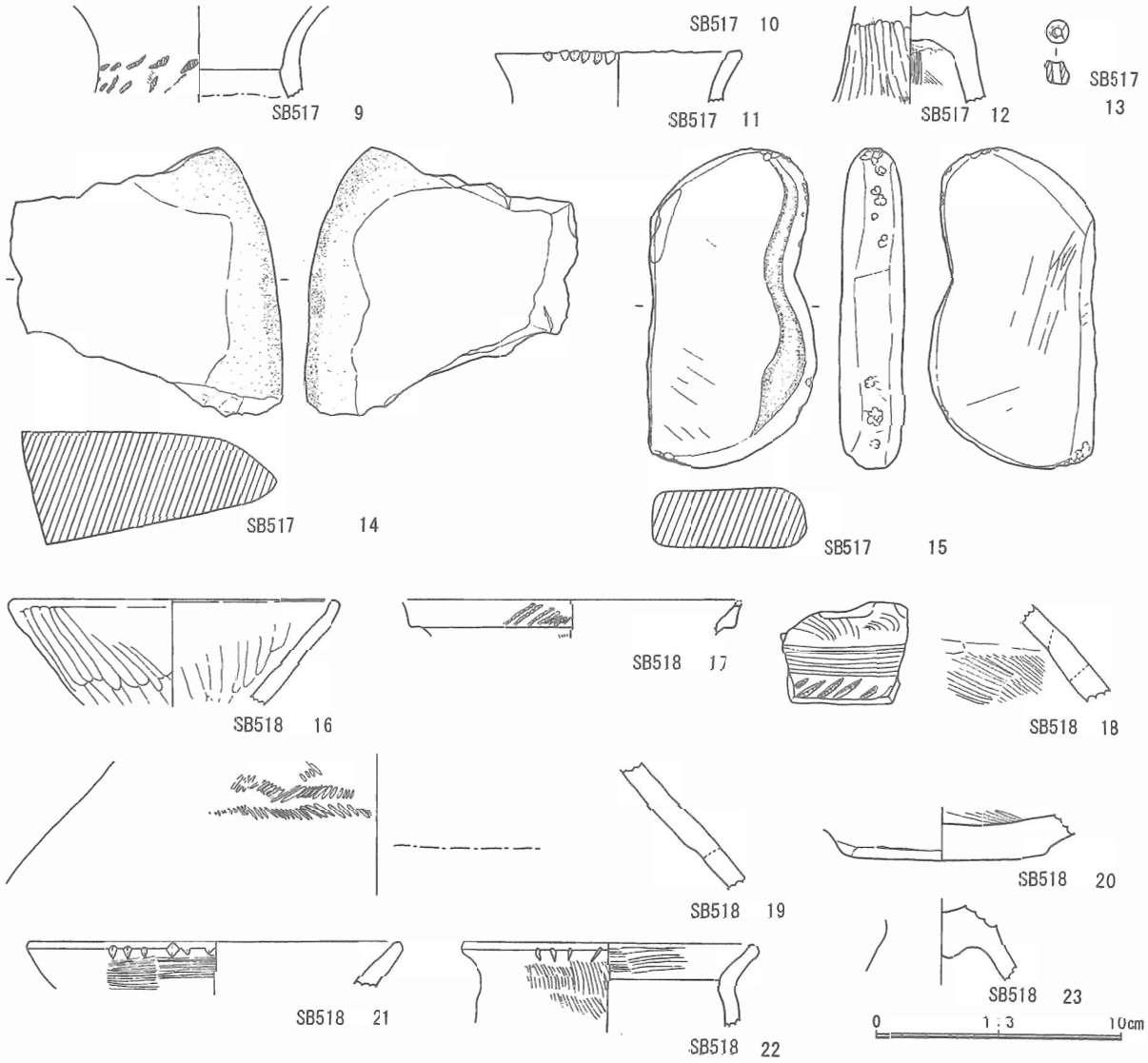
SB519出土遺物（第87図）

23は壺頸部片である。内面の頸部と胴部の境の段差が認められる。24は胴下位に最大径をもち、下膨れの器形である。下位には横方向のヘラミガキが施される。胴上位は有段羽状文がつく。3個で1単位の円形浮文がつく。

SB521・522（第88図　図版26）

SB521は隅丸方形を呈する住居で、長軸4.4m、短軸4mである。主柱穴は4基確認され、柱間間隔は1.8m、2m、2.3mである。炉跡は2箇所確認され、中心より北側で並列して検出された。貼床は1面確認された。遺物量は少ない。SB522は楕円形を呈する住居で、長軸4.8mである。主柱穴の存在は不明であるが、小穴が検出されている。

時　期　弥生時代後期



第85図　5－1区　SB517・518出土遺物実測図

SB521・SB522遺物（第89図）

25は櫛刺突文がわずかながら残る。26は折返口縁壺で、折返部の段差はほとんどない。27は壺底部片である。やや上げ底である。28は壺胴部片である。最大径は下位で球胴に近い形状である。

SB520・523・524（第90図　図版27・28）

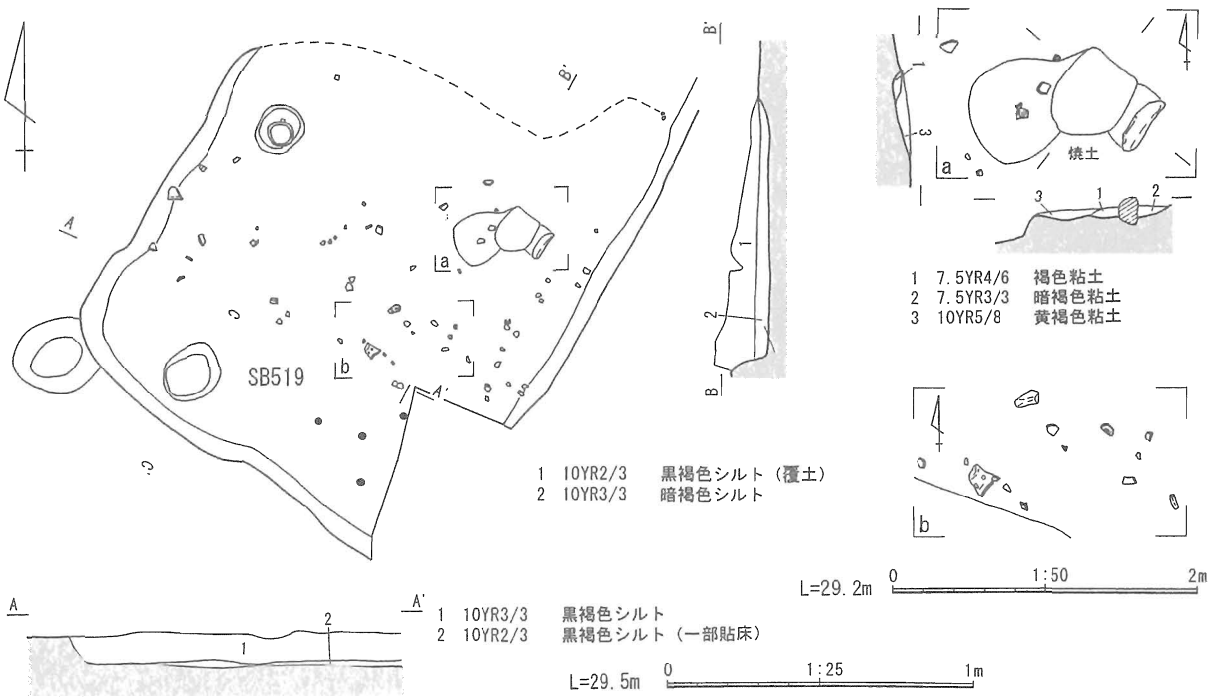
3軒切り合う住居である。構築順序はSB520→SB524→SB523である。SB520は楕円形を呈し、長軸5.8m、短軸4.6mである。炉跡はほぼ中央に位置し、主柱穴はSP1・SP2・SP3を想定した。柱間間隔は3mである。SB524は小型の楕円形を呈する住居で、長軸3.7m、短軸3.3mである。ほぼ中央に炉跡が検出された。主柱穴はSP1・SP2で柱間間隔は1.6mである。SF1は長楕円形を呈し、貯蔵穴の可能性もある。

時　期　弥生時代後期中葉

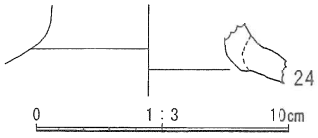
SB520（第91図　図版27）

隅丸方形を呈する住居である。長軸4.4m、短軸3.8mである。小穴の位置関係から主柱穴はSP1・SP2・SP3と推測される。柱間間隔は2.5m・2mである。炉跡はほぼ中央に位置する。浅い掘り込みを有する。住居の北東隅で細長い礫と焼土がみられたが炉跡であるか判然としない。

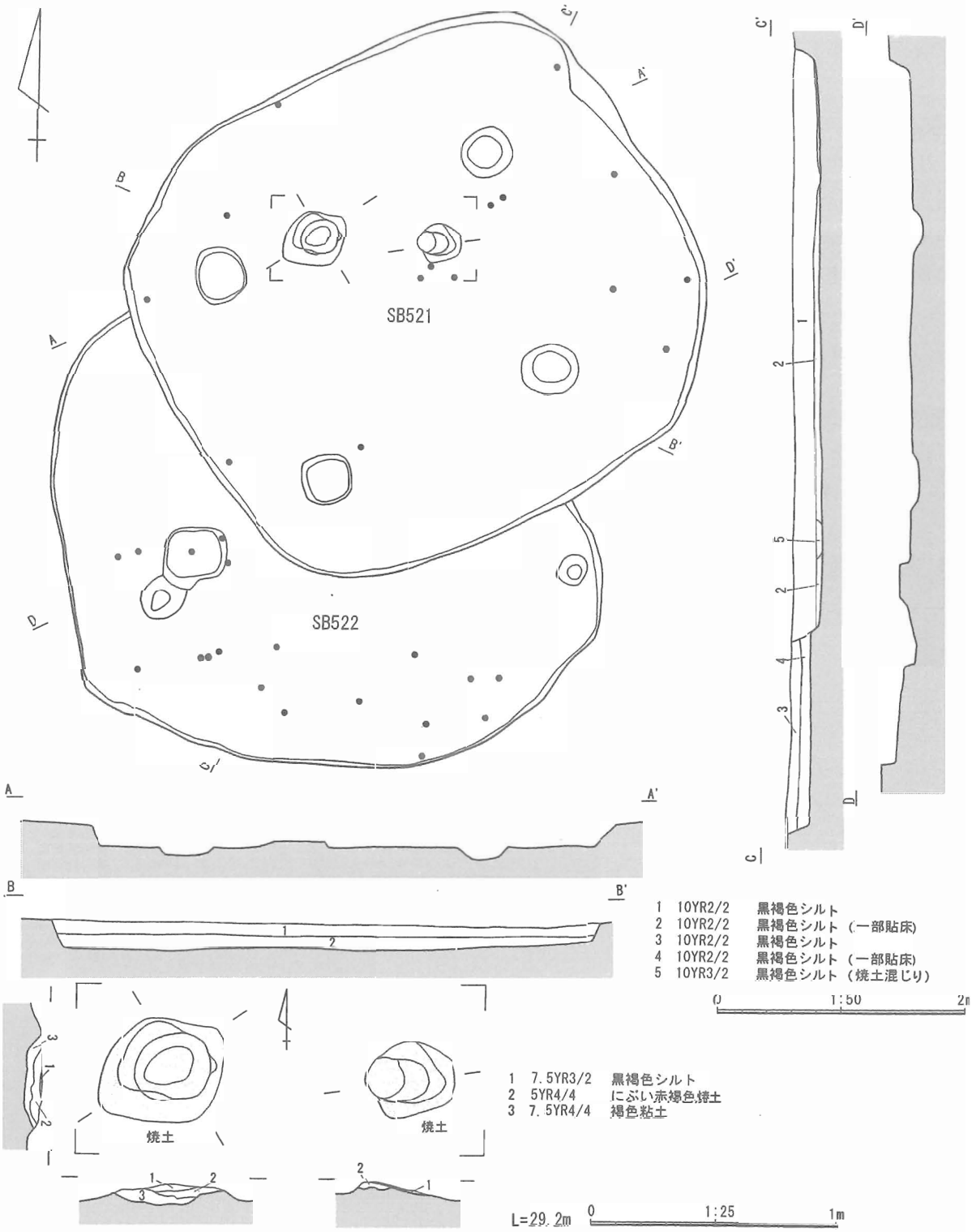
時　期　弥生時代後期後半



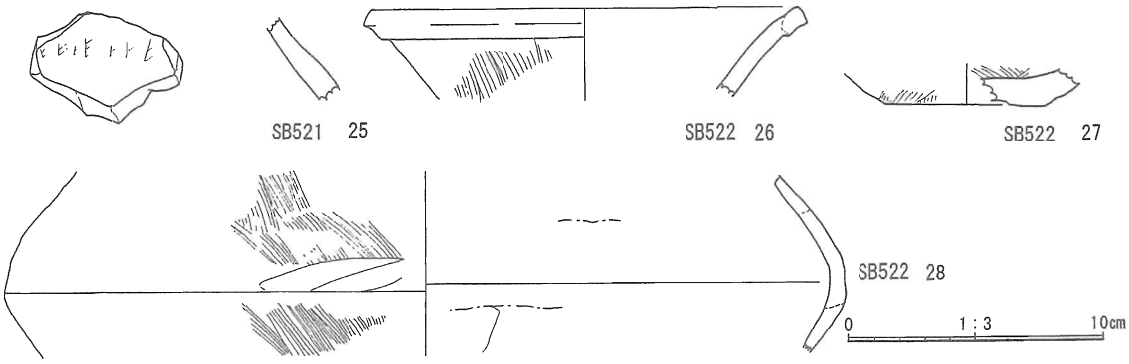
第86図　5－1区　SB519実測図



第87図　5－1区　SB519出土遺物実測図



第88図　5－1区　SB521・522実測図



第89図　5－1区　SB521・522出土遺物実測図

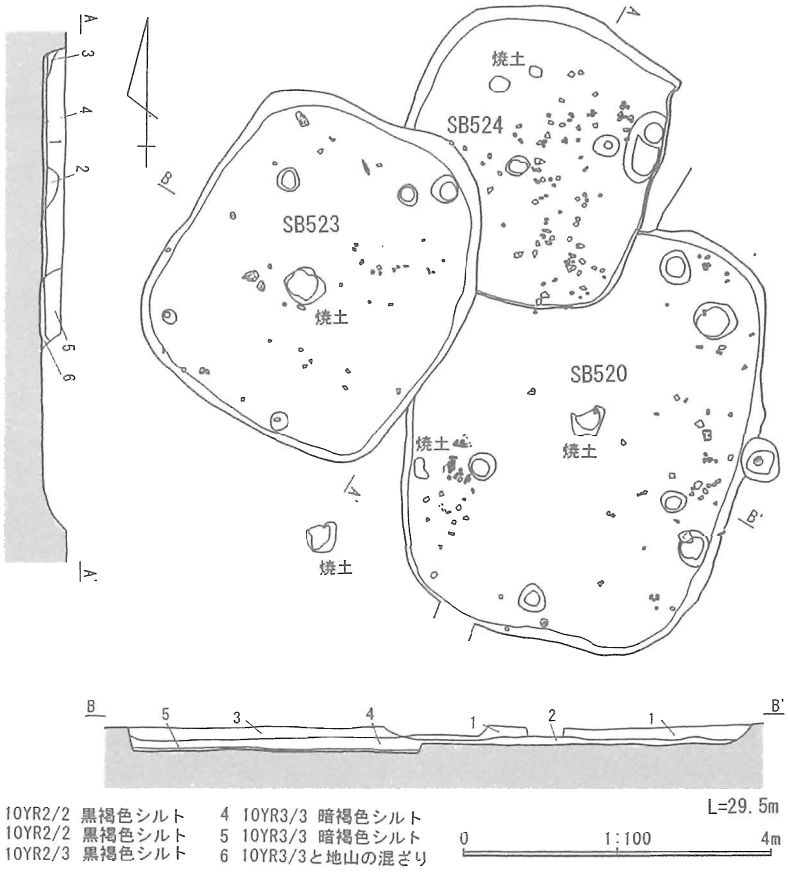
SB520遺物（第92図）

29は折返口縁壺である。30は波状文がわずかに観察される。31は壺胴部片で、最大径が下位で球胴状である。32は壺底部片である。33・34は台付甕である。35は口縁部が短く外反する台付甕である。36はやや内湾ぎみの脚台部である。37は石錐である。石材は珪質頁岩で、重さは2.66ｇである。38は打製石斧である。刃部は欠損している。石材は砂質変岩である。

SB523・SB524遺物（第94図）

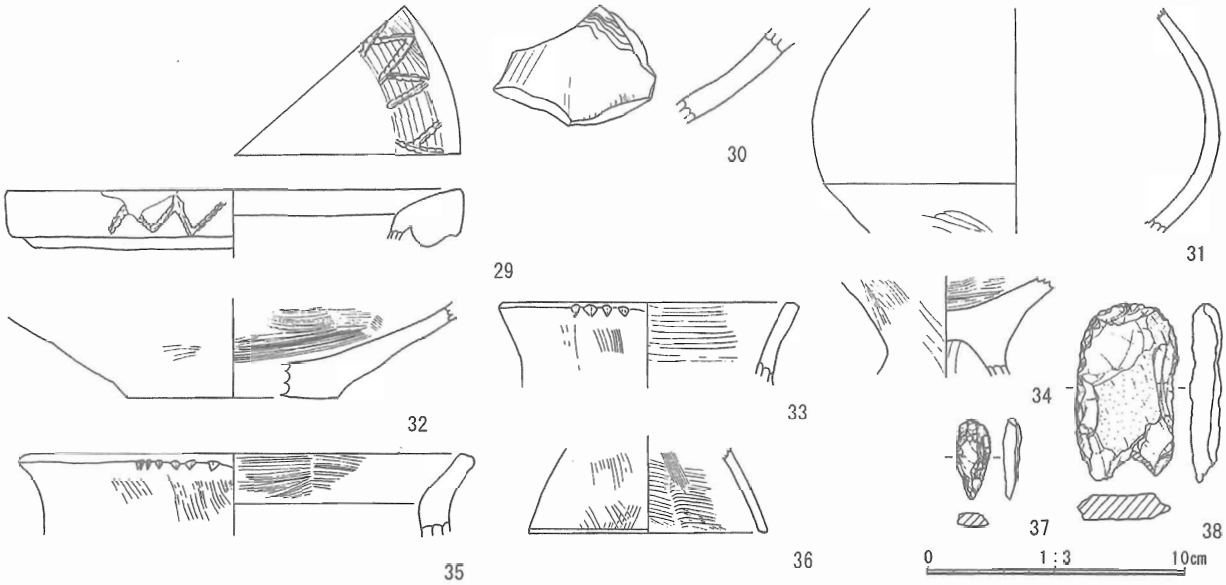
39～48までがSB523出土遺物である。39は折返口縁壺である。短く低い折返部がつき、端部には刻みが入る。40は壺胴部片で、細い頸部に櫛刺突文がつく。41は壺底部片である。42は高坏で、内外面ともにヘラミガキが施される。43は台付甕の口縁部片で刻みがつく。44は台付甕の脚台部で、低く内湾する形態である。45・46はやや内湾する台付き甕の脚台部である。47は外方へ広がる脚台部である。48は打製石斧で、刃部に磨耗痕が観察される。石材は頁岩である。

49～57がSB524出土遺物である。49は単純口縁壺である。50は折返口縁壺で、折返部の段差は明瞭ではない。51は折返口縁壺で、端部には斜格子文がつく。52は折返口縁壺で、内面には波状文が施され、口縁端部下に刻みが入る。53は櫛刺突文がつく。54は厚手の壺底部片である。55は台付甕の底部である。56は高坏で、坏部の下部で屈曲する。57は台付甕で、端部は面取りされ、刻みが入る。

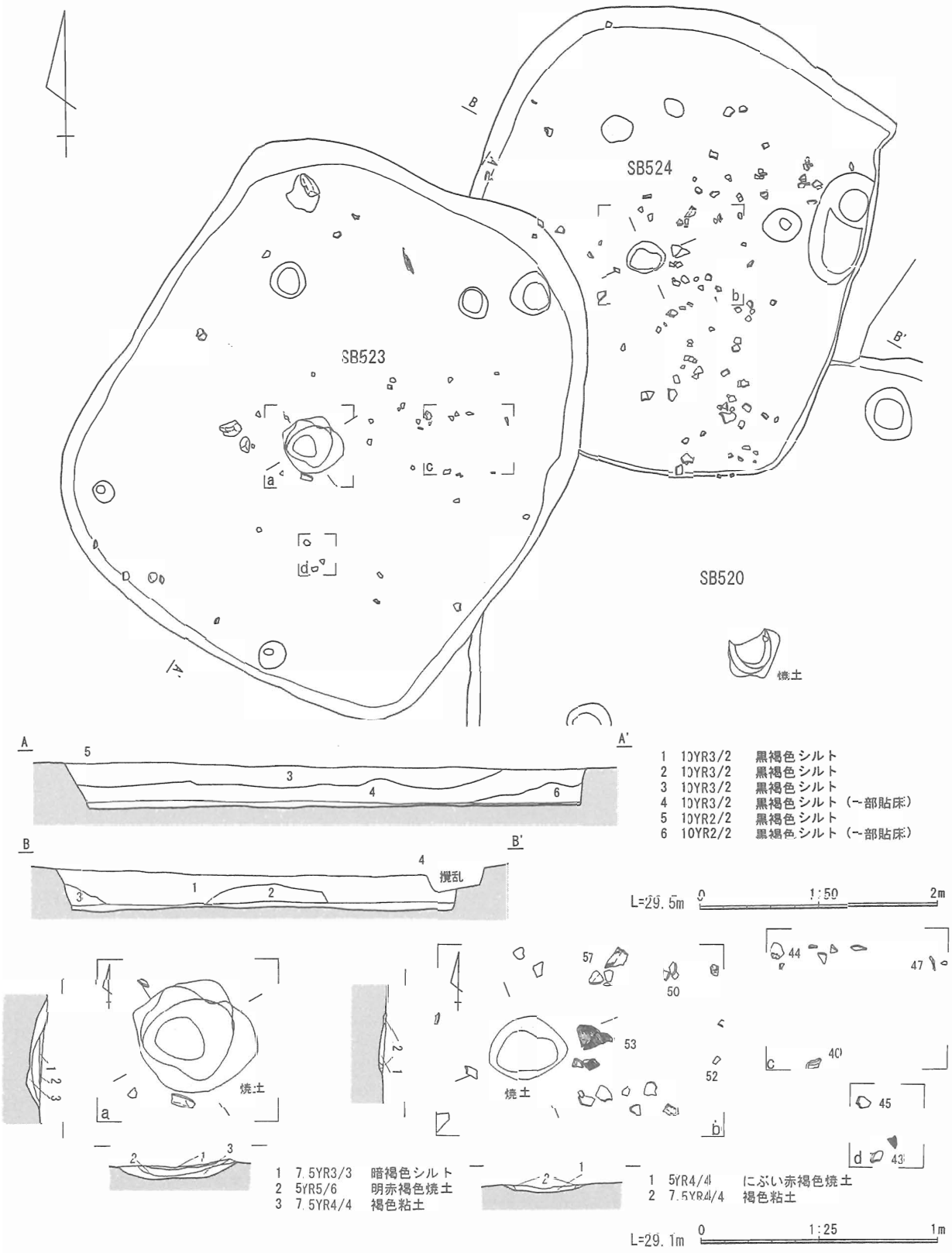


第90図　5－1区　SB520・523・524実測図

第91図　5－1区　SB520実測図



第92図　5－1区　SB520出土遺物実測図



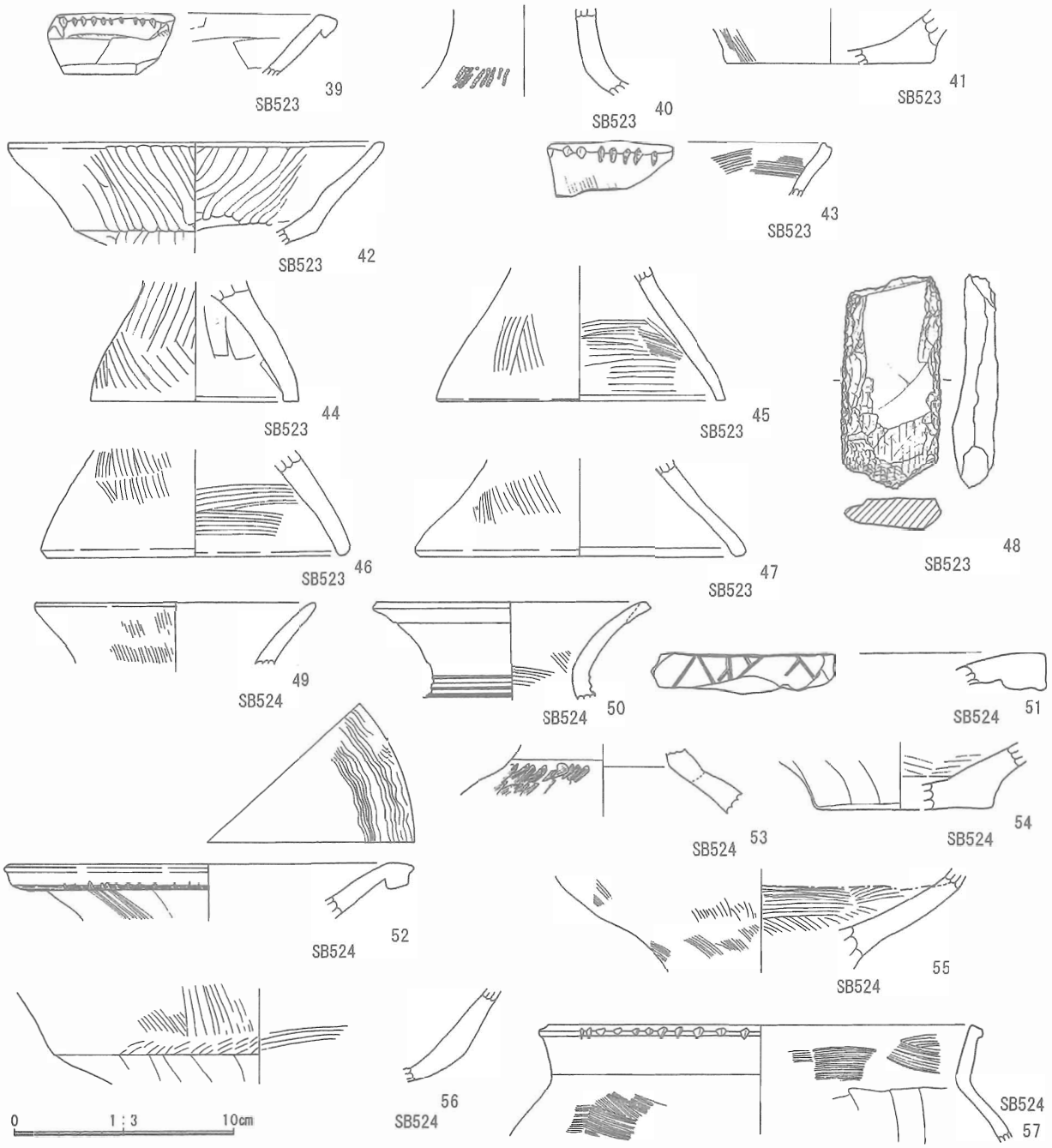
第93図　5－1区　SB523・524実測図

SB525～530（第95図　図版26）

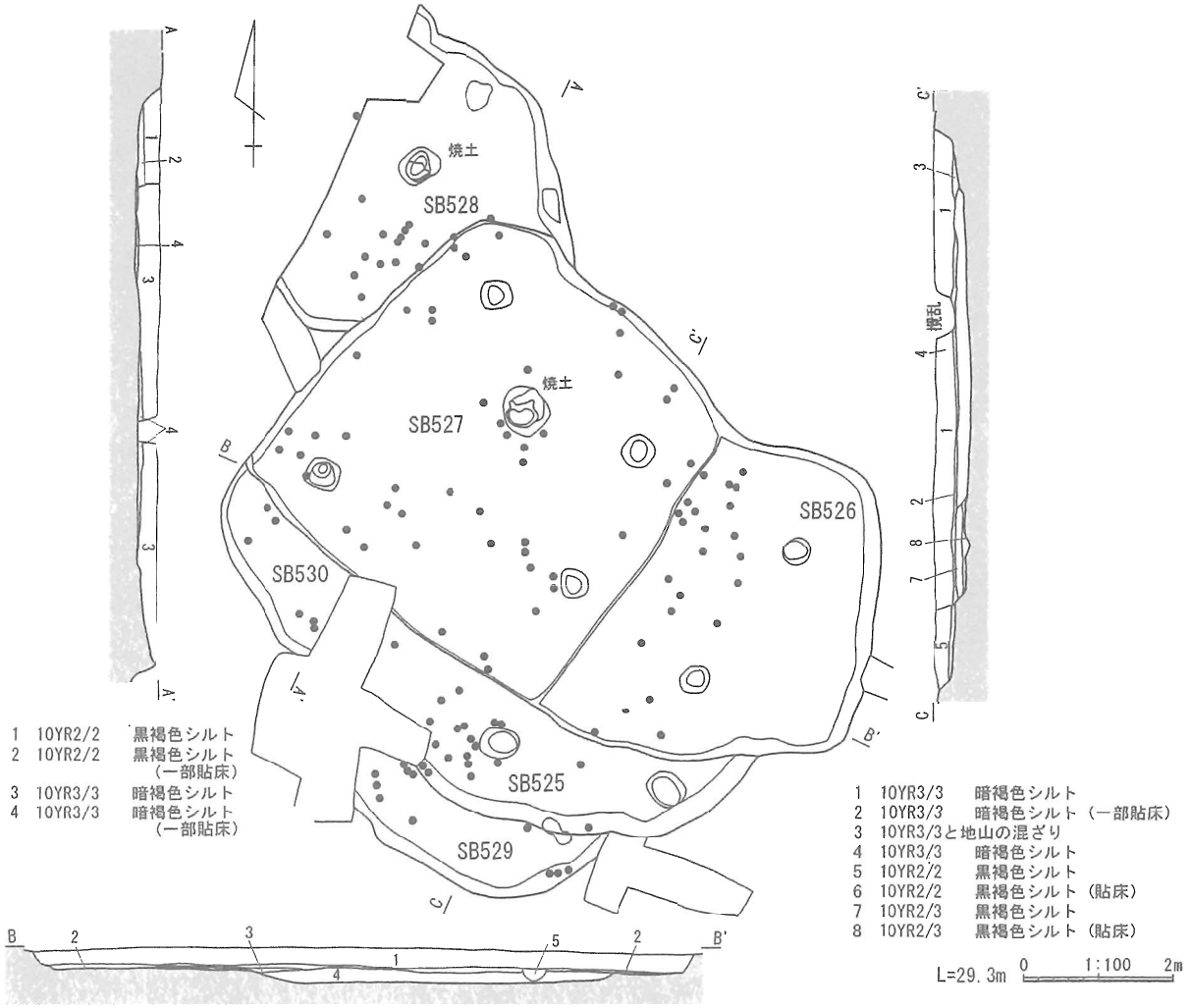
6軒の住居と1軒の掘立柱建物跡が切り合う一群である。構築順序はSB529→SB530・SB525・SB526・SB528→SB527→SH501である。そのうち炉跡が検出されているのはSB527・SB528である。

SB528は方形を呈し、長軸5.2m、短軸5mである。主柱穴は2基確認され、柱間間隔3.3mである。SB526隅丸方形をなす。SB525は住居の弧の部分のみの検出であったが、下部には貼床が認められ、おそらく楕円形に近い形状であったと推察される。そのほかSB529・530は部分的な掘り込みのみの検出であった。

時　期　弥生時代後期後半



第94図　5－1区　SB523・524出土遺物実測図



第95図　5－1区　SB525～530実測図

SB525～531出土遺物（第98図）

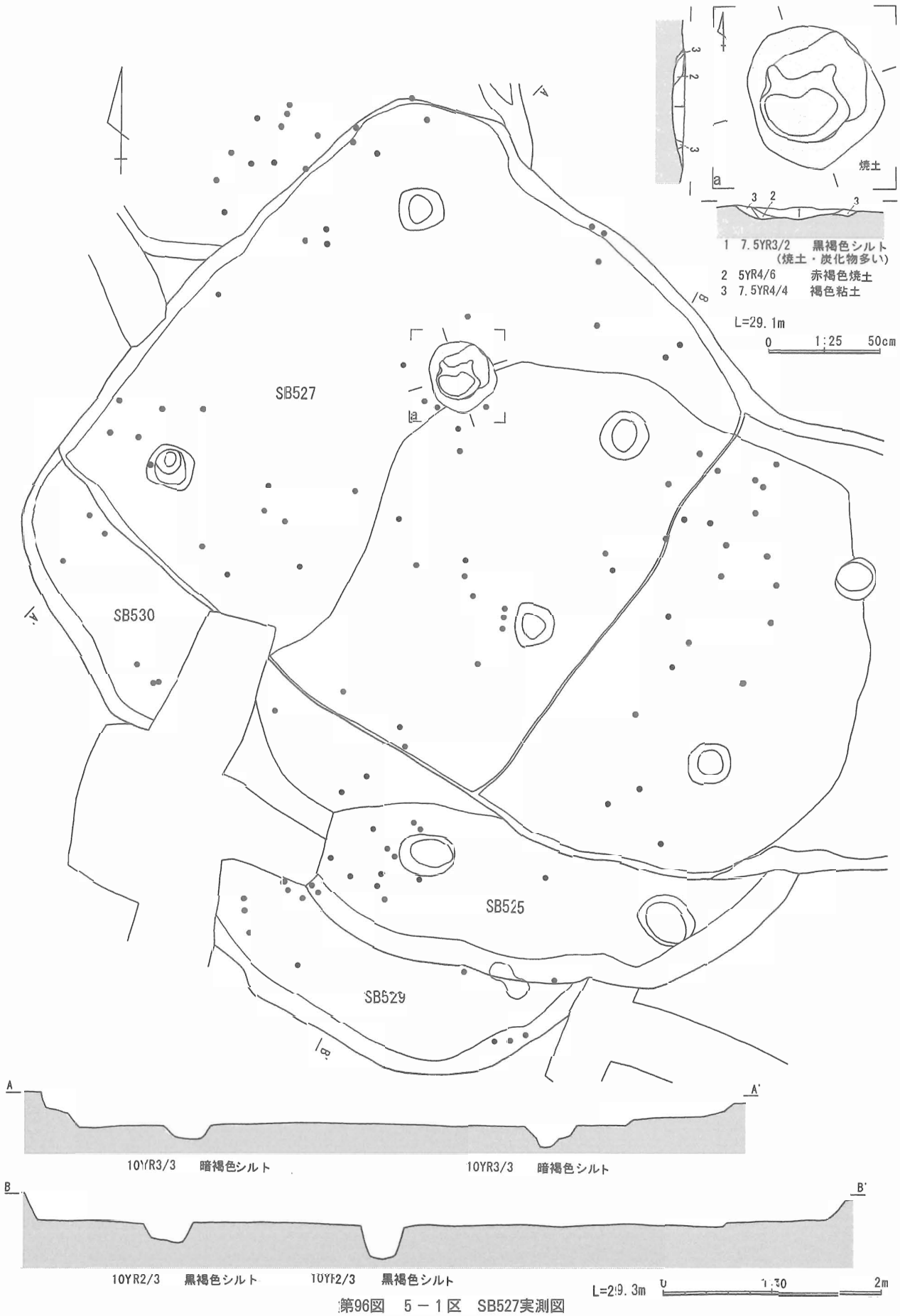
58～65はSB525出土遺物である。58は折返口縁壺である。59は壺胴部片で、直線文に扇形文の組合せである。60は円形刺突文がつく。61は無頸壺で、直線文間に刺突文が巡る。61は単純口縁壺で、端部は縄文がつく。64は直線文が巡る。65は高坏で内外面ミガキが施される。

66～68はSB526出土である。66は短く外反する台付甕である。67・68は台付甕の脚台部である。

70～72はSB527出土である。69は刺突文が斜位に施されている。70は壺底部片で、やや上げ底である。71は高坏で、屈曲は弱い。72は括れの弱い台付甕である。

73～75はSB528出土である。73は波状文が残る。74は折返口縁壺である。

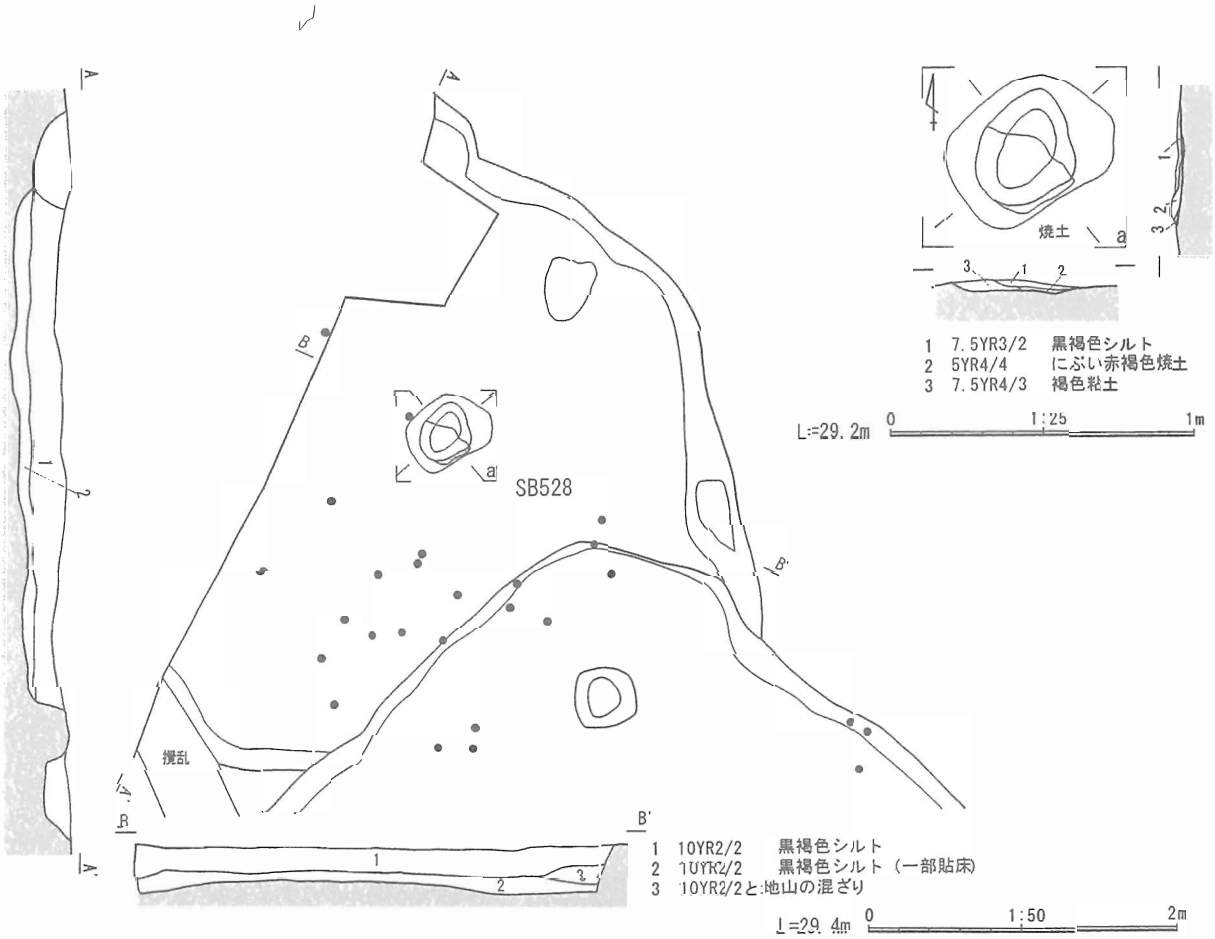
76はSB531出土で、折返口縁壺である。内側には波状文と扇形文の組合せである。折返部の側面には刺突文がつく。77はSB530出土で、台付甕の脚台部である。79～81はSB529出土である。80・81は台付甕の脚台部である。



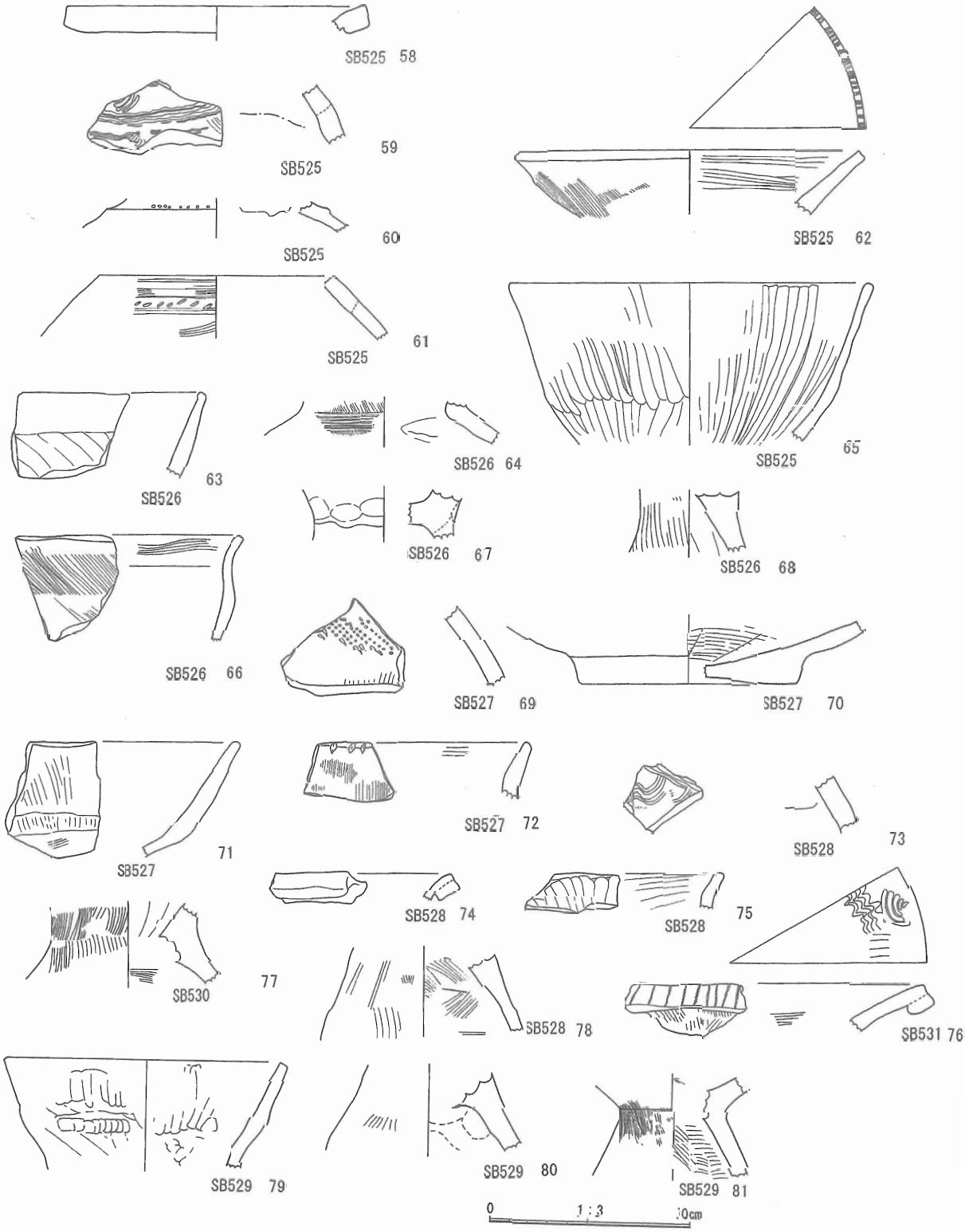
第96図　5－1区　SB527実測図

5－1区土坑・溝・小穴・表土出土遺物（第99図）

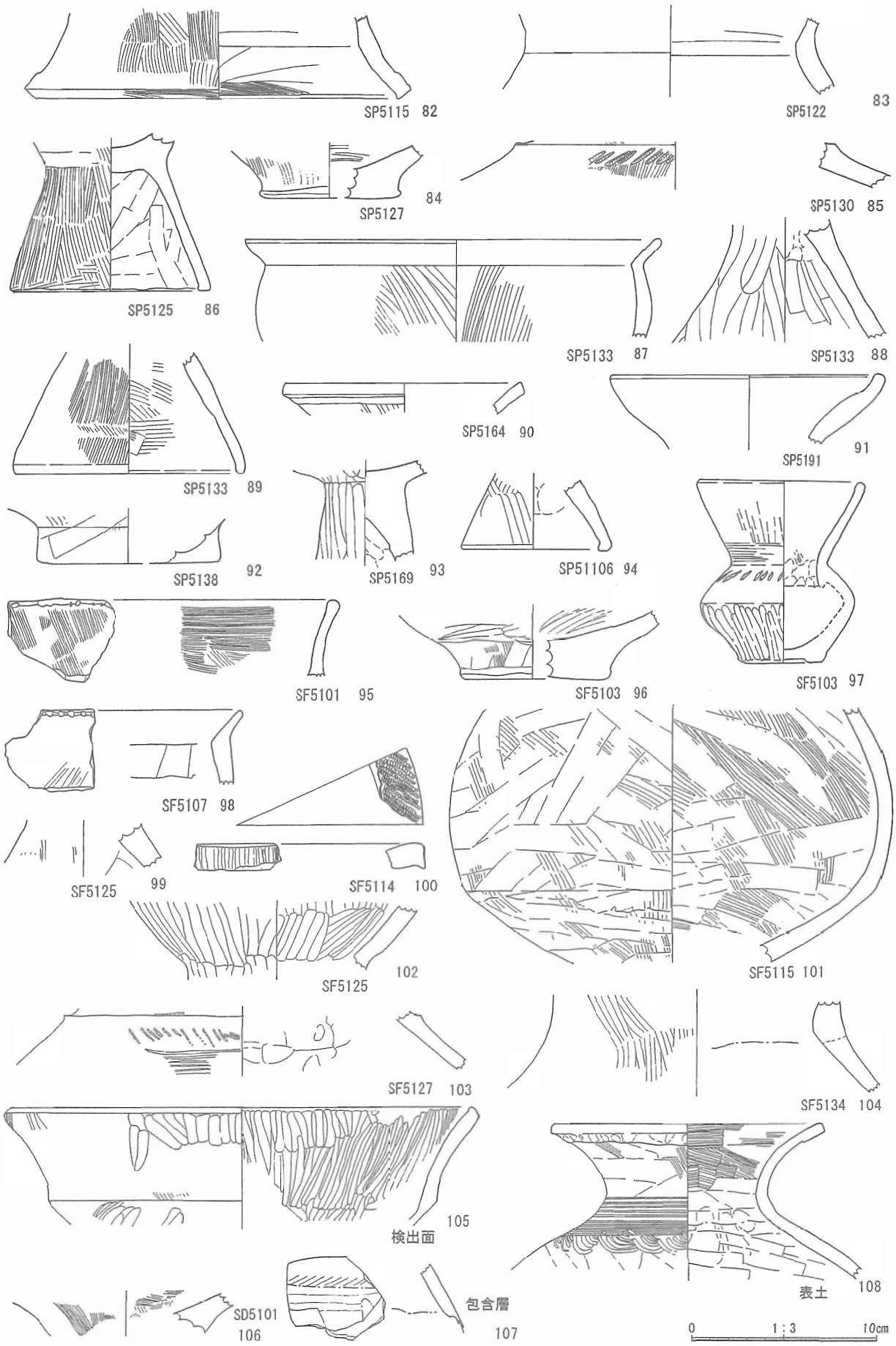
82は台付甕の脚台部である。85は壺胴部片で、刺突文がつく。86は台付甕の脚台部である。87は短く屈曲する口縁部部をもち、球胴状を呈する。88は高坏の脚部で、外面にミガキがつく。91は内湾口縁壺である。89はやや内湾する脚台部である。93は高坏の脚部である。長脚と思われ、縦位のミガキが施される。94は台付甕の脚台部である。端部は内側に括れる。95は括れの弱い台付甕である。96は壺底部片で、厚手である。97は小型の壺である。上げ底で、屈曲は胴中位にくる。上位には刺突文がつく。口縁部は直線的に伸び、端部はやや丸く仕上げる。98は台付甕で、口縁部は短く屈曲する。端部に刻みが入る。100は折返口縁壺で、内面には縄文がつく。101は壺胴部片で、胴下位の屈曲は弱い。102は高坏で、内外面とも縦位、斜位のミガキがみられる。103は直線文の上に刺突文がつく。104は壺頸部片である。105は高坏で、坏部は屈曲し、口縁部は外反する。内外面とも縦位、斜位のミガキが施される。107はパレス壺の胴部片である。刺突文がつき、上部に赤彩が施される。東原遺跡では唯一のパレス壺である。108は折返口縁壺で、低い折返部がつく。直線文下に扇形文が巡る。



第97図　5－1区　SB528実測図



第98図　5－1区　SB525～531出土遺物実測図



第99図　5－1区　土坑・小穴・溝・表土出土遺物実測図

5－2区（第100図）

狭い調査区であるが、竪穴住居は14軒検出されている。ほとんどが切り合い関係をもっており、調査区全域に及ぶ。

SB501・504・505・513・514（第101図　図版29）

調査区北側に位置し、4軒の切り合い関係が認められる。構築順序はSB505→SB504・SB512→SB501である。

SB505は住居の一部を検出したが、全体の形状は不明である。炉跡も一部検出したに過ぎない。SB504は住居の隅丸部分を検出していることから方形をなす形状と推測される。炉跡は検出されており、楕円形で、細長い礫を有するタイプである。礫の表面には熱を受け、赤化している。

時　期　SB504は弥生時代後期後半であろう。

SB504出土遺物（第102図）

109は壺で、直線文がつく。110は壺底部片で、断面は厚い。111は高坏の脚部で、内湾ぎみで、端部は垂直に立ち上がり、横ナデが顕著である。

SB513・514（第103図　図版31）

SB514は方形状を呈する住居と考えられる。中心部より南西にずれた位置で、楕円形の炉跡が検出された。貼床、主柱穴は確認されていない。遺物は弥生土器片が少量出土している。SB514は全体の形状は不明であるが、貼床がみられたことから住居とした。

時　期　弥生時代後期

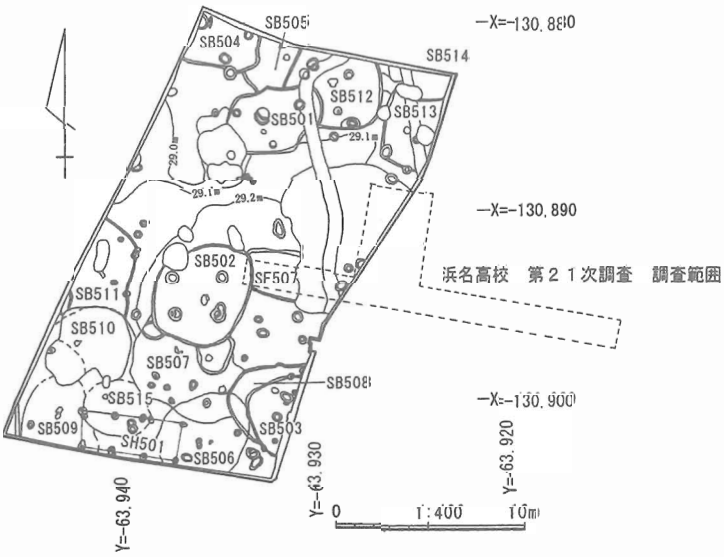
SB513・514出土遺物（第104図）

112は複合口縁壺で、外面には櫛刺突文がつく。113は複合口縁壺である。斜位の櫛刺突文に5本の棒状浮文がつく。114は壺底部片である。115は台付甕で、口縁部は小さく屈曲する。116は台付甕の脚台部である。117は内湾する口縁をもつ鉢である。口縁部から胴部にかけて縦位のミガキが施される。

SB501・SB512（第105図　図版29）

SB501は不整形な楕円形を呈する。長軸5m以上、短軸3.6mで浅い掘り込みを有する。炉跡は土坑により切られているが、楕円形である。遺物は住居内からまんべんなく出土しているが、ほとんどが図化できないほどの細片であった。

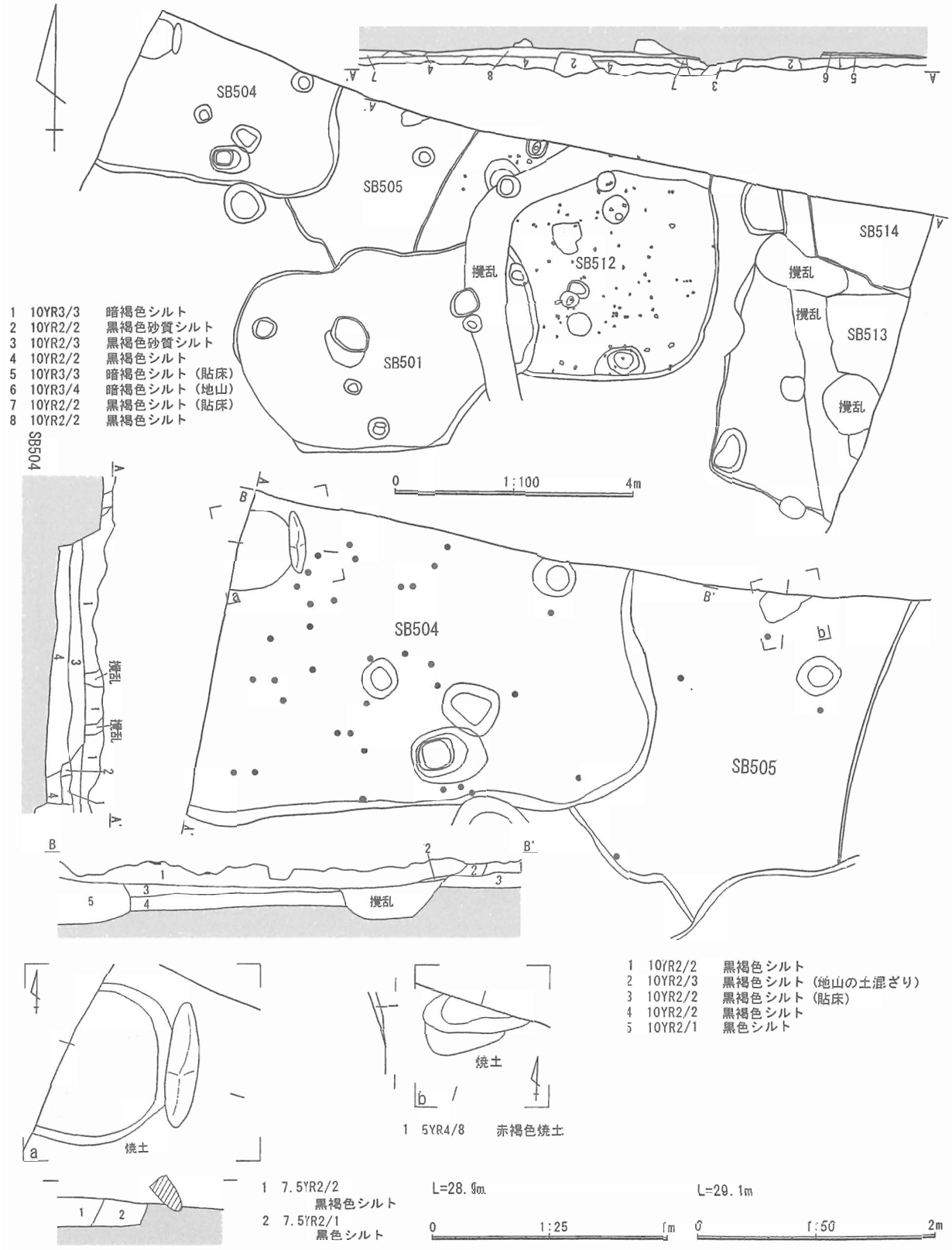
SB512は楕円形を呈する形態である。残存長4.9m以上で、炉跡の位置はほぼ住居の中心部に位置し、切り合い関係が認められた。主柱穴は明確でないが、小穴の間隔が2mピッチであることからSP1・SP2・SP3



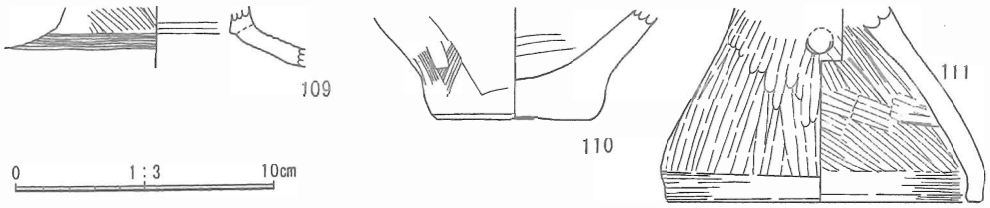
第100図　5－2区　全体図

の３基が主柱穴の可能性がある。

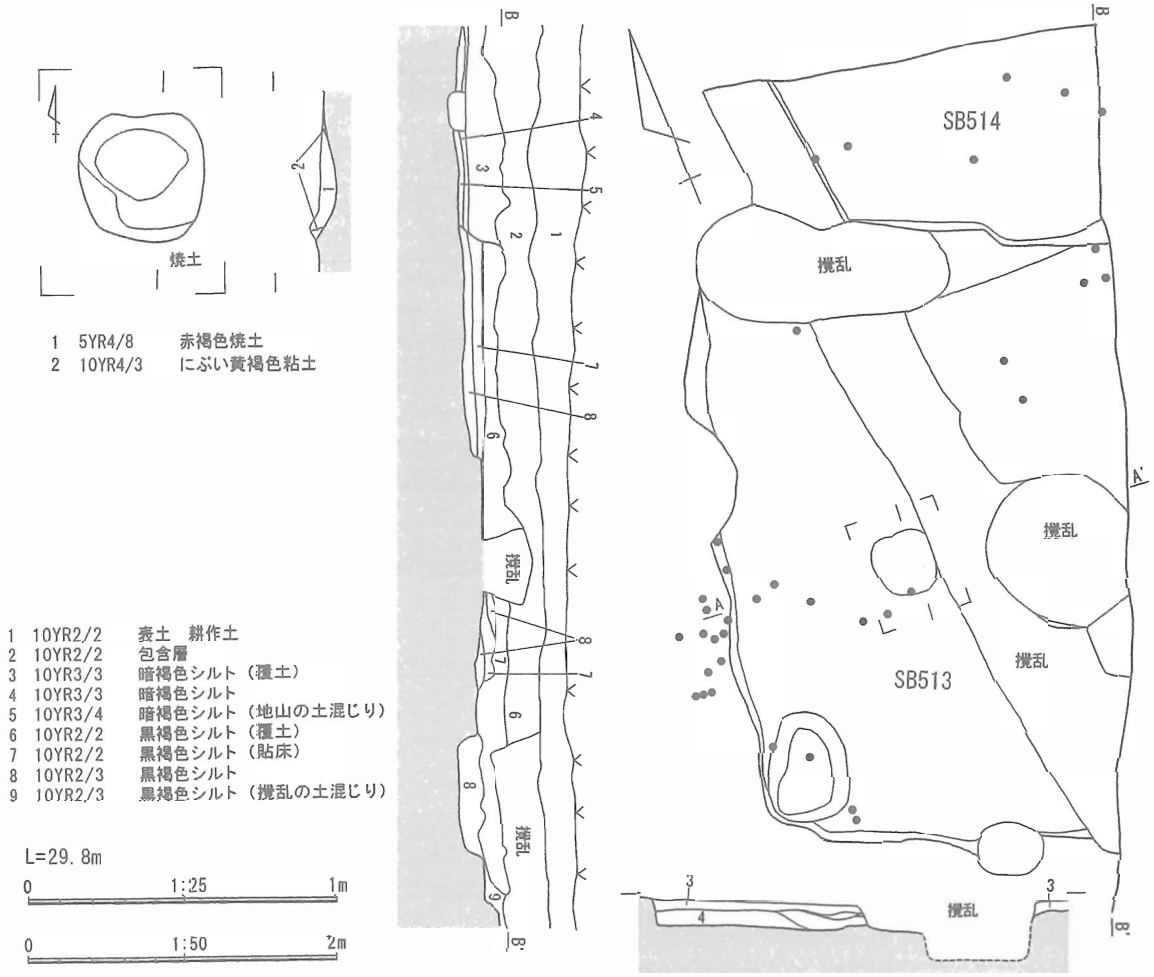
時　期　弥生時代後期後半



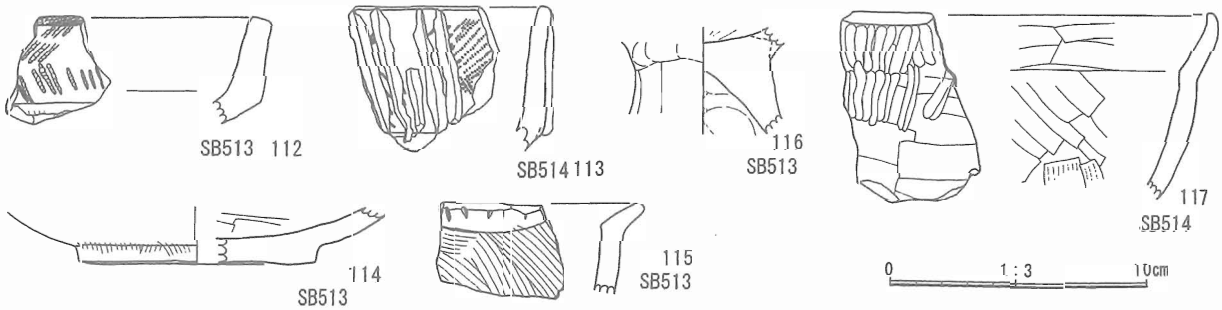
第101図　５－２区　SB501・504・505・512・513・514実測図



第102図　5－2区　SB504出土遺物実測図

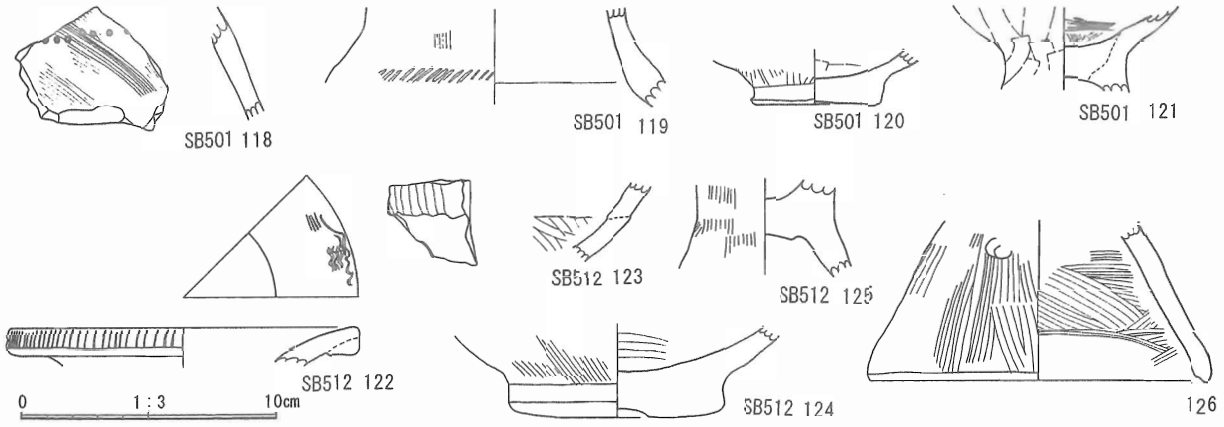


第103図　5－2区　SB513・514実測図



第104図　5－2区　SB513・514出土遺物実測図

第105図　5－2区　SB501・512実測図



第106図　5－2区　SB501・512出土遺物実測図

SB501・SB512出土遺物（第106図）

118は壺胴部片で、竹管状工具による円形刺突文がつく。119は壺で、斜位の刺突文がつく。頸部と胴部の境は肥厚する。120は小型壺の底部片である。121は小型の台付甕である。122は折返口縁壺で、低い折返部がつく。内面には波状文がつく。端部には刺突文が施される。124は壺底部片で、中央部が窪む。125は台付甕の台部である。126は高坏で、スカシ孔をもつ。端部はやや内湾し、内傾面をもつ。

SB502（第107図　図版29）

全体の形状が把握できる住居である。不整形な楕円形を呈し、長軸5.7m、短軸5.1mである。炉跡は中心部よりやや南東に位置しており、楕円形を呈する。貼床は確認できなかったが、主柱穴は4基検出され、柱間間隔は2m・2.5m・2.7mである。主柱穴は径0.6～0.7mと本調査区において大型の部類に入る。SP1・SP2の掘り方内には小礫が含まれており、根石と思われる。遺物出土状況はドットで表記したが、住居の中心部から南側にかけて出土している。

時　期　弥生時代後期後半

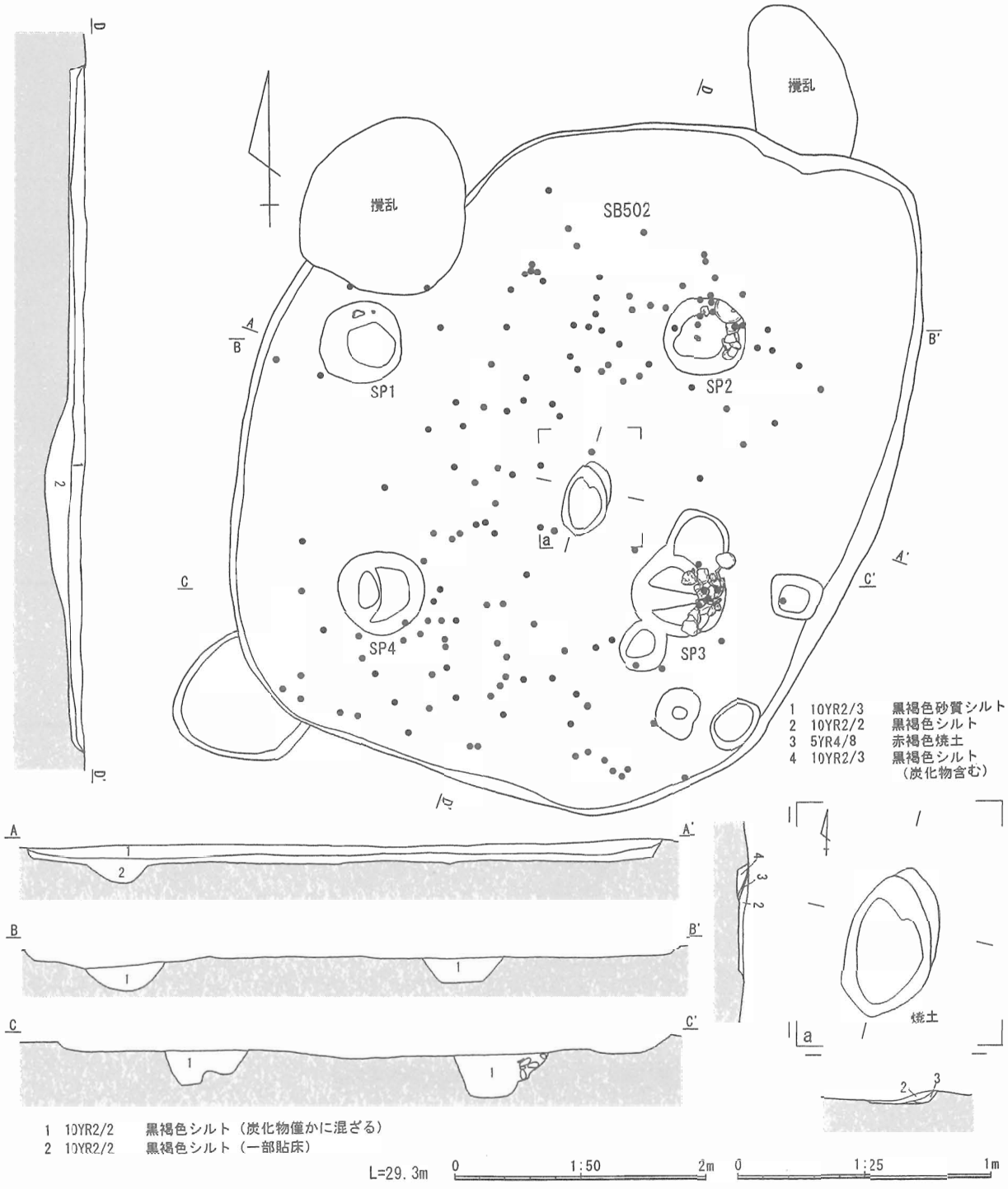
SB502出土遺物（第108図）

127は櫛刺突文が施される。128は口縁部が括れない形態の台付甕である。端部は面取りされ、斜位の刻みが入る。外面は縦ハケ、内面は横ハケが施される。129は台付甕で、胴部最大径が胴上位にくる。口縁部は外方へ短く延びる。頸部と胴部の境はやや肥厚する。

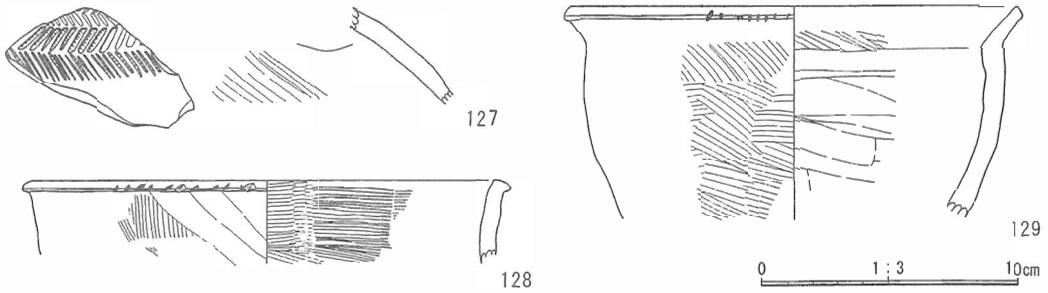
SB503・SB508（第109図　図版29）

2軒切り合っており、構築順序はSB508→SB503である。SB508は長楕円形を呈し、遺物量は少ない。SB503の東半分は調査区外であるため全体の形状は判然としないが、隅丸方形に近い形態と推定される。短軸4.25m以上である。炉跡は中心部より北側に位置しており、長楕円形を呈する。SB506と同様に深い掘り込みを有する。主柱穴は明瞭ではないが、SP1・SP2が想定され、その間隔は2.3mである。

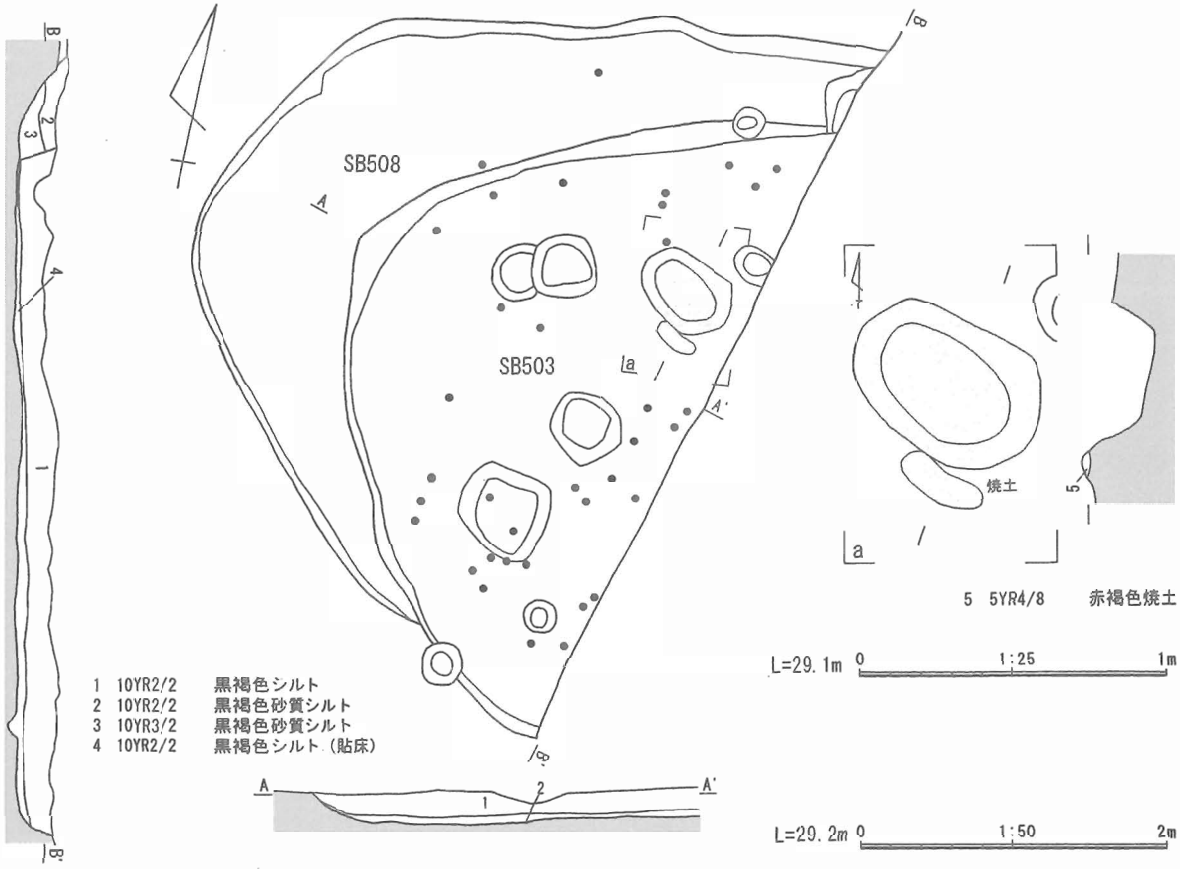
時　期　SB503は弥生時代後期中葉であろう。



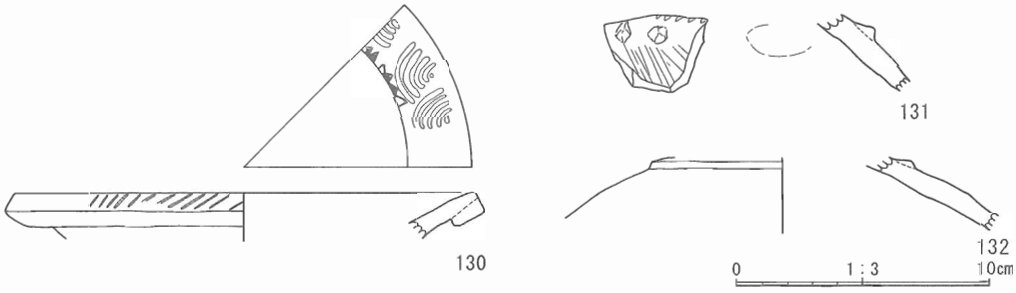
第107図　5－2区　SB502実測図



第108図　5－2区　SB502出土遺物実測図



第109図　5－2区　SB503・508実測図



第110図　5－2区　SB503出土遺物実測図

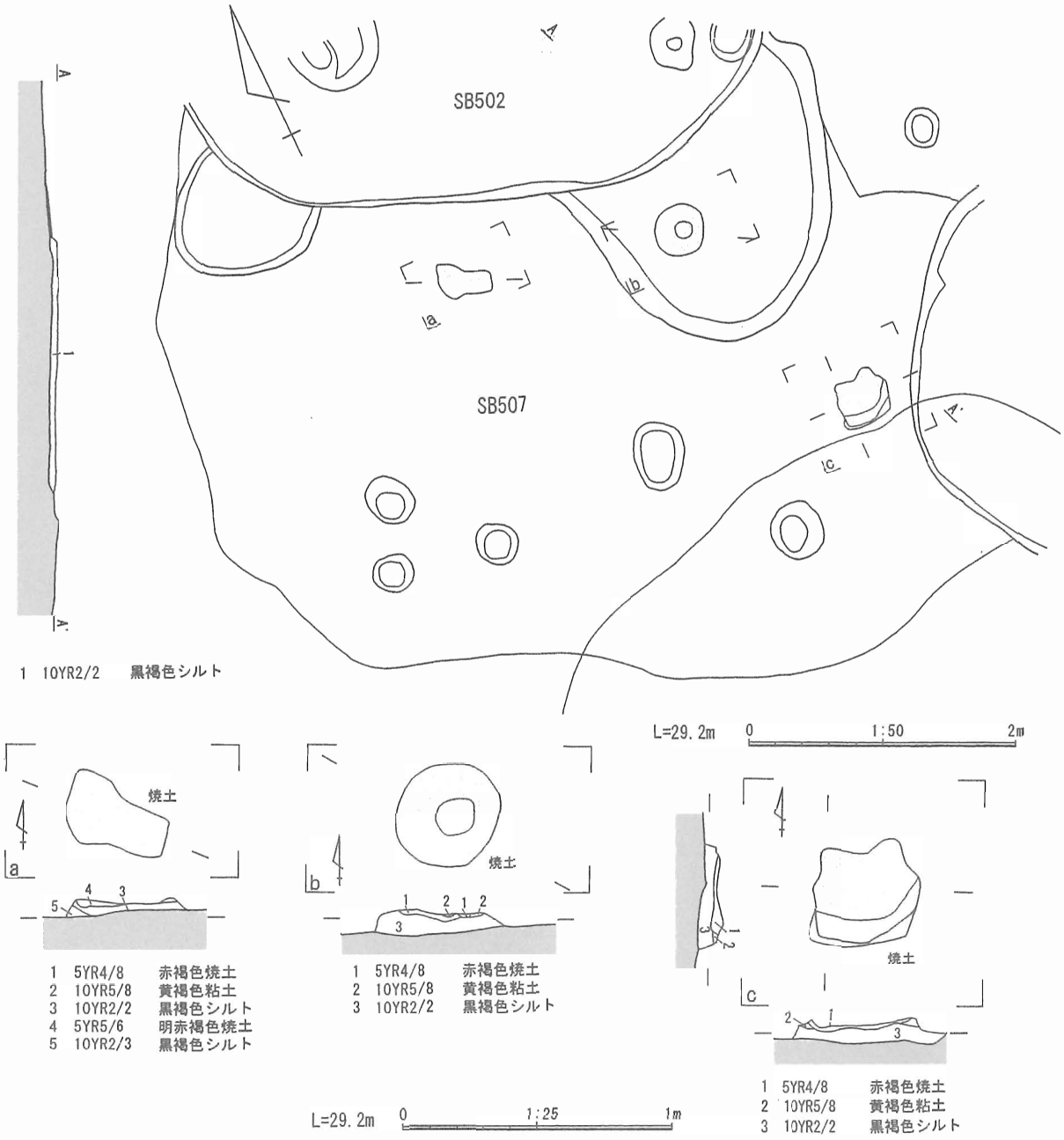
SB502出土遺物（第108図）

127は櫛刺突文が施される。128は口縁部が括れない形態の台付甕である。端部は面取りされ、斜位の刻みが入る。外面は縦ハケ、内面は横ハケが施される。129は台付甕で、胴部最大径が胴上位にくる。口縁部は外方へ短く延びる。頸部と胴部の境はやや肥厚する。

SB503・SB508（第109図　図版29）

2軒切り合っており、構築順序はSB508→SB503である。SB508は長楕円形を呈し、遺物量は少ない。SB503の東半分は調査区外であるため全体の形状は判然としないが、隅丸方形に近い形態と推定される。短軸4.25m以上である。炉跡は中心部より北側に位置しており、長楕円形を呈する。SB506と同様に深い掘り込みを有する。主柱穴は明瞭ではないが、SP1・SP2が想定され、その間隔は2.3mである。

時　期　SB503は弥生時代後期中葉であろう。



第111図　5－2区　SB507実測図

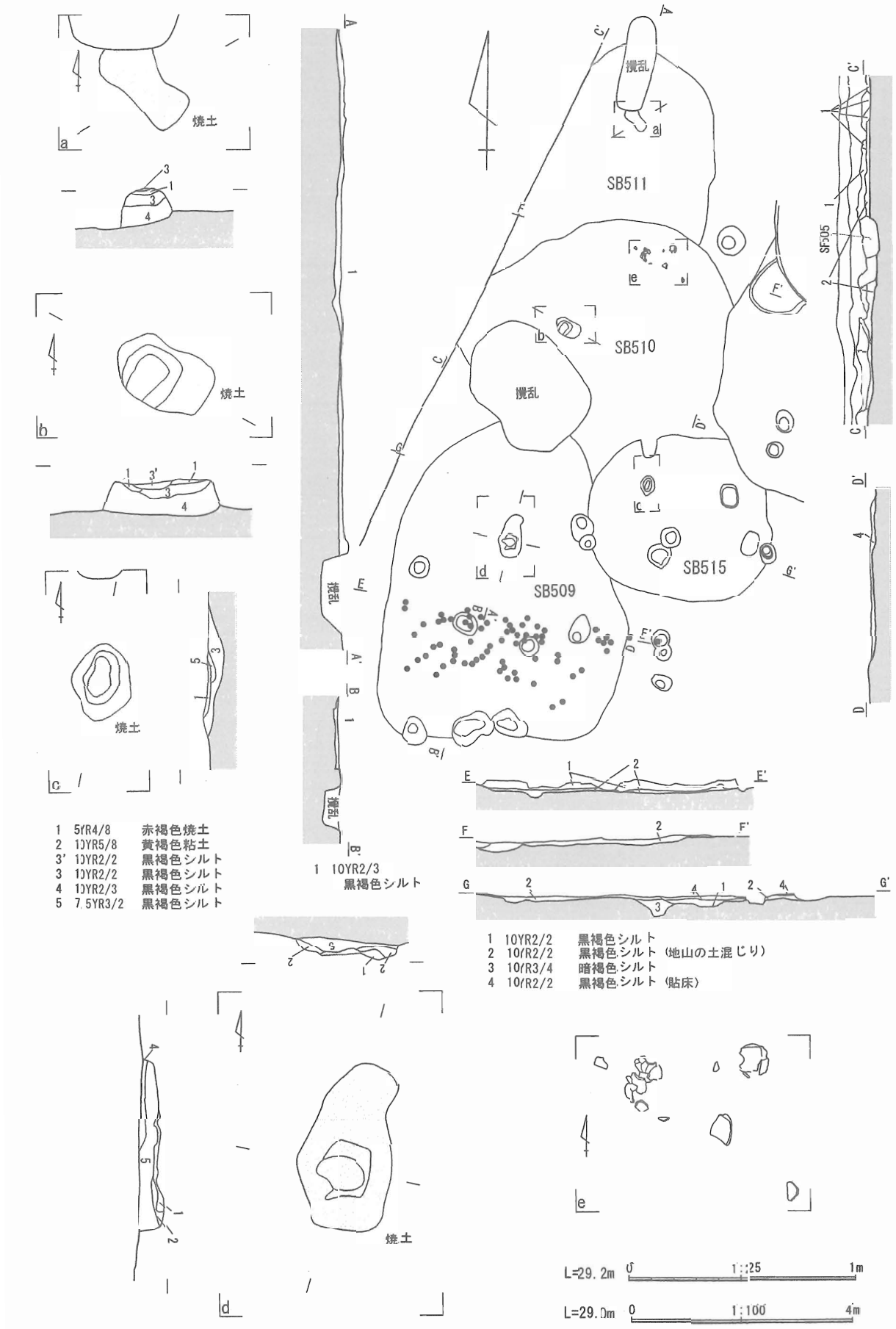
SB503出土遺物（第110図）

130は折り返し口縁壺で、低い折り返し分がつき、内面には波状文と扇形文の組合せである。端部外面には斜位の刺突文がつく。131は浮文がつき、刺突文が施される。132は突帯が巡る。

SB507（第111図　図版30）

楕円形を呈する住居で、長軸6ｍである。炉跡は3基検出されており、ほぼ同一レベルで検出しているが、さらに複数の住居が切り合っている可能性がある。柱穴は明確でないが、SP1－SP2間は3ｍである。

時　期　弥生時代後期



第112図　5－2区　SB509・510・511・515実測図

SB509・510・511・515

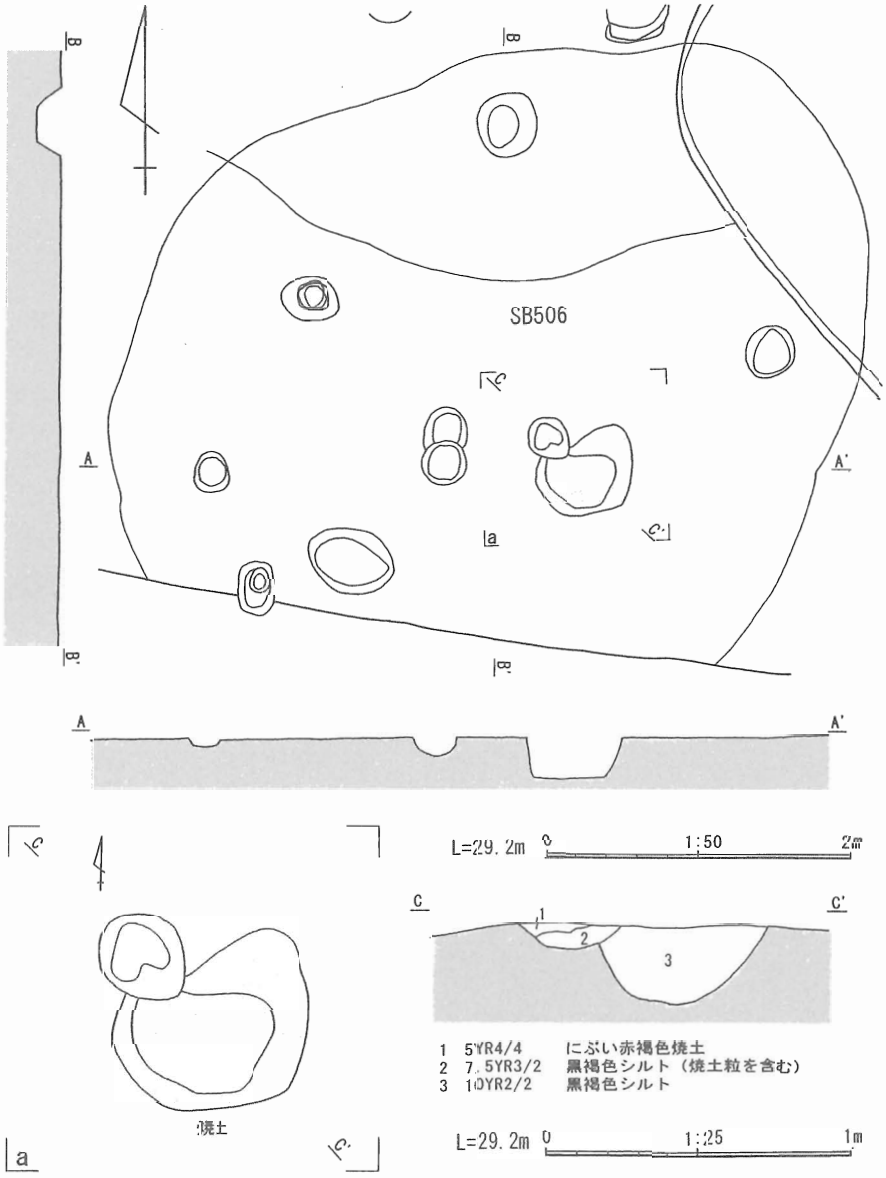
（第112図　図版31）

5軒切りあう住居群でここでは4軒の住居の報告をする。構築順序はSB511→SB510→SB509→SB515である。SB509は長楕円形を呈する住居で長軸5.5m、短軸4.3mである。掘り込みは非常に浅い。炉跡は中央部よりやや北寄りの位置で検出された。遺物はドットで表記したが、南半部より土器片が集中して出土した。

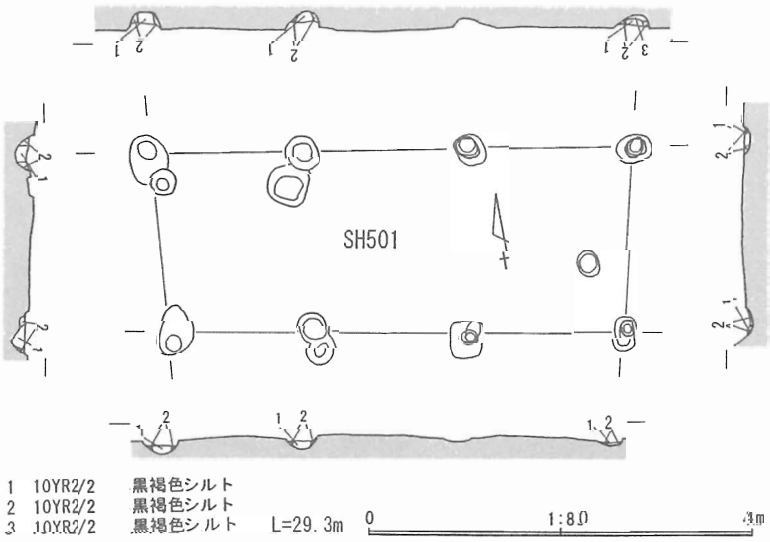
SB515は楕円形を呈する住居で、長軸3.3m、短軸2.9mである。炉跡は中心部より北西にずれた位置で検出された。小穴は検出されているが、主柱穴であるか判然としない。SB510はおそらく楕円形を呈する住居と考えられる。炉跡は北西寄りで検出されており、貼床や主柱穴は検出されなかった。遺物出土状況は北側で出土している。

SB511は長楕円形を呈する形状と考えられる。炉跡は北側寄りで検出されている。貼床、主柱穴は検出されていない。

時　期　弥生時代後期



第113図　5－2区　SB506実測図

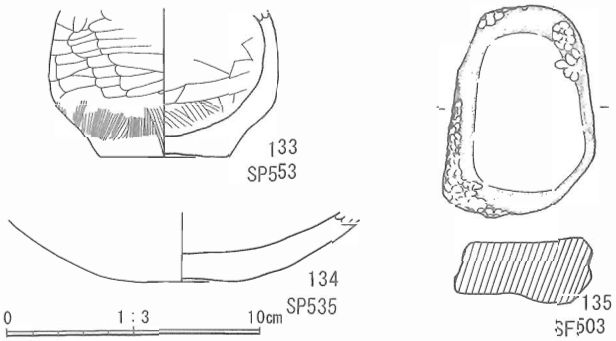


第114図　5－2区　SH501実測図

SB506（第113図）

不整形な楕円形を呈する住居である。掘り込みは浅く、長軸5.3m、短軸4.4mである。炉跡は中心部より南東にすれた位置で検出された。この炉跡は掘り込みが深く、これまで他の住居で検出されている炉跡とは若干様相が異なる。主柱穴はSP1・SP2・SP3が想定され、柱間隔は3m・2mである。

時　期　弥生時代後期



第115図　5－2区　土坑・小穴出土遺物実測図

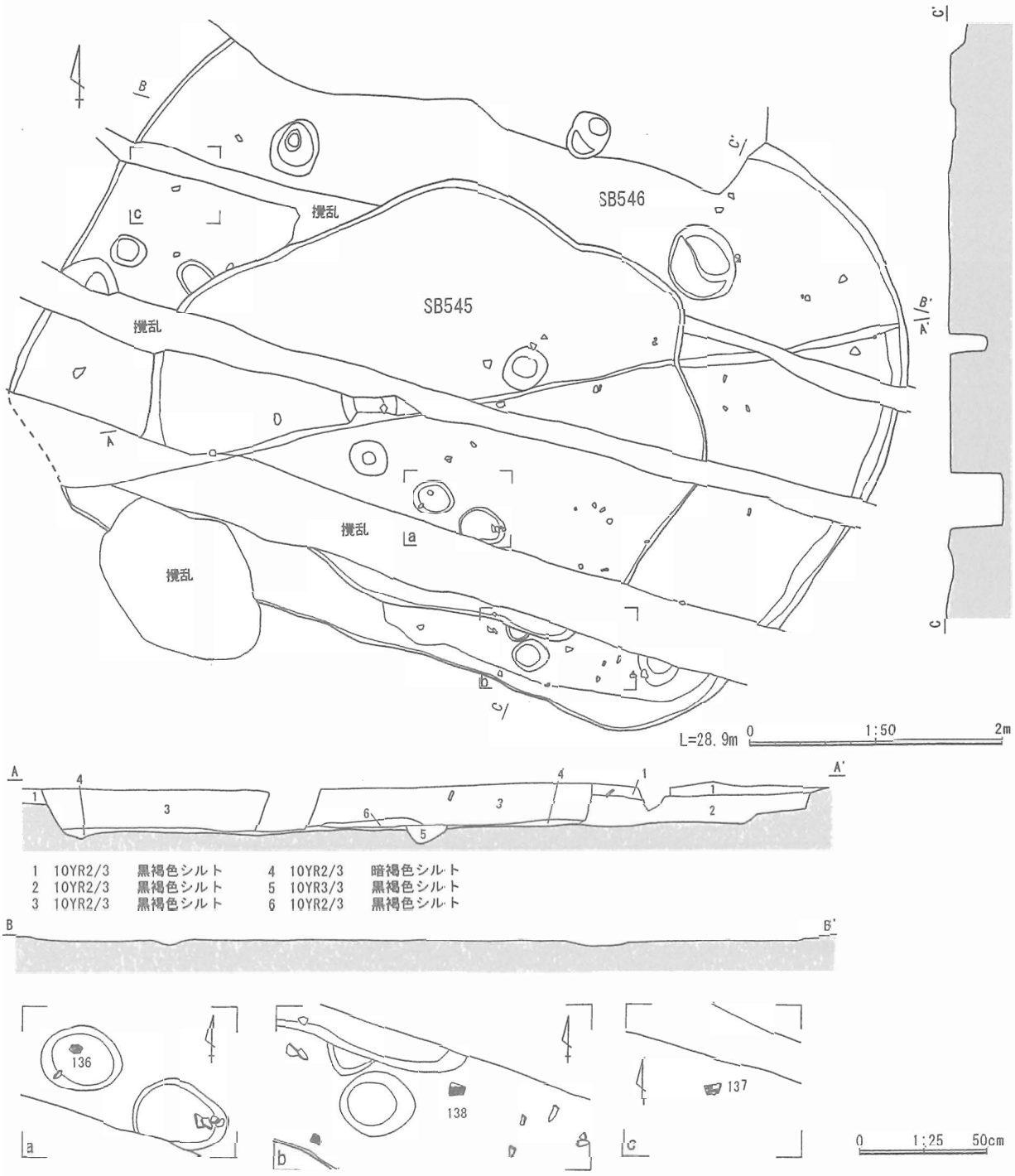
SH501（第114図　図版32）

調査区の南側に位置する。梁行2m・桁行4.7mで、1間×2間の掘立柱建物跡である。柱間間隔は1.6m・1.7mである。土層断面で柱痕の痕跡を確認している。掘り方の平面形は楕円形ややや隅丸方形をなす。時期は不明であるが、層位的にSB527よりは後出であろう。

5－2区小穴・土坑出土遺物（第115図　図版32）

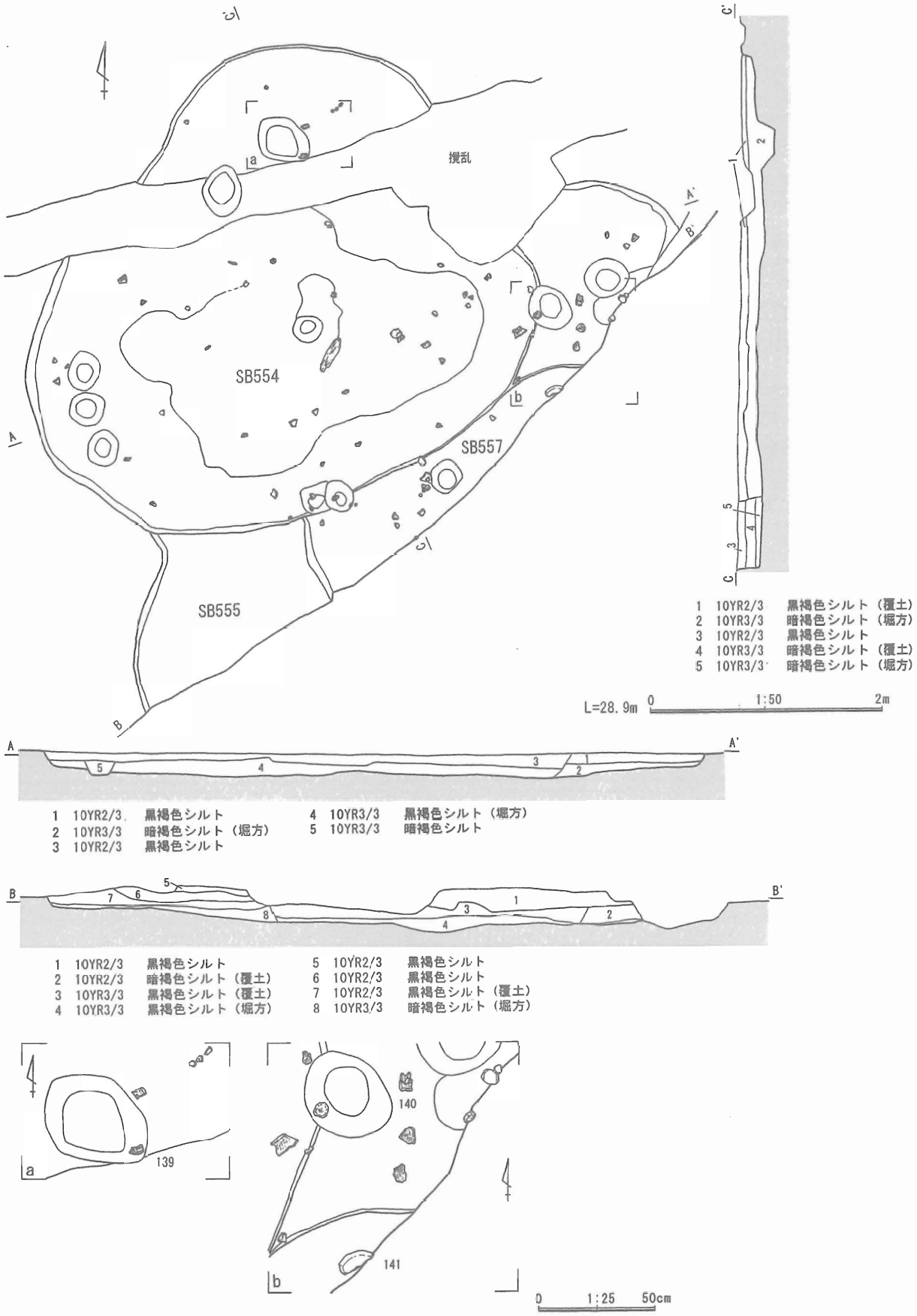
133は小型の壺である。やや上げ底状で、胴下位で屈曲する。横位のミガキが施される。134は底部と胴部の境が不明瞭な壺である。135は砥石で、使用痕は1面で、周縁には敲打痕が観察された。石材は砂岩で、重さ435.8gである。

第116図　5－3・4区　全体図



第117図　5－3・4区　SB545・546実測図

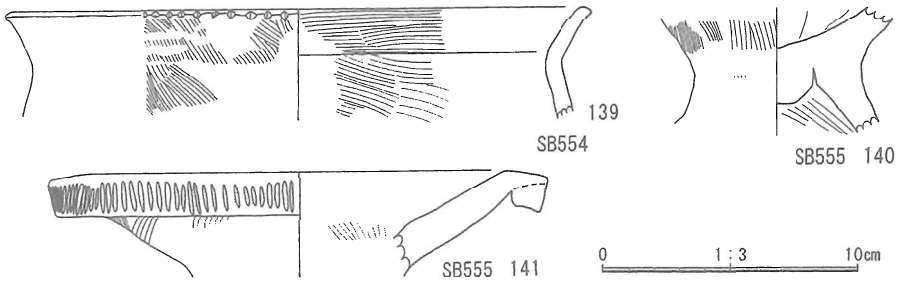
第118図　5－3・4区　SB545・546出土遺物実測図



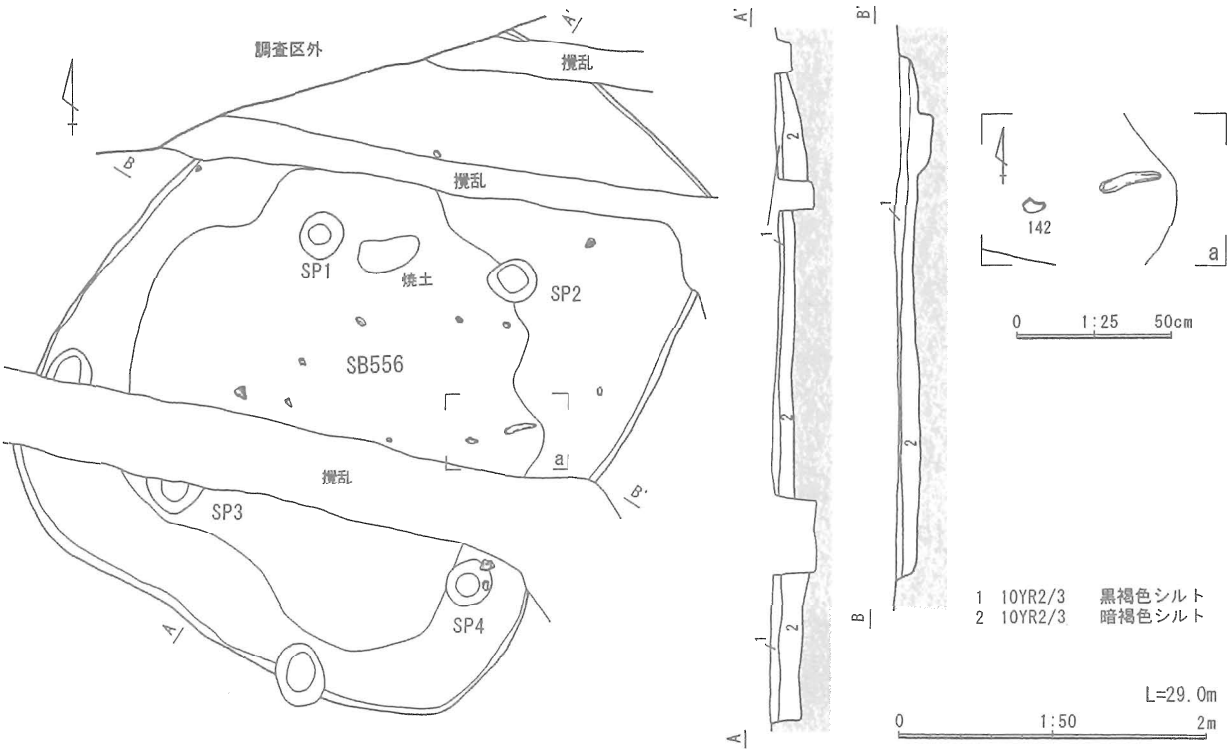
第119図　5－3・4区　SB554・555・557実測図

5－3・4区（第116図）

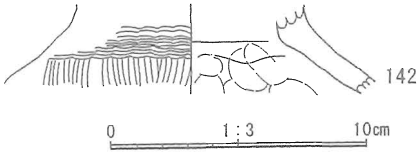
5区の中で最も南に位置し、東に1区、南は6区と接する。5－3・4区の中央部は20次調査で住居を6軒検出している。今回はこの調査区以外の部分の調査を実施した。竪穴住居は軒検出している。単独で検出された例もあるが、概ね複数の切り合い関係をもつ。構築時期は弥生時代後期中葉～後葉でものがほとんどである。



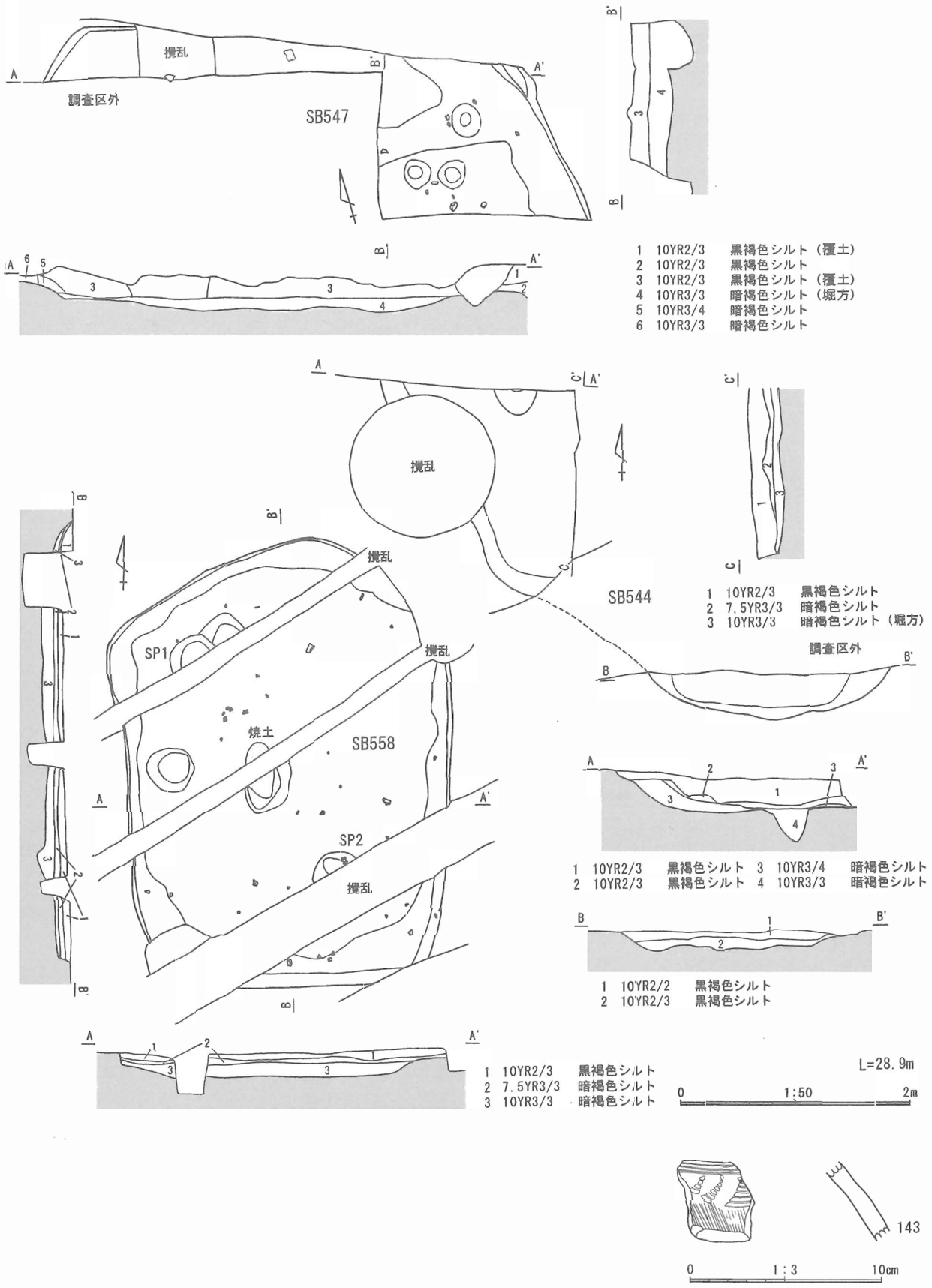
第120図　5－3・4区　SB554・555出土遺物実測図



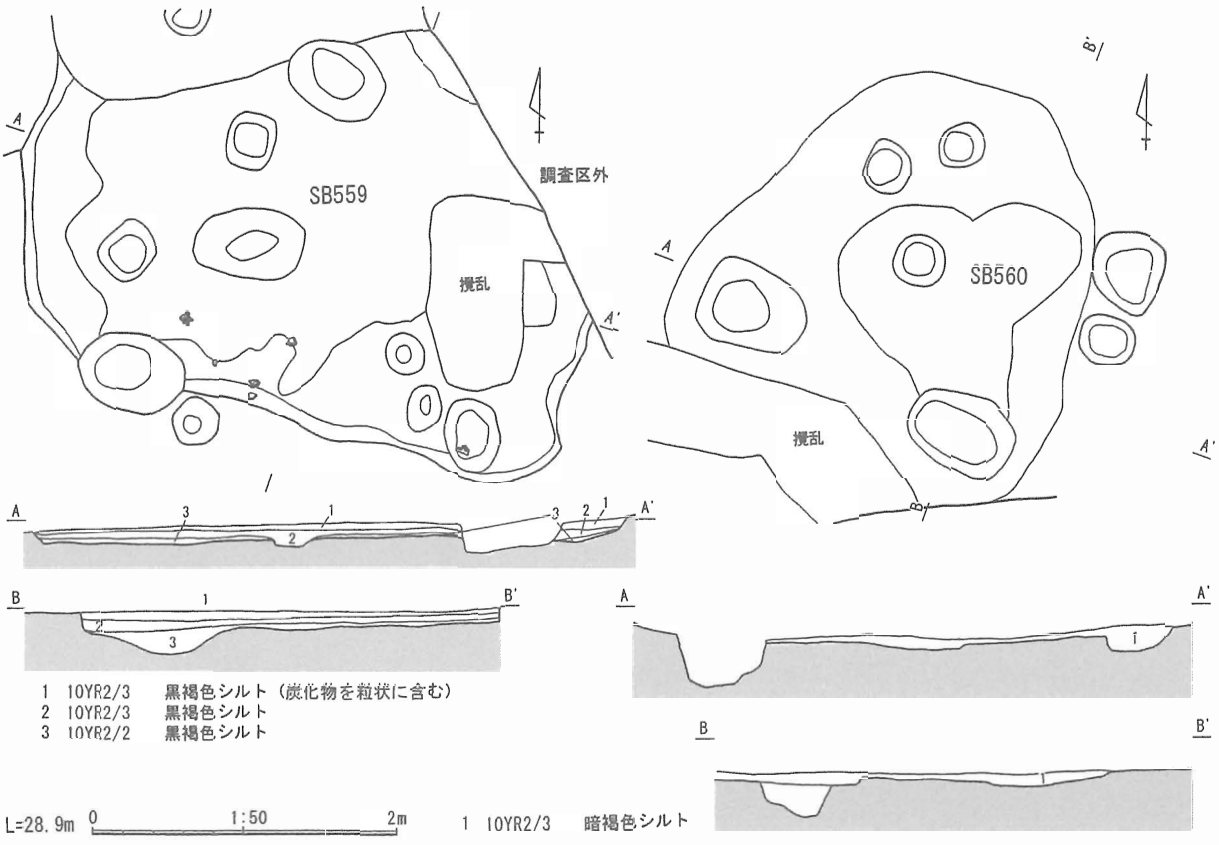
第121図　5－3・4区　SB556実測図



第122図　5－3・4区　SB556出土遺物実測図



第123図　5－3・4区　SB544・547・558実測図



第124図　5－3・4区　SB559・560実測図

SB545・546（第117図　図版37）

調査区のほぼ中央に位置する。2軒の住居の切り合い関係で構築順序はSB546→SB545である。SB545は不整形な楕円形を呈し、長軸4.2m、短軸3.4mである。炉跡、主柱穴の存在は明確ではないが、小穴から弥生土器片が出土している。

時　期　弥生時代後期後半

SB545・546出土遺物（第118図）

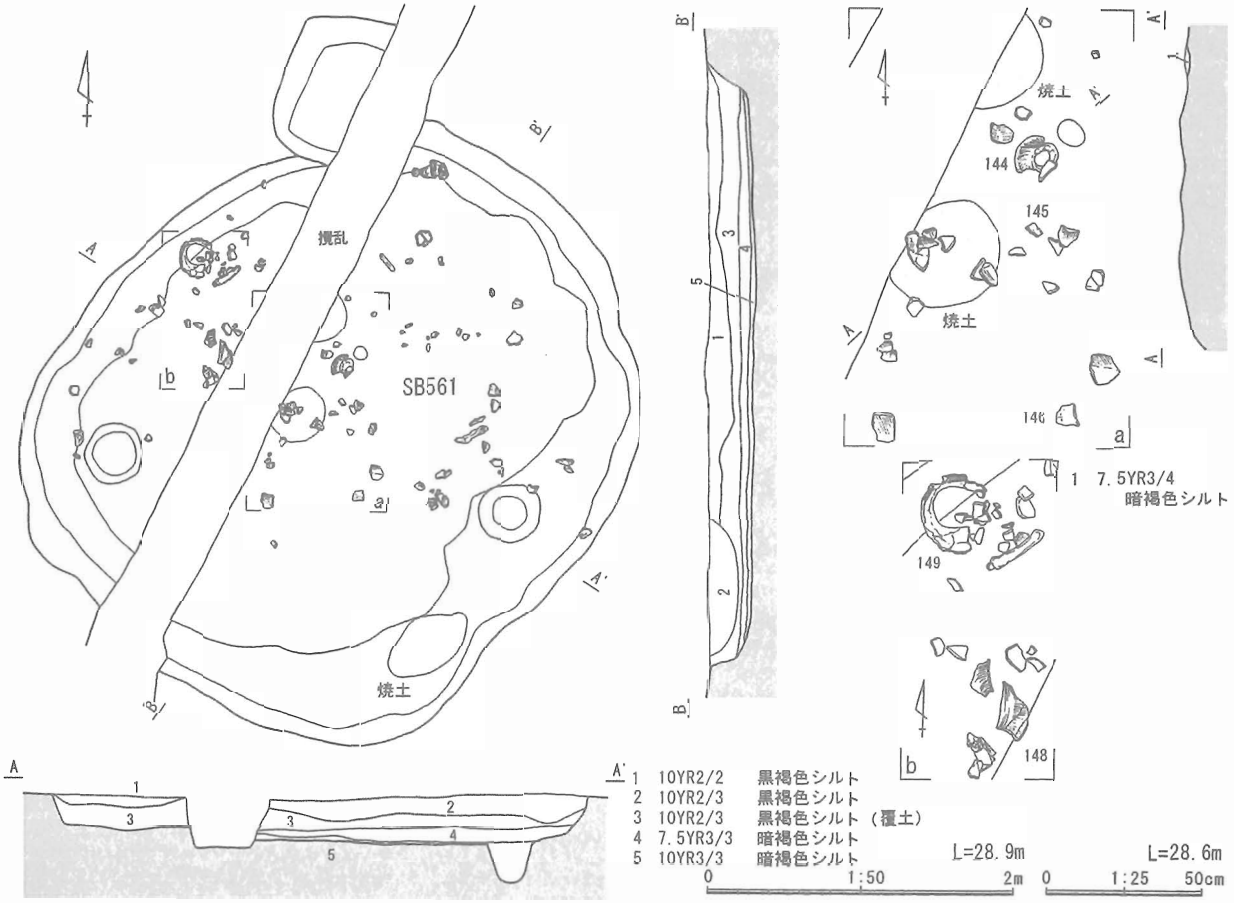
136は頸部に櫛刺突文がつく。137は細い頸部に櫛刺突文がつく。

138は波状文下に扇形文が施される。

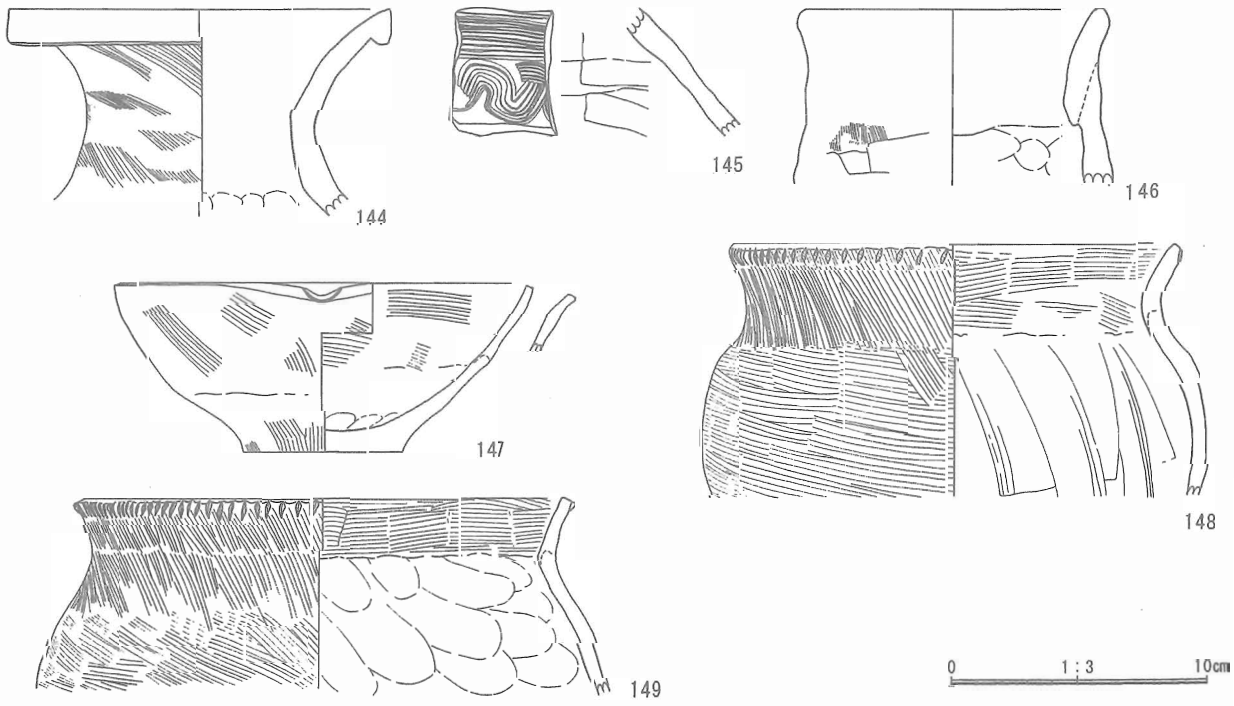
SB554・555・557（第119図　図版33）

1区に近い東側で検出され、4軒の住居が切り合い関係をもつ。構築順序はSB555→SB557→554である。SB554は楕円形を呈する住居で長軸4.5m、短軸3.5mである。貼床は中央部で確認された。炉跡位置は明確ではないが、炉に使用されたと思われる細長い礫が中央部で出土した。主柱穴は不明であるが、小穴が複数検出されている。これ以外の住居は形状が不明であるが、床面から遺物出土し、小穴等が検出されている。

時　期　弥生時代後期後半



第125図　5－3・4区　SB561実測図



第126図　5－3・4区　SB561出土遺物実測図

第127図　5－3・4区　SB562・563実測図

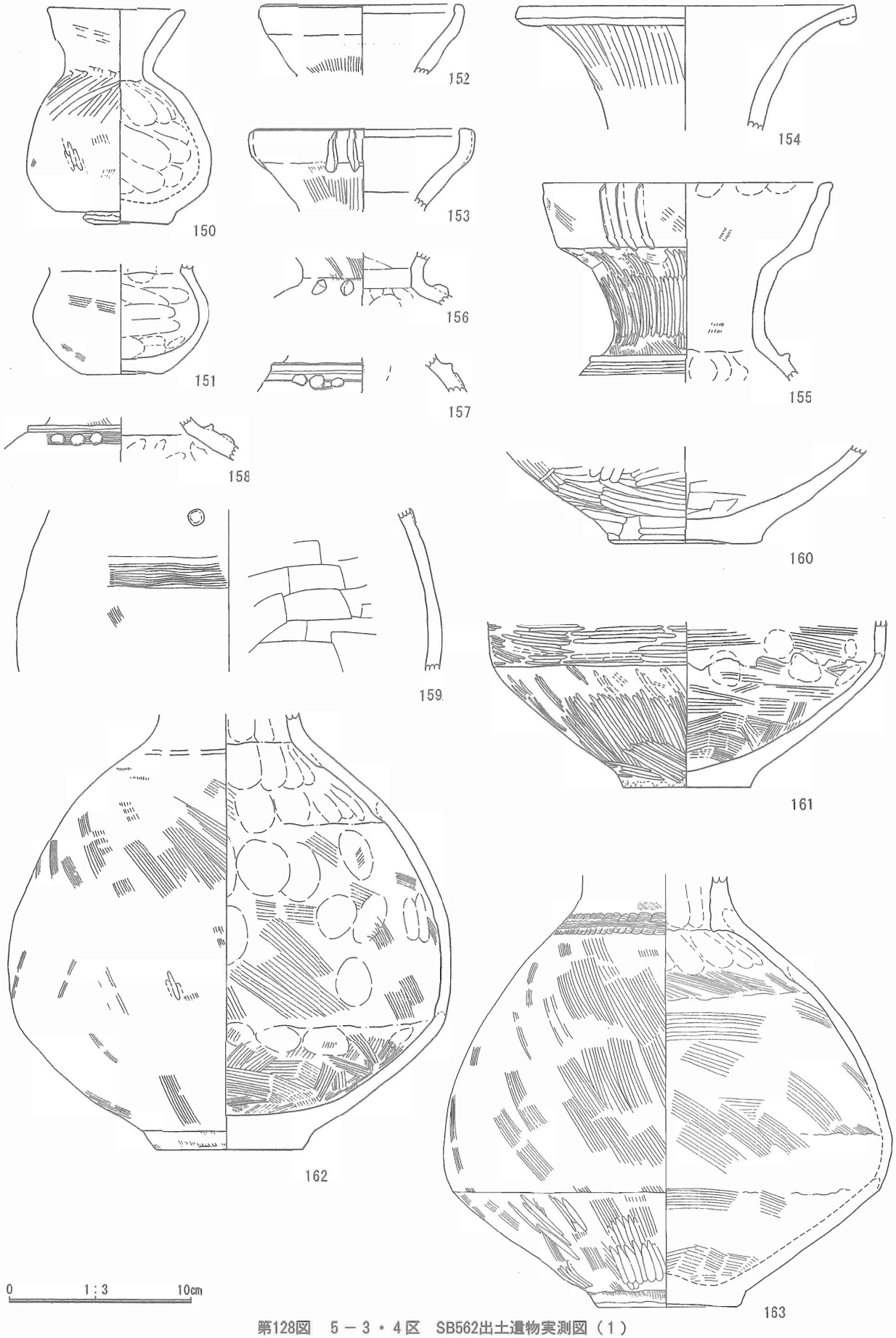
SB554・555・557出土遺物（第120図）

139は台付甕である。口縁部は小さく屈曲する。端部には刻みが入る。140は台付甕の脚台部である。141は折返口縁壺である。口縁部内面はやや下方に下がり、端部は断面方形で垂下する。外面には縦位の刺突文がつく。

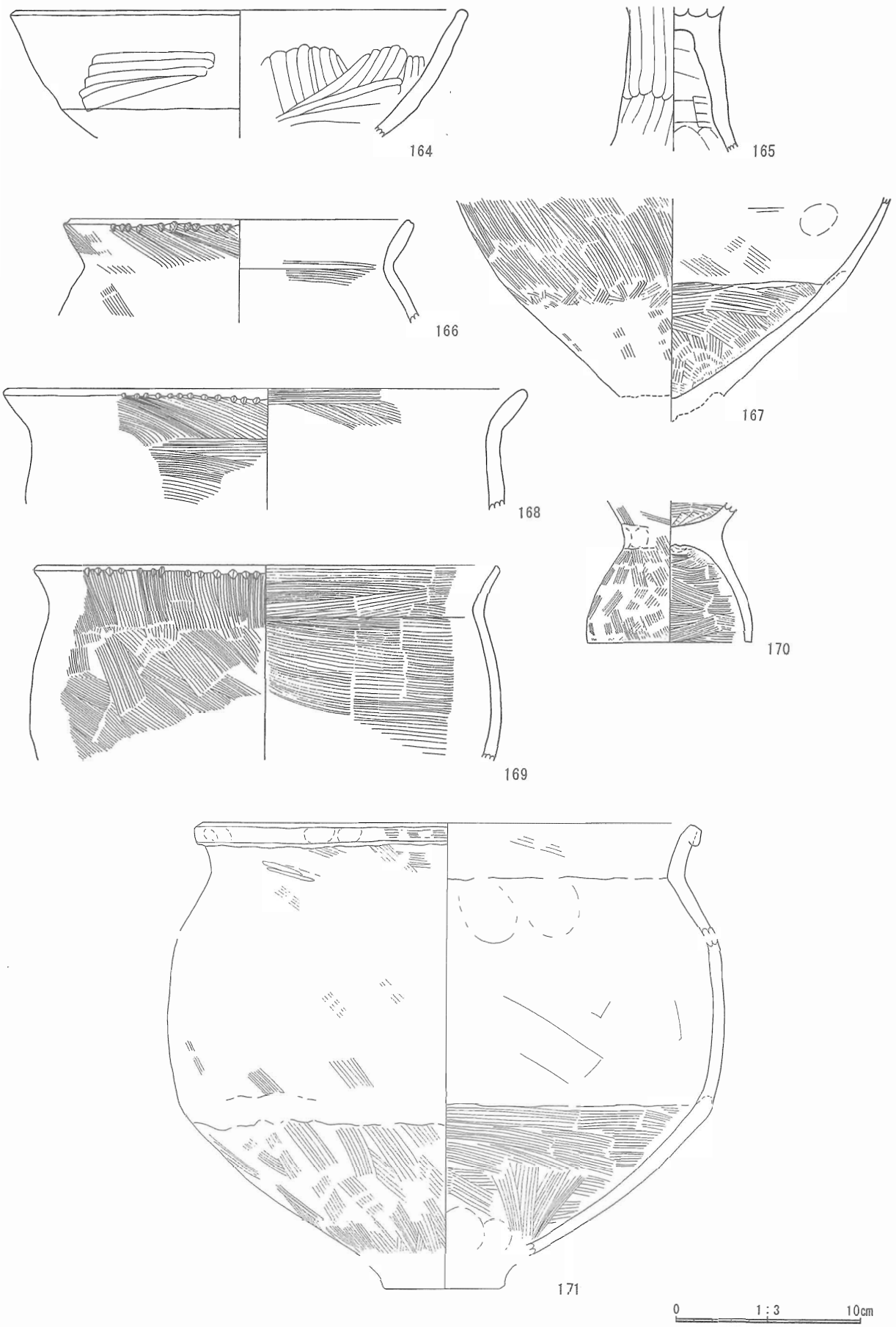
SB556（第121図）

調査区の東側で検出されている。楕円形を呈する竪穴住居で単独に立地している。長軸4.4m、短軸3.5mで、掘り込みは0.25mである。炉跡は検出されていないが、炉に使用されたと考えられる細長い礫が床面から出土している。貼床は中心部でみられた。主柱穴は4基確認され、柱間間隔は2m・1.7mである。

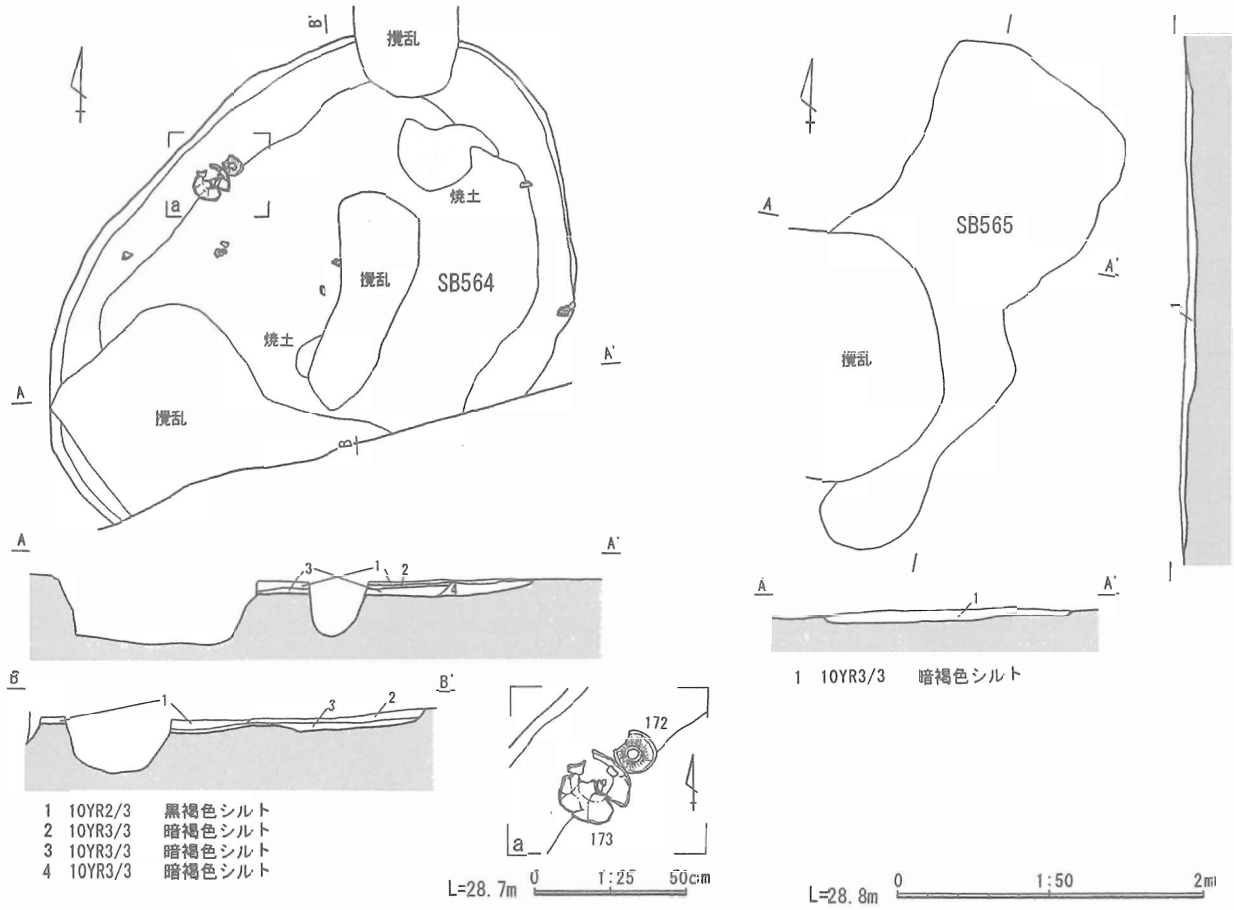
時　期　弥生時代後期



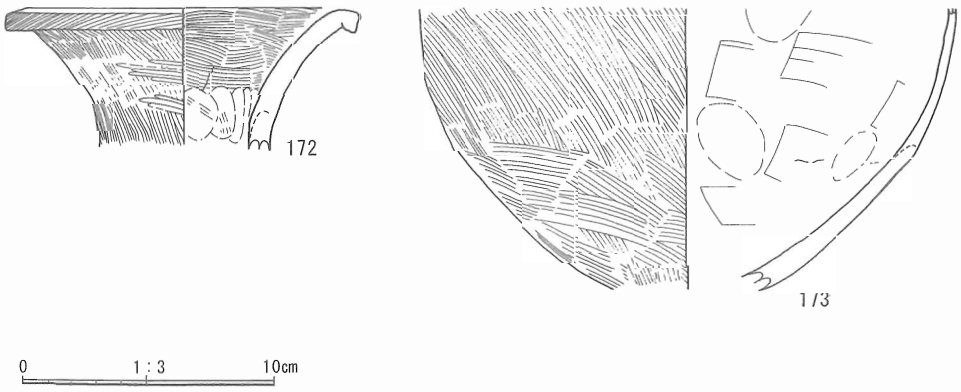
第128図　5－3・4区　SB562出土遺物実測図（1）



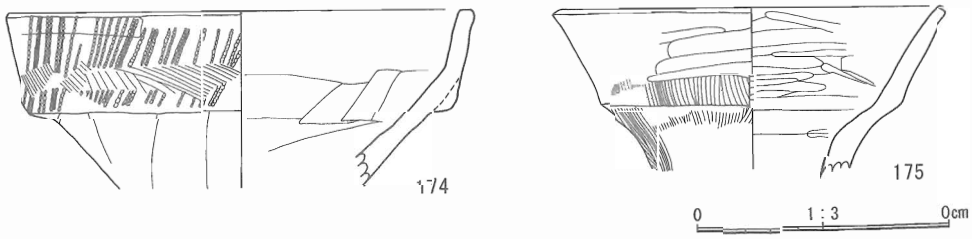
第129図　5－3・4区　SB562出土遺物実測図（2）



第130図　5－3・4区　SB564・565実測図



第131図　5－3・4区　SB564出土遺物実測図



第132図　5－3・4区　SF5303出土遺物実測図

SB556出土遺物（第122図）

142は壺胴部片で、波状文がつく。

SB544・547・548（第123図　図版37）

SB558の北側に位置する。住居の形状はほとんど不明であるが、1982年の20次調査の住居に連続する部分であり、楕円形と推定される。主柱穴の存在は明確にできなかった。

時　期　弥生時代後期後半

SB558（第123図　図版33）

調査区のほぼ中央、SB545・546の東側に隣接する。形状は隅丸長方形で、長軸４ｍ、短軸2.8ｍである。中央部に炉跡が検出された。主柱穴は２基確認された。貼床はほぼ全面に認められた。遺物は少量出土した。時期は弥生時代後期であろう。

SB558出土遺物（第123図）

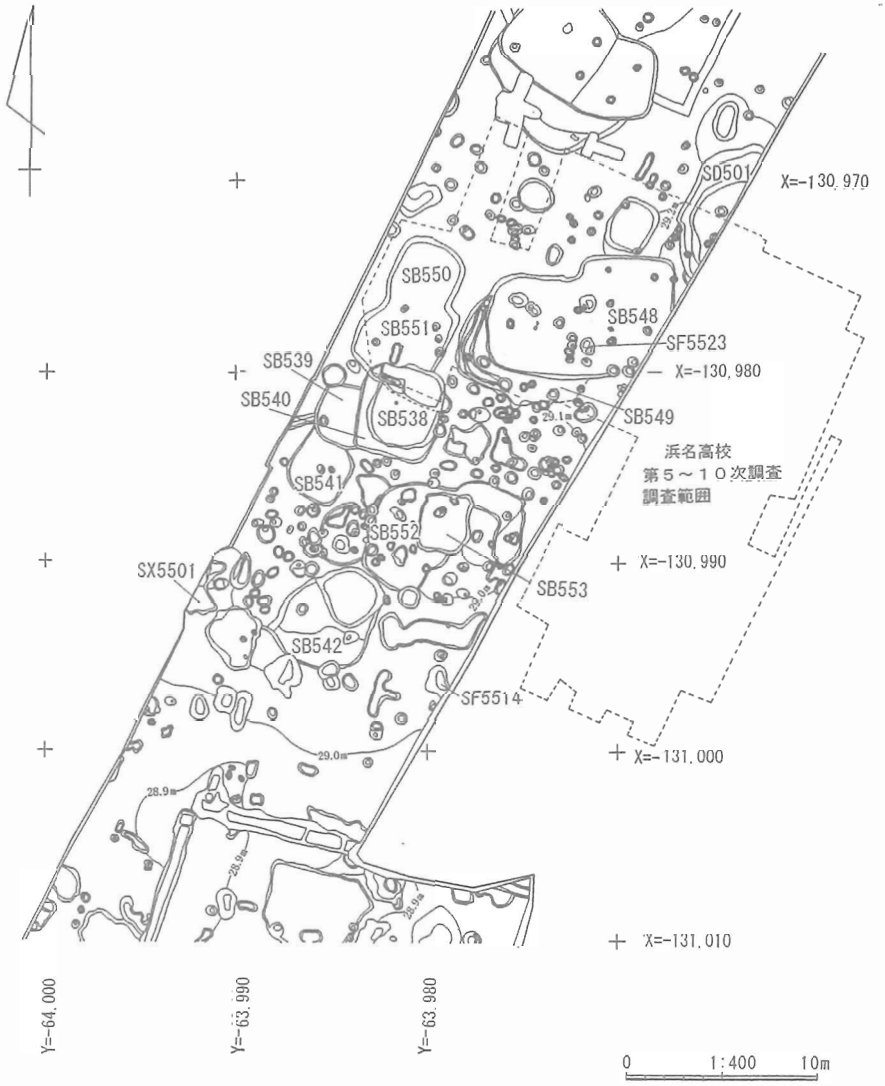
143は直線文間に扇形文が施される。

SB559・560（第124図）

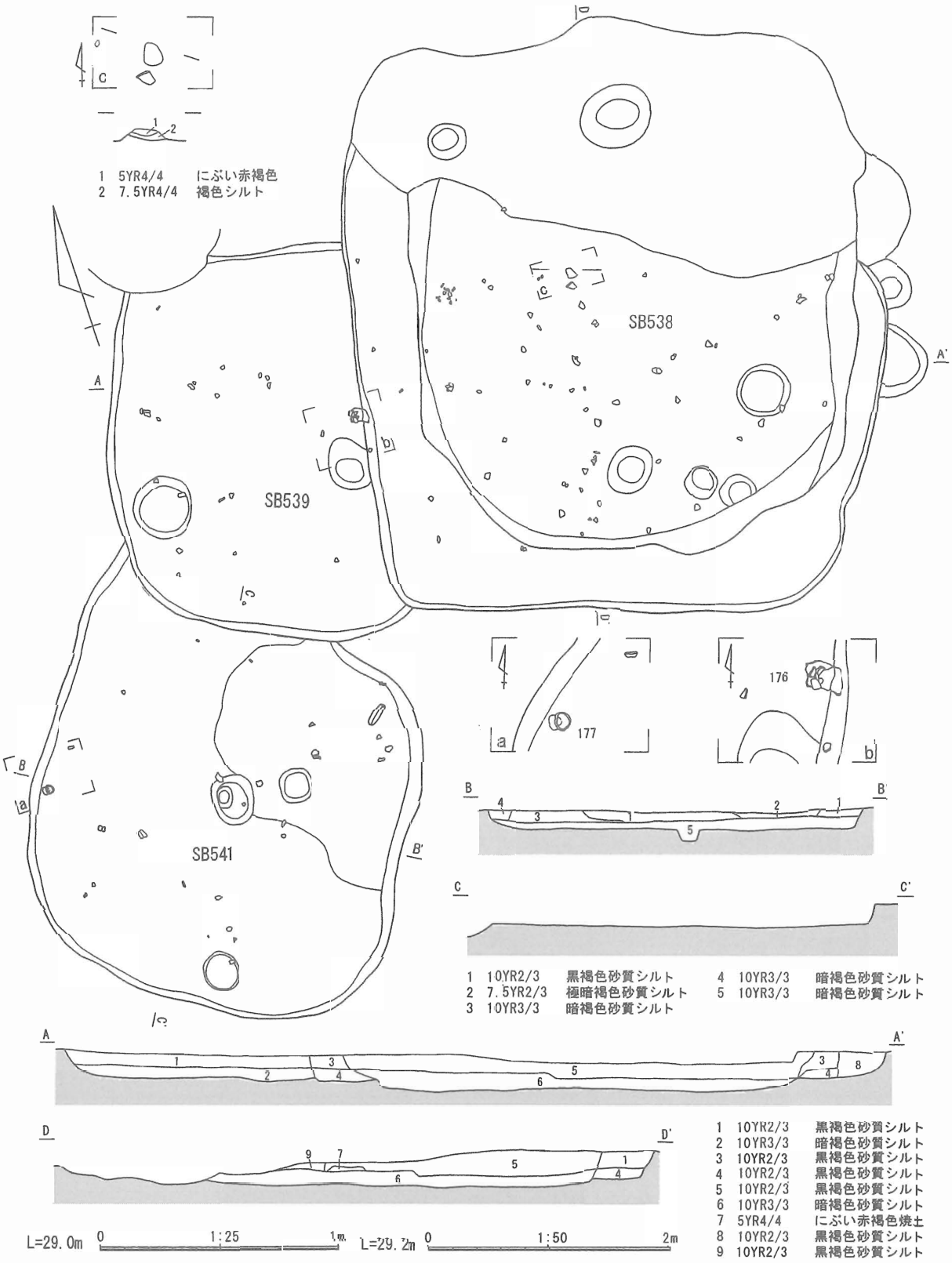
SB560は調査区中央南側で検出された。不整形な楕円形を呈していたが、貼床が認められたことから住居とした。長軸の残存長は2.7ｍで、短軸2.5ｍである。SB559はSB560より東側で検出された。撹乱の影響で全体像は不明であるが、おそらく楕円形を呈すると思われる。貼床がみられたことから住居とした。東西3.9ｍである。炉跡や主柱穴は明確にできなかった。

SB561（第125図　図版34）

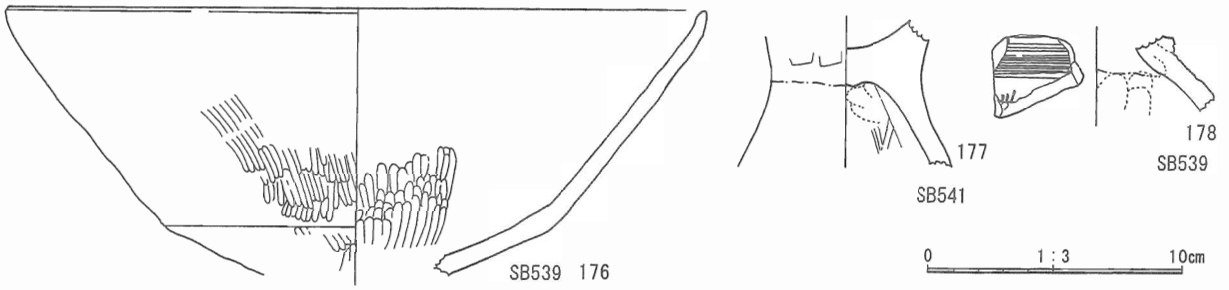
調査区の西側に位置する。楕円形を呈する住居で単独に立地している。長軸４ｍ短軸3.6ｍで焼土の痕跡は３箇所確認された。主柱穴は２箇所確認し、柱間間隔は2.6ｍである。貼床は柱



第133図　５－５区　全体図



第134図　5－5区　SB538～541実測図



第135図　5－5区　SB539・541出土遺物実測図

穴より内側部分で顕著に認められた。住居の北西部分で遺物が比較的多く出土した。

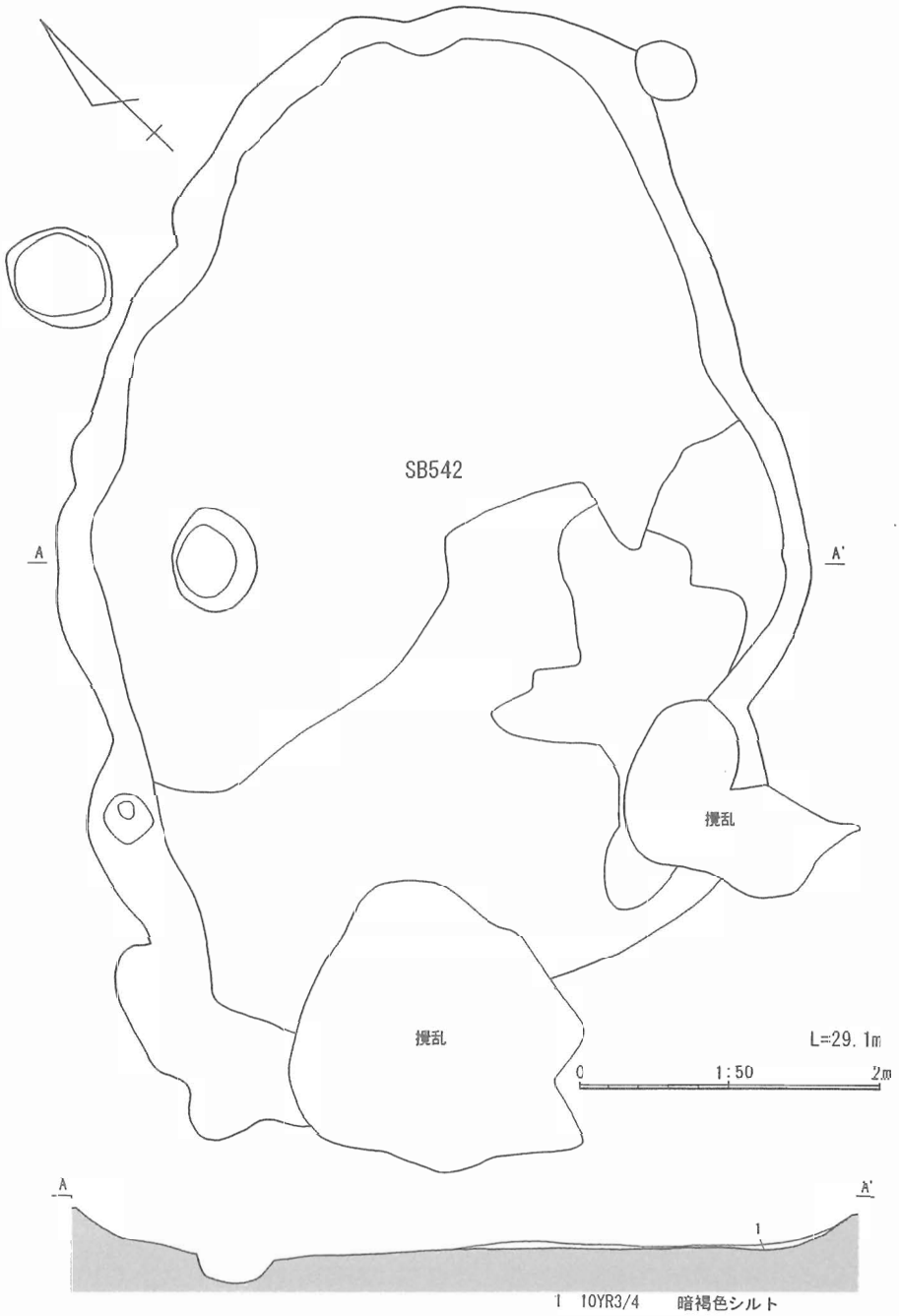
時　期　弥生時代後期中葉

SB561出土遺物（第126図 図版62）

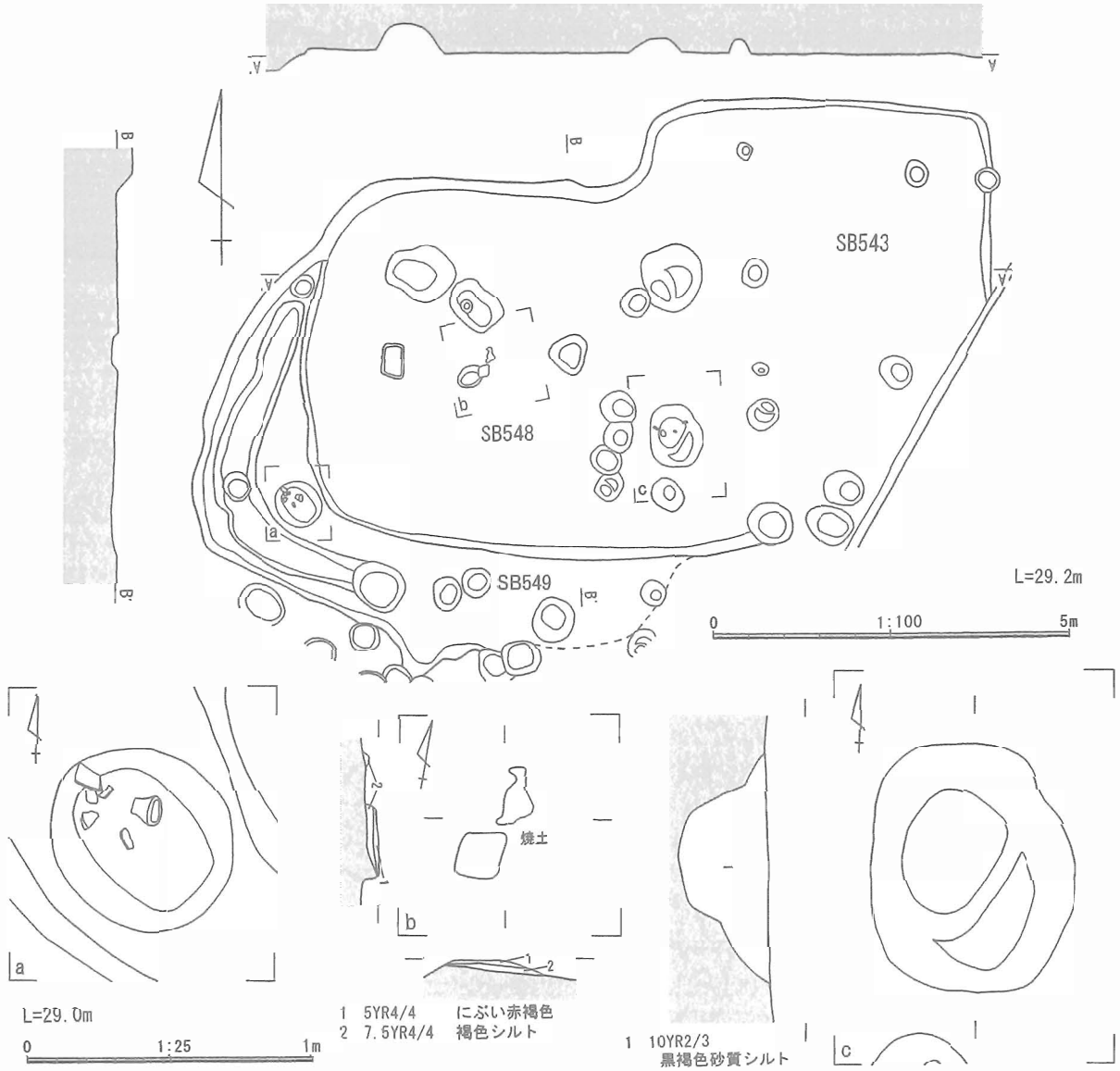
144は折返口縁壺である。端部は断面三角形である。145は直線文下に波状文がつく。146は円筒形を呈する。口縁部はやや外反し、頸部と口縁部には段差がつく。外面はハケ調整が施される。147は無口縁鉢である。口縁部を窪ませ片口をつけている。148は台付甕で、球胴状を呈する。端部には刻みが入る。外面の胴部は横ハケで、内面は下方から板ナデが施される。149は台付甕で、口縁部は外方へ延びる。端部は面取りされ、鋭角的ある。

SB562・563（第127図 図版35）

SB565より南側に位置する。構築順序はSB563→SB562である。SB563は楕円形を呈する住居で、長軸方向を北東に向けている。長軸3ｍ、短軸2.5ｍと小規



第136図　5－5区　SB542実測図



第137図　5－5区　SB543・548・549実測図

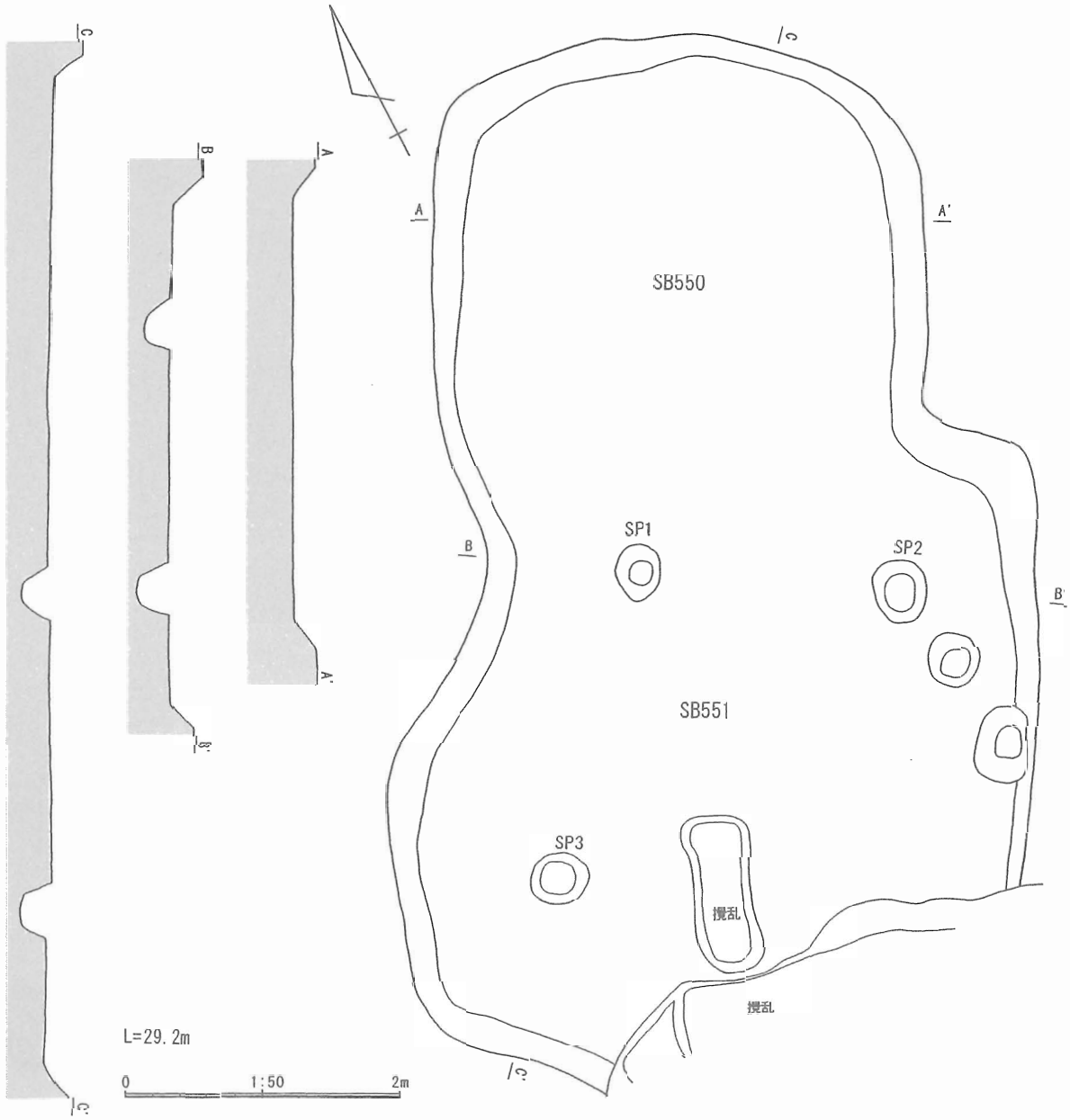
模な住居である。中央部の撹乱により明確でないが、炉跡に使用されたと思われる細長い礫や遺物がみられたことからほぼ中央に位置していたと推測される。主柱穴は明確にできなかった。

SB562は楕円形を呈し、長軸3.7m短軸2.9mである。主柱穴は2箇所確認し、柱間間隔は1.5mである。遺物は貼床面で炭化材とともに比較的多く出土しており、焼失住居と思われる。特に細長い礫が多く出土していることが注意される。炭化材下に焼土範囲が認められており、この部分が炉跡の可能性がある。

時　期　SB562は弥生時代後期中葉であろう。

SB562出土遺物（第128・129図　図版61）

150は小型の単純口縁壺である。口縁部に特別な造作はみられないが、やや肥厚する。胴部は無花果形を呈する。胴部下位にはわずかながら斜位にミガキが観察される。内面は指ナデの痕跡が顕著である。151は小型の壺である。胴部中位で屈曲する。底部はやや上げ底である。152は内湾口縁壺である。端部



第138図　5－5区　SB550・551実測図

は内側に突出する。153は内湾口縁壺である。口縁部は直立し、やや内湾する。2本1単位の棒状浮文がつく。154は折返口縁壺である。端部は低い折り返し部がつく。155は複合口縁壺である。3本1単位の棒状浮文がつく。頸部には縦位のミガキが施される。156・157・158は壺胴部片で、2個ないし3個で1単位の円形浮文がつく。

159は壺胴部片で、扁平な胴部で直線文がつく。その上部には円形浮文がつく。160は壺底部片で横位のミガキが施される。やや上げ底である。161は壺である。胴下部で屈曲し、斜位のミガキ、屈曲部より上位には横方向のミガキが施される。162は胴下位で緩やかに屈曲し、無花果形を呈する。163は細い頸部をもち、胴下位でゆるやかに屈曲する。頸部には波状文が巡る。下部には斜位のミガキが施される。内面の頸部と胴部の段差は明瞭である。

第139図　5－5区　SB552・553実測図

164は高坏である。やや浅い坏部で、屈曲は弱い。外面は横位、内面は斜位のミガキが施される。165は高坏の脚部である。高い脚部で、端部に向かいやや外反傾向がある。縦位のミガキが施される。スカシ孔はもたない。

166～170は台付甕である。168は長胴傾向のある台付甕で、内面下部にススが付着する。166は台付甕で、口縁部は厚く、端部は刻みが入る。169は台付甕で、やや球胴状を呈する。端部は面取りされ、刻みが入る。外面は斜めハケ、内面は横ハケが施される。

171は鉢である。口縁部は短く屈曲し、折り返し部がつく。胴部下位でゆるやかに屈曲し、接合痕が観察される。胴部は摩滅しており、頸部にはわずかではあるが、斜位のミガキがみられた。

SB564・565（第130図　図版36）

SB564長軸４ｍ、短軸2.8ｍで楕円形を呈する。焼土は住居の北東方向で検出されている。主柱穴は明確ではないが、貼床は認められた。遺物は住居の北西の壁際から出土した。

SB565はSB653より北側で検出された。住居の掘り方はなく、貼床のみの検出であった。

SB546は隅丸方形を呈する住居で、長軸6.5ｍ、短軸4.7ｍを測る。主柱穴は３基確認し、柱間間隔は3.4ｍ・3.5ｍである。炉跡は検出されなかった。

時　期　弥生時代後期後半

SB564出土遺物（第131図）

172は折返口縁壺である。173は台付甕である。やや長胴を呈する形態である。

SF5303（第132図）

174・175は複合口縁壺である。複合部には櫛刺突文が施される。175の口縁部はやや外反する。

５－５区（第133図）

SB538・539・541・540（第134図　図版38）

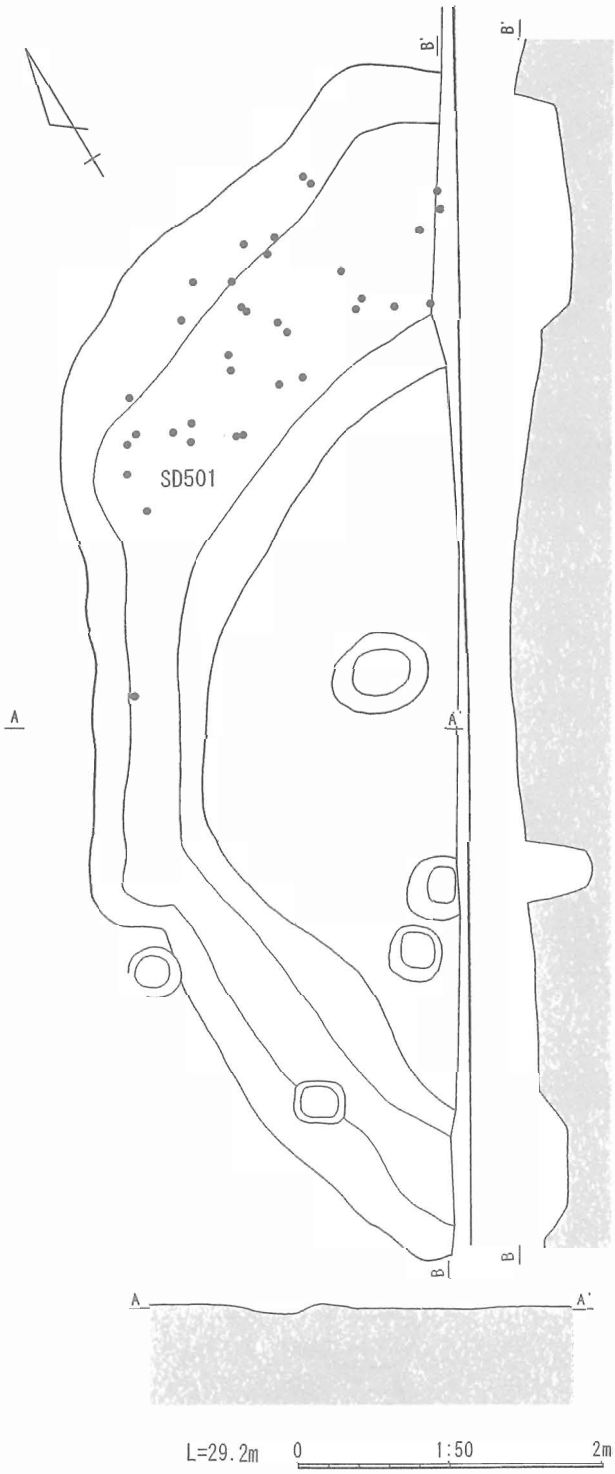
４軒の切り合い関係をもっており、構築順序はSB541→SB539→SB540→SB538である。SB541は隅丸方形で長軸3.3ｍ、短軸3.2ｍである。住居の北東部の一部で貼床が認められた。小穴は３基確認しているが、主柱穴、炉跡であるは不明である。遺物は少量出土しており、北東隅では炉に使用したと思われる細長い礫が出土している。

SB539は隅丸方形をなす住居で、南北軸3.3ｍである。貼床はみとめられず、位置関係から主柱穴と思われる土坑が認められる。SB540は隅丸方形をなす住居で、東西4.4ｍである。この住居群のなかでは最も大きい。主柱穴、貼床はみられなかった。遺物量は少ない。SB538はやや不整形な掘り込みをもつ住居で楕円形を呈すると思われる。東西軸3.6ｍである。炉跡は中心部よりやや北西寄りで検出され、残存状態は良好ではない。遺物は土器片がまんべんなく出土している。

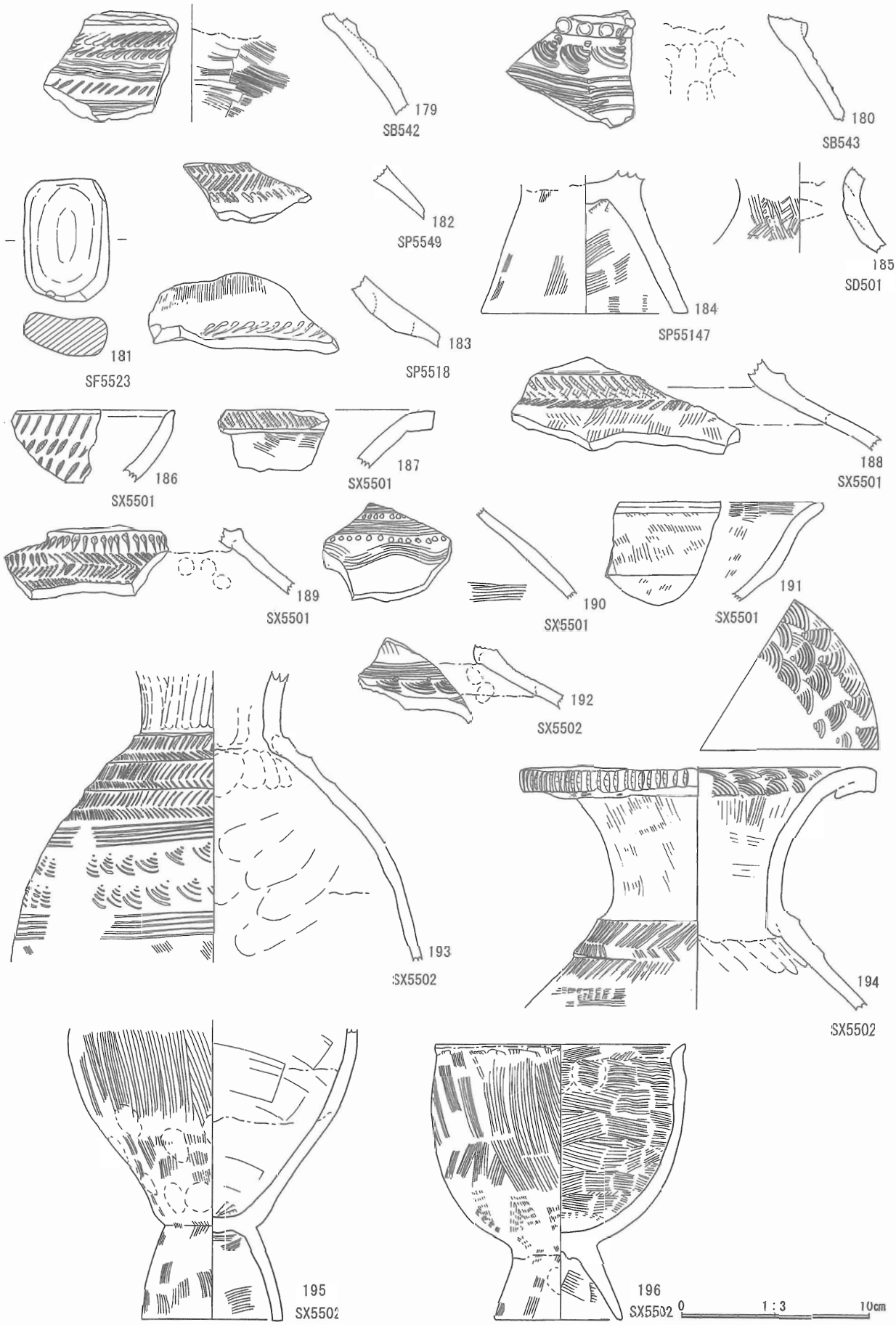
時　期　SB539は弥生時代後期後半であろう。

SB539・541出土遺物（第135図　図版62）

176は高坏の坏部である。端面は内傾面をもつ。稜は弱く、やや深い坏部である。内外面に縦位のミガキが施される。弥生時代後期後葉であろう。



第140図　５－５区　SD501実測図



第141図　5－5区　竪穴住居・土坑・小穴・溝・不明遺構出土遺物実測図

177は台付甕の台部である。178は壺胴部片で、直線文下に刺突文が観察される。

SB542（第136図）

楕円形を呈する住居である。撹乱が及んでおり、複数の住居の切り合いを持つかもしれない。貼床は住居の南東部分で認められた。小穴は1基検出したに過ぎない。

時　期　弥生時代後期

SB543・548・549（第137図　図版38）

3軒の切り合い関係をもつ住居である。SB548とSB543の切り合い関係は不明であるが、SB549が古い。SB548は南北2.7mの隅丸方形を呈する。掘り込みは非常に浅い。中央部に焼土が2箇所認められる。主柱穴はSP1とSP2で柱間間隔は2mである。SP3からは台付き甕の破片が出土している。

時　期　弥生時代後期

SB550・551（第138図　図版38）

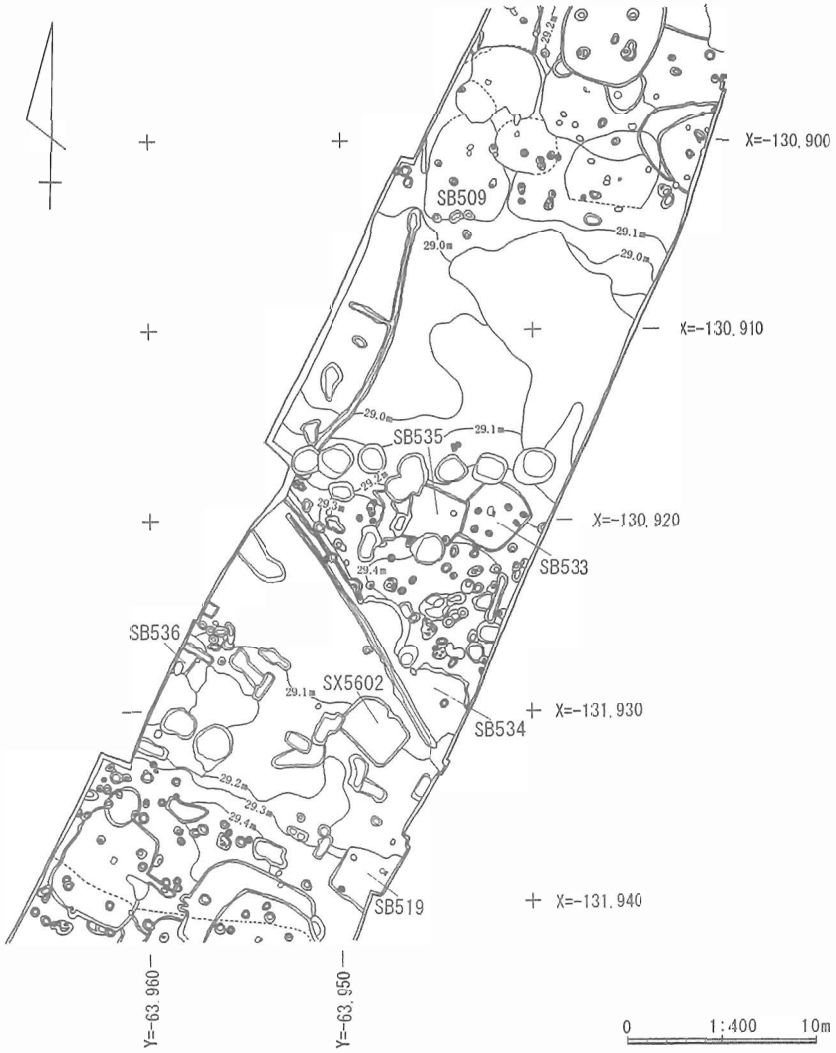
2軒の切り合い関係をもつが、構築順序は明確にできなかった。SB550はやや隅丸方形状をなし、東西3.6mの住居である。貼床、主柱穴、炉跡は明確でなかった。SB551は不整形ながらも隅丸方形をなす住居である。東西軸4.1mで、主柱穴は3基確認した。柱間間隔は2.4m、1.9mである。

時　期　弥生時代後期

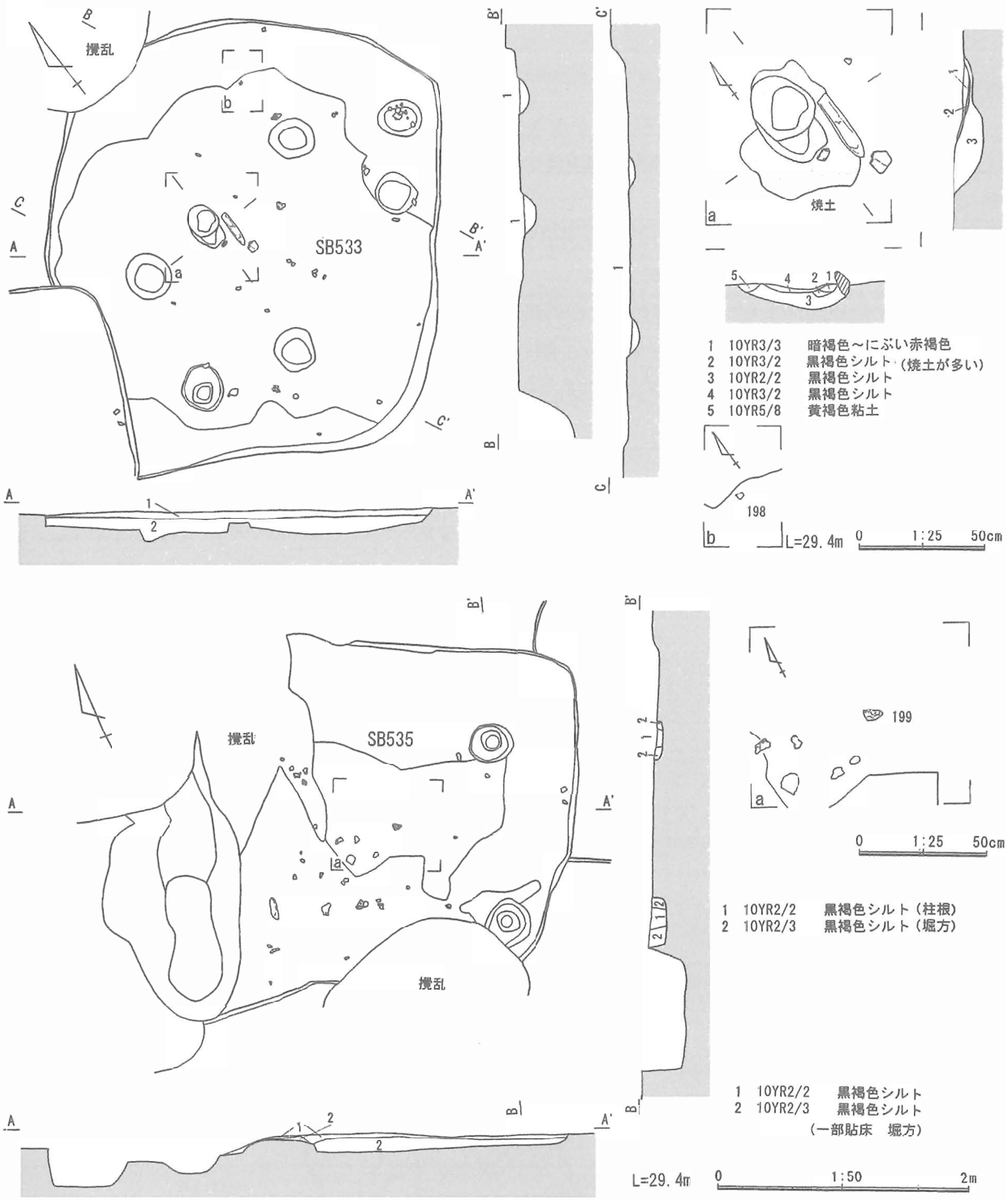
SB552・553（第139図 図版39）

少なくとも2軒は切り合う住居で、3軒の可能性もある。構築順序はSB552→SB553である。SB553は小型で、隅丸方形をなす住居である。長軸3m、短軸2.6mである。貼床、主柱穴等は不明である。中央よりやや北西側で小穴を検出したに過ぎない。SB552は楕円形をなす住居で、長軸5.6m、短軸4.4mである。炉跡は中央部で検出された。住居内部には撹乱が及んでおり、主柱穴の存在は不明である。

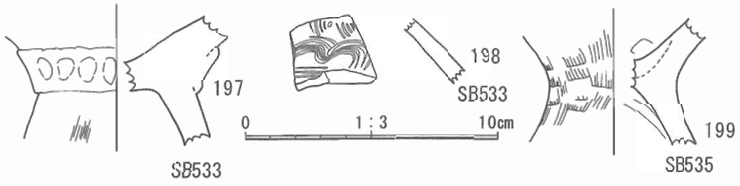
時　期　弥生時代後期



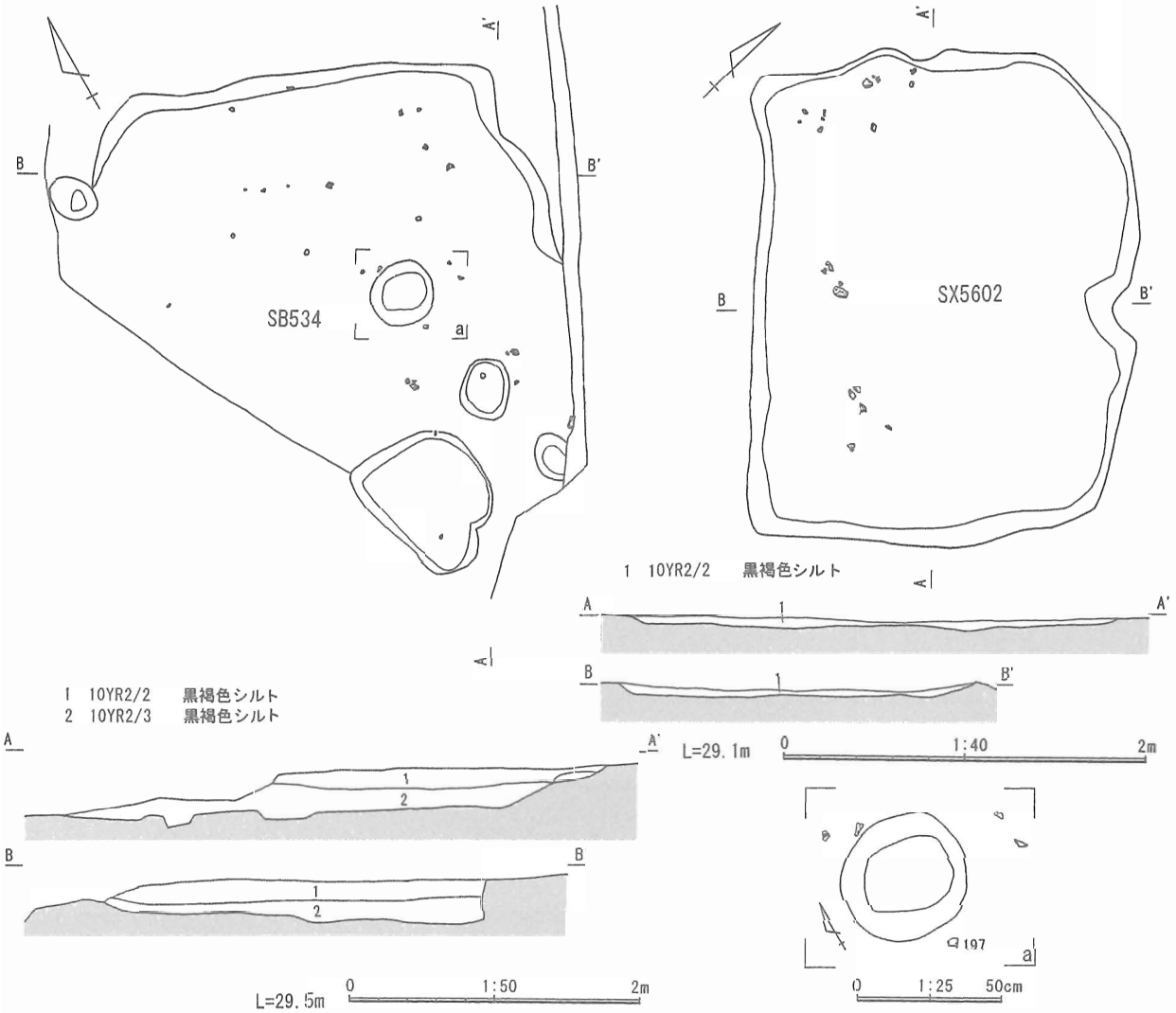
第142図　5－6・7区　全体図



第143図　5－6・7区　SB533・535実測図



第144図　5－6・7区　SB533・535出土遺物実測図

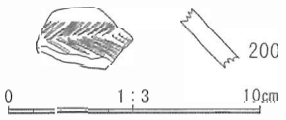


第145図　5－6・7区　SB534・SX5602実測図

SD501（第140図）

本調査区で唯一の円形に巡る溝が検出されている。半円部分の検出に過ぎないが、円形周溝墓の可能性がある。溝幅は2～0.8mと一定せず、断面は箱掘りである。遺物は幅広の溝からやや浮いた状態で出土している。主体部や盛土の存在は不明である。

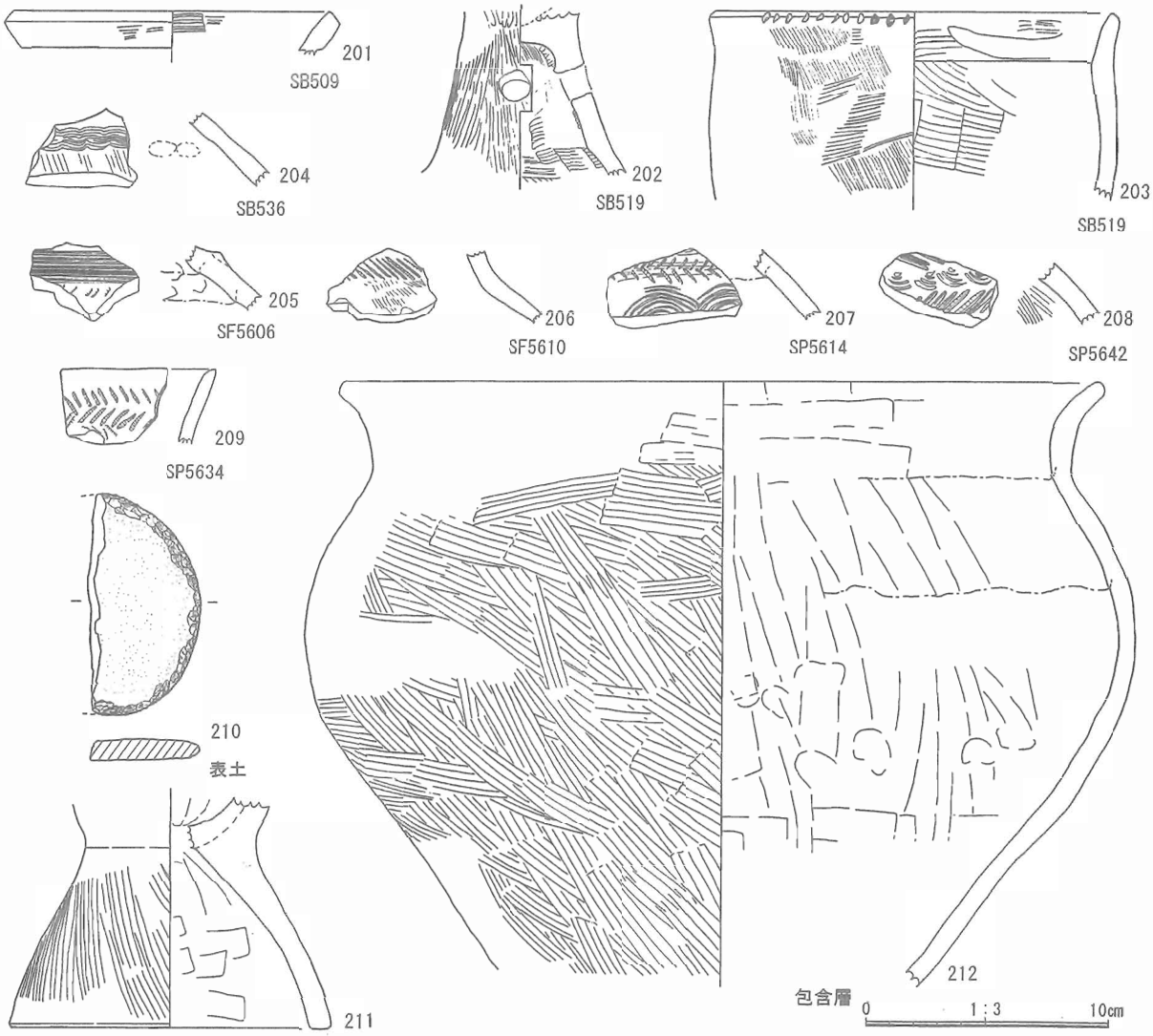
時　期　弥生時代後期



第146図　5－6・7区　SB534出土遺物実測図

5－5区竪穴住居・土坑・小穴・溝・不明遺構遺物（第141図　図版62）

179は壺胴部片である。直線文間に羽状刺突文がつき、多段である。180は壺胴部片で、突帯には円形刺突文がつく。直線文上には扇形文がつく。181は砥石であり、中央部に凹みがあり、磨耗している。182は壺胴部片で、櫛刺突羽状文がつく。183は壺胴部片で刺突文がつく。184は台付甕の脚台部である。185はSD501出土で、壺頸部片である。櫛歯状工具により、斜位に施されており斜格子状をなす。186は



第147図　5－6・7区　竪穴住居・土坑・小穴・包含層出土遺物実測図

口縁部に刺突文が斜位につく。鉢であろう。187は折返口縁壺で、口縁部は外反し、端部には斜位の刺突文がつく。188は櫛刺突羽状文がつく。189は櫛刺突文が多段になる。190は櫛描直線文、波状文間に円形刺突文がつく。191は高坏で、外反口縁である。192は直線文間に扇形文がつく。193の頸部はやや細く、直立し、胴部は扁平な形態である。内面の頸部と胴部の段差はみられる。直線文間に扇形文が2段施され、突帯間には櫛刺突羽状文が3段施文される。194は折返口縁壺で、口縁部は外反し、折返部は幅広である。端部には縦位の刻みが入る。内面の頸部と胴部の段差は明瞭で、外面の突帯は櫛刺突羽状文が施される。口縁部内面には3段の扇形文が施される。

195は台付甕で、内湾する脚台部がつき、長胴化を志向する形態である。196は台付甕で、口縁部は短く屈曲する。低い台部がつき、ハ字に広がる。外面は斜位のハケ、内面は横位のハケ調整が施される。

５－６・７区（第142図）

SB533（第143図　図版40）

楕円形の住居で長軸3.4m、短軸３mである。ほぼ中央に炉跡が設置されている。不整形な炉跡には細長い礫がみられた。小穴は６個検出されたが、主柱穴は明確でなかった。貼床はほぼ全面にみられた。

時　期　弥生時代後期

SB535（第143図）

切り合いにより平面形は不明確であるが、おそらく方形の住居と思われる。主柱穴は２箇所確認し、柱痕も土層にて確認できた。柱間間隔は1.5mである。貼床は柱穴間で一部確認されている。

時　期　弥生時代後期

SB533・SB535出土遺物（第144図）

197は台付甕の台部である。台部には粘土帯が貼られる。198は壺の胴部である。直線文、波状文、扇形文が施される。199は台付甕の脚台部である。

SB534（第145図）

平面形は不明確であるが、おそらく隅丸方形を呈すると思われる。炉跡は中央よりずれた位置で検出されている。遺物は少量出土している。

時　期　弥生時代後期

SB534出土遺物（第146図）

200は壺の胴部片である。櫛刺突羽状文が巡る。

SX5602（第145図）

不整形な長方形を呈し、住居の可能性もある。長軸3.3m、短軸2.6mで、浅い掘り込みを有する。床や柱穴は明確でない。遺物出土状況は少量出土している。

竪穴住居・土坑・小穴・包含層出土遺物（第147図）

201はSB509出土で、折返口縁壺である。204はSB536出土で、壺胴部片である。波状文が巡る。202はSB519出土で、高坏の脚部片である。外面に縦位のミガキが施される。203は台付甕で、頸部の括れは弱く、端部に刻みが施される。205は直線文下に刺突文がつく。206は櫛刺突文がつく。207は櫛刺突羽状文下に波状文がつく。208が櫛刺突文間に扇形文が巡る。209は複合口縁壺で、外面に櫛刺突羽状文がつく。210は円盤状の打製石器である。表裏とも研磨されており、周縁部に剥離調整を施し、円形に整形している。中央部に穿孔が施された痕跡は不明である。環状石斧の未完成品の可能性もある。外径は9.1cmで厚さは0.9cmである。石材は結晶片岩である。211は台付甕の台部である。やや内湾ぎみで低い台部である。212は台付甕である。頸部はやや直立ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。胴部最大径は中位よりやや上に位置し、底部に向かい、窄まる形態である。

第7節　東原　6区

6区の検出遺構（第148図）

概　要

6区は遠鉄線に沿った細長い調査区で、南北160mに及ぶ。本調査区では弥生時代後期の竪穴住居3軒、18世紀後半～19世紀前半の区画溝、火葬墓、建物が確認された。遺構の配置として6区北端で弥生時代の竪穴建物、土坑等が検出されている。南側では弥生時代の遺構・遺物はまったくみられなかった。よって弥生時代おける東原遺跡の南端は6区北側で検出されている遺構範囲まで及んでいると思われる。

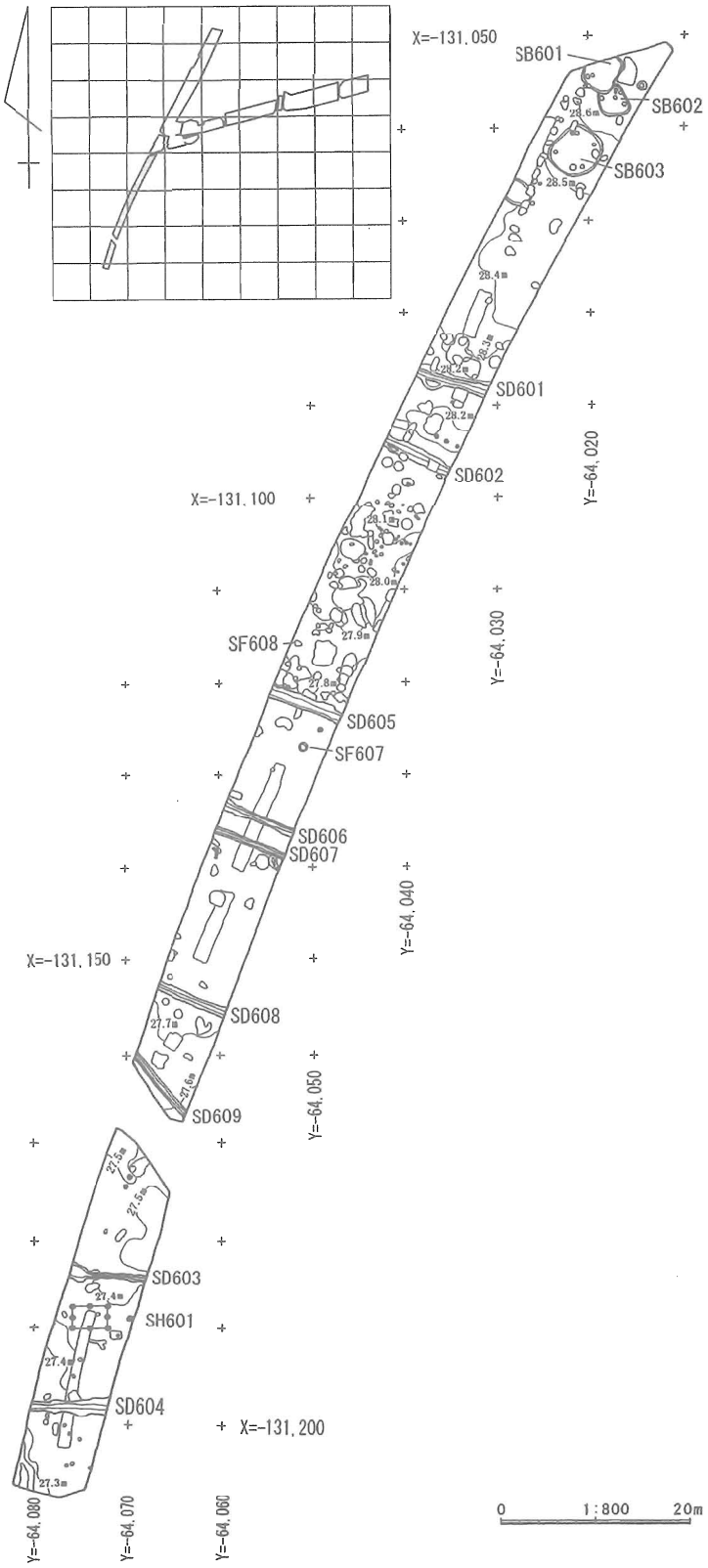
一方、南側では9本の溝状遺構が検出されており、これらの遺構から遺物量は少ないものの概ね江戸時代と考えられる。特に東西方向に延びる溝内に建物が配置されており、屋敷地としての性格が考えられる。北西から南東に延びる区画溝内からは火葬墓が2基確認された。

竪穴住居

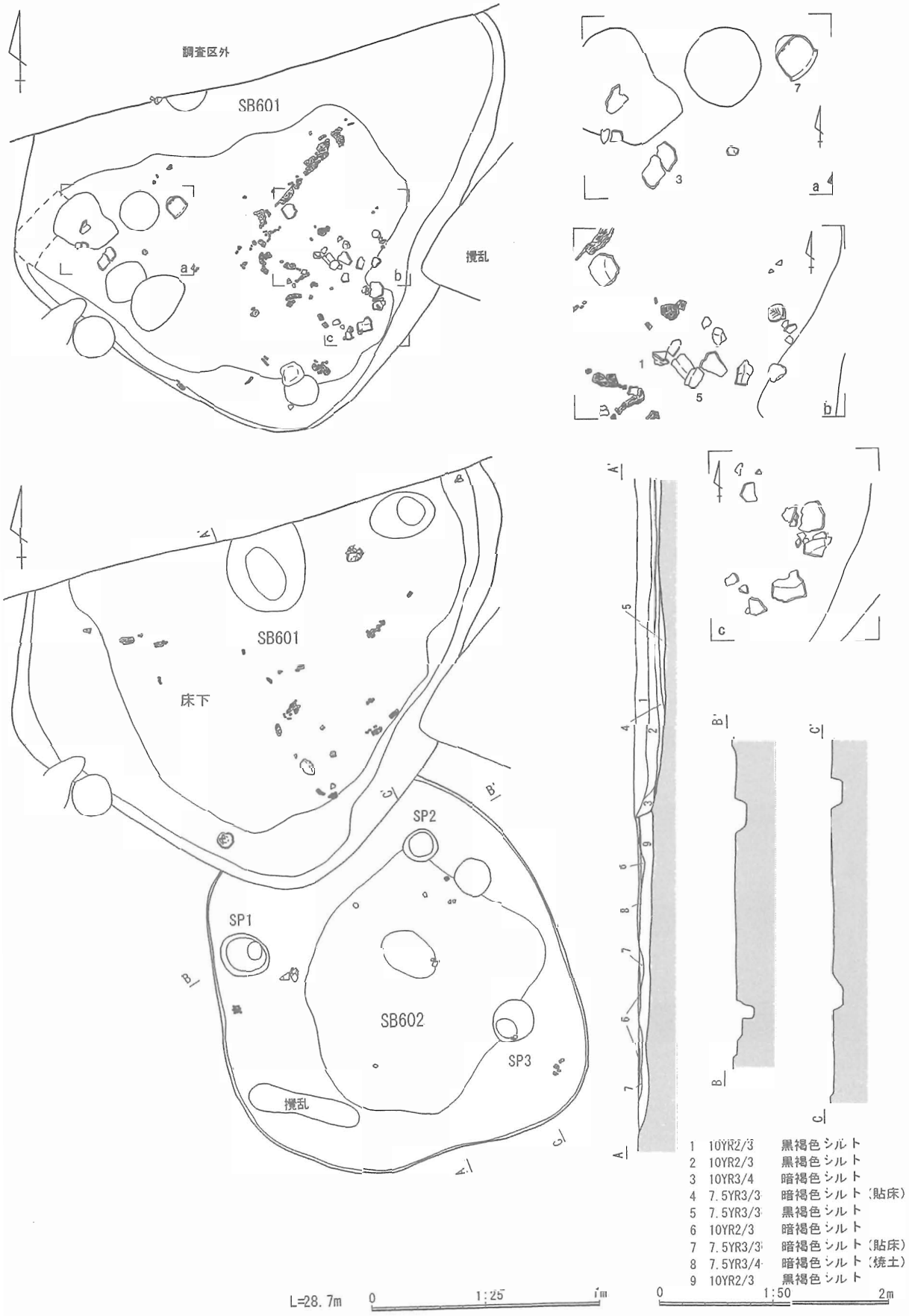
SB601（第149図　図版41）

SB601は長軸4.1m、短軸3.7mの規模をもつ竪穴住居で、SB602と切り合い関係をもつ。楕円形に近い隅丸方形を呈し、長軸を北東－南西に向ける。掘り込みは浅いものの、床面は2面確認した。上面の貼床は建物南半部で認められ、貼床上に炭化材が散乱した状態で検出され、焼失住居の可能性が強い。中央に土坑が検出され、貯蔵穴の可能性が高い。遺物も比較的多く出土した。床下からも炭化材、遺物が出土している。柱穴の状況は不明であるが、北東隅で小穴を確認した。

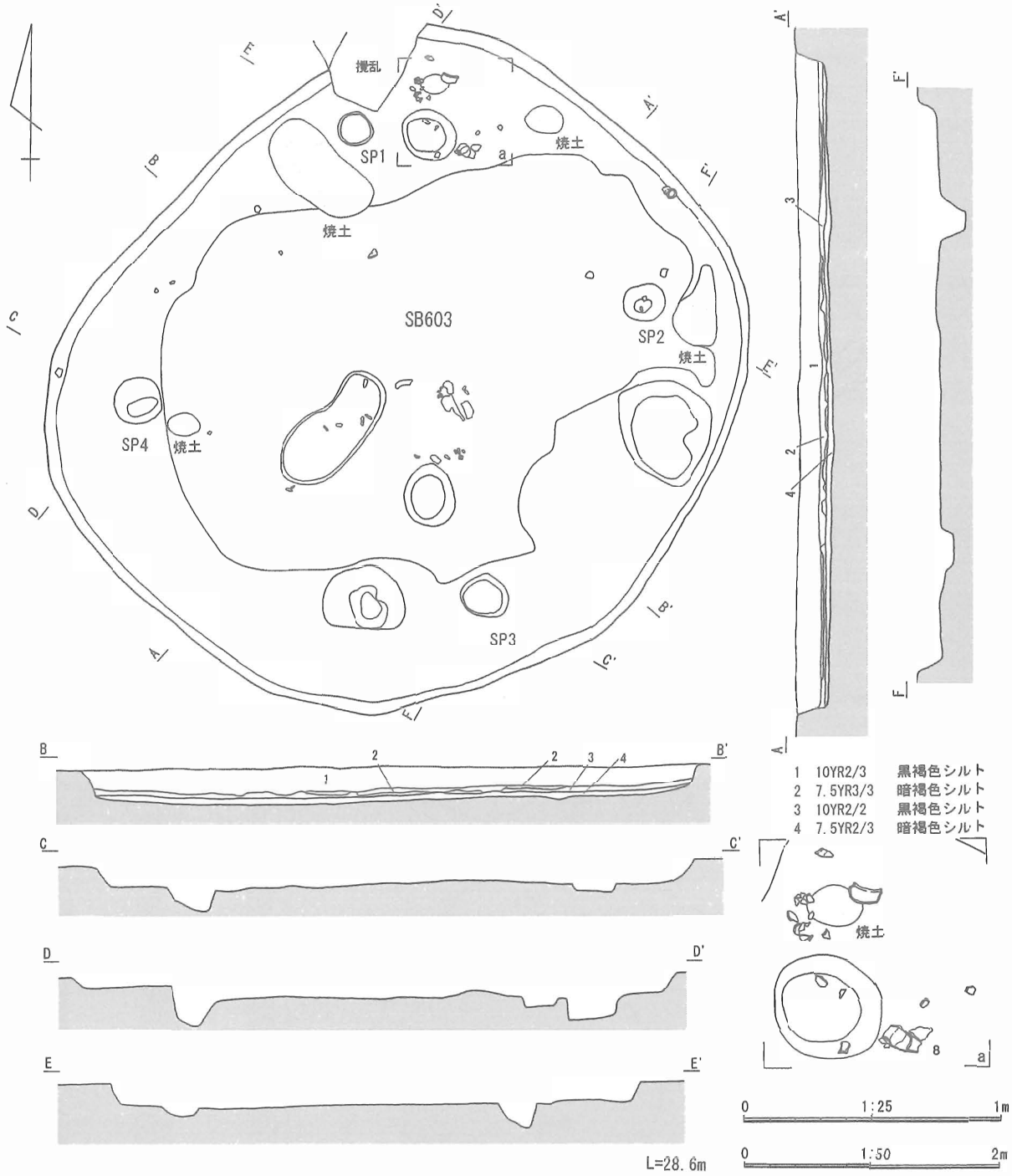
時　期　弥生時代後期後半



第148図　6区　全体図



第149図　6区　SB601・602実測図

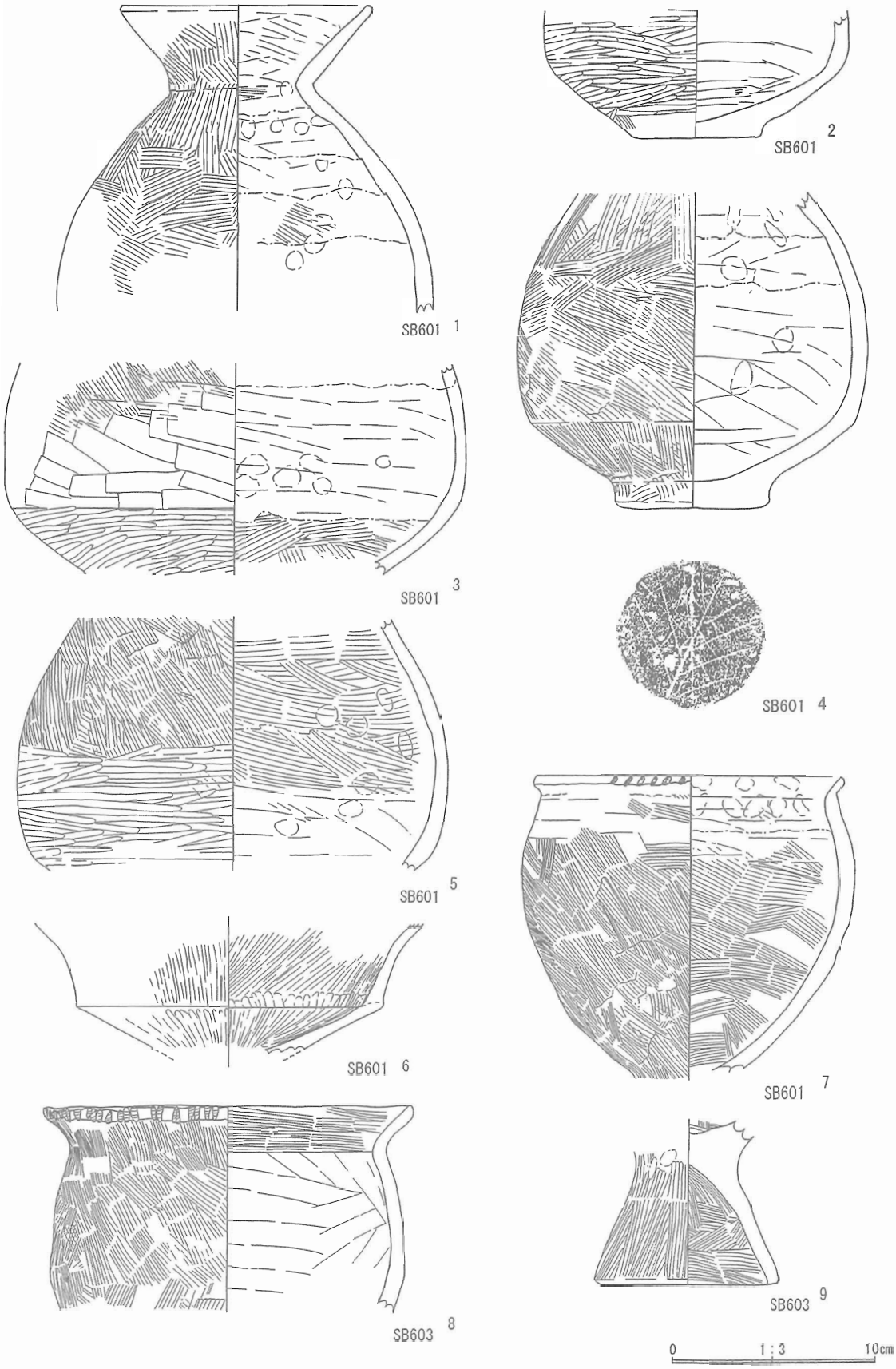


第150図　6区　SB603実測図

SB602（第149図　図版41）

楕円形を呈し、長軸3.2m以上短軸3.1mの規模を有する竪穴住居である。長軸は北西－南東方向に向ける。建物の掘り込みは浅く、中央やや北東寄りで焼土を確認した。柱穴は3基確認し、柱間間隔は3.5mである。貼床は柱穴間の中央部で顕著にみられた。遺物量は少ない。

時　期　弥生時代後期後半

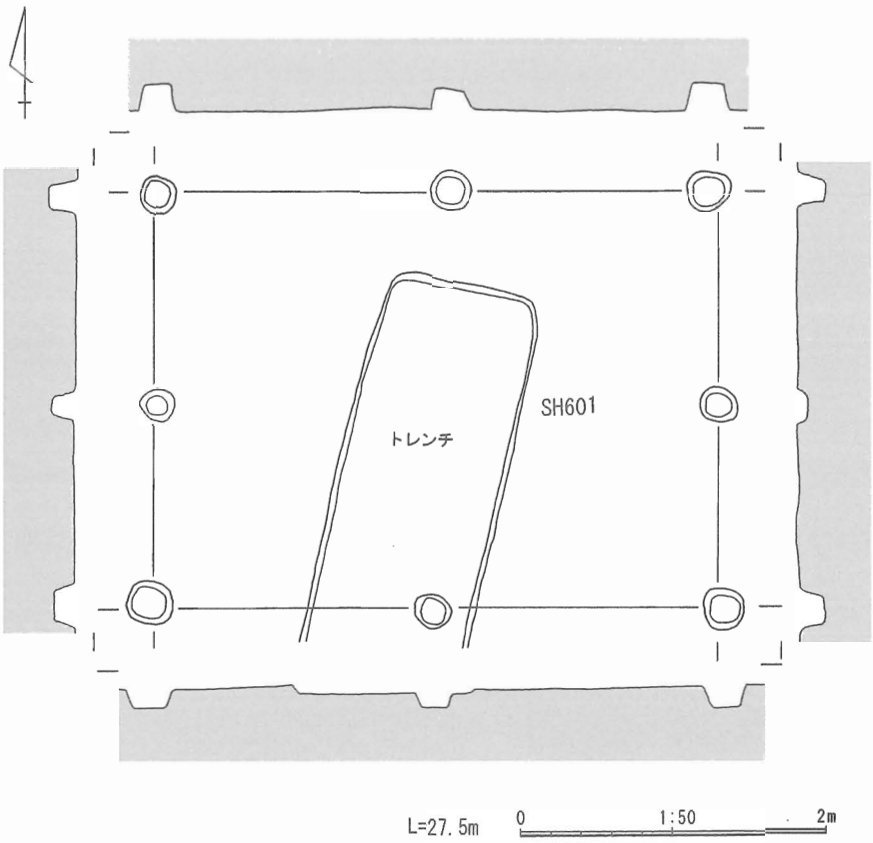


第151図　6区　SB601・603出土遺物実測図

SB603（第150図　図版41）

SB602の南側に位置し、長軸5.28m短軸4.8mの規模をもつ竪穴住居である。楕円形を呈し、掘り込みは浅いものの床面は2面確認した。主柱穴は4本確認し、やや建物の外寄りに配置される。柱間間隔は2.3m、3.25mである。その主柱穴の内側で貼床がみられた。中央部に炭化材がみられるものの柱穴付近に焼土が4箇所ほど確認された。遺物量は少なく、柱穴、焼土付近から弥生土器片が出土している。

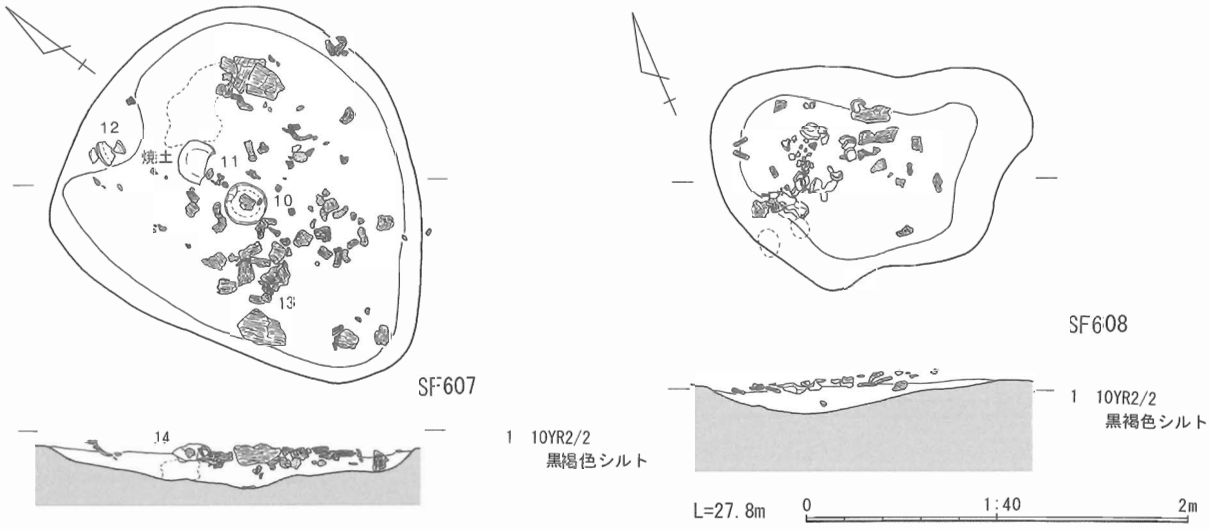
時　期　弥生時代後期後半



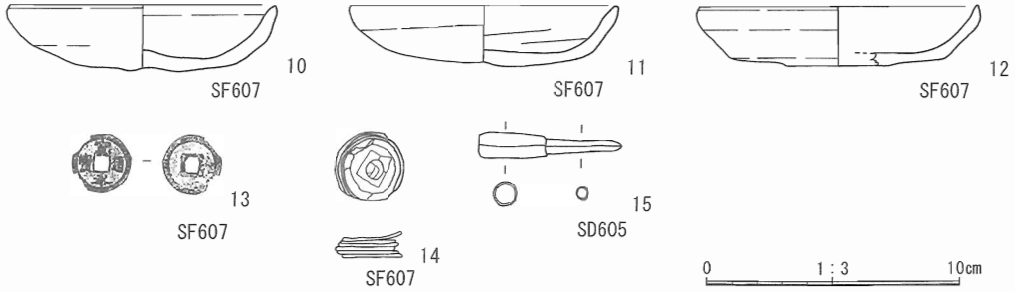
第152図　6区　建物1実測図

SB601出土遺物（第151図　図版63）

1～7はSB601出土遺物である。1は単純口縁を有する壺である。口縁部、胴部は無文で、ハケ調整が残る。2～5は壺である。2の胴部下半には横方向のミガキが施される。3は胴部下半の屈曲が弱い。4は無花果形を呈し、胴部上半は無文である。底部には木葉痕が観察される。5は胴部下半から中にかけて横方向のミガキが施される。6は高坏である。口縁部は外反し、稜は強い。内外面ともにミガキが施される。7は台付甕である。体部はやや厚手で、口縁部はわずかに外方へ屈曲し、長胴状である。体部最大径は口縁部を上回る。



第153図　6区　SF607・608実測図



第154図　6区　SF607・SD605出土遺物実測図

SB603出土遺物（第151図　図版63）

8・9はSB603出土遺物である。8は台付甕で、口縁部に縦方向の長い刻みが施される。9は台付甕の台部で直線的に開き、短小化したものである。

建物（第152図）

2間×1間の建物で、梁行2.7m、桁行3.8mである。柱間間隔は1.3～1.4m、1.7～1.9mである。建物の主軸方位は区画溝に平行していることから建物と区画溝は同時期と考えられる。これらの遺構から出土遺物はないものの、3区で検出されている屋敷地を区画する溝や建物の方位が同様であることから18世紀後半～19世紀前半と推定される。掘立柱建物か石場立建物かどうか判別できなかった。

区画溝（第148図）

区画溝は6区で9条確認されている。概ね東西方向、北西―南東方向に延びる直線的な溝である。2条の溝は平行に延びており、畑地、墓地等を区画する溝であったと考えられる。特に東西に延びる溝内には2間×1間の建物が配置されていた。これらの遺構の配置関係からほぼ同時期と推定される。区画溝から出土した遺物は少なく、周辺の出土から18世紀後半以降と推定される。溝の断面形はすべて箱形を呈し、深さもほかのものと比べてもほぼ同様である。しかしながら、SD605内には両壁に石組が一部みられ、SD602内には石組による堰がみられた。これらは排水路として機能していたと考えられる。

火葬墓（第153図）

火葬墓は2基検出されている。SF607は長軸2.1m、短軸1.78m、深さ0.2mの長楕円形の土坑である。内から火葬人骨、炭化材、白色のかわらけ3点、寛永通寶1枚、鉄銭6枚が出土した。土坑中央部の上面にかわらけが出土した。その周囲には焼土粒子が認められた。炭化材は土坑内にまんべんなく出土している。人骨は火葬されていたため、原形をとどめるものはなく、散乱した状態であった。出土した銭貨やかわらけは熱を受けている。かわらけは3区で出土しているかわらけと同様であることから18世紀後半以降に位置づけられる。SF608は不整形な土坑で、長軸1.72m、短軸1.2m、深さ0.14mである。この土坑内からは炭化材、骨粉が出土しているが、焼土は認められない。

SF607出土遺物（第154図　図版63）

10～12はかわらけである。白色系を呈し、いずれも被熱を受けている。非ロクロ成形で、口径が10cm前後のものである。底部からの立ち上がりがやや屈曲しながら立ち上がり、3区で出土しているかわらけはやや丸みをもちながら立ち上がる傾向がある。13は寛永通寶で、いわゆる古寛永である。14は鉄銭で、6枚重ねられた状態で出土した。被熱していた。15はSD605出土で、煙管の吸口である。銅製。

第Ⅳ章　結　語

この（国）152号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は平成15年度から３ヵ年にわたり、現地調査や資料整理作業を実施してきた。周辺では長年にわたり、浜名高等学校による調査や旧浜北市の調査が行われており、多くの成果を挙げている。

東原遺跡は天竜川北部において弥生時代後期の大規模な集落として評価されている。今回の調査は10,981㎡に及び、弥生時代中期末～後期、奈良時代前半、江戸時代に関して大きな成果があがった。ここでは新たな知見をふまえて今回の成果を簡単にまとめておく。

弥生時代の東原遺跡

注目される成果として弥生時代後期前半の方形周溝墓、土器棺墓の存在が挙げられる。すでに東原遺跡Ａ地点の段丘崖付近で旧浜北市による調査が行われ、方形周溝墓の存在が報告されている。今回はその区域で方形周溝墓は10基、土器棺墓は３基確認された。墓域は居住域と明確な境はもたないが、ある程度の空白域をもちながら、墓域と居住域が分けられていたと考えられ、造墓規制が働いていたと思われる。そして、墓域はその居住域の外縁の段丘崖に沿って展開していると考えられる。群として捉えることはできなかったが、形態はいずれも四隅に陸橋部をもつもので、７ｍクラスと10ｍクラスに分けられる。埋葬施設の痕跡や盛土の存在は確認できなかった。

方形周溝墓と土器棺墓の配置関係は特に特徴はなく、方形周溝墓群と共存して土器棺墓が検出されている。ただし、方形周溝墓の溝内で掘り方は明確ではないが、土器棺墓がみつかっており、大型壺を横位に置き、蓋をする構造であった。

住居は旧浜北市調査分と浜名高等学校分を合わせて68軒が確認されている。今回の調査では78軒の竪穴住居が検出されており、合わせると150軒近く検出されたことになる。住居配置は５区全域から６区北半に及び東側は２区まで集落域は広がる。この集落域を区画する溝や環濠は検出されず、現状では東原遺跡では未確認である。ただし、集落の末端付近でSX202（土器集積遺構）が検出されており、多量の土器が出土していた。

建物は単独で検出された例は少なく、ほとんどが複数切り合っていた。住居の建て替えや柱のみの建て替えなども認められたが、地点によって重複関係を捉えることができなかった。遺物量は比較的少ないもののほとんどの住居は弥生時代後期中葉から後期後半に集中し、古墳時代前期に入ると竪穴住居は全く確認できなくなり、この地での集落は廃絶する。

竪穴住居の規模による差はほとんどみられず、４～６ｍ前後のものが大半であった。主柱穴は基本的に４本柱である。貼床は比較的多く認められたが、周壁溝はほとんど確認されていない。貼床は全面に貼られている場合と柱内に囲まれた部分のみに貼られる場合がある。

炉の位置は住居中央よりややずれた位置で検出された例が多く、細長い礫を１個設置したタイプが特徴である。炉の形状は楕円形で、遺跡のベースとなる４層黄褐色土まで掘り込まれていた。炉床部分は周囲の床より若干高い位置までかさ上げされていた。

主要な遺物はほとんどが弥生時代後期中葉・後葉の土器で、住居からの出土量は少ないが、SX202（土器集積遺構）から大量の土器が出土している。テンバコにして12箱出土しており、ここからは壺と甕により構成され、鉢、高坏の出土量はきわめて少ない。壺類は広口壺で、口縁部形態は単純口縁、折返口縁、複合口縁のものが多い。菊川様式圏からの搬入品も一定量存在し、菊川式の影響を受けた欠山式の範疇に属する土器が多い傾向がある。特に扇形文の多用、有段羽状文と櫛描波状文の組み合わせや上下に大きく振れる波状文が多いことが特徴として挙げられる。

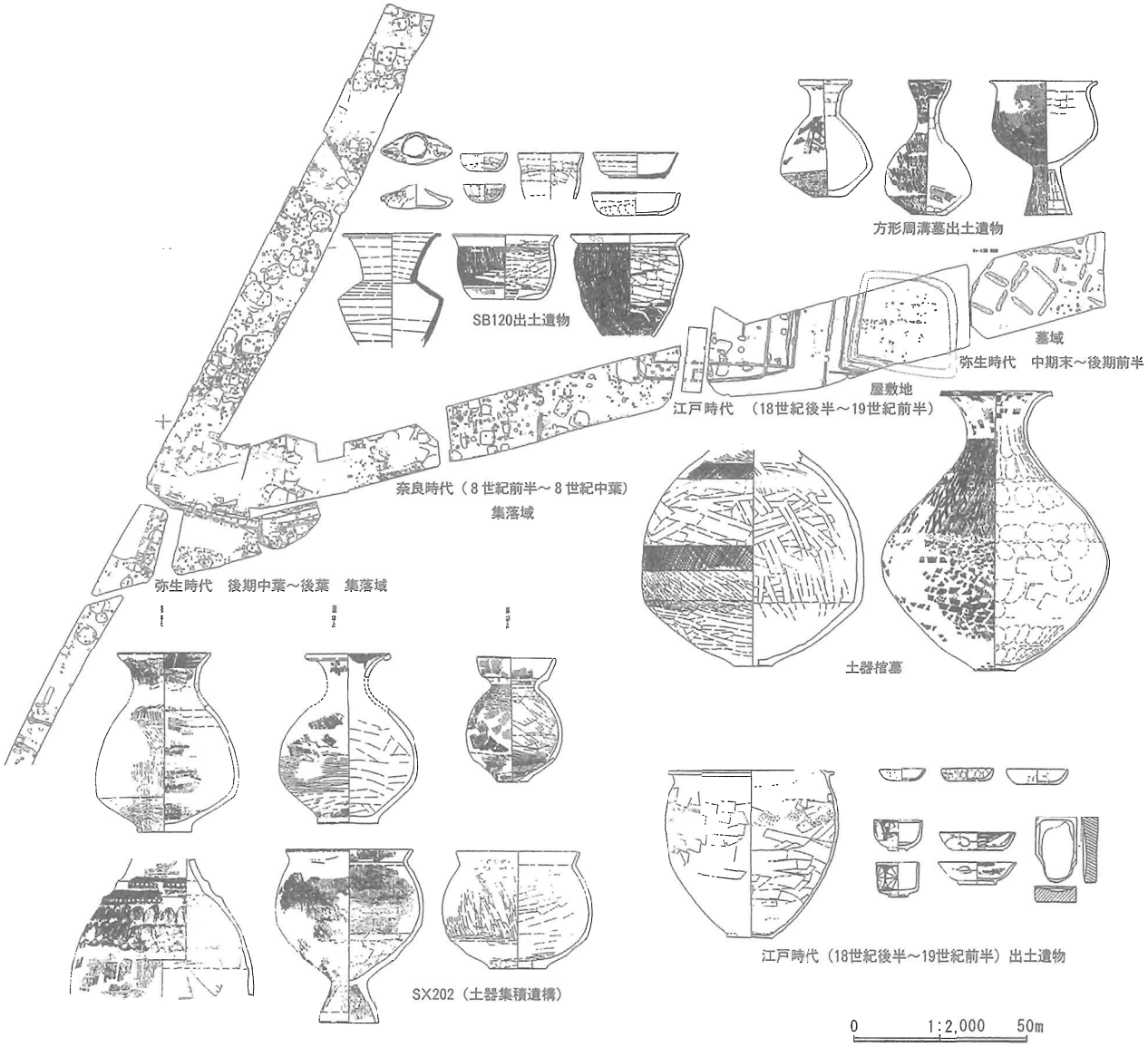
甕はすべて台付甕と思われる。口縁端部に刻みを有するが、一定量刻みが施されないものもわずかに存在する。脚台部への粘土帯貼り付けは少ない。

奈良時代の東原遺跡

検出された奈良時代の遺構は竪穴建物10棟、土坑、溝であった。遺跡のひろがりは1区東側から2区にかけて限定的に検出された。東原遺跡南端に古墳時代～奈良時代の集落が立地しているとされ、今回の成果により、あらためて裏付けることとなった。また、奈良時代集落の広がりがさらに北側へ延びることが確認された。

奈良時代集落の特徴として、掘立柱建物は明確に確認されず、竪穴建物のみで構成される小規模な一般的な集落であったと考えられる。存続時期は奈良時代前半～中葉までと短い。浜北面での奈良時代集落の調査例は少なく、向山Ⅰ遺跡で竪穴建物が検出されているに過ぎず、今回の調査例は貴重な成果といえよう。

建物は長方形を呈し、カマドは東壁につく傾向がある。カマドの残存状況は不明瞭であるが、粘土と構築材の袖石から作られていると推定する。煙道は建物外へそれほど延びない形態であった。支脚は土製で、静岡県東部でみられる切石製とは明らかに異なり、カマド内に残置されていなかった。今回特に



第155図　東原遺跡の様相

注目されるものとして１区で検出したSB120（焼失建物）が挙げられる。この建物内からは大量の土器が出土し、そのほとんどが、土師器から構成され、火熱を受けている。その中でも圧倒的な量をもののが、土師器坏である。坏類は建物の壁際が多く、煮沸具はカマド周辺から出土している。須恵器は非常に少なく、ほとんどが貯蔵具であった。小型の坏と皮袋形土製品もセットで出土しており、建物内における祭祀を示すものとして注目される。

江戸時代の東原遺跡

延宝６年(1678)頃の「浜松藩青山領分絵図」には、当時の東原遺跡周辺にひろがっていた村々の景観が描かれている。遺跡の東側には天竜川流域の中州の中に点々と村々が営まれている。これらの村々は天竜川の造った扇状地上を貫流した流路により周囲を分断され、島状となった微高地に村落が形成された故に、点在して描かれたと考えられる。

それとは対照的に東原遺跡の西側(赤佐から宮口付近)では、河岸段丘上に村々が等高線に沿って営まれている。江戸時代の東原は新原村の一部であって、新原はその名の示すように新しく開拓された村である。この付近はその東に当たるところから後にふれる陸地測量部測量の「麁玉村」には新原東原と呼称している。近接する小林(江戸時代には小林村)にも東原の字名が有り、新原と小林にまたがるこの付近が広く東原と呼称されていたと考えられる。小林の字名には西原があり、小林と新原の西側は西原と呼んでいたと考えられる。いずれにせよ東原遺跡周辺が、江戸時代には「原」と呼ばれる原野と森林の中に家屋が点在している村であることを読み取ることができる。

明治23年陸地測量部測量の「麁玉村」と「二俣町」(いずれも縮尺２万分の１)をみると、遺跡の東側を流れる天竜川が幾筋かに分流する様子が見てとれる。東原遺跡のすぐ東側には南北に浜北段丘の段丘崖があり、天竜川の旧流路のなごりである彦助川(中世には小天竜川と呼ばれていた)がその下を流れている。この川の名称の由来となった彦助とは氾濫を防ぐために築堤の中心となり、自ら人柱となったという新原村の人物である。延宝３(1675)年彦助が築き、その後も修築された堤(彦助堤と称する)とその屋敷跡と称する地点があり、いずれも調査区の南にある。彦助堤は遺跡の南側の段丘が低くなったところからはじまり、おもに天竜川の扇状地の高地と村落を守る役割を担った。東原の周囲が森林であるところは江戸時代と変わらない。

赤佐から宮口にかけての段丘面には根堅丘陵からの伏流水があり、それを利用した水田が広がっていた。それより低位にある東原遺跡周辺では、江戸時代の村絵図には新原村の新田とあるが、それは森林を新たに畑地として開墾した地と理解できる。同じ低位段丘面の村でありながらも、赤佐から宮口にかけての村々とは、米作と畑作（麦と木綿）という生業の違いでもあったのである。

土器・陶磁器からみた３区

２区東側・西側では溝に囲まれた屋敷跡が発見された。東側の屋敷はやや幅広い溝に囲まれ、その内側から建物跡２棟が検出された。屋敷はペンシルドロータイプの碗や木型打ち込みの小皿が出土していることから、天保期およびそれ以降の年代が推定される。おそらく幅の広い溝の外周には細い溝が巡るが、この陶磁器の年代は、幅広い溝の屋敷地の使用年代を示すと考えられる。それより古い遺物は少なく、新しい陶磁器も認められない。すると幕末以降、どこかへ移住した可能性が高い。

３区西側の屋敷は３回ほど溝の斬り合いが認められた。SD304やSD305など屋敷地の区画溝の北東から陶磁器は、1760～1780年代を示すものが多い(相良町教育委員会2005 嬬恋村教育委員会1994)。破損しやすいかわらけも原形をとどめていることから、おさらく立て替えや屋敷区画の大幅な変更に伴って、短期間に廃棄された一括廃棄と考えられる。するとこの地に屋敷をつくり、住まいした時期を示すと考えられる。おそらくその景気は前節の新田開発による移住と考えられる。なお１から３のような瀬戸・

美濃産のかき分け碗と肥前の時期がほぼ拮抗する量で出土している。中皿と碗が主体であり、水甕のような貯蔵具や擂鉢のような調理具は、きわめて少ない。壊れにくいために長く使用されたのであろうか。

では屋敷の終末時期はいつであろうか。35の湯飲み碗タイプがあることから1820年代と考えられる。それにしてもその量は少なく、転居の際、破損のない陶磁器はそのまま持って行ったと考えられる。ところで、屋敷の区画溝の内側ではあるべき建物跡は発見されなかった。発見された遺構は厠と礫積みの井戸である。厠については常滑産甕が大形土抗に埋置されていたこと、さらに廃棄の際破片となった甕をそのまま埋めていることから、糞尿溜と考えている。この甕は表面に酸化鉄を塗ったものの焼成がやや不良のため、真焼け状態にならなかったと判断される。口縁がＹ字状を呈することとともに、18世紀中頃～後半の製品と考えておく（中野　1986）。

井戸とともに厠施設が発見されているので、深く掘りこんだ遺構のみ残存したと考えられる。

参考文献

静岡県西部農林事務所・浜北市教育委員会　2002『東原遺跡Ａ地点・Ｂ地点』

浜北市　2004『浜北市史』資料編　原始・古代・中世

松井一明・鈴木京太郎　2004「芝本・東原遺跡群より見た弥生後期集落と土器」『浜北市史』資料編　原始・古代・中世

相良町教育委員会2005 『相良城趾』

嬬恋村教育委員会1994 『鎌原村発掘調査概報』

中野晴久　1986 「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』

現地調査並びに報告書作成にあたり、下記の方々には有益な御指導・ご助言を賜った。文末であるが、記して感謝の意を表したい。（五十音順・敬称略）

伊藤美鈴　大野勝美　大橋将史　大谷宏治　柴田　稔　白澤　崇

鈴木京太郎　塚本和弘　戸塚和美　藤沢良祐　松井一明　溝口彰啓

第Ⅴ章　芝本遺跡Ｈ地点　第１～６次発掘調査報告

１．はじめに

浜北市芝本遺跡は遠州鉄道芝本駅の東側の浜北段丘と称せられる段丘崖の南北にのびた微高地上に立地している。芝本遺跡の範囲は南北に広く、表面採集される遺物の分布の濃淡と微地形からＡ～Ｈ地点の８地点、南に連続する東原遺跡でＡ～Ｄ地点の４地点に遺跡の範囲が認められた。このうち芝本遺跡で発掘調査が行われているのは、今回報告のＨ地点の他はＢ地点で昭和40年の調査において浜名高校史学クラブが弥生時代中期中～後葉の竪穴住居１棟を調査されている（浜北市教育委員会1985）。Ｆ地点（北部中西弥生遺跡）でも昭和43年度にトレンチが行われ、土器片の出土はあったが、竪穴住居等の遺構の検出には至らなかったようである（浜名高等学校史学クラブ1968）。その後は調査が中断するものの、浜北市教育委員会によりＤ地点の調査が平成９年度、Ｈ地点の調査が平成12年度に行われ、住居や柱穴等の弥生時代後期の遺構が検出されている（浜北市教育委員会1998・2001）。

芝本遺跡Ｈ地点は昭和40年刊行の県遺跡台帳・地図によると芝本Ⅲ遺跡として登録されていた（静岡県教育委員会他1965）が、具体的な遺跡の内容は弥生時代後期の遺跡としか記載されていない。具体的な遺跡の内容を知るうえでの直接の契機は、昭和37年春頃にＨ地点のほぼ中央東西方向に通過していた農道の拡幅工事の際に弥生時代後期の土器が大量に出土したことで、これ以後弥生時代後期の大規模集落遺跡として認識されるようになったと思われる。その時に採取されたと思われる記念碑的な壺形土器１点（第12図45）が幸運にも浜名高等学校に残されており、おそらく１号方形周溝墓の南溝から出土したものと想定される。当時浜名高等学校史学クラブは下津谷達男先生のご指導のもと赤門上古墳や積石塚古墳群を始めとする内野古墳群などの、浜北市内の主要古墳の発掘調査を昭和29年より継続的に行っていた。この時の芝本Ⅲ遺跡からの土器の出土に注目したことにより、昭和37年度調査の雲岩寺入形山１・３号墳を最後として、昭和38年度より芝本Ⅲ遺跡の継続的な発掘調査を行うこととなった。

なお、調査の期間は高等学校のクラブ活動という性格であったため、各年度の７月下旬～８月上旬の２週間程度行われている。また、各年度の調査については下津谷達男先生にご指導を受け、国学院大学の関係者や学生の参加、浜北市教育委員会の後援を頂きながら学術的な調査を進めることができた。全国的に高校のクラブ活動が盛んな時期ではあったが、高校のクラブとして単独の発掘調査チームが組織され継続的に調査がなされ、しかも概要報告を『伎倍』という名称の活版のクラブ誌を継続的に刊行することができたことは、全国的にも稀な調査であり幸運なことでもあった。Ｈ地点出土の土器量は膨大であり土器の洗浄や復元作業はクラブ員によりほぼ完了していたが、土器の実測作業や遺構の図面整理などの資料整理は遅々として進まず、正式報告書の作成はままならないものがあった。2004年に刊行された『浜北市史資料編原始・古代・中世』刊行に向けて整理作業が開始されたが、資料数が膨大であったため全てを掲載することができなかった（浜北市2004）。よって今回報告することができた資料は、浜名高校史学クラブ関係者が進めてきた資料整理の成果と旧浜北市教育委員会より提供された図面を活用し、再整理して掲載することができたものである。本文の内容は関係者よりの伝聞情報と『伎倍』の芝本遺跡関連概要報告（下津谷達男先生執筆）を基にした。以下Ｈ地点の各年度ごとの調査経過の概要について触れた後に遺構・遺物の記述を進めたい。

第１次調査（昭和38年度）は土器が出土した拡張された農道より北側を中心として９本のトレンチを

設定したところ、完形品を含む土器を大量に出土した１～３号遺構（１号方形周溝墓）、４・５号遺構（２号方形周溝墓）、１号住居跡、特殊配列とした土器集中を検出した。遺構の全体像は見えてはいなかったが、当時報告されていた横浜市三殿台遺跡や川崎市、沼津市、袋井市の類似の遺構から、墳墓に関係した遺構であるとの指摘をすでにしている（浜名高等学校1963）。

第２次調査（昭和39年度）は第１次調査で検出できた特殊遺構とされた１～５号遺構に関係した遺構をさらに発見すべく、遺構の集中する箇所に拡張区を設け、北側にも遺構が存在する可能性を求めてトレンチを設定して調査を進めた。すると、６号遺構（２号方形周溝墓）が「コの字」形になることと、７号遺構（１号方形周溝墓）の発見で、２箇所の方形囲溝が存在することが明らかにされた。また６号遺構から壺形棺が検出されたことにより墳墓としての性格が強まり、当時方形周溝墓の報告例として嚆矢となった八王子市宇津木遺跡で発見された方形囲溝との関係についても比較された。方形囲溝が検出できた拡張区の北側に設定したトレンチからは、２・３号住居跡も発見された（浜名高等学校1968）。

第３次調査（昭和41年度）は農道南側の部分について遺跡の広がりを知るために５本のトレンチを設定したところ、集落を区画すると思われる溝状遺構と４号住居跡が検出された（浜名高等学校1968）。

第４次調査（昭和42年度）は昨年度からの継続として農道南側の部分を中心に進め、第３次調査区の北側～農道の地区から第３次調査区からの続きの溝状遺構が弧状に北東方向に伸びることをつきとめ、その付近から６・７号住居跡と後に８号住居跡とされた土器集中遺構、後に焼土を伴う９号住居跡と認定した竪穴住居群、４号住居跡の南側にも５号住居跡の都合竪穴住居５棟を検出している。さらに１・２次調査区の北西部分の状況を確認するため４本のトレンチを設定したところ、土器が大量に廃棄された土坑（第２号遺構）２基を検出した（浜名高等学校1968）。

第５次調査（昭和43年度）は４次調査より北側100ｍの場所に調査区を設定したとされるが、確実な調査位置については今回検索できる資料がなく明らかにできなかったため、第３図の全体図には調査場所を記入できなかった。単純に距離から逆算すると、２・３号住居跡北側部分に位置すると思われるが定かではない。調査区からは炉跡４箇所と複数の貼床面を確認することができ、最低４軒の竪穴住居が狭い範囲で重複していた（浜名高等学校1968）。

その後の調査は東原遺跡に移ったが、昭和49年度の第６次調査として第１・２・４次調査北西方向の空地部分を調査対象としてトレンチ６本を設定したところ、壺形棺と思われる土器棺３箇所、祭祀用の土器と見られる土器集中３箇所が確認できた。土器棺が検出できた場所を拡張したところ、近世の溝が２本を確認できたのみで方形周溝墓はもとより竪穴住居跡も存在しないことが判明し、土器棺のみが埋葬された場所であったことが判明した（浜名高等学校1979）。

２．遺構

トレンチ調査を行い、遺構が確認できた場所を拡張する方法をとっているため、面的な調査を実施している場所が少ないものの、主要な遺構として竪穴住居14棟、方形周溝墓２基、土器棺墓３基、溝状遺構１基、土器の廃棄土坑１基が検出されている。

方形周溝墓　方形周溝墓としては学史的に見て初期の発見であったので調査時には方形周溝墓という用語自体が定着しておらず遺構の認識が確定していない時期であったこと、１次と２次調査の２回にまたがる調査であったため、１～７号遺構という各辺の溝に個別に遺構名がつけられた。しかしながら、現在の視点から見ても方形に巡る遺構群が２基あること、土器棺や穿孔土器が出土していることから見ても、方形周溝墓であることは確実と思われる。よって、便宜的に最初に発見された南側の遺構群を１号

方形周溝墓、北側の遺構群を2号方形周溝墓として報告する。

1号方形周溝墓は1～3・7号遺構、2号方形周溝墓は4～6号遺構が組み合わせになる。1号方形周溝墓は南溝は道路拡幅で破壊されているため南溝の状況は確認できないが、7号遺構（北溝）の両端は切れているため、最低2箇所の陸橋が存在し、2・3号遺構（東溝）の南端は溝の幅が減じる形態をとるようである。方台部西よりに管玉を含んだ集石遺構があるが、範囲からみると周溝墓に伴うものではないだろう。隣接する土坑も不定形でこれも主体部とは考えられないため、集石遺構と組み合わせると風倒木痕であった可能性も考えられる。管玉からは付近に主体部はあった可能性はあるが、風倒木のために破壊された可能性も指摘しうる。各溝からは完形品を含む土器が多量に出土するが、破片がより上層から出土する傾向がある。溝に廃棄土器が投棄されている可能性もあるが、穿孔土器も上層から出土しているため、上層土器の全てを居住域からの廃棄土器と断定することはできない。

2号方形周溝墓の4号遺構北端（南溝）は途切れるため、最低1箇所の陸橋が認められる。5号遺構（東溝）と6号遺構（北溝）のコーナー部分は、溝幅と深さが減じ接続すると考えられる。4号遺構と6号遺構が連結するかは未調査のため分からない。6号遺構の南コーナー部分の溝幅・深さは若干ではあるが減じ突出する形態が認められる。6号遺構からは壺形土器の下半を蓋とする壺棺が、直立した埋葬状態で出土した。方台部中央に特殊配列と呼ばれた土器集中箇所が存在する。主体部上層に廃棄された祭祀用土器群とも考えられるが、完形品は少なく破片資料が主体で、甕形土器も多数含むため、主体部に伴う祭祀用土器とは考えられない。特殊配列下から検出された1号住居跡埋没痕に廃棄された土器片の可能性を考えたい。ただし、南側のトレンチから管玉が出土しているため、管玉が副葬されていた主体部が存在していた可能性は高い。各遺構の土器の出土状況は1号方形周溝墓と同じく、完形品を含む土器が多量に出土し、破片がより上層から出土する傾向はあるが、完形率の高い土器も上層から出土しているため、上層土器の全てを生活域からの廃棄土器と断定することはできない。

周溝墓の時期は出土土器から見ると1号方形周溝墓が後期中葉（伊場式新段階）、2号方形周溝墓は後期後葉（欠山式）に該当するが、1号方形周溝墓の中に後期後葉の土器も含まれるため、かなり近接した時期に連続して造られ、複数の埋葬がなされた時期幅も存在すると考えられる。

土器棺墓群　第6次調査区で3基確認できたが、土器棺2・3とした2基はほとんどが耕作等で破壊され底部のみの検出であり、直立埋葬状態であったことしか確認できない。土器棺1については辛うじて包含層が残存していた場所に位置していたためほぼ完形品として確認できた。遺構確認面では長さ1.5m、幅0.8mの楕円形の土坑に斜行状態で埋葬されていた。ただし、実際の掘込面での墓坑の大きさについては、もう一回り大きかった可能性が高い。土器棺1の棺身は口縁を欠いた大型壺を利用し、やはり口縁を欠いた小型の広口壺をソケット状に蓋をしていた。なお、棺身の口縁部は出土していないが、小型壺は口縁の破片の一部が棺身内部から出土している。蓋の小型壺（第27図589）は後期後葉（欠山式）段階に並行すると考えられるが、中遠江によく見られる菊川式後半新段階（欠山式並行）に該当する土器であるのに対して、棺身は頸部と肩部の境に三角突帯が施された西遠江の土器である。埋葬者の出自に関係したセット関係と見ることができるのだろうか。包含層中からおそらく確認面まで掘り込まれていない土坑が存在し、そこに祭祀用と思われる小型土器が廃棄された土器集中箇所が3箇所見つかっており、トレンチ調査のためさらに付近に同様の土坑が存在していた可能性が高い。土器集中箇所からは小型の坏や台付坏（第27図590・591）が出土していることから見て、土器棺墓群に係わる祭祀用土器であったと考えられる。

竪穴住居　14棟を抽出することができ、概ね方形周溝墓より北側の調査区で検出された１～３号住居、南側の調査区で検出された４～14号に分けられる。ただし、５次調査の10～14号住居については相当切合の頻度が高く調査面積も狭いためさらなる検討が必要だろう。

１号住居は２号方形周溝墓と重複しており、西側半分の検出となっている。おそらくの平面形態で中央北よりに地床炉が検出されている。柱穴の配置については不明である。住居内の土坑についても貯蔵穴かどうか分からない。時期は出土土器から見ると小破片資料しかないため確実なところは分からないが、２号方形周溝墓に先行する後期中葉（伊場式新段階）に該当すると思われる。

２・３号住居は１・２号方形周溝墓北側に隣接して検出され、一部重複する竪穴住居である。切り合い関係から見ると２号住居の方が古そうであるが、確実なところは不明である。平面形態は２号住居が円形、３号住居が隅丸長方形である。炉跡はいずれも検出されていないが、３号住居については狭い範囲で焼土や炭化材が出土しているため、廃材を焼却した住居のようである。柱穴の配置は２号住居については明らかではないが、３号住居は４本柱になりそうである。遺物の出土状況は３号住居の埋土上層に廃棄された土器片や礫が多数見られた。時期は出土土器から見ると２・３号住居ともに後期中～後葉（伊場式新段階～欠山式）に該当するものが混在するが、２・３号住居ともに後期中葉の土器を一定量含むことと、埋土廃棄の時期を後期後葉と考えればいずれも後期中葉に該当すると考えたい。

４号住居は南側の調査区で検出され、平面形態は小型の隅丸方形を示している。炉跡は検出されていないが、柱穴の配置は４本柱になりそうである。時期は出土土器からみると、後期後葉（欠山式）に該当すると思われる。

５号住居は南側の調査区の最南端で検出され、平面形態は隅丸方形を示している。炉跡は地床炉が中央よりも西南によった場所で検出され、柱穴の配置は典型的な４本柱になりそうである。時期の分かる出土土器が見られないため、該当時期は分からない。

６号住居は南側の調査区の西端で検出され、平面形態はかなり小型の隅丸方形を示している。炉跡は地床炉が中央部で検出され、柱穴の配置は１本しか検出できていないため不明である。時期は出土土器からみると小破片資料が多く確実なところは分からない。

７号住居は６号住居の西側に隣接して検出され、平面形態は床面の検出に留まったため不明である。炉跡は地床炉が検出されているがどの位置にあったのかは不明であり、柱穴も検出されていない。時期は小破片が多く確実なところは分からないが、後期後葉（欠山式）に該当すると思われる。

８号住居は溝状遺構に隣接して検出され、平面形態は隅丸長方形を示している。炉跡は棒状の石が１石置かれた配石炉が中央より南側によった場所で検出されている。柱の配置については分からない。埋土上層から土器完形率の高い土器や礫がまとまって廃棄されていた。時期は出土土器が比較的まとまっており、後期後葉（欠山式）に該当する。

９号住居は南側の調査区の溝状遺構と重複され検出されているが、溝状遺構との新旧関係は明らかではない。平面形態は部分検出であるため確実なところは分からないが、隅丸方形となりそうである。炉跡は地床炉が中央よりも西によった場所で検出されたが、柱穴の配置は分からない。時期の分かる出土土器が見られないため、該当時期は分からない。

10～14号住居は５次調査区の狭い範囲で密集し重複され検出されてることと、部分検出であるため平面形態は確実なところは分からないが、大方隅丸方形となりそうである。切り合い関係についても不明である。炉跡は地床炉が12号住居、11号住居より検出されているが、どの位置にあるかは分からない。

柱穴の配置についても分からないが、調査区北側に並んだ柱穴群については掘立柱建物の可能性についても指摘されている。土器の出土状況が分からないため、各住居の確実な該当時期は分からないが、10号住居は後期後葉（欠山段階）になりそうである。

溝状遺構　南側の調査区の南西から北東方向に掘られており、断面形態は浅い箱状を示すことから所謂環濠には該当しないものの、集落内の一角を区画する溝であると思われる。該当時期は時期の分かる土器がないため分からないが9号住居（時期不明）と重複し、8号住居（後期後葉）と隣接するため後期中葉に該当すると推測される。

土坑　4次調査のうち2・3号住居西側のトレンチ調査で2基の楕円形の大型土坑が検出された。そのうち南側の2号遺構とされた土坑から、まとまって土器が出土していることから廃棄土坑であった可能性が指摘できる。時期は出土土器から見ると後期中葉（伊場式新段階）に該当する。

3．遺物

主要な出土遺物はほとんどが弥生時代後期の土器で、しかも後期中・後葉の土器である。中世の遺物も少量出土している。中世の遺物としては274の土師質の羽釜、593の内彎型の内耳鍋で、いずれも16世紀代に該当するものである。以下主要な遺構から出土した土器について説明を加えたい。

伊場式段階　伊場式の土器は主に1号方形周溝墓と4次調査2号遺構から出土している。壺形土器は中型と小型のものが出土している。中型のものは球形胴の14・28・33、外反口縁の32・39・44、肩部に櫛描横線文の施される8・25などが伊場式新段階の範疇に入る。44は球形胴というより胴部下半に最大径があるが、口唇端部に刻目を施した外反口縁で、肩部の三角突帯は伊場式に見られる特徴である。なかでも、23の肩部に刻目の施された突帯文をもつものや、564・565のような流水文の施されたものは伊場式の中でも古い要素となろうか。下膨れの胴部形態で肩部に1段程度の刺突文で有段化しない30は菊川式後半古段階に並行しそうな資料であるが、胴部形態は典型的な菊川式ではない。折返口縁で肩部に複数の有段化した羽状刺突文が施された4・9・24・29は菊川式新段階（欠山式）に並行するものであり、伊場式新段階に伴わない。複合口縁の38は口縁部に有状刺突文が施されるもので、菊川式後半古段階に並行しそうである。小型壺のうち5・549は伊場式古段階になりそうなものも含むが、2・11・13・18・34・36・37・42・43は欠山式以降増加する小型土器と同形態であり、伊場式との区別は難しい。

高坏は1のように伊場式に特有なものを含むほか、22・41・543・545は伊場式新段階の典型的な高坏となるが、542は欠山式の高坏である。17は脚接合部に1段の羽状文の施された菊川式後半古段階に該当し、坏部は263・264のような鍔状口縁になる高坏である。544は鉢形高坏と呼ばれる菊川式後半古段階に該当するもので、583と584の口縁部も鉢形高坏になるものであろう。

台付甕については外反口縁で下膨れ胴になる566～568・571が伊場式のなかでも古段階の形態を示すほか、くの字状口縁で球形胴となる15・16・35が伊場式新段階になるものであろうか。19・20のように口縁部に刻目がなく、胴部にミガキ調整の入る特殊なものは、欠山式に該当するものであろうか。

欠山式段階　欠山式段階の土器は2号方形周溝墓、7・8号住居、6次調査土器棺1などが良好な資料となっている。壺は土器棺に使われた大型のほか、中型、小型の3種類が見られる。大型壺は176・589のように下膨れ形態で肩部に三角突帯文が施されたものが見られる。口縁部は欠損するが同形態の中型壺を参考にすると単純な外返口縁となろうか。中型壺は内彎口縁で球形胴の84・91・120・142・473が典型的な欠山式の形態である。45・50・56・57・60・61・79・82・83・121・123・127・139・140・143・144・161・468のように、胴部は下膨れ形態で折返口縁となり肩部に複数の有段羽状刺突文が施された

典型的な菊川式後半新段階以外にも、118の肩部に有段羽状文の施された内彎口縁のもの、81・89の棒状浮文の施された複合口縁のものも同段階に該当する。胴部形態は下膨れであるが肩部文様は無文か櫛描文の施された51・141・470～472は、西遠江でも中遠江に隣接した地域に分布する菊川式の影響を受けた欠山式の範疇に属する土器と考えたい。小型壺のうち球形胴で無文様か櫛描文の施された55・80・124～126・128・132～138は欠山式に属するもの、下膨れの胴部形態で無文か羽状刺突文の施された90・130・131と589の蓋は菊川式後半新段階に該当する。

高坏は伊場式段階に該当する54・129・158・174・179・181・182・464・465、内彎の脚となり広い口縁となる坏部で脚の長い78・183・462は欠山式の中でも古い様相、口縁部径が小さくなり短い脚となる46・119・157・178・457・458・460・461・463は欠山式の中でも新しい様相に該当する。有段羽状文が脚接合部の文様帯となる155・459は菊川式後半新段階に該当するが数は少ない。

台付甕は伊場式新段階とさほど区別のつかないくの字口縁で球形胴の152のほか、欠山式の甕特有のくの字口縁で長胴形態となる52・153・154・512と、口縁部の刻目がなくなりなで調整が施される73～75・168・170・511が存在する。513のような無台の甕も小数存在している。

419・466・468の形態は欠山式に存在する鉢（無頸壺？）、467の形態は欠山式だけでなく菊川式にも見られる鉢である。590は小型鉢、591はワイングラス型の脚付鉢で、いずれも欠山式に該当すると思われる。241～243は鉄石英製の細身の両面穿孔の管玉で、弥生時代の典型的な形態である。５点出土したと報告されているが、３点しか残されていない。

４．まとめ

芝本遺跡Ｈ地点の発掘調査で最大の成果は、弥生時代の方形周溝墓の報告例としてはかなり古い時期のものであり、学史的に価値のある遺跡であったことである。しかしながら、早期の段階で本報告書の刊行がなされなかったせいか、方形周溝墓の代名詞となった宇津木遺跡ほど全国に知れ渡ることはなかったことは残念なことであった。ただし今現在においても、静岡県内で調査例の少ない後期の方形周溝墓の類例としても、出土土器の質の高から見ても資料価値はいささかも損なわれてはいない。方形周溝墓だけでなく周辺に展開する住居群の状況も明らかにする調査がなされており、隣接する東原遺跡と共に弥生時代後期の拠点集落の内容を知るうえでも良好な調査例となっている。すなわち、周辺の住居の密集度が高いのに対して墓の数が少ない現象は、墓の数の多い中期の方形周溝墓とは明らかに異なる状況のため、後期段階で方形周溝墓の被葬者層がかなり限定されてきたことを物語るのであろう（松井・鈴木2004）。土器の出土状況も丁寧な図面が残されており、破片と完形品が混在する状態であったことが明らかとなった。周溝内には上層を中心として土器の破片が大量に廃棄されおり、なかに完形品に近いものも上層に含んでいた。完形品ばかりでなく破片の中にも底部穿孔土器が含まれているため、生活域からの廃棄土器が一部含まれている可能性はあるものの、主に葬送儀礼に用いられた土器を破砕して周溝内に何回かにわけて廃棄した可能性が高い。１号方形周溝墓は伊場式新段階から欠山式に継続して、２号方形周溝墓は欠山式段階に埋葬がなされたと考えられる。また、小型土器を中心として焼成前穿孔のものが含まれるため、祭祀専用土器の出現もあったと指摘できる。

方形周溝墓や住居跡から伊場式新段階～欠山式の良好な土器が出土しているが、壺形土器の半数に近い個体に中・東遠江に分布する菊川式が大量に含まれ、とくに後期後半新段階（欠山式並行）が半数近くを占めることが明らかとなった。高坏は菊川式の搬入品が一定量存在するが壺ほど多くはない。甕については長胴甕や口唇部なで調整のものを多く含むため、菊川式の影響は少ないと見られる。このよう

な土器の様相は西遠江でも天竜川流域に見られる特徴であると指摘したい（松井・鈴木2004）。

芝本遺跡Ｈ地点の発掘調査から得られた資料は、隣接の東原遺跡の集落の様相と土器の傾向を知るうえで貴重な資料となっているばかりでなく、弥生時代の代表的な墓制である方形周溝墓発見の学史を語るうえでも注目に値する遺跡である。

一高等学校の継続的なクラブ活動として発掘調査を支えて下さった学生や顧問の先生、調査を長期に渡り指導して頂きました下津谷達男先生と芳名をあげられませんでしたが、関係者の皆様方のご支援に感謝し、まとめの言葉としたい。

【参考文献】（芝本遺跡関係文献）

浜北市教育委員会　1985『浜北市芝本遺跡Ｂ地点』

浜北市教育委員会　1998「芝本遺跡Ｄ地点」『平成９年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』

浜北市教育委員会　2001「芝本遺跡Ｈ地点」『平成12年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』

浜名高等学校史学クラブ　1963「芝本弥生特殊遺跡（昭和38年度調査）」『伎倍１号』

浜名高等学校史学クラブ　1968「芝本弥生遺跡（第１～５次・昭和38～43年度調査）『伎倍２号』

浜名高等学校史学クラブ　1979「芝本弥生遺跡（第６次・昭和49年度調査）『伎倍６号』

静岡県教育委員会　1965　『静岡県埋蔵文化財地図』

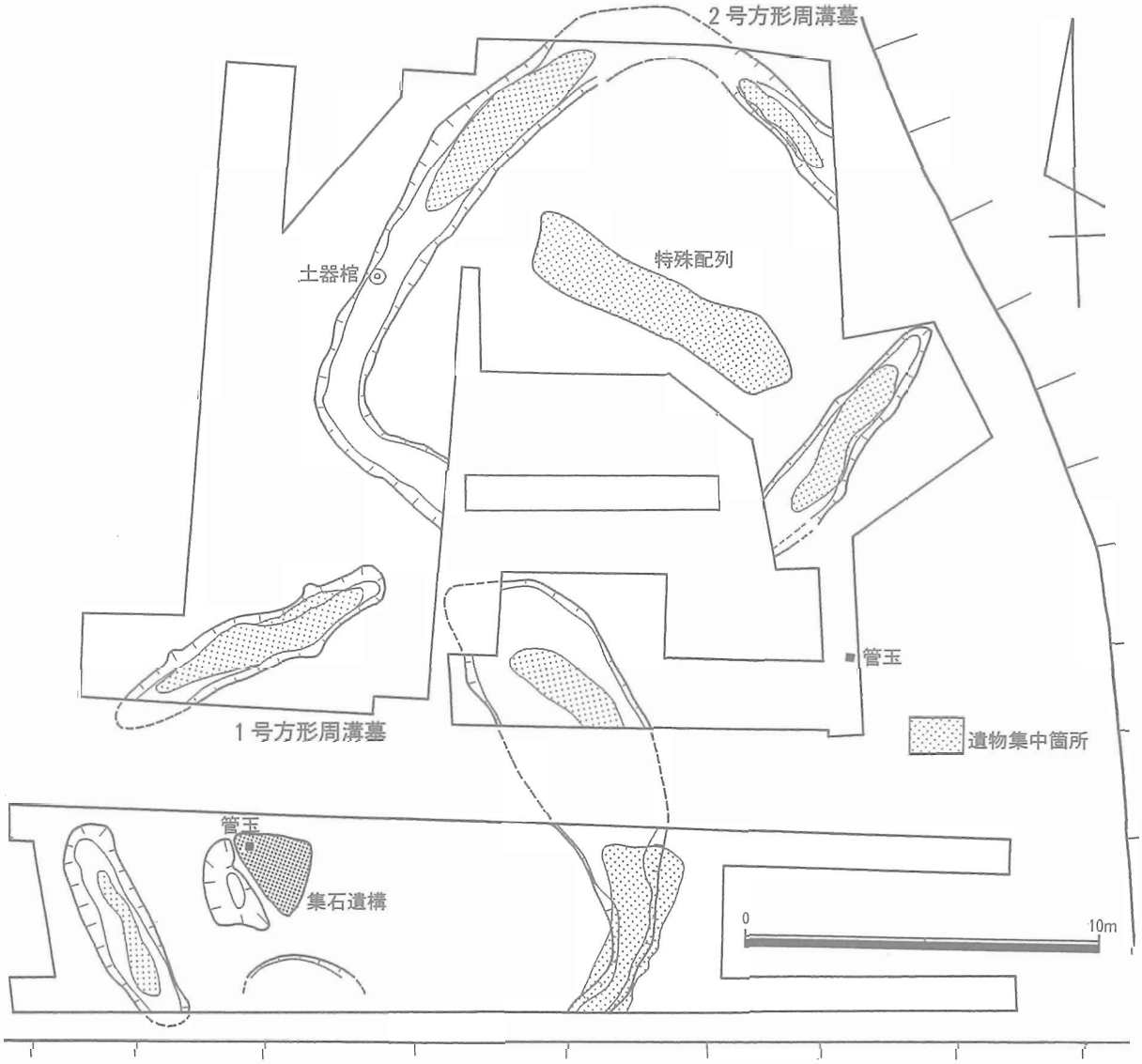
久野正博　1985「芝本Ｈ地点発掘調査の中間報告」『浜北市芝本遺跡Ｂ地点』浜北市教育委員会

久野正博　2004「芝本遺跡」『浜北市史資料編原始・古代・中世』浜北市

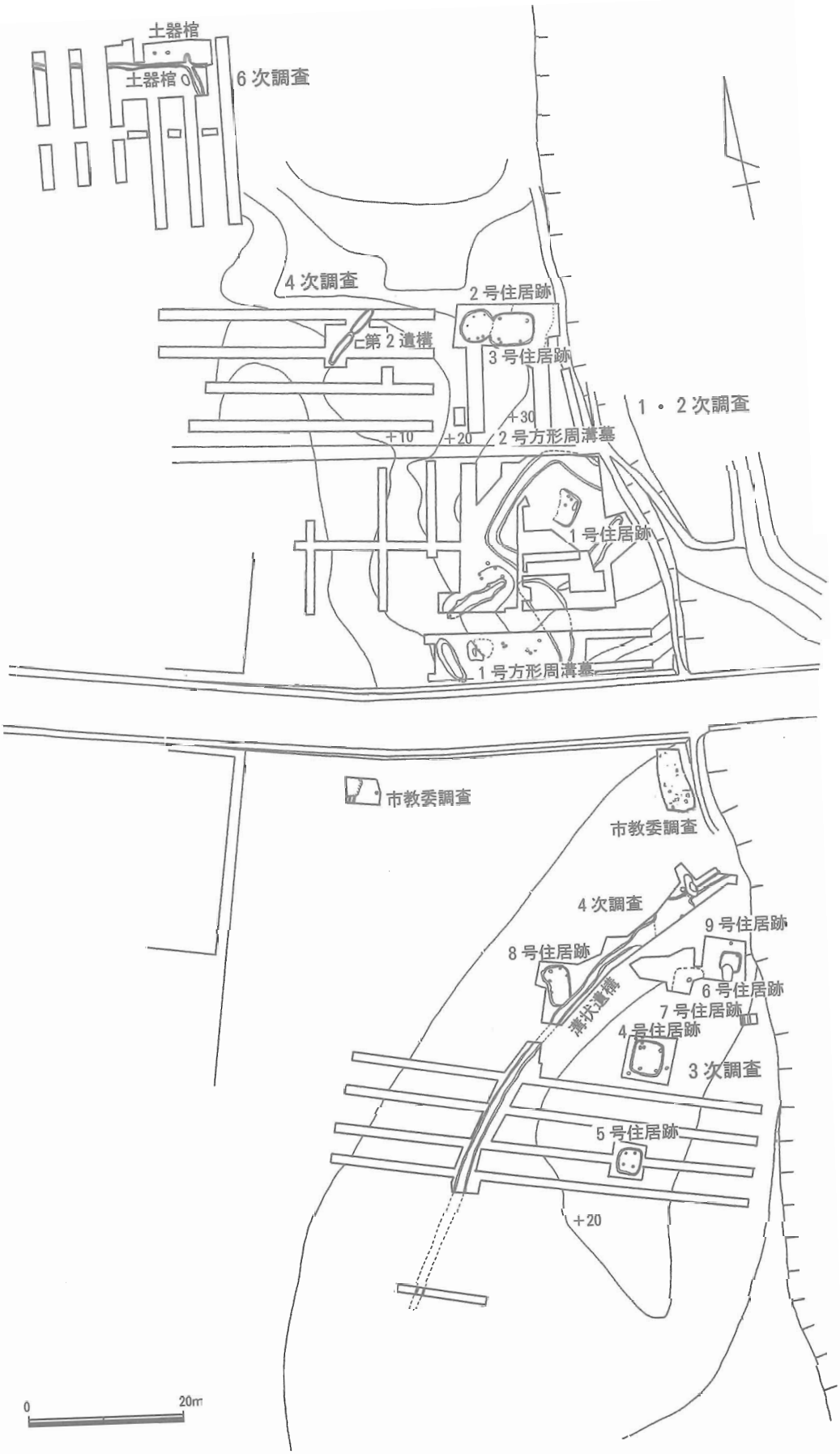
松井一明　1989「稲作農耕と「むら」のはじまり」『浜北市史通史編上巻』浜北市

松井一明・鈴木京太郎　2004「芝本・東原遺跡より見た弥生後期集落と土器」『浜北市史資料編原始・古代・中世』浜北市

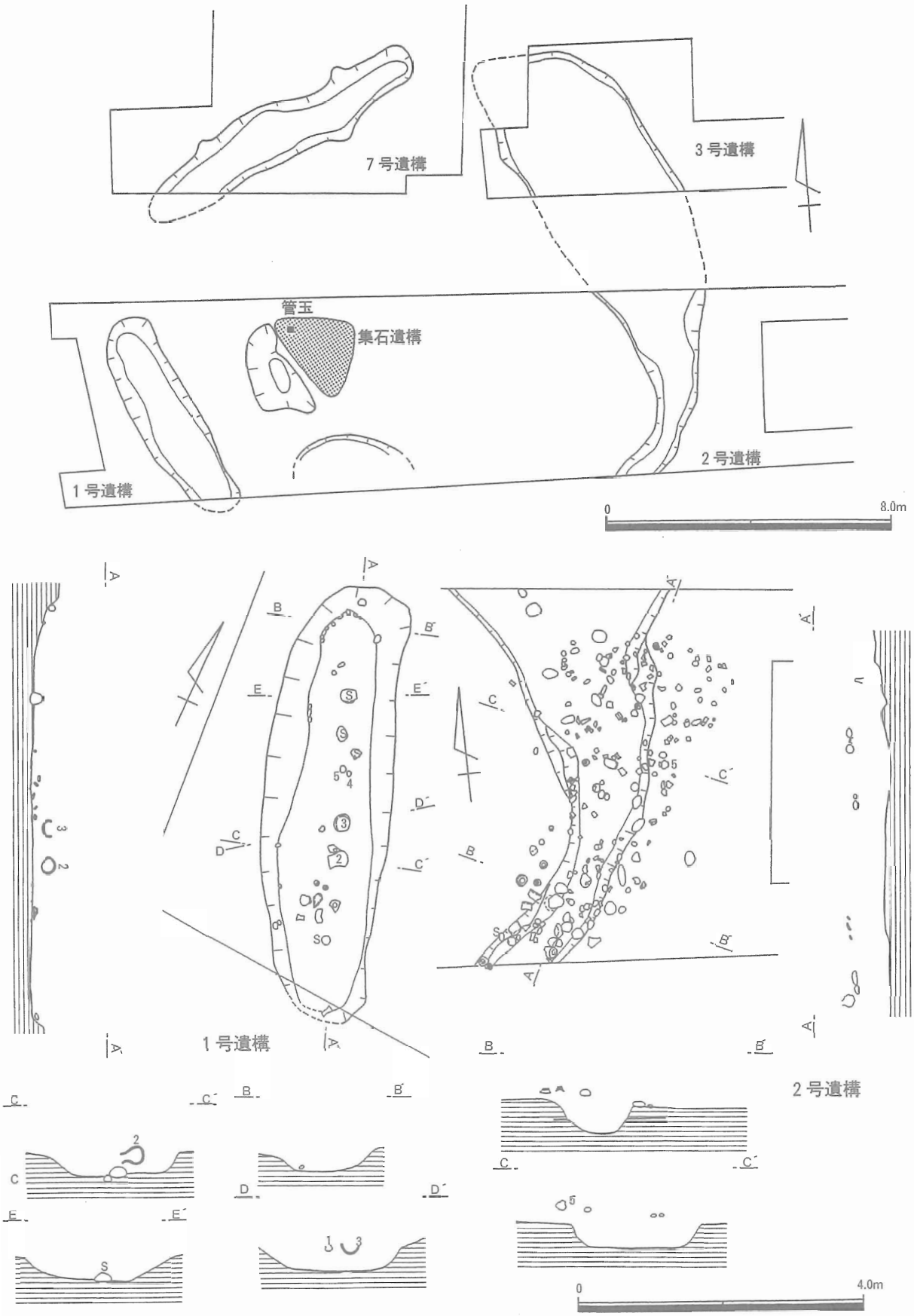
第１図　調査位置図



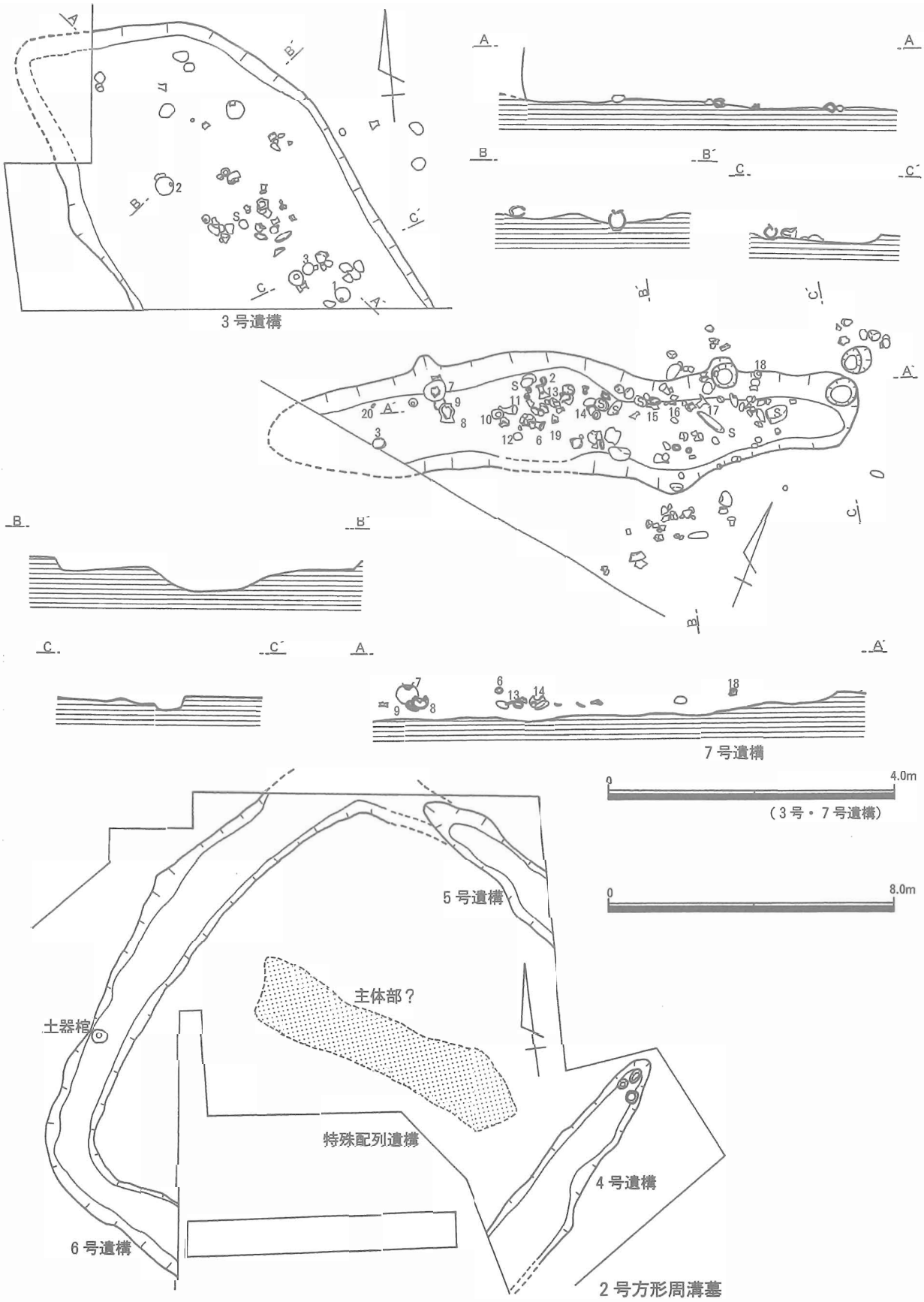
第２図　方形周溝墓　実測図


土器棺
土器棺
6次調査
4次調査
2号住居跡
第2遺構
3号住居跡
1・2次調査
+30
+10
+20
2号方形周溝墓
1号住居跡
1号方形周溝墓
市教委調査
市教委調査
4次調査
9号住居跡
8号住居跡
6号住居跡
7号住居跡
溝状遺構
4号住居跡
3次調査
5号住居跡
+20
0
20m

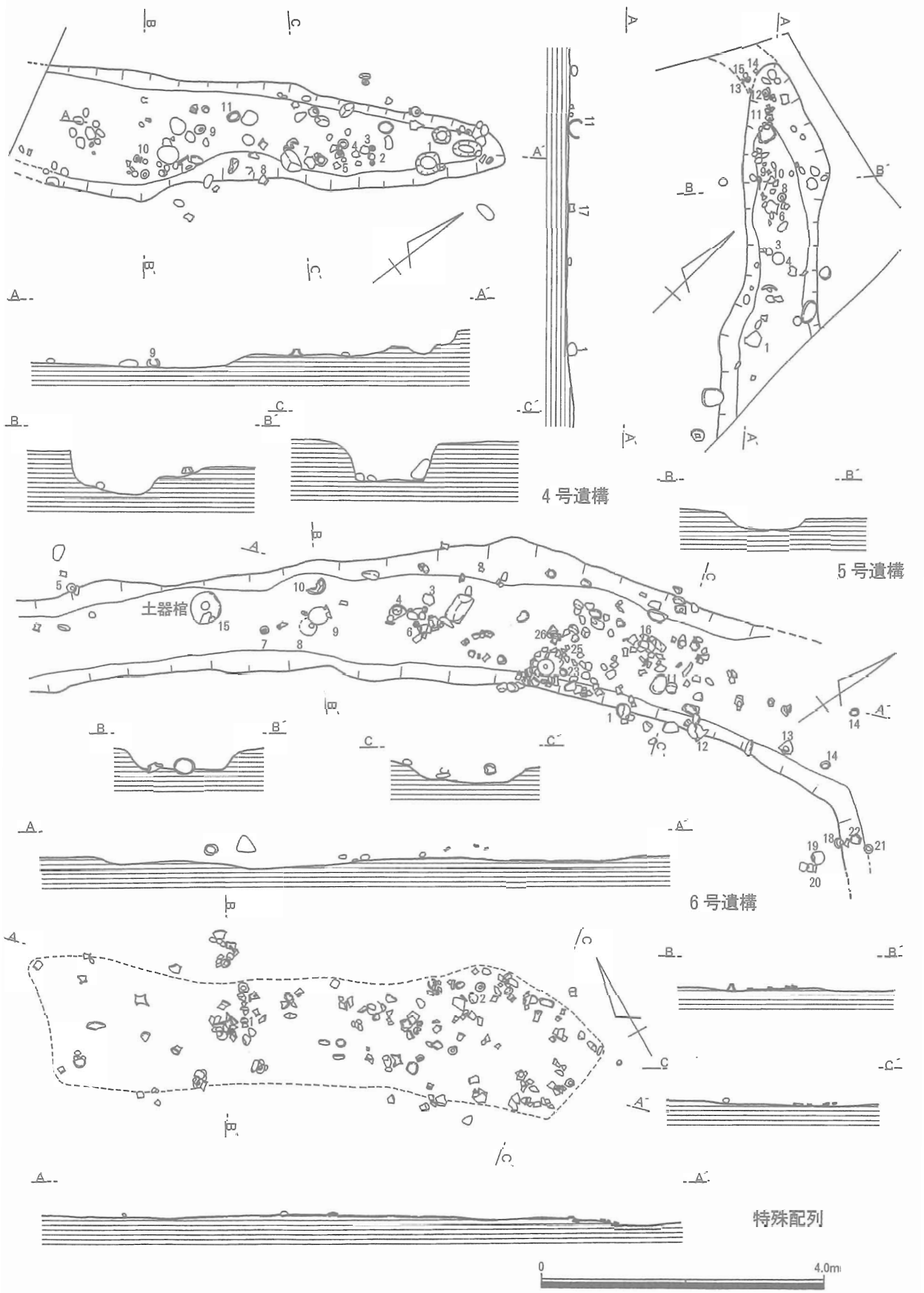
第3図　H地点全体図



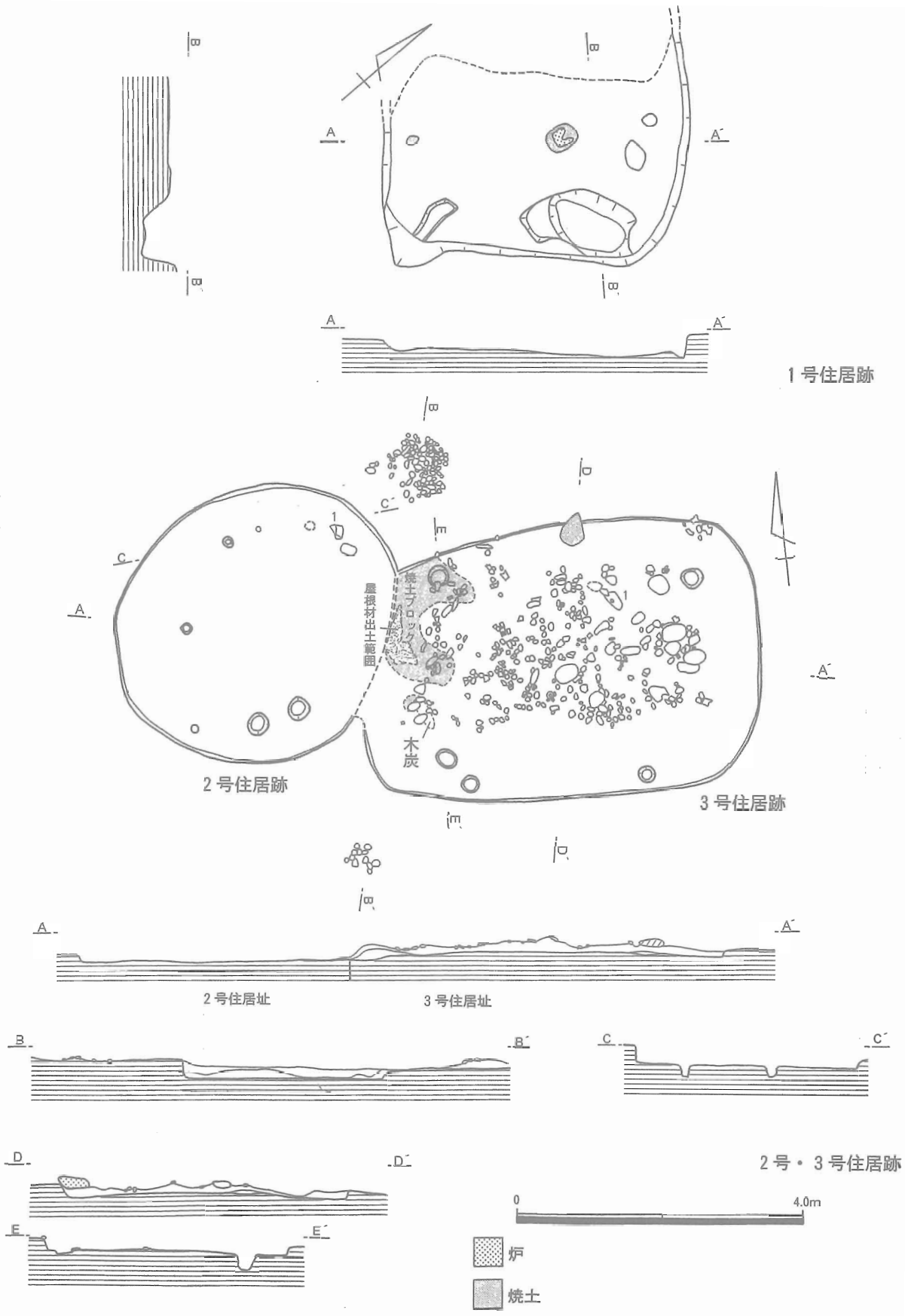
第4図　1号方形周溝墓（1号・2号遺構）実測図



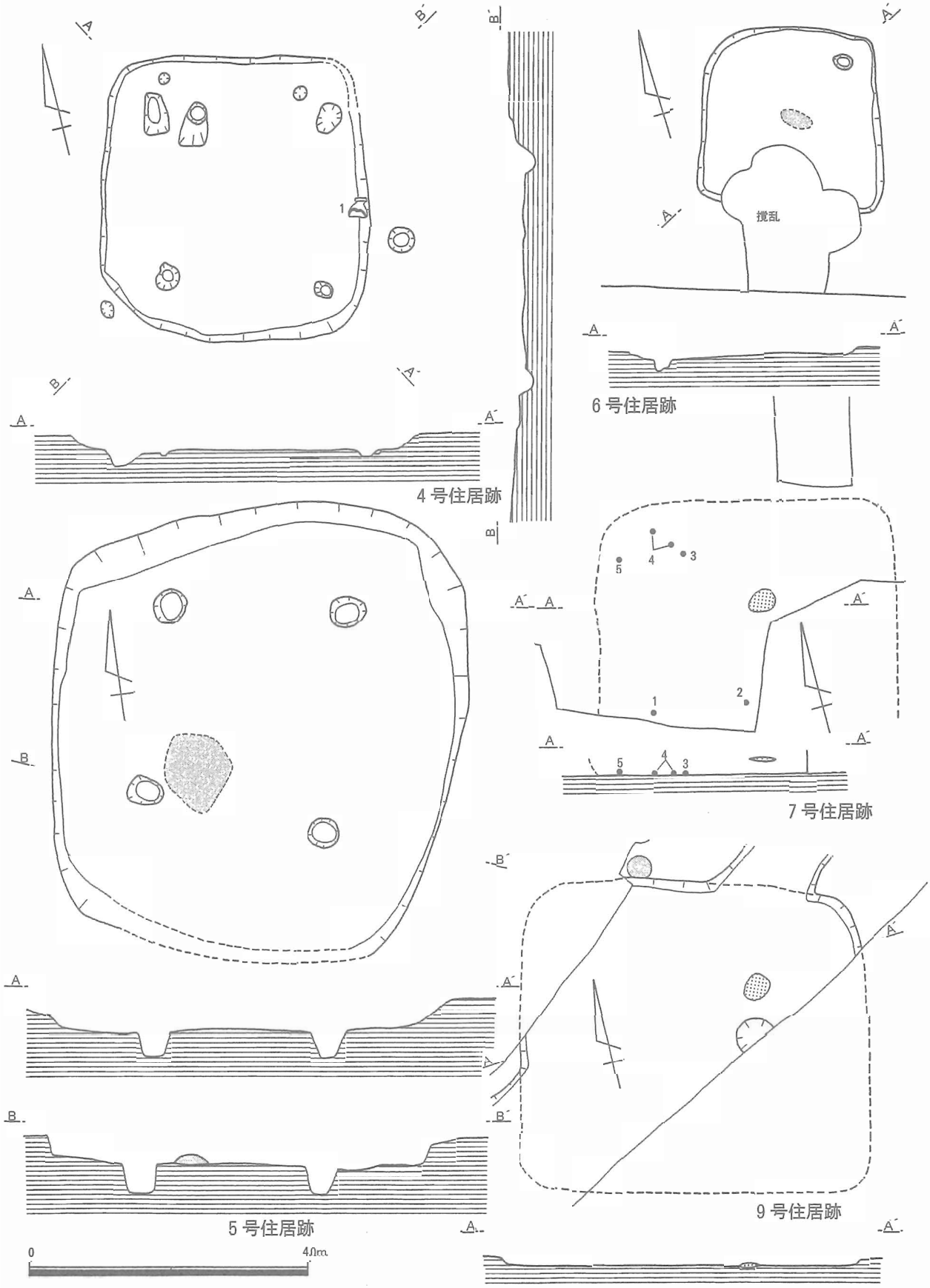
第5図　1号方形周溝墓（3号・7号遺構）・2号方形周溝墓実測図



第6図　2号方形周溝墓（4号遺構・5号遺構・6号遺構・特殊配列）実測図

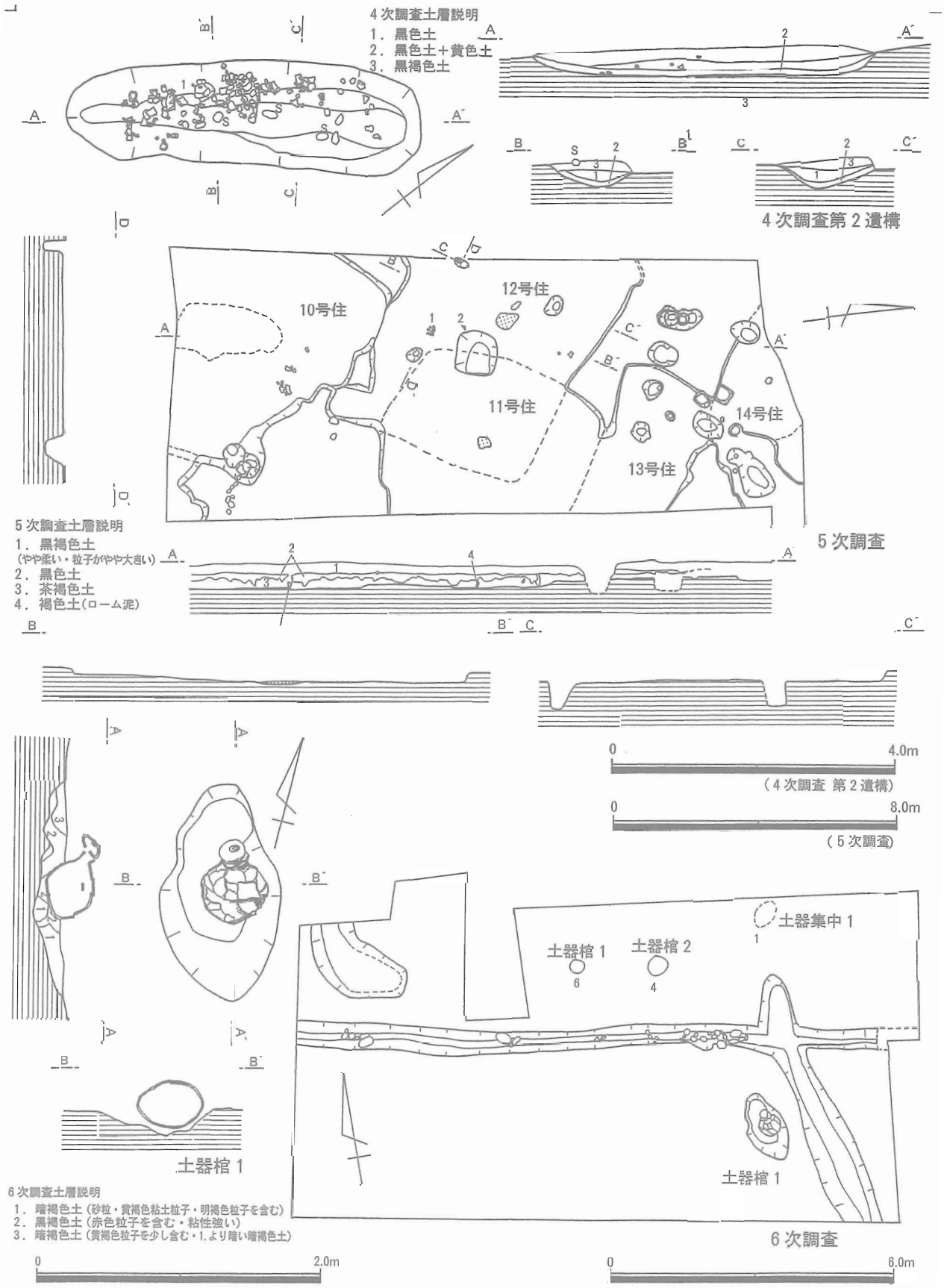


第7図　1・2・3号住居跡 実測図

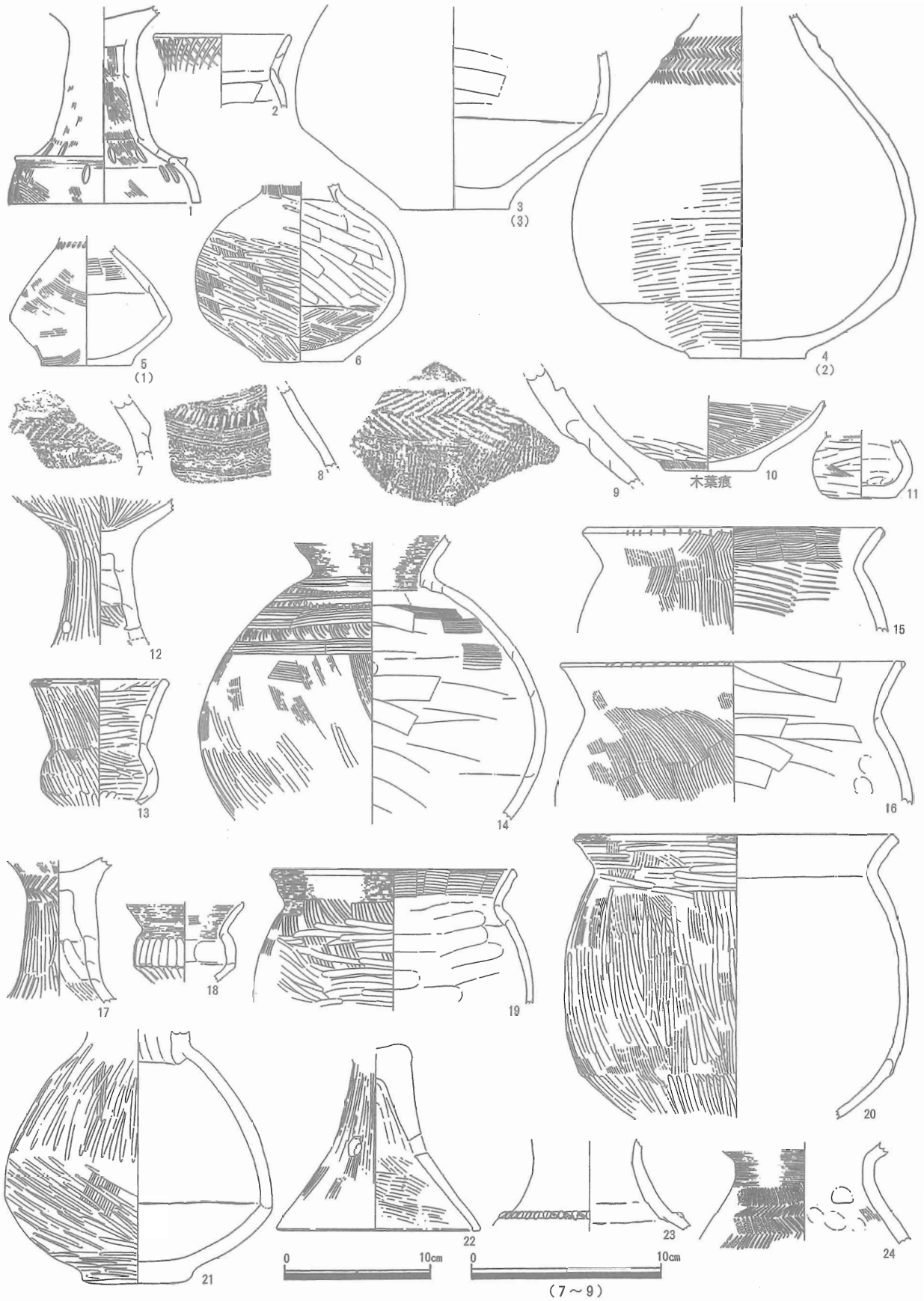


第8図　4号・5号・6号・7号・9号住居跡 実測図

第９図　８号住居跡 実測図



第10図　4次（第2遺構）5・6次調査　実測図

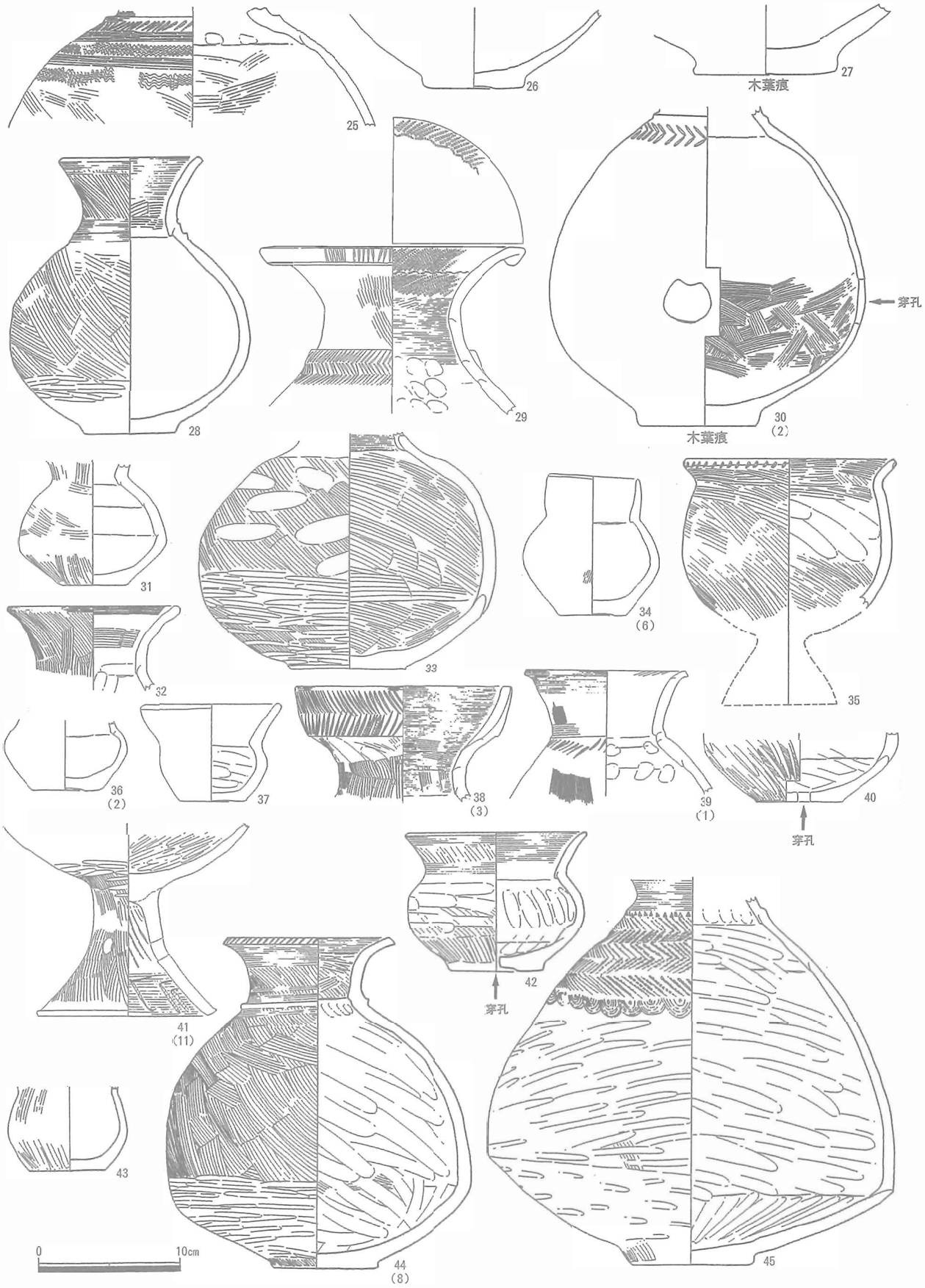


※（　）内番号は遺構番号と一致する。

1	1号方形周溝墓	7～9	2号遺構	18	2号遺構　2層下
2	1号遺構	10・11	2号遺構　上層	19・20	2号遺構　2層下
3～5	1号遺構　中層	12～16	2号遺構　中層	21	3号遺構
6	1号遺構　下層	17	2号遺構　2層	22～24	3号遺構　上層

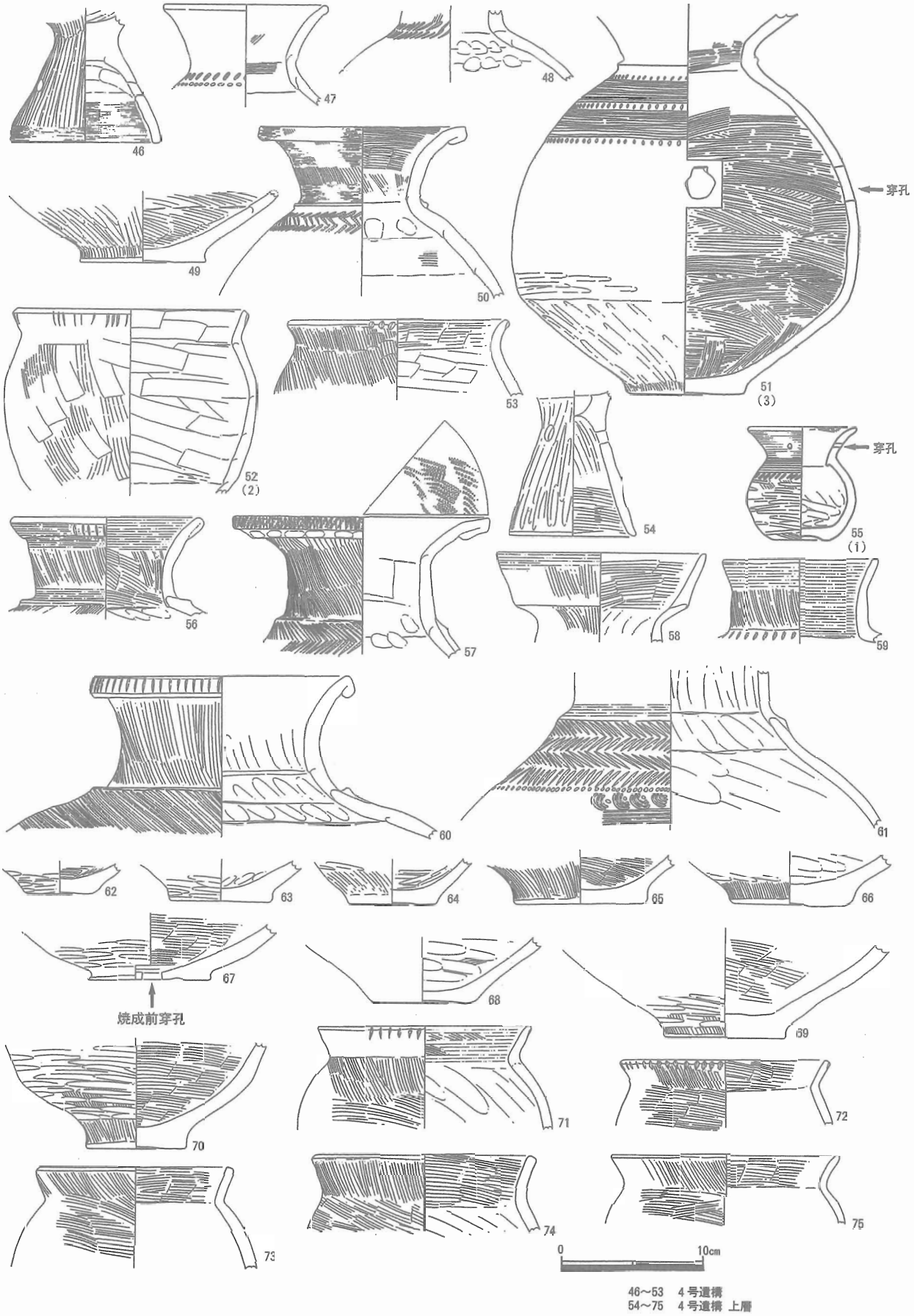
（7～9）

第11図　土器実測図（1）

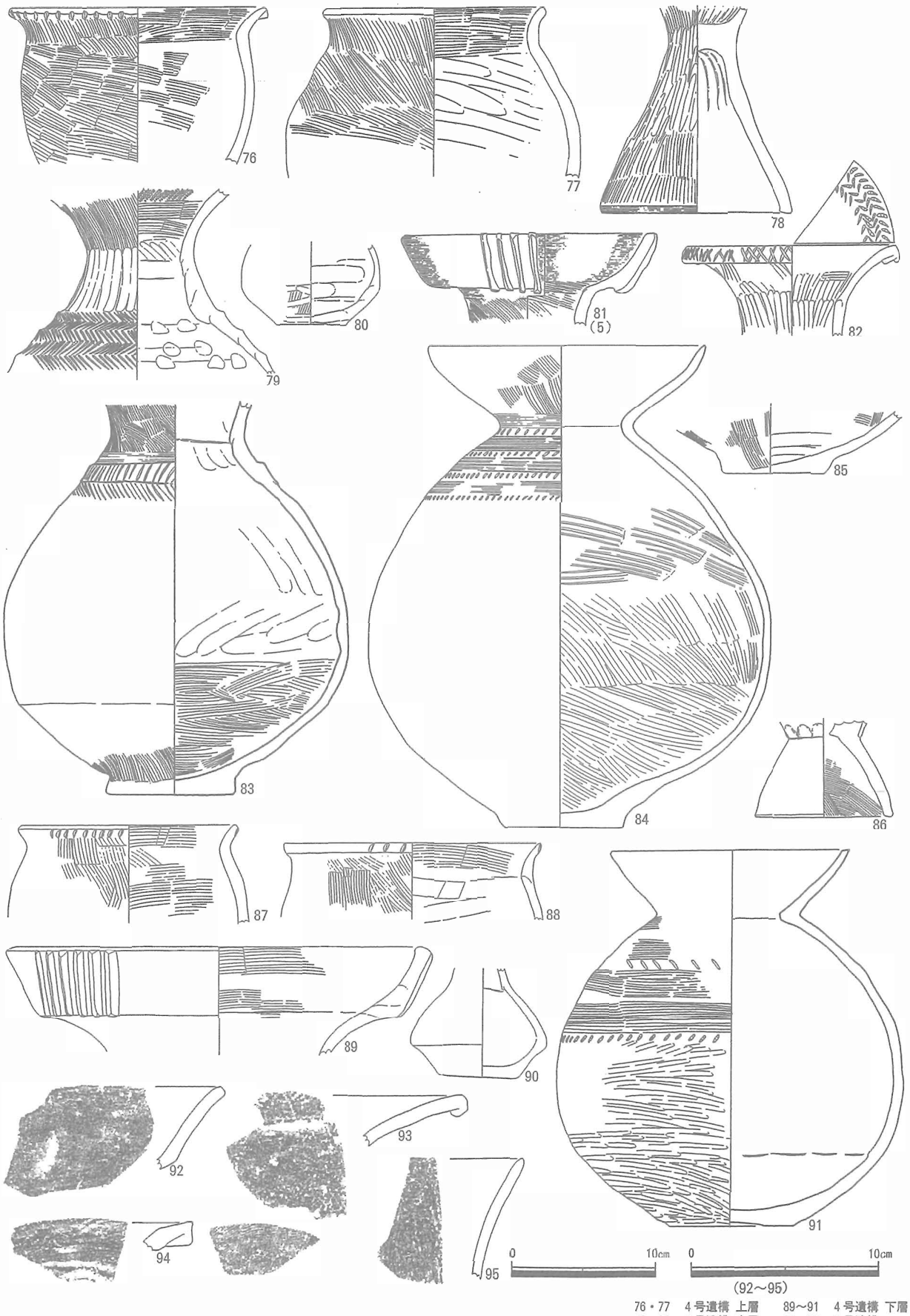


25～30　3号遺構 上層　　36～40　7号遺構上層
31　3号遺構 下層　　41～44　7号遺構下層
32～35　7号遺構　　45　2号方形周溝墓（表採）

第12図　土器実測図（2）

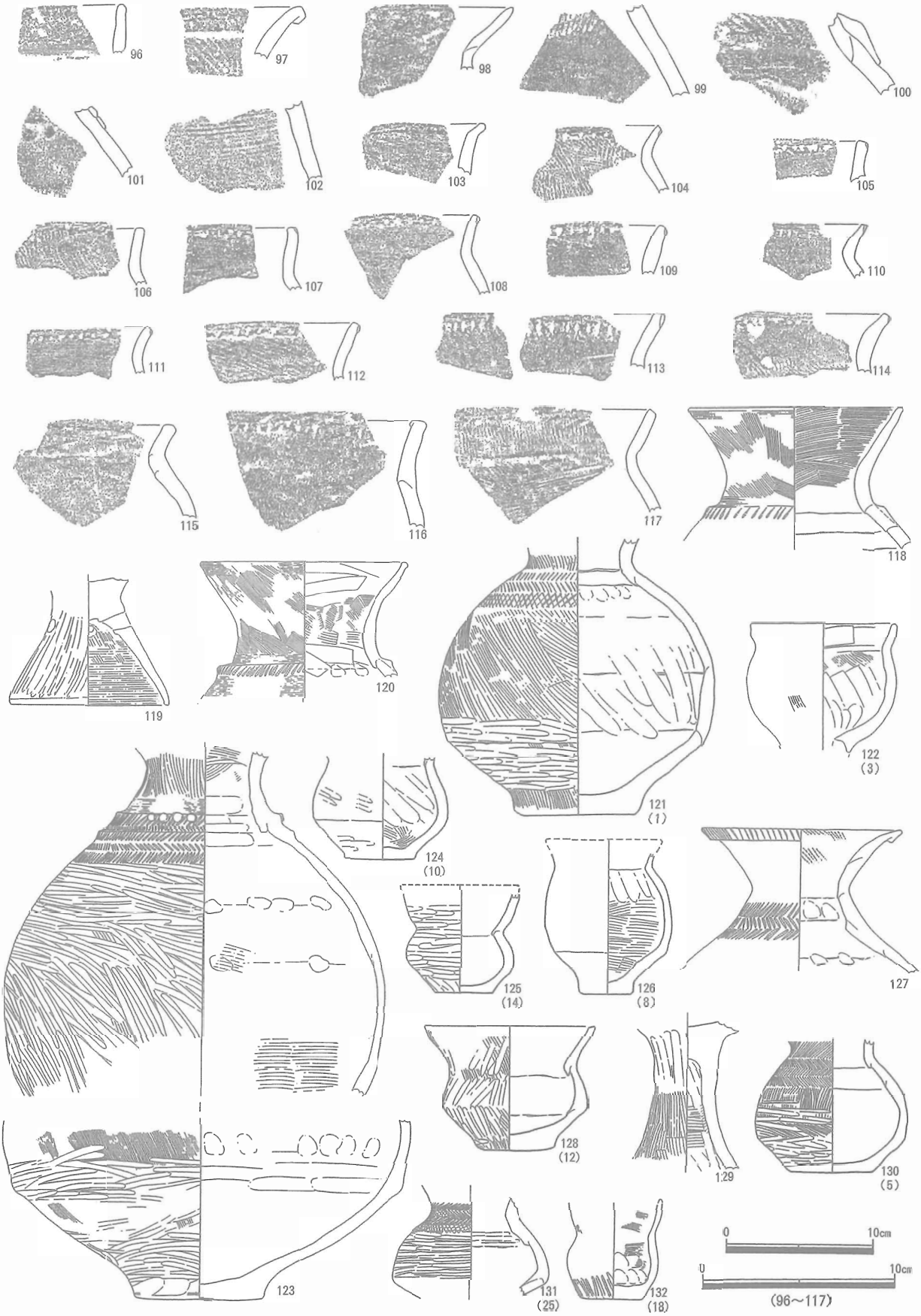

46
47
48
49
50
51
(3)
穿孔
52
(2)
53
54
55
(1)
穿孔
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
焼成前穿孔
68
69
70
71
72
73
74
75
0
10cm
46～53　4号遺構
54～75　4号遺構 上層

第13図　土器実測図（3）



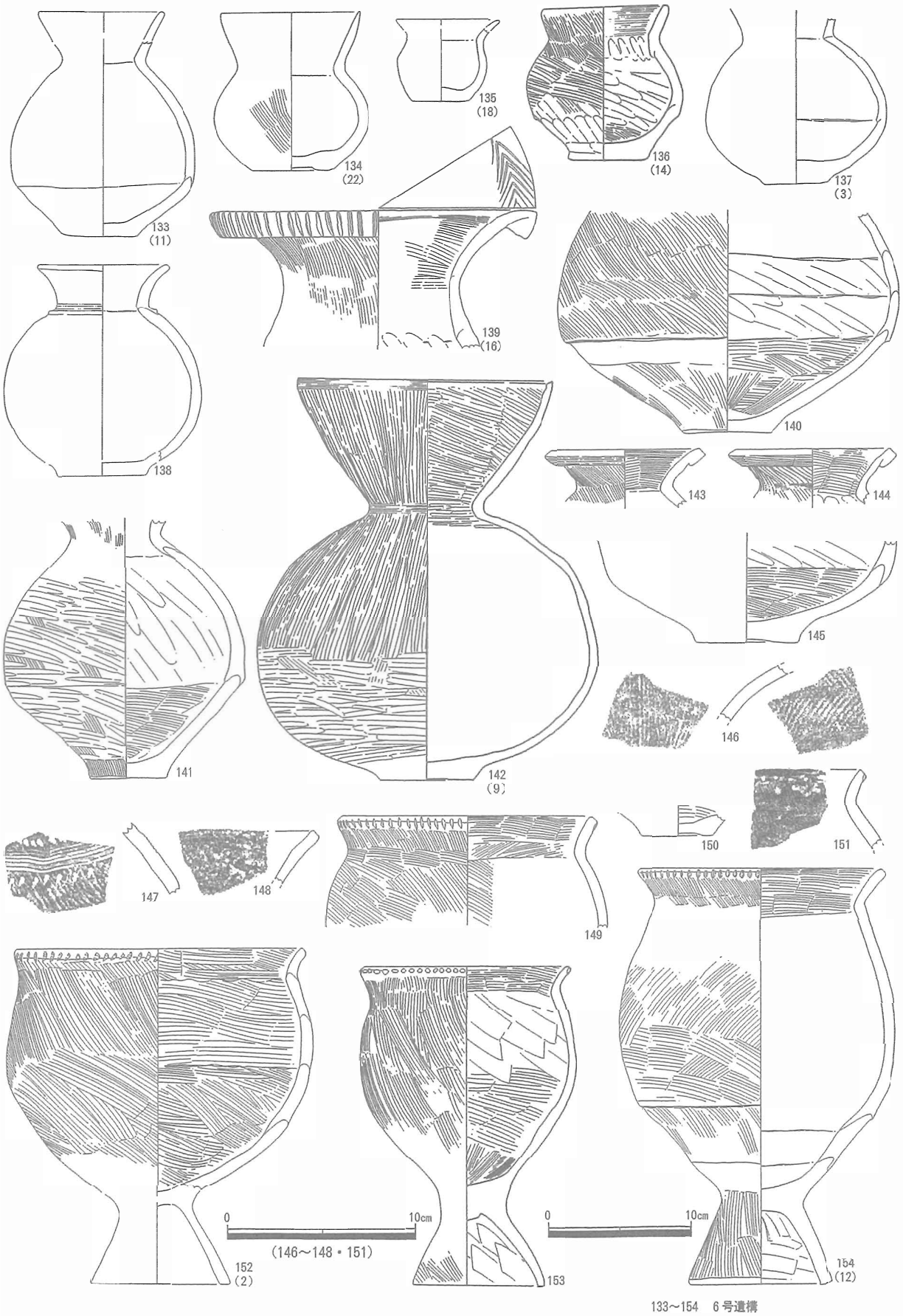
76・77　4号遺構 上層　　89～91　4号遺構 下層
78～88　4号遺構 中層　　92～95　5号遺構

第14図　土器実測図（4）



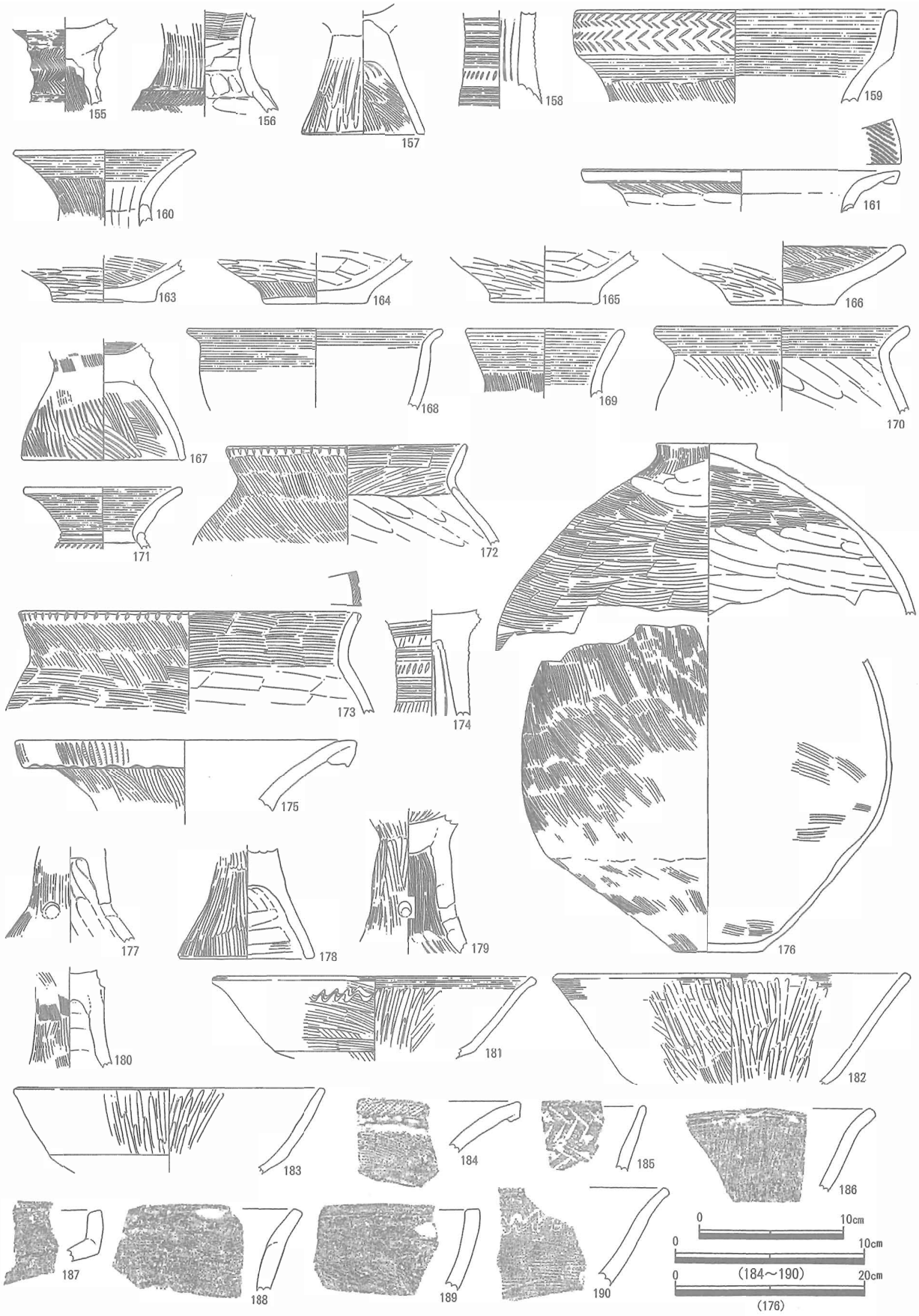
96～117　5号遺構
118　5号遺構 中央
119～122　5号遺構 中層
123～128　5号遺構 下層
129～132　6号遺構

第15図　土器実測図（5）



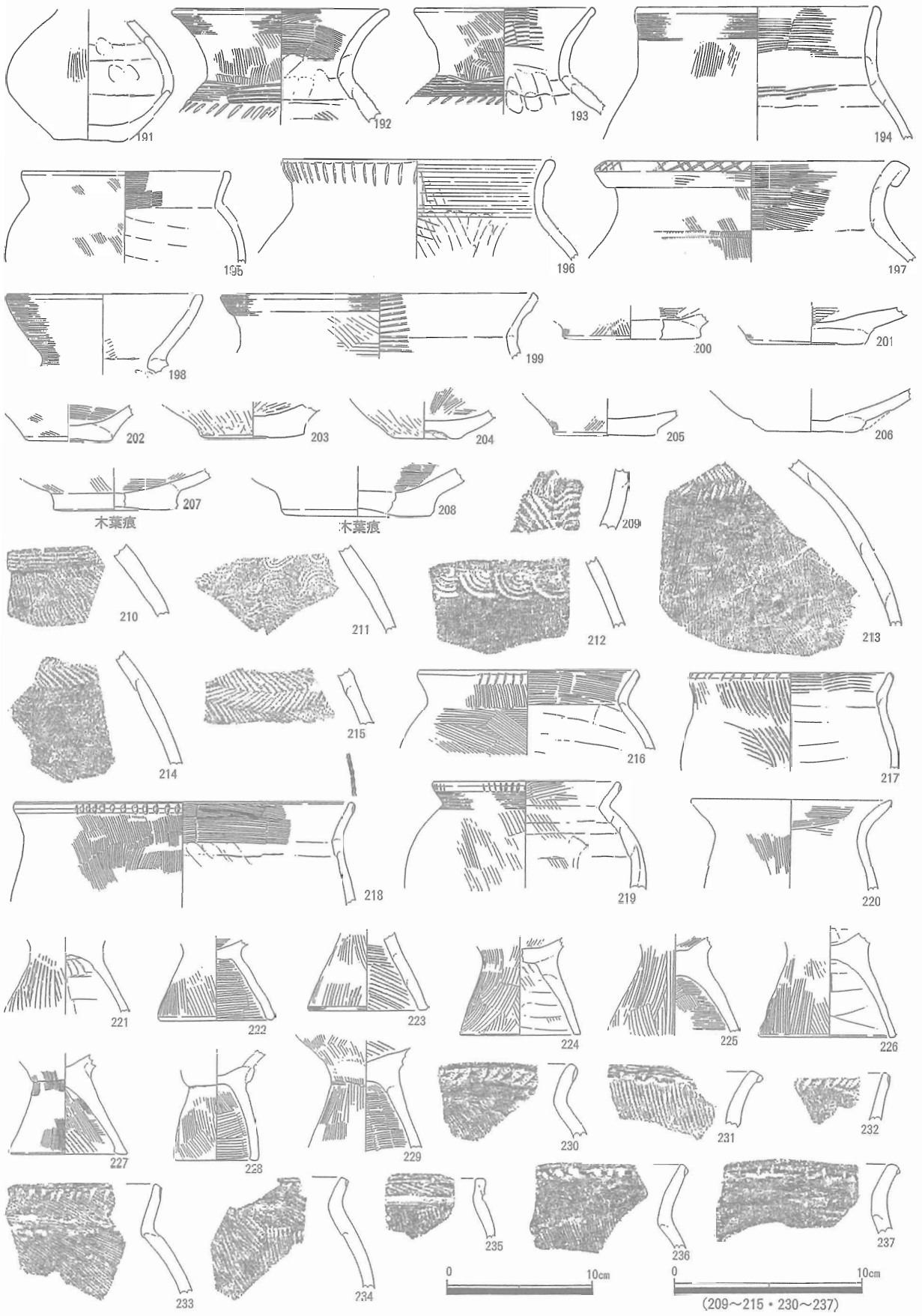
133～154　6号遺構

第16図　土器実測図（6）



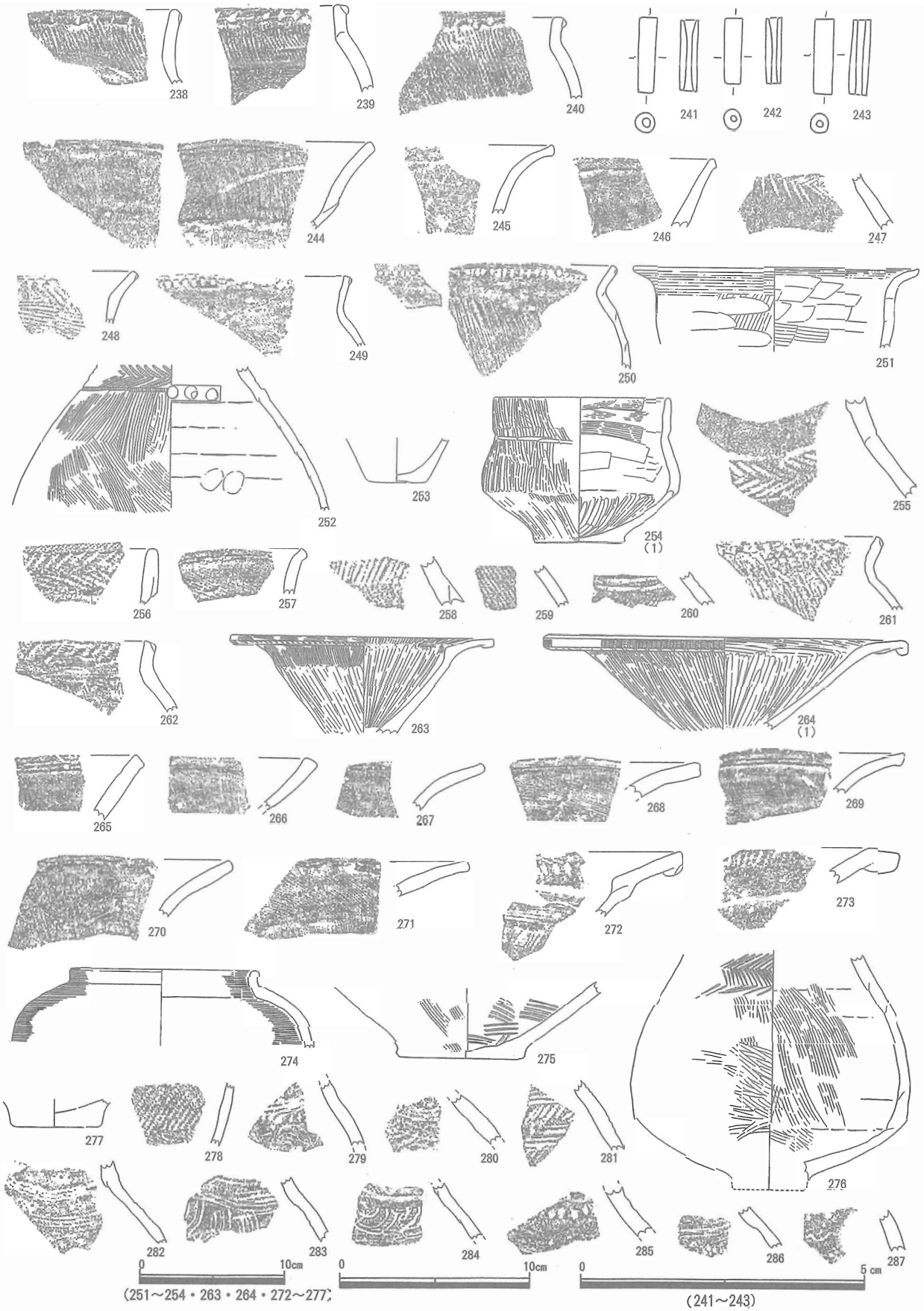
155・156　6号遺構上層
157～167　6号遺構中・下層
168～170　6号遺構1区中・下層
171～173　6号遺構2区中・下層
174　6号遺構3区中・下層
175　6号遺構5区
176　6号遺構土器棺
177～190　特殊配列遺構

第17図　土器実測図（7）



191～234　特殊配列遺構

第18図　土器実測図（8）

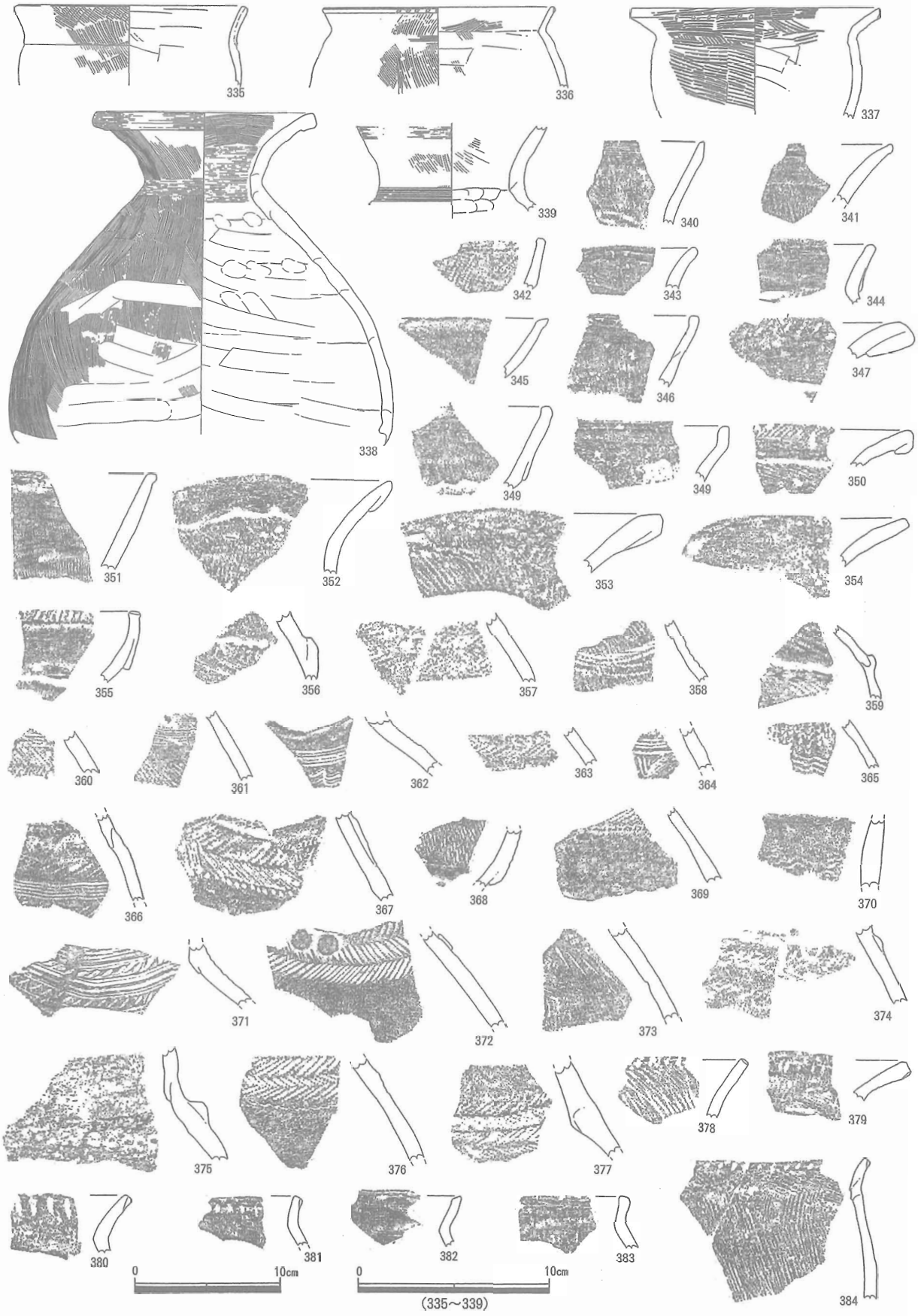


238～240　特殊配列遺構　　251～262　2号住居跡
241～243　方形周溝墓付近　　263～237　3号住居跡
244～250　1号住居跡

第19図　土器実測図（9）

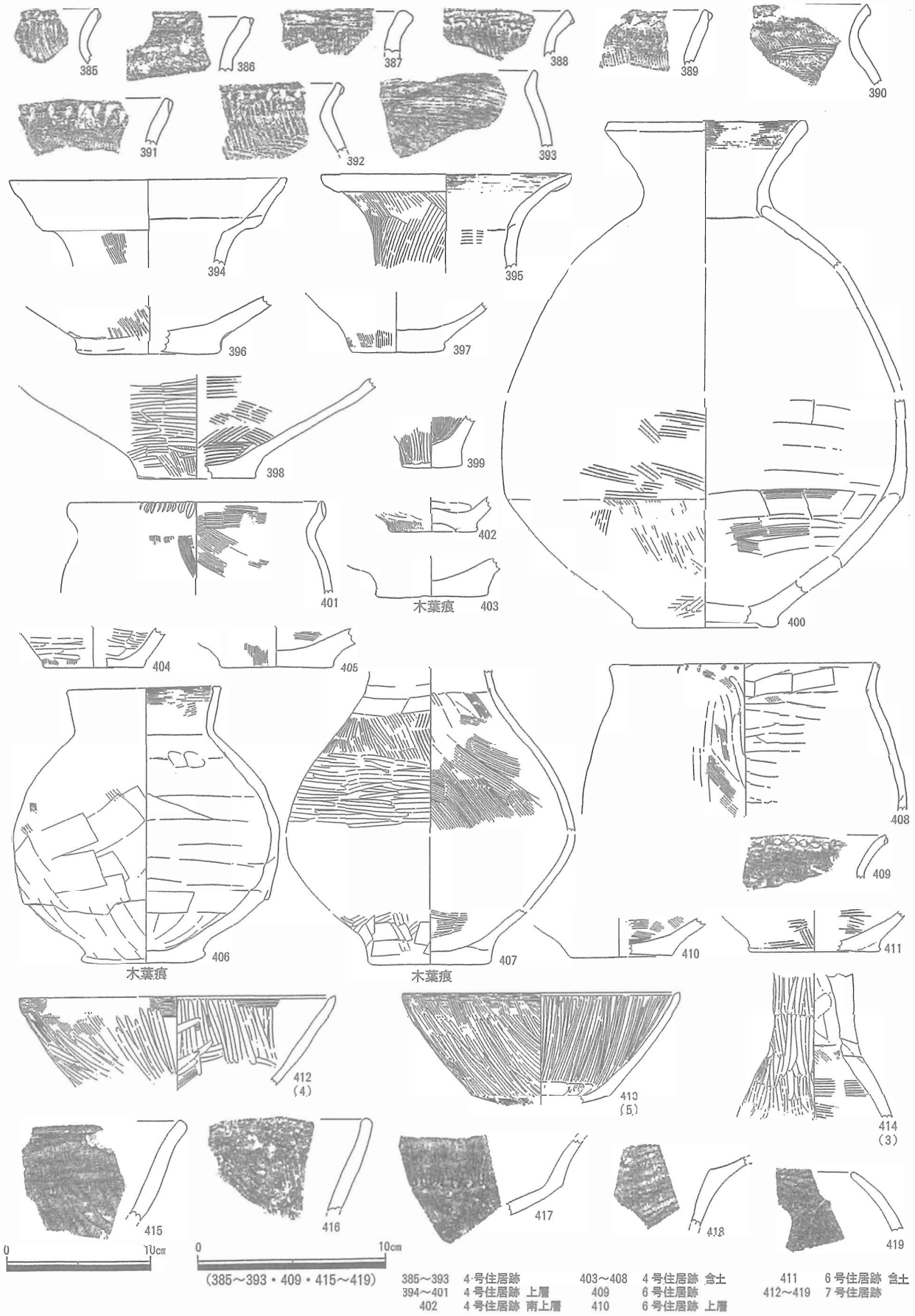
288～323　3号住居跡
324～334　3号住居跡 上層

第20図　土器実測図（10）



335～337　3号住居跡 上層
338～384　4号住居跡

第21図　土器実測図（11）

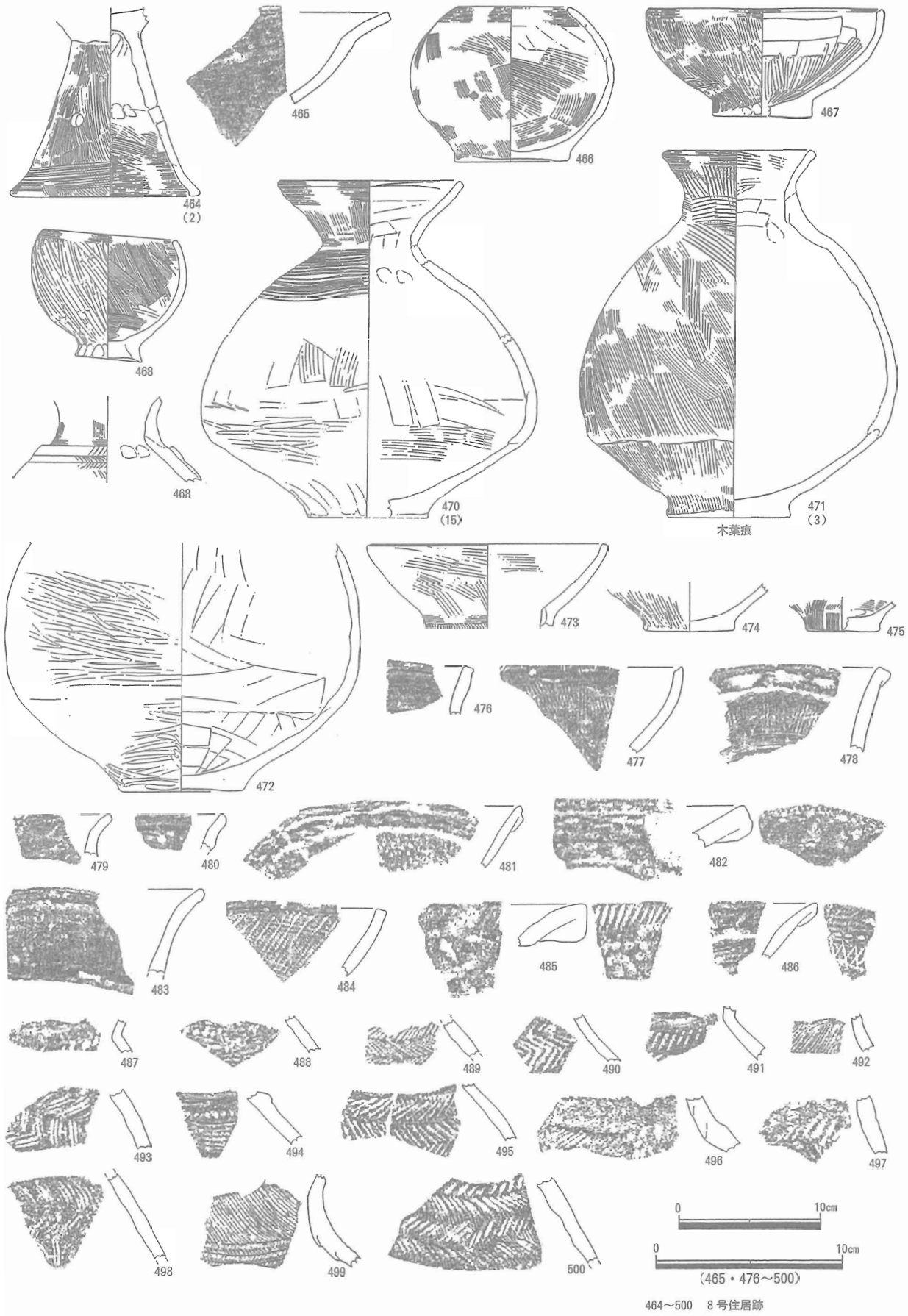


385～393	4号住居跡	403～408	4号住居跡 含土	411	6号住居跡 含土
394～401	4号住居跡 上層	409	6号住居跡	412～419	7号住居跡
402	4号住居跡 南上層	410	6号住居跡 上層		

第22図　土器実測図（12）

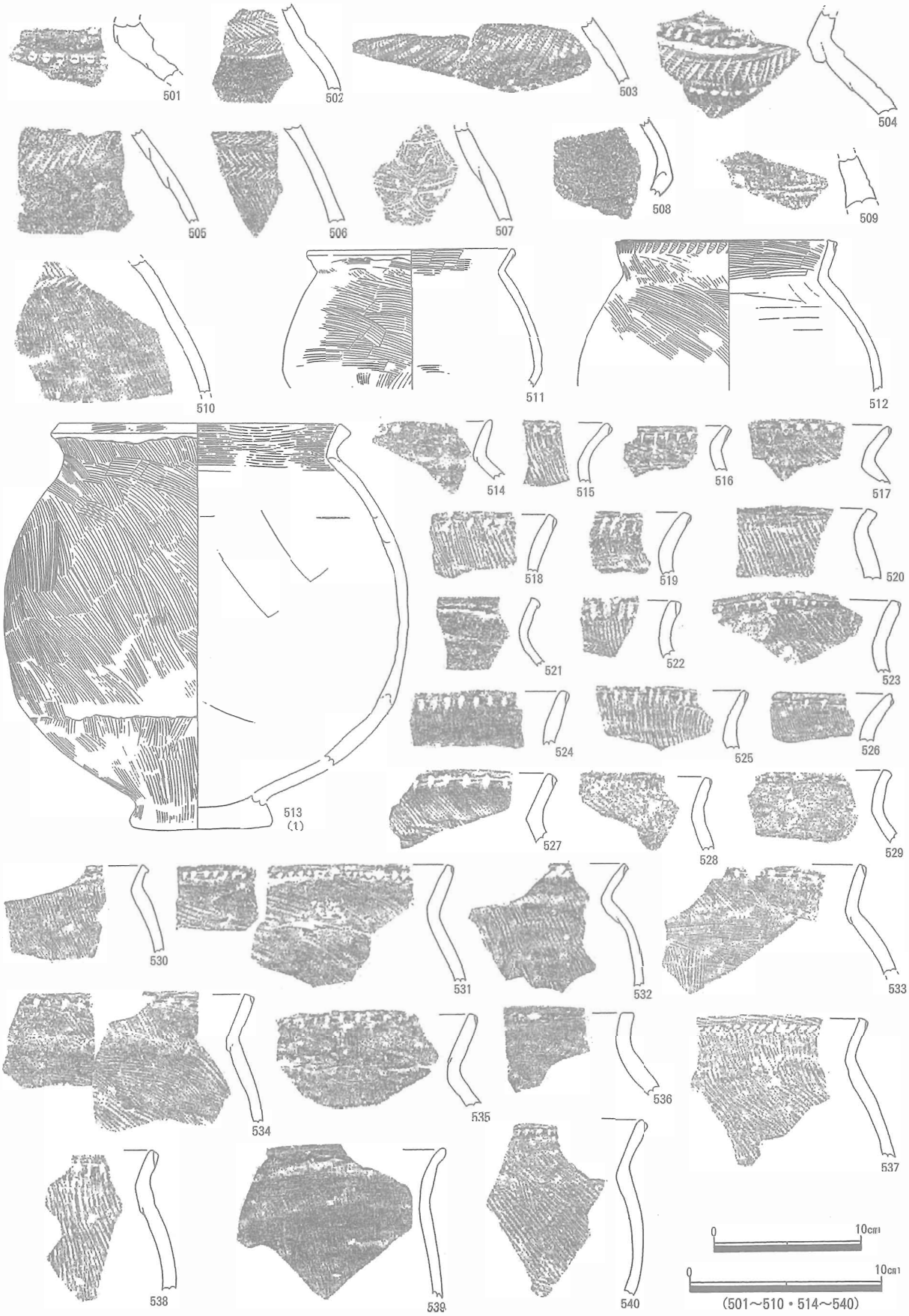
420～453　7号住居跡　　456　7号住居跡 上層
454・455　7号住居跡 含土　　457～463　8号住居跡

第23図　土器実測図（13）



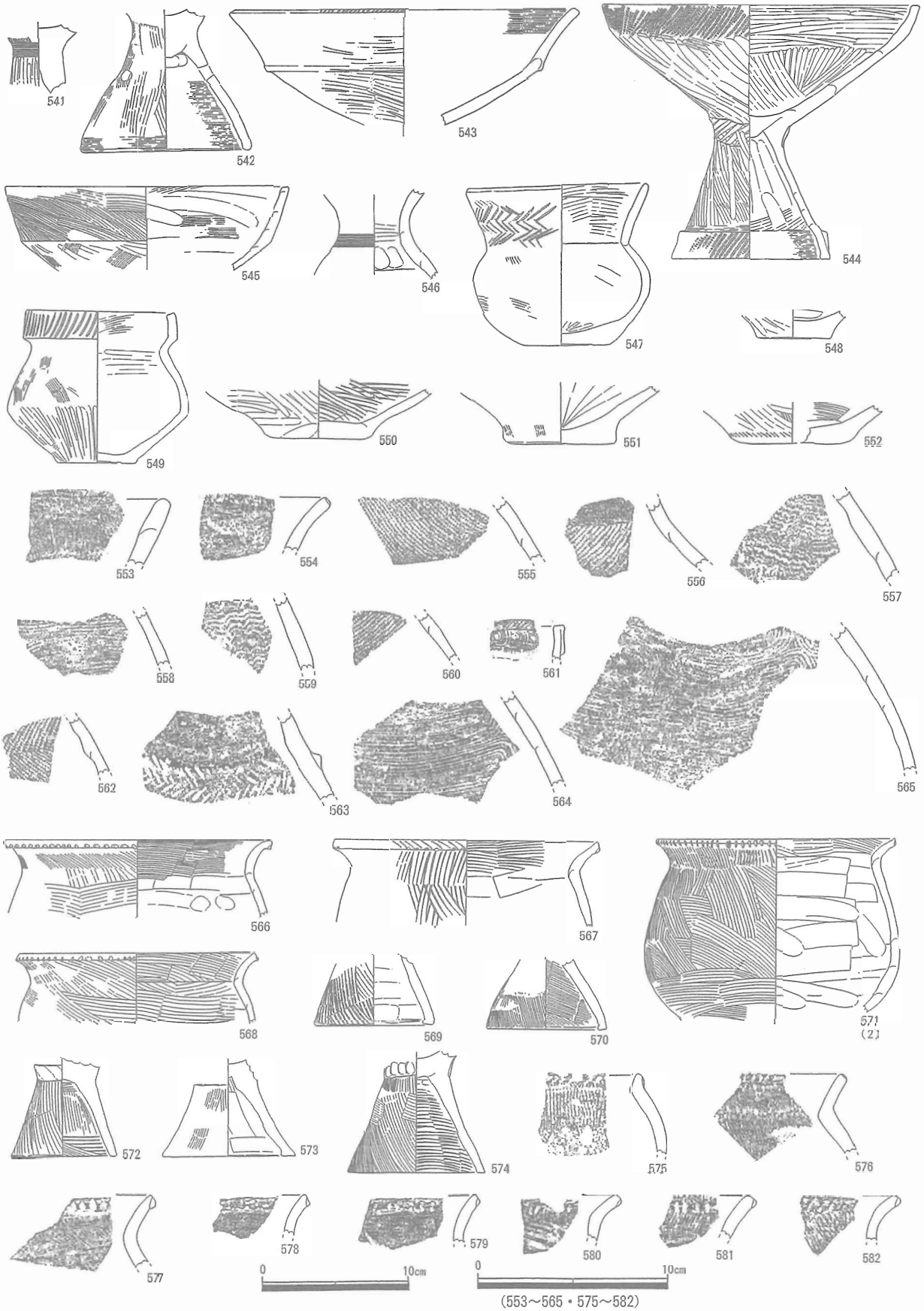
464～500　8号住居跡

第24図　土器実測図（14）



501～540　8号住居跡

第25図　土器実測図（15）



(553～565・575～582)

541～582　4次調査第2遺構

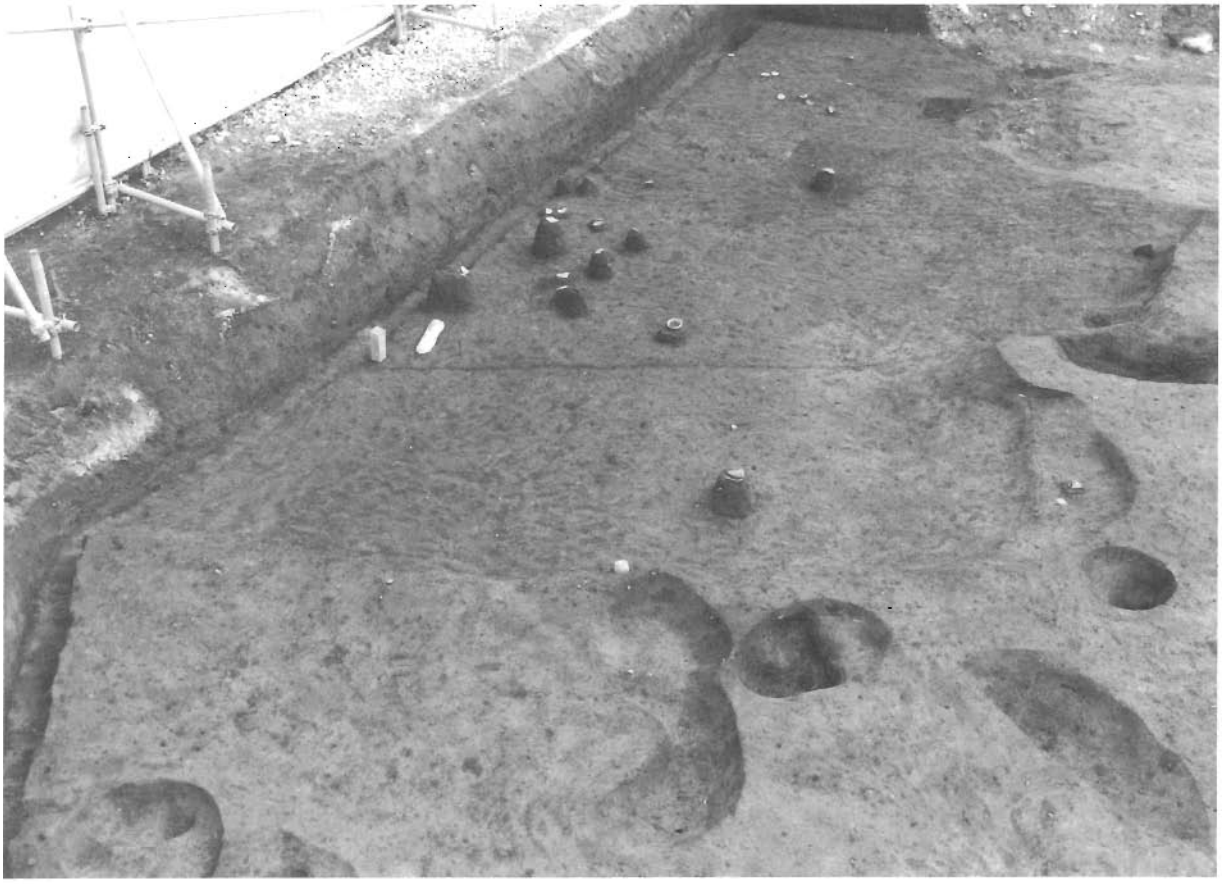
第26図　土器実測図（16）

583・584　4次調査 第2遺構
585～588　5次調査
589　6次調査 土器棺1
590　6次調査 土器集中2
591　6次調査 土器集中3
592・593　その他 中世包含層
594～597　その他 不明

第27図　土器実測図（17）

写　真　図　版

図版 1

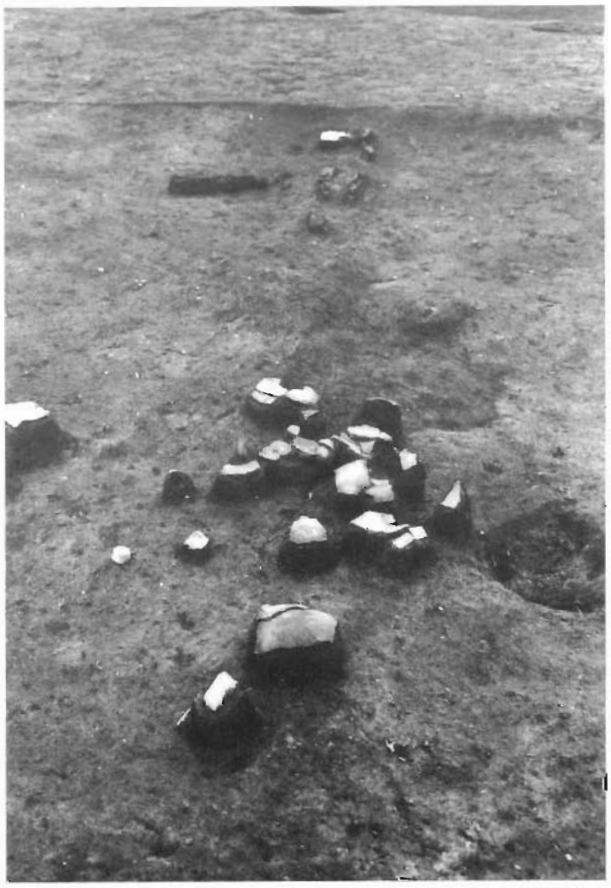


1 区　SB101・102完掘状況

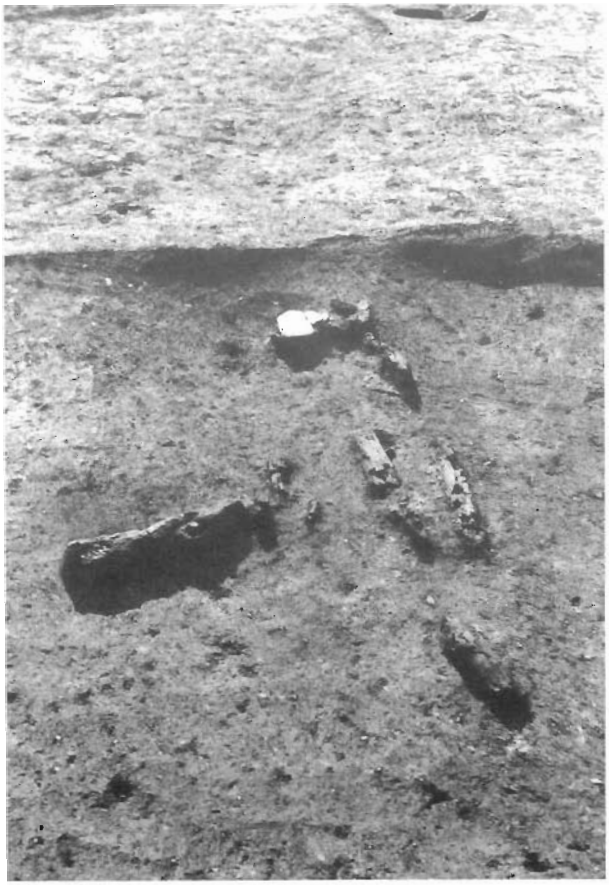
1 区　SB104・105完掘状況

図版 2

1 区　SB110完掘状況



1 区　SB110遺物出土状況



1 区　SB110炭化材出土状況

図版 3

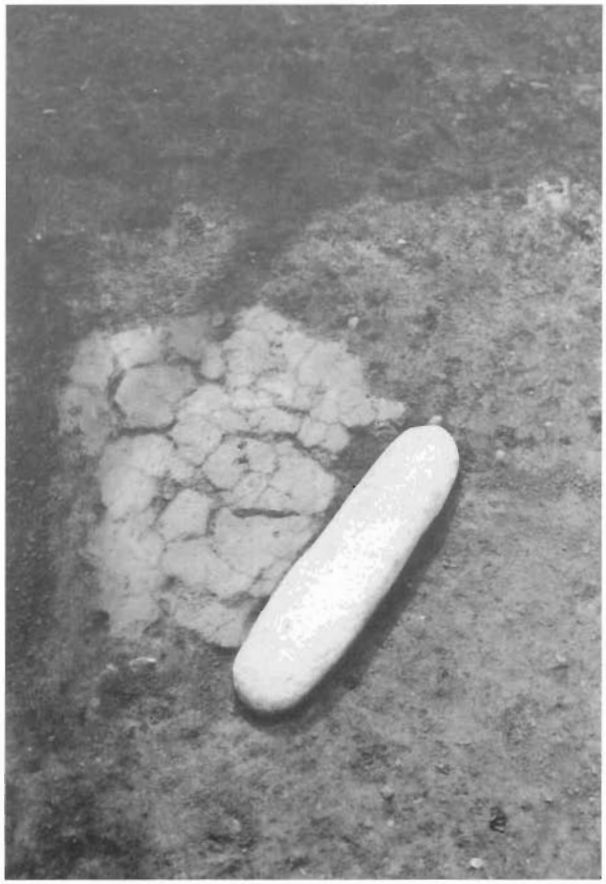
1 区　SB111完掘状況

1 区　SB112完掘状況

図版 4

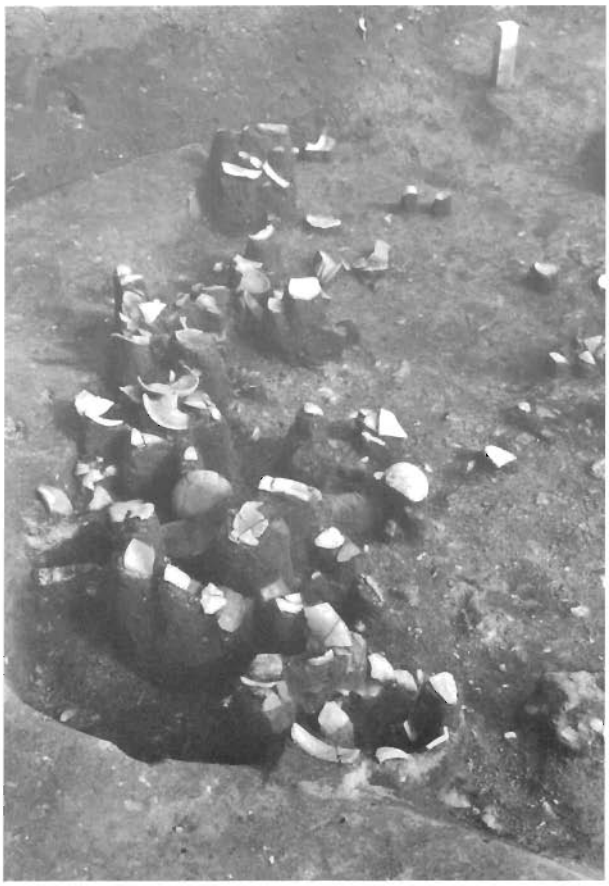
1 区　SB117・118完掘状況

1 区　SB117遺物出土状況



1 区　SB118炉跡検出状況

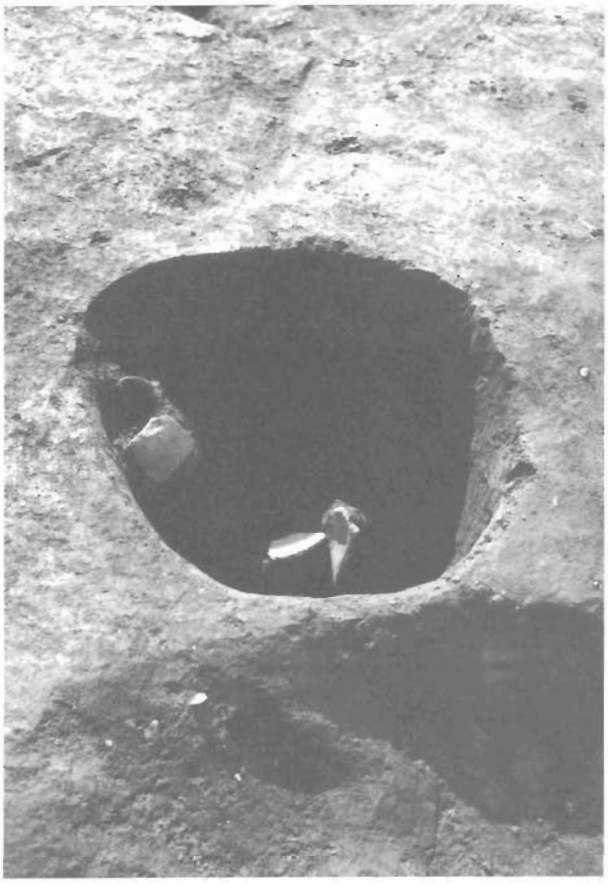
1 区　SB120遺物出土状況全景



1 区　SB120遺物出土状況近景（1）

1 区　SB120遺物出土状況近景（2）

図版 6



1 区　SF156遺物出土状況

1 区　SF133遺物出土状況

1 区　SF147遺物出土状況

1 区　SP118遺物出土状況

2 区　SB203完掘状況

2 区　SB202完掘状況

図版 8

2 区　SB204完掘状況

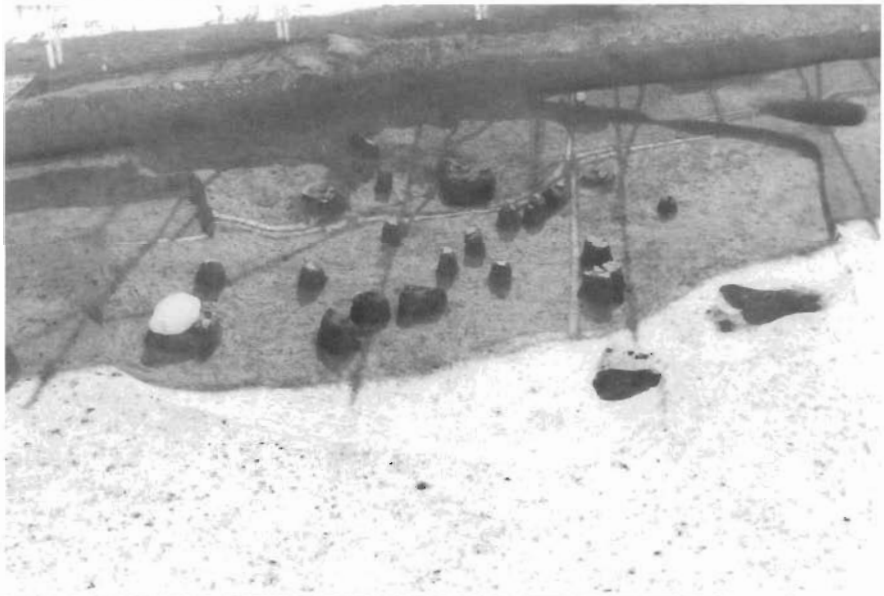
2 区　SB205完掘状況

2 区　SB206完掘状況

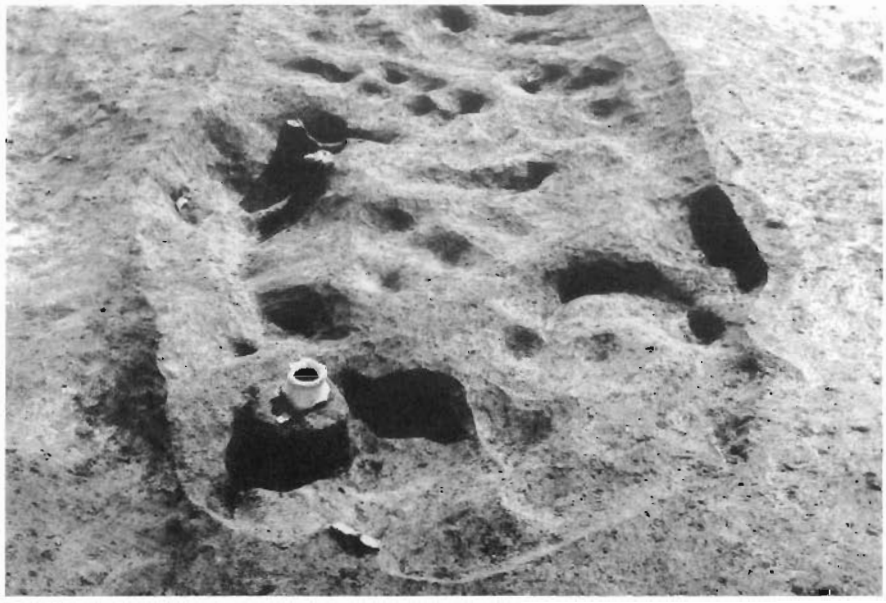
2 区　SB208完掘状況

図版10

2区　SD201・202完掘状況

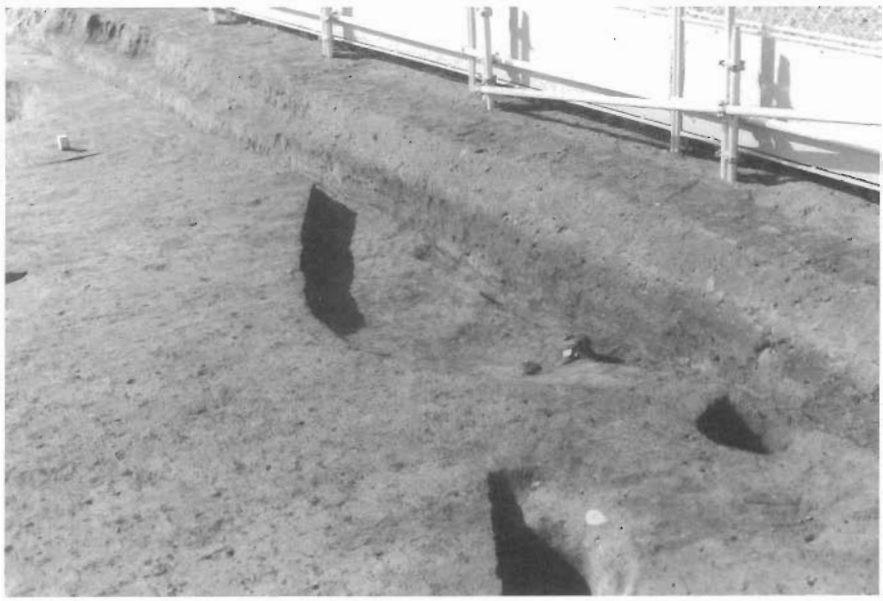


2区　SX203遺物出土状況



2区　SF2246遺物出土状況

図版11



2区　SF202完掘状況

2区　SF297遺物出土状況

2区　SF299遺物出土状況

図版12

2区　SX202遺物出土状況全景

2区　SX202遺物出土状況近景（1）

2区　SX202遺物出土状況近景（2）

3区　屋敷地1全景

3区　屋敷地1　完掘状況

図版14

3区　SD305完掘状況

3区　屋敷地2　完掘状況

3区　SX301検出状況

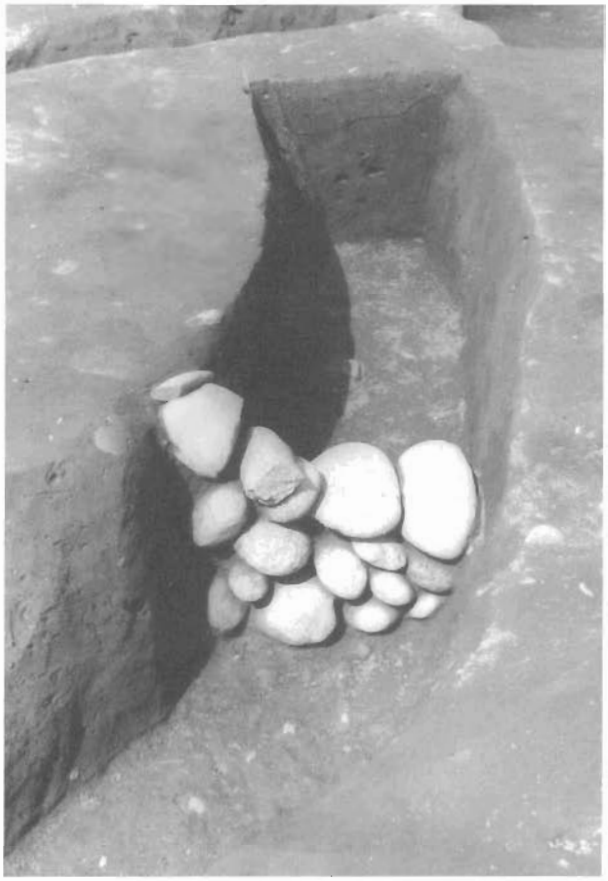
3区　SE302検出状況

3区　SF302遺物出土状況

3区　SF308内漆喰出土状況

図版16

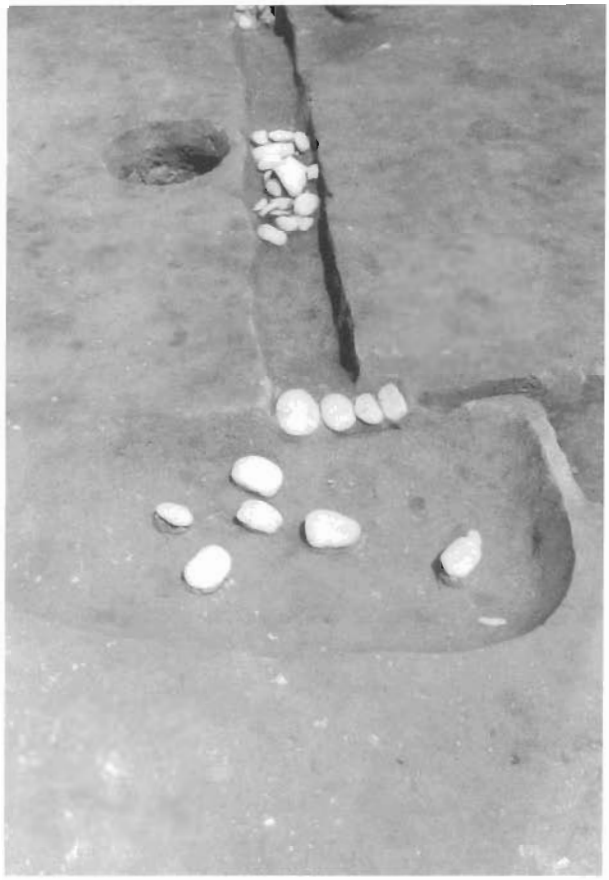
3区　SF312完掘状況



3区　SD304内礫検出状況

3区　SF307内漆喰出土状況

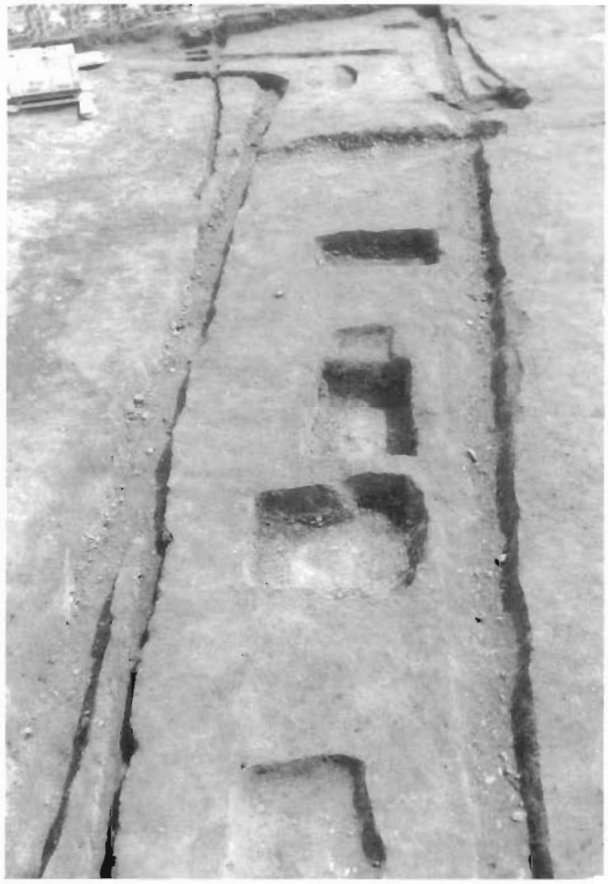
3区　SF311完掘状況



3区　SF310・SD308完掘状況

3区　SD304・305完掘状況

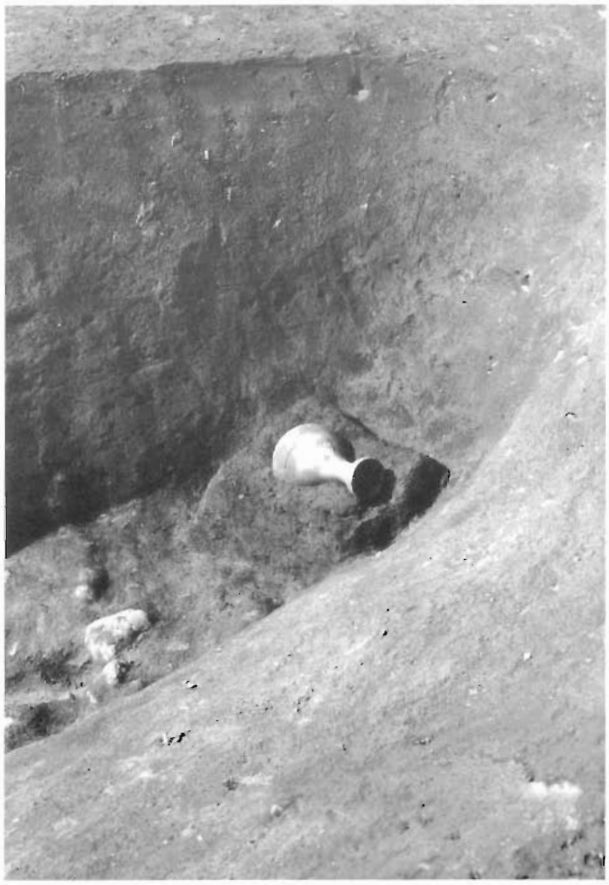
3区　SD304かわらけ出土状況



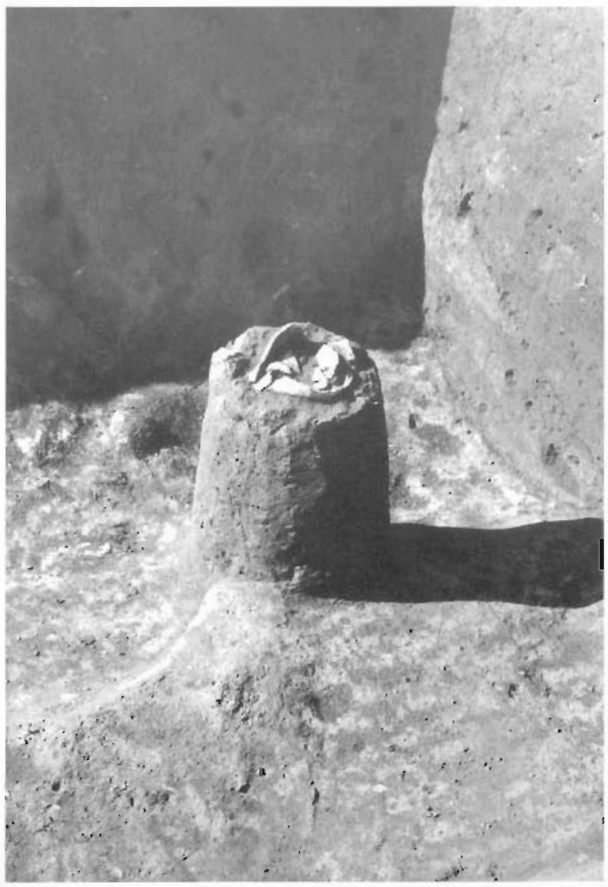
3区　SD302・303完掘状況

図版18

4区　SZ401完掘状況

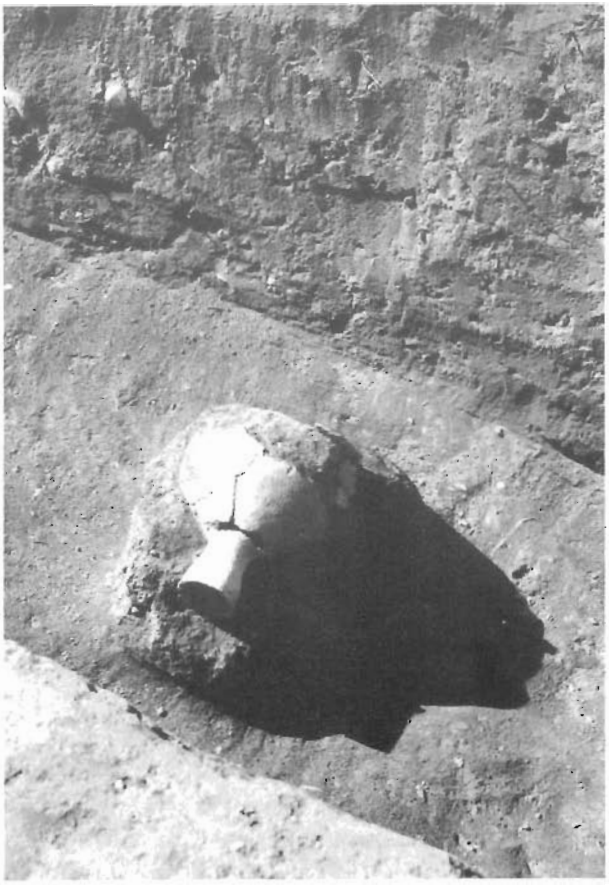


4区　SZ401周溝内遺物出土状況（1）



4区　SZ401周溝内遺物出土状況（2）

4区　SZ402完掘状況



4区　SZ402周溝内遺物出土状況（1）

4区　SZ402周溝内遺物出土状況（2）

図版20

4区　SZ403完掘状況

4区　SZ403周溝内遺物出土状況（1）

4区　SZ403周溝内遺物出土状況（2）

4区　SZ404完掘状況

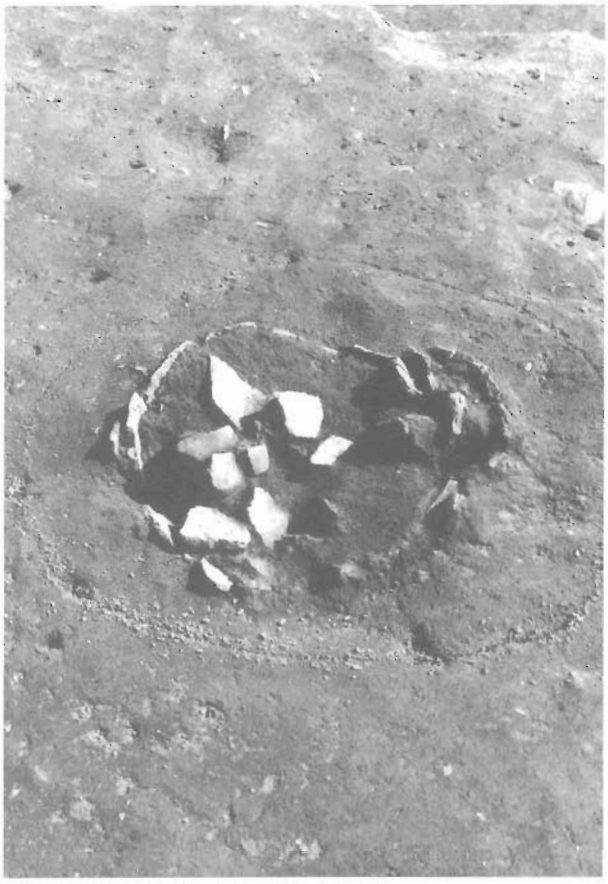
4区　SZ405完掘状況

図版22

4区　SZ407完掘状況

4区　SZ407周溝内遺物出土状況（1）

4区　SZ407周溝内遺物出土状況（2）



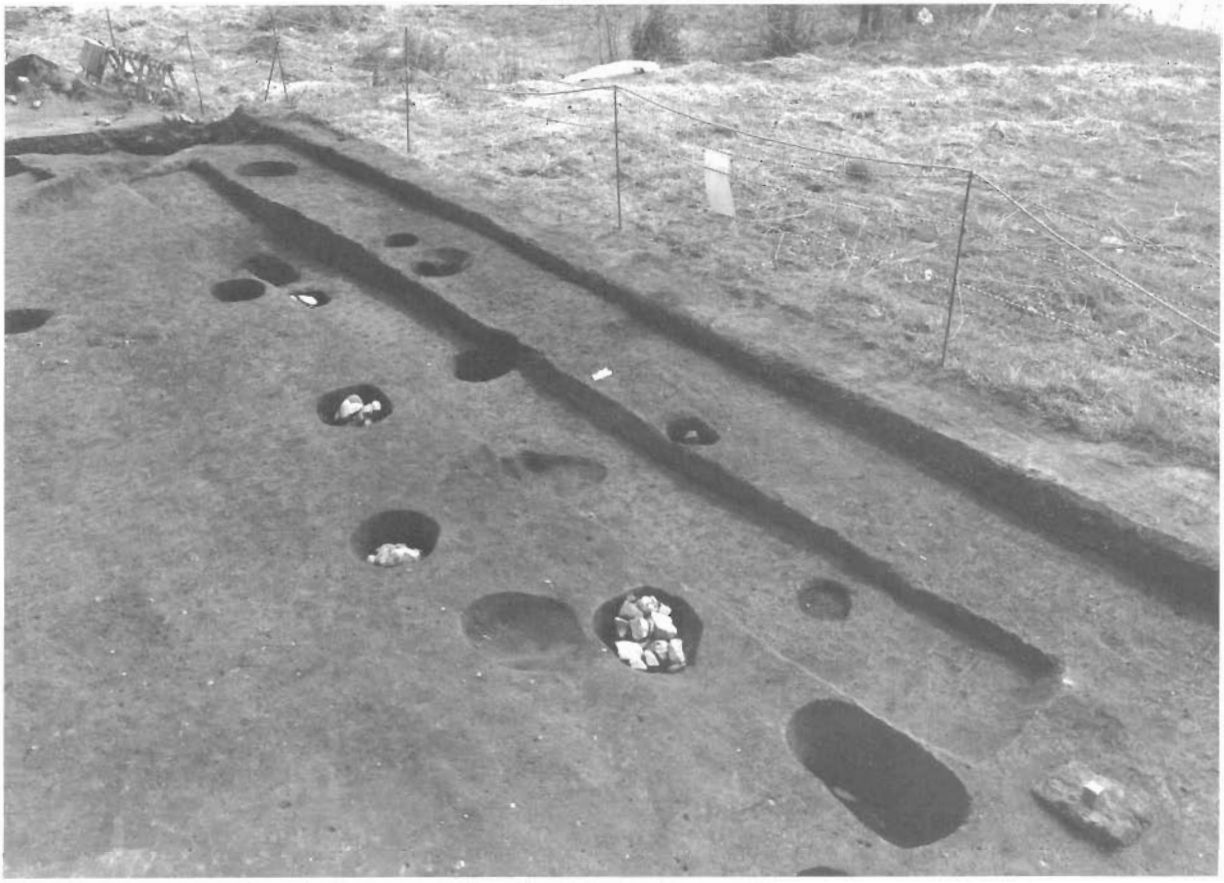
4 区　SF401検出状況

4 区　SF401完掘状況

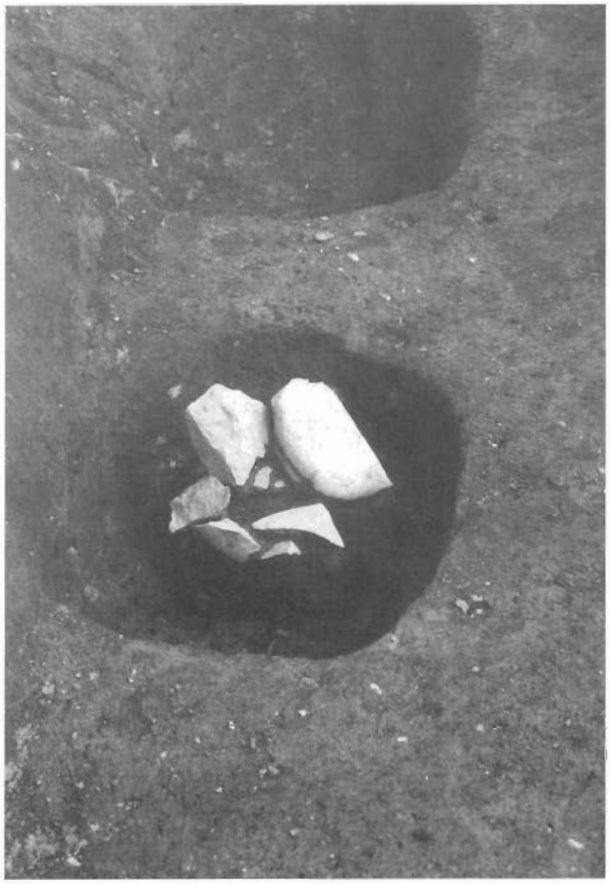
4 区　SF402検出状況

4 区　SF402完掘状況

図版24

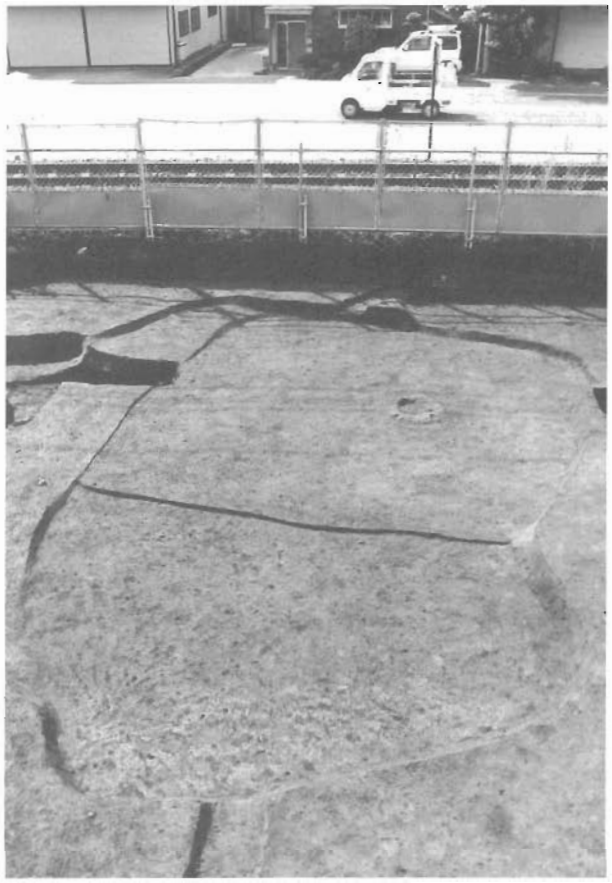


4区　小穴群全景

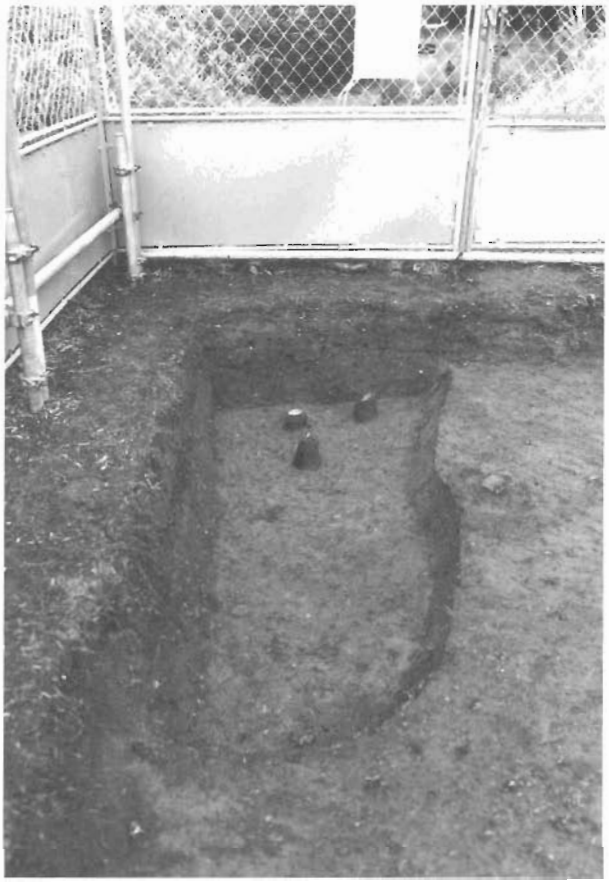


4区　SP405根石検出状況

4区　SP401根石検出状況

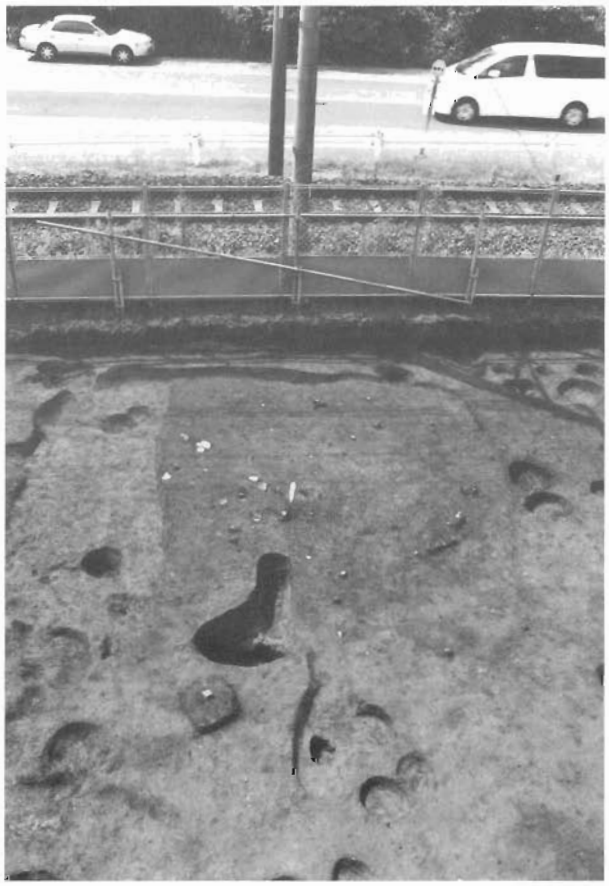


5－1区　SB517・518完掘状況



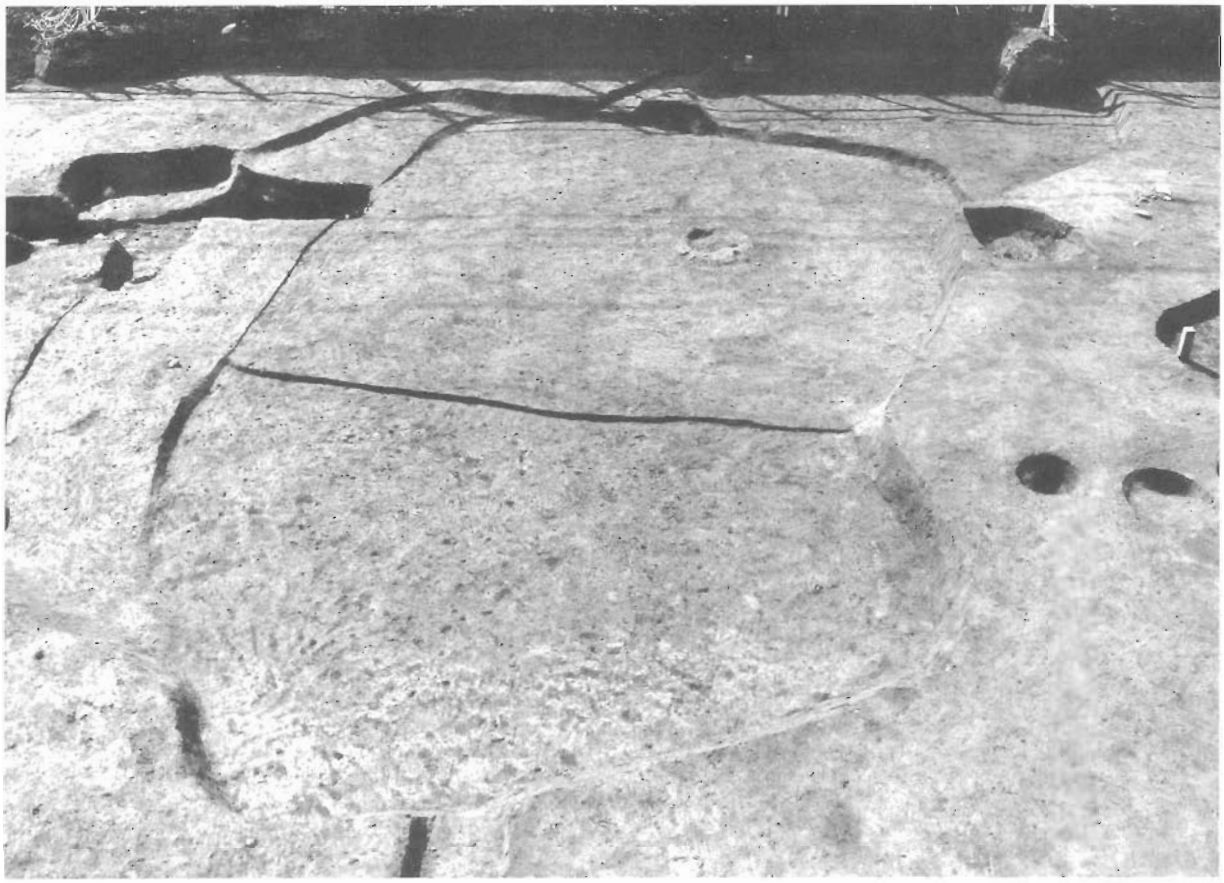
5－1区　SB519完掘状況

5－1区　SF5125遺物出土状況



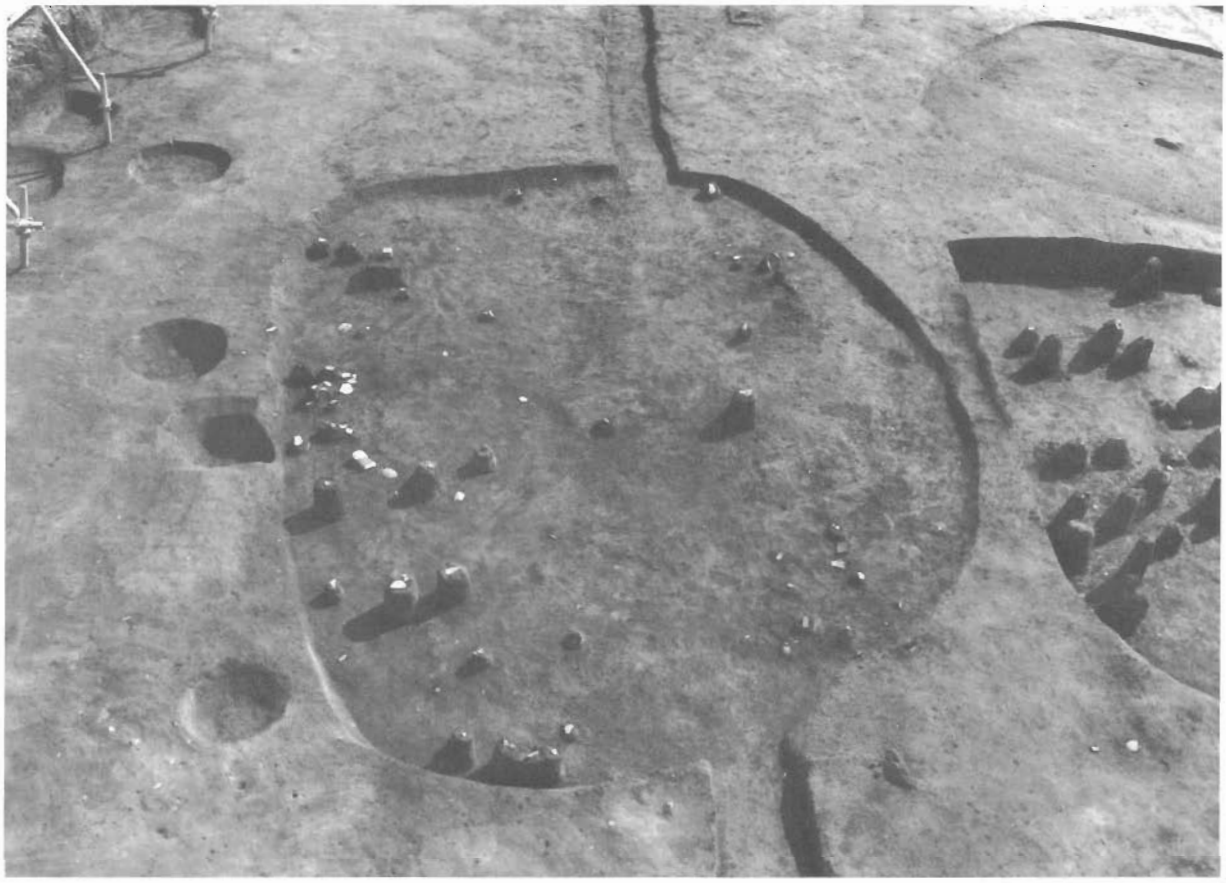
5－1区　SB516完掘状況

図版26

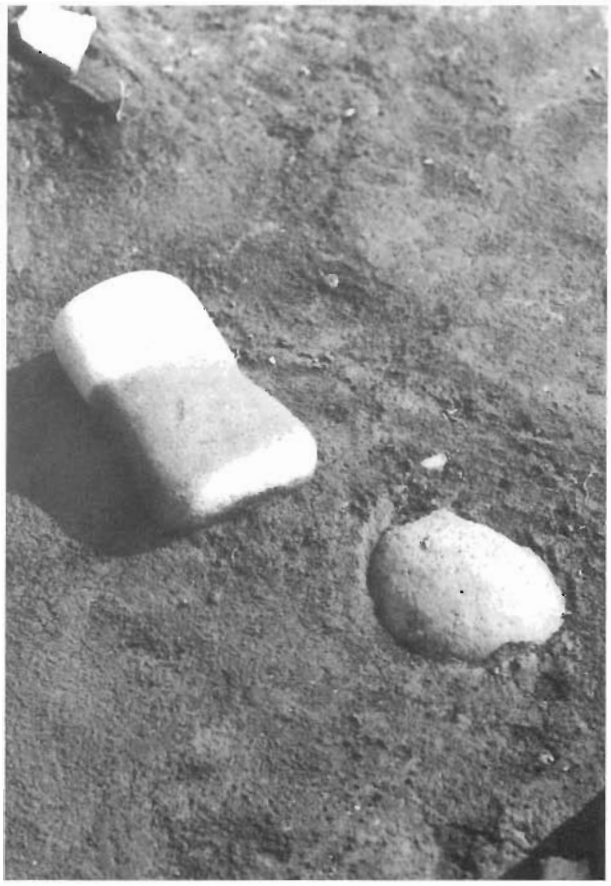


5－1区　SB525～530完掘状況

5－1区　SB521・522完掘状況



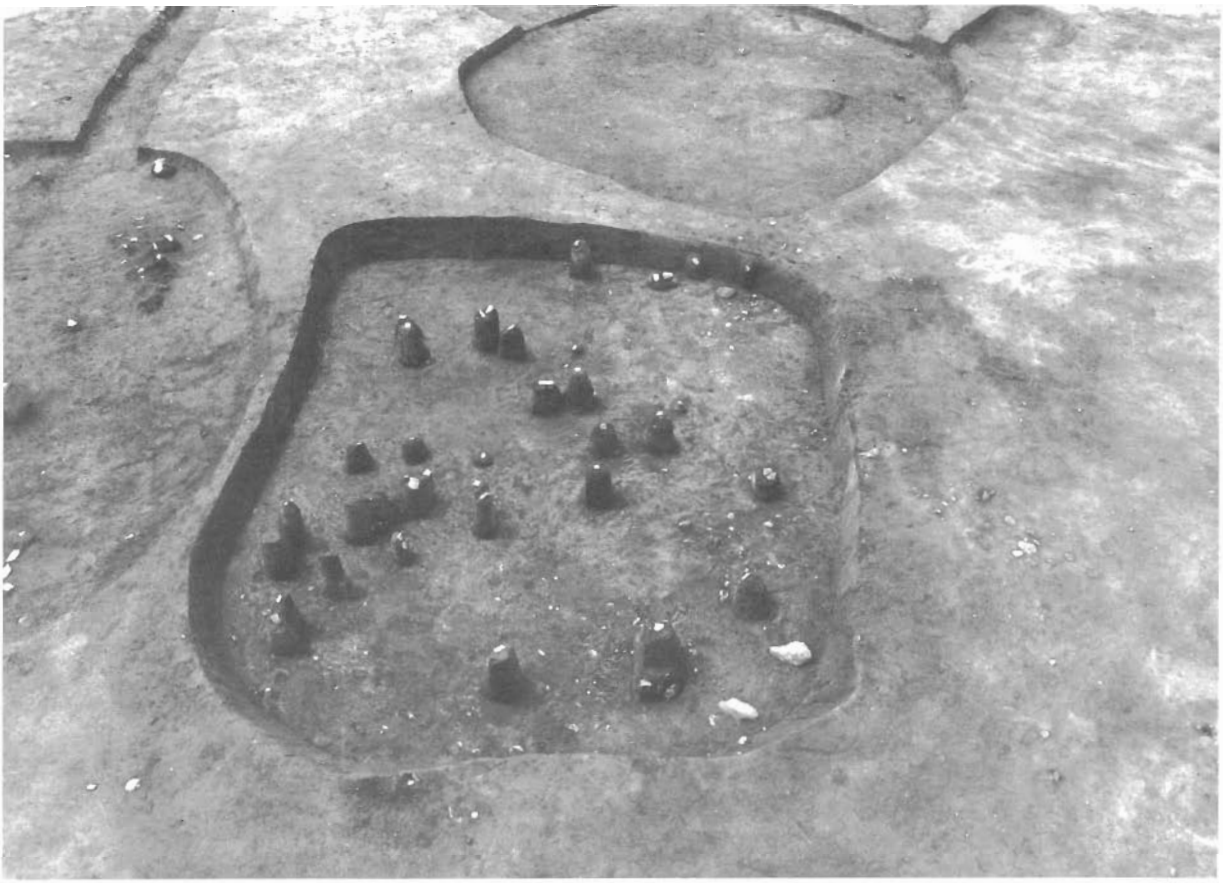
5－1区　SB520遺物出土状況



5－1区　SB520遺物出土状況近景（1）

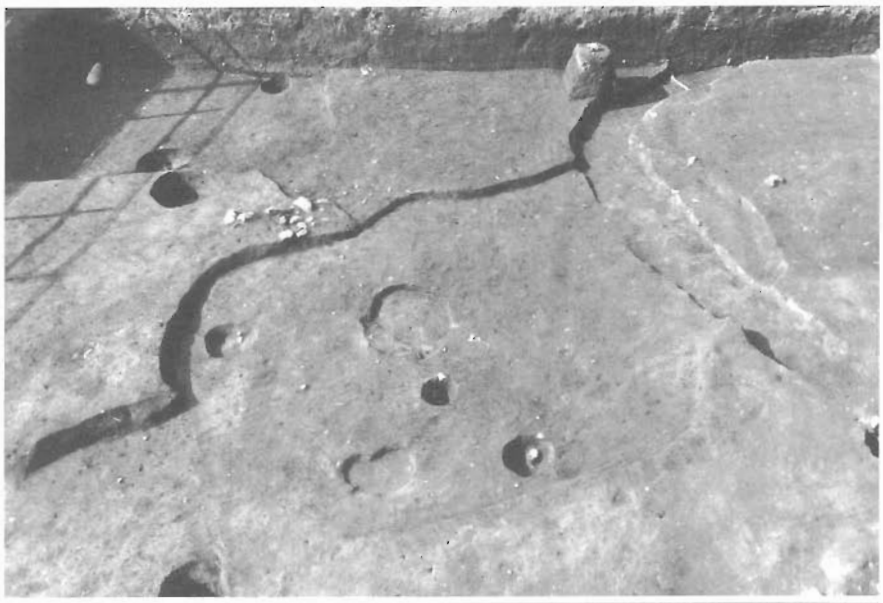
5－1区　SB520遺物出土状況近景（2）

図版28



5－1区　SB523遺物出土状況

5－1区　SB524遺物出土状況



5－2区　SB501完掘状況

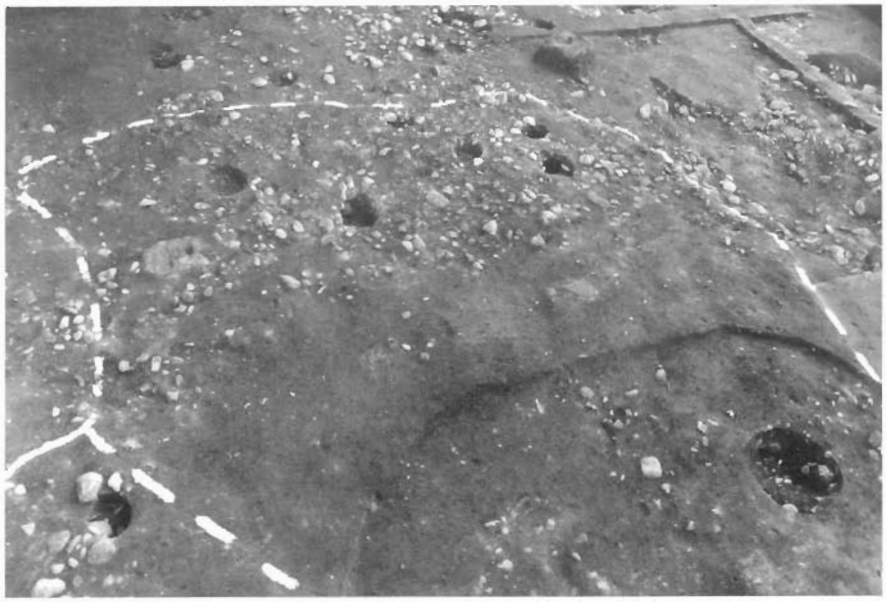
5－2区　SB502完掘状況

5－2区　SB503・508完掘状況

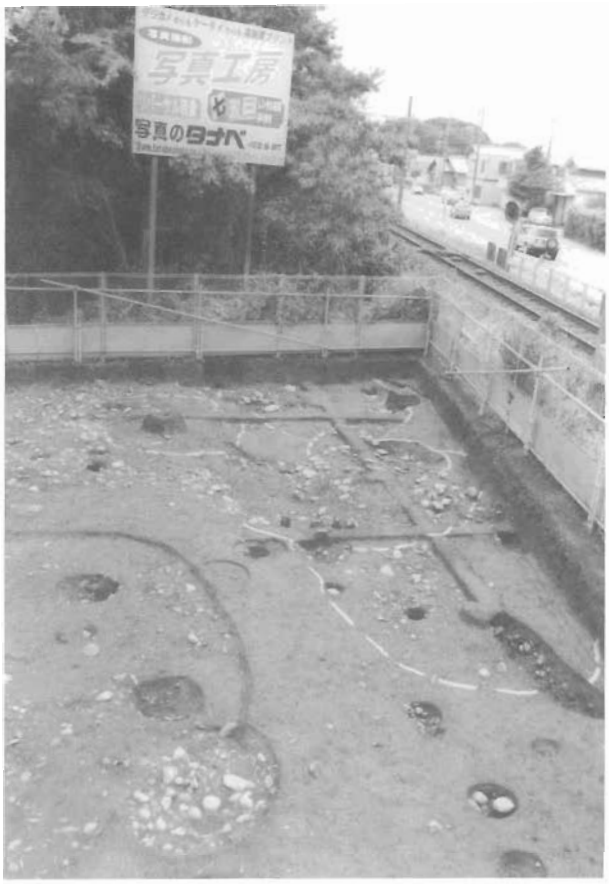
図版30

5－2区　SB504完掘状況

5－2区　SB512遺物出土状況

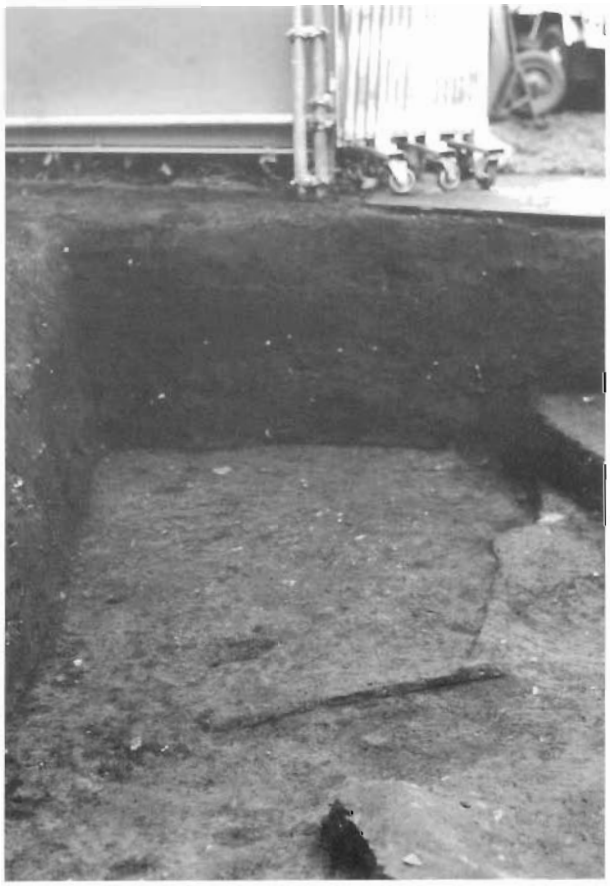


5－2区　SB507完掘状況



5－2区　SB509～510完掘状況

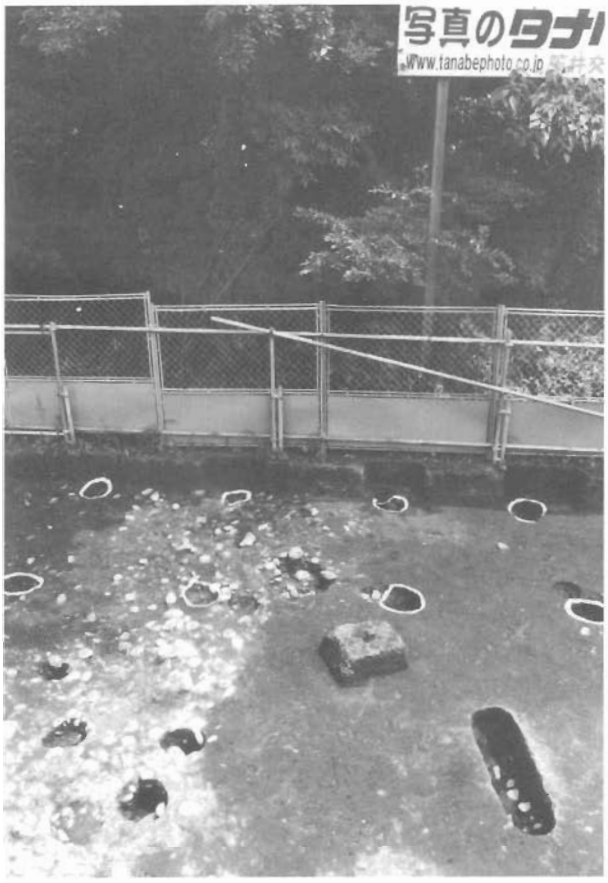
5－2区　SB513完掘状況



5－2区　SB505完掘状況

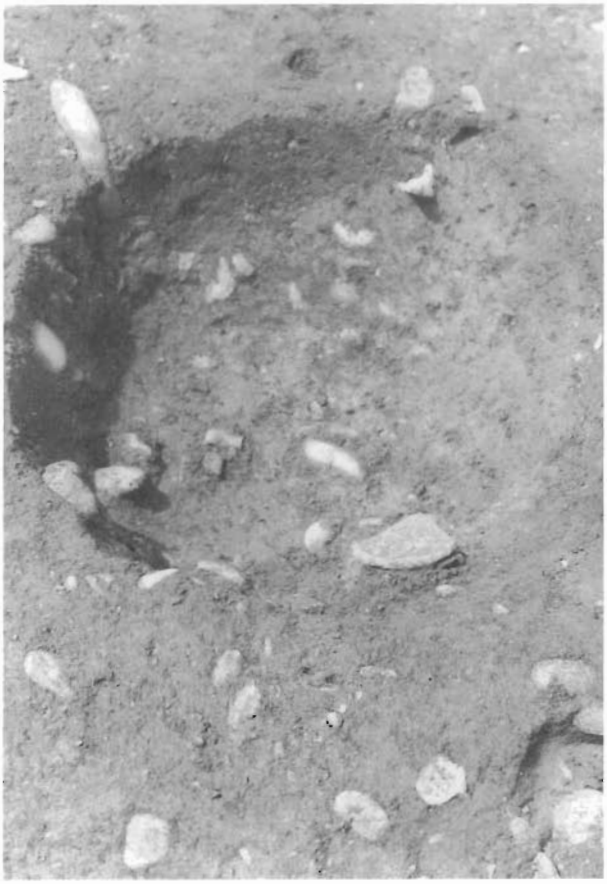
5－2区　SP556・557完掘状況

図版32

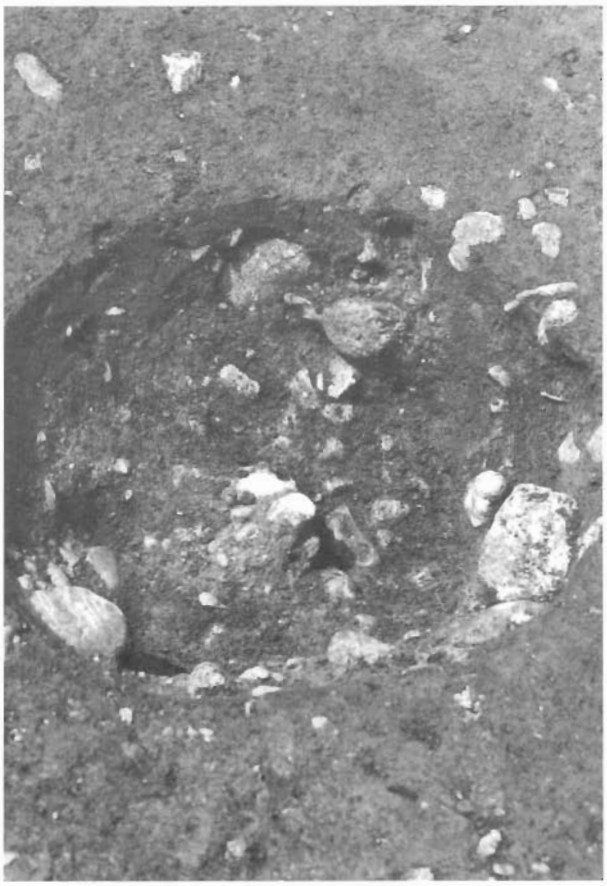


5－2区　SH501完掘状況

5－2区　SP554完掘状況

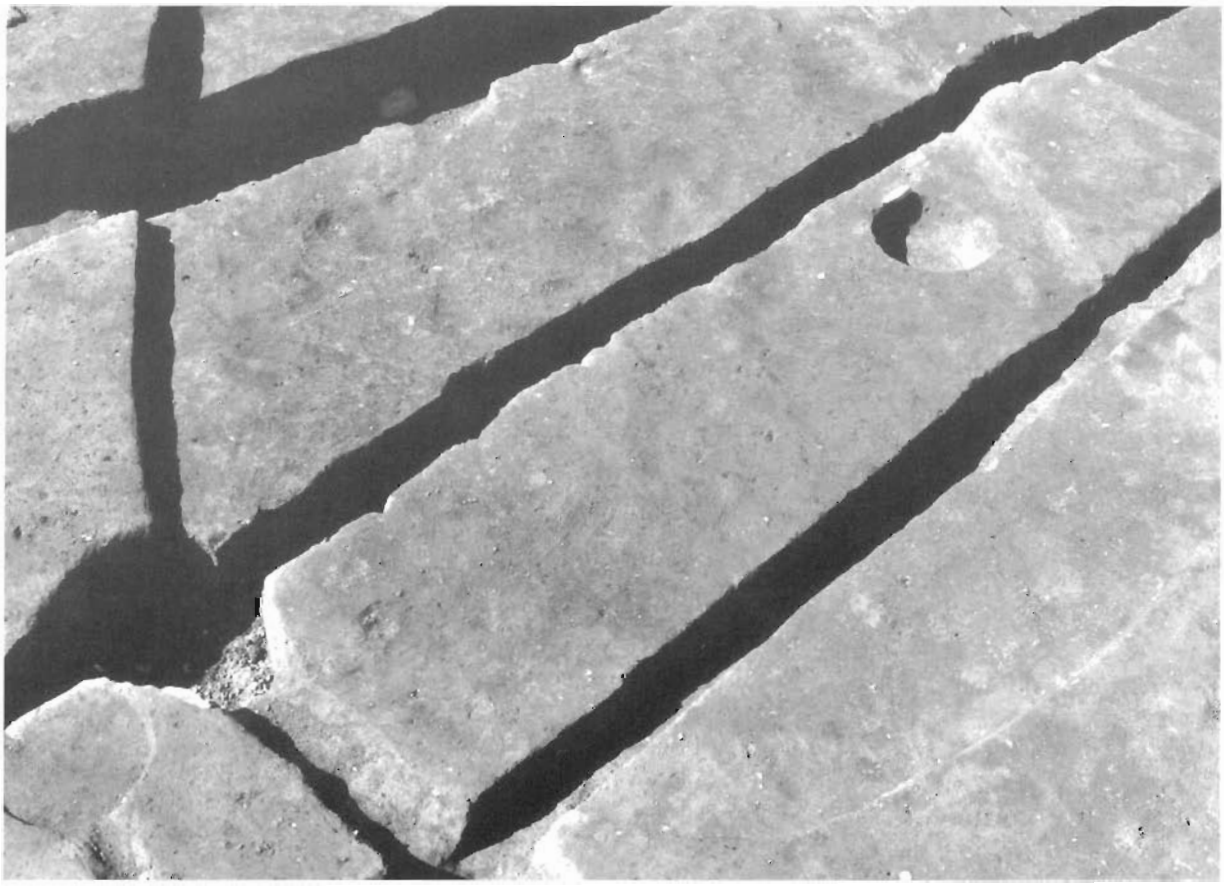


5－2区　SP555完掘状況



5－2区　SP553完掘状況

5－3・4区　SB554・555・557完掘状況

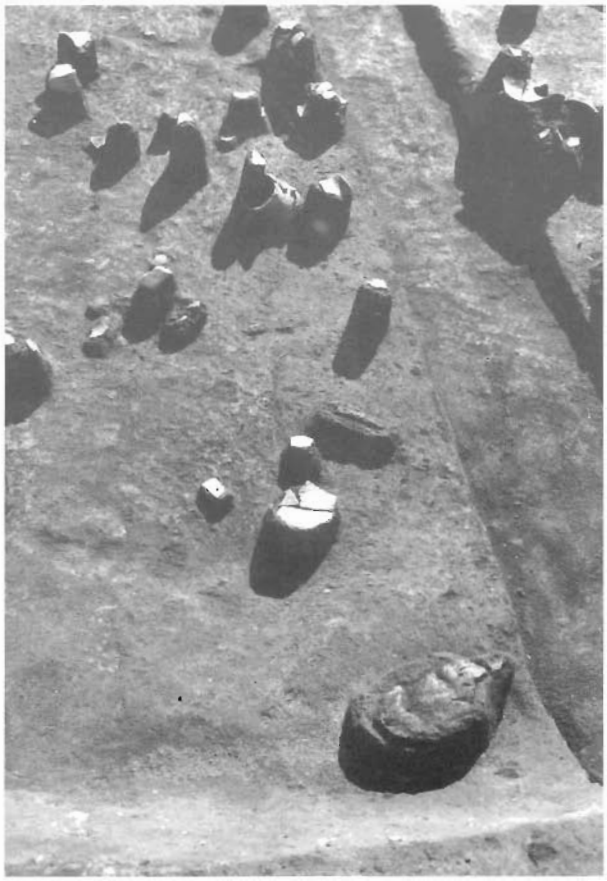


5－3・4区　SB558完掘状況

図版34

5－3・4区　SB561遺物出土状況全景

5－3・4区　SB561遺物出土状況近景（1）



5－3・4区　SB561遺物出土状況近景（2）

5－3・4区　SB562遺物出土状況全景

5－3・4区　SB562遺物出土状況近景（1）

5－3・4区　SB562遺物出土状況近景（2）

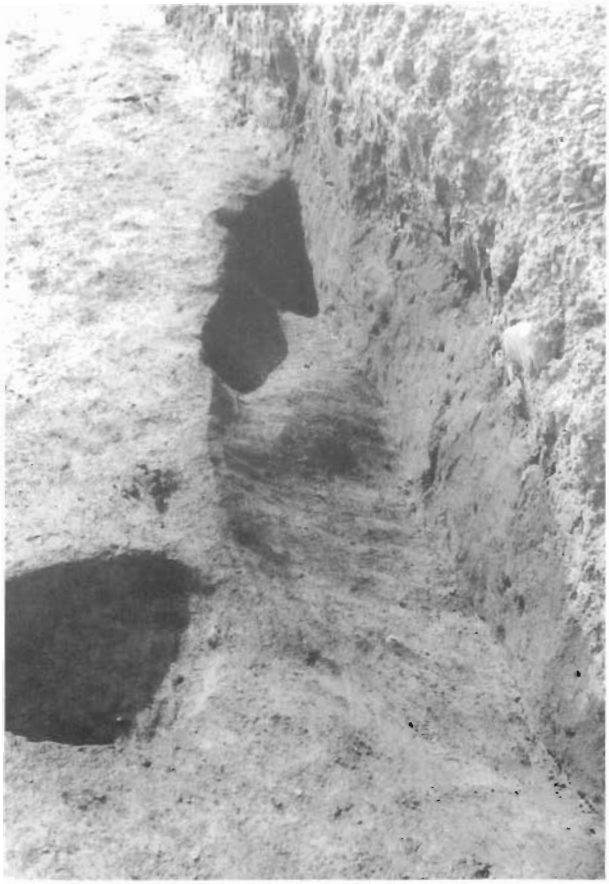
図版36

5－3・4区　SB565完掘状況

5－3・4区　SB564完掘状況

5－3・4区　SB547完掘状況

5－3・4区　SB545・546完掘状況



5－3・4区　SB544完掘状況

5－3・4区　SF5303遺物出土状況

図版38

5－5区　SB543・548・549完掘状況

5－5区　SB539・541完掘状況

5－5区　SB550・551完掘状況

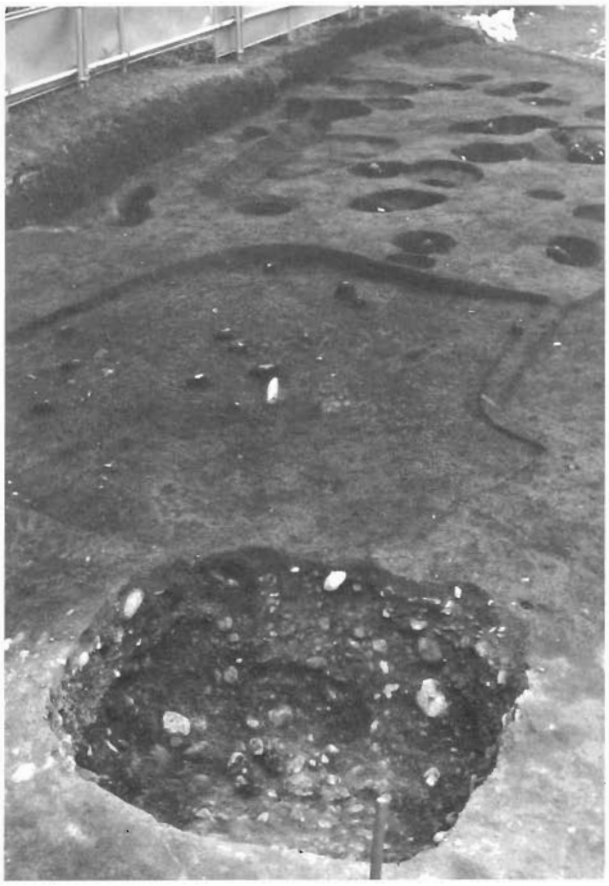
5－5区　SB552完掘状況

5－5区　SB554・555完掘状況

図版40

5－6・7区　SP5562遺物出土状況

5－6・7区　SF5502遺物出土状況



5－6・7区　SB533完掘状況

5－6・7区　SX5601遺物出土状況

6区　SB601遺物出土状況

6区　SB603遺物出土状況

図版42

5

8

18

21

149
150

1区　出土遺物（1）

50

51

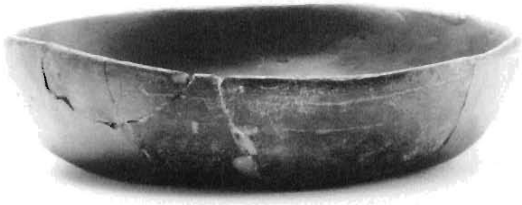
52

53

54

55

56



59

1区　出土遺物（2）

図版44

61

68

73

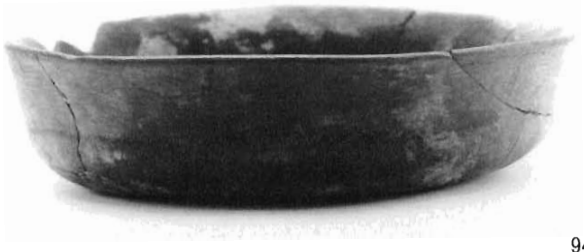
78

79

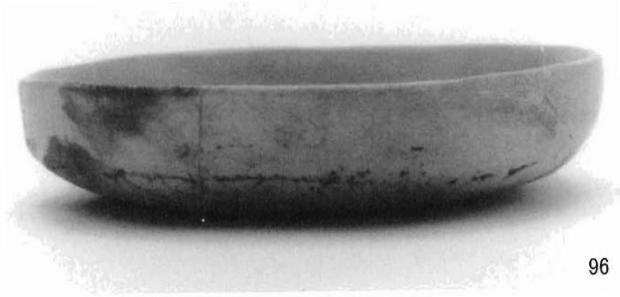
83

84

93



94



96

1区　出土遺物（3）

103

110

111

113

114

115

118

117

1区　出土遺物（4）

図版46

120

122

123

124

125

133

126
～
132

1区　出土遺物（5）

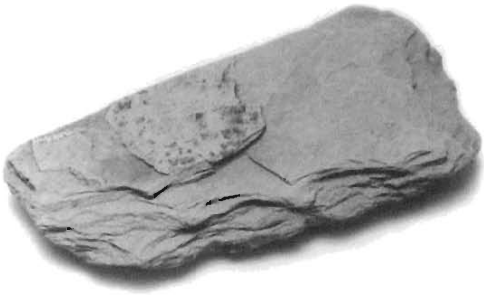
4

6

12

13

56



151

14
～
20

2区　出土遺物（1）

図版48

22

25

26

37

38

51

35・36

39～49

2区　出土遺物（2）

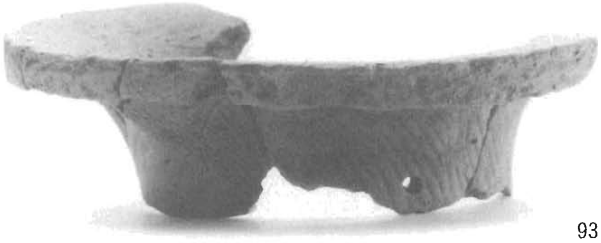
86

88

89

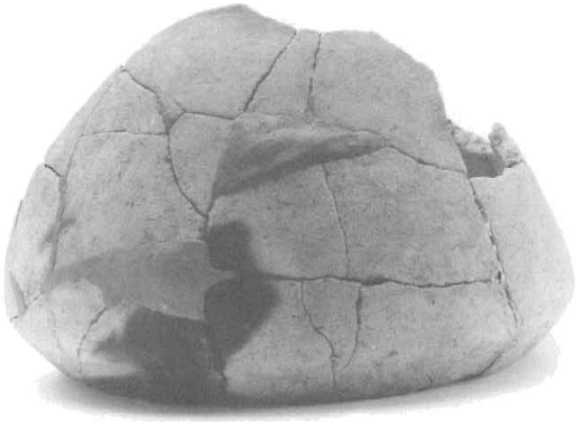
90

91



93

94



97

2区　出土遺物（3）

図版50

96

95

100

101

105

2区　出土遺物（4）

102

104

106

112

113

110

2区　出土遺物（5）

図版52

111

114

115

117

124

125

2区　出土遺物（6）

131

132

133

134

135

141

2区　出土遺物（7）

図版54

140

142

143

144

145

146

147

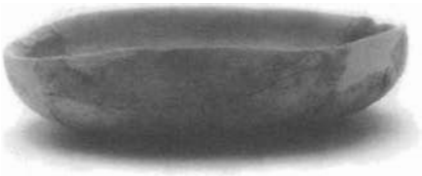
149

2区　出土遺物（8）

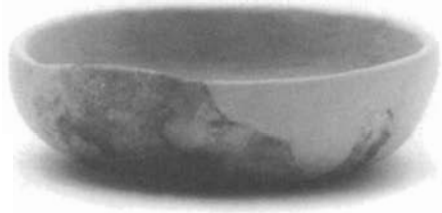
2

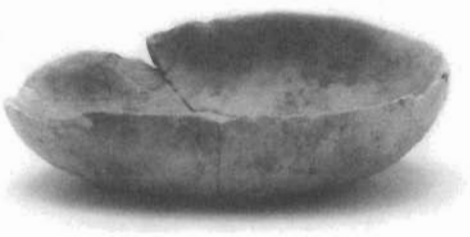
6

8

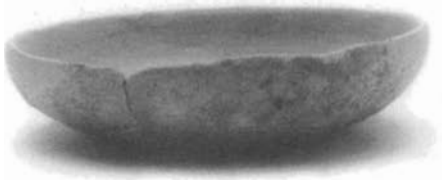

11

10


24


18

30


21

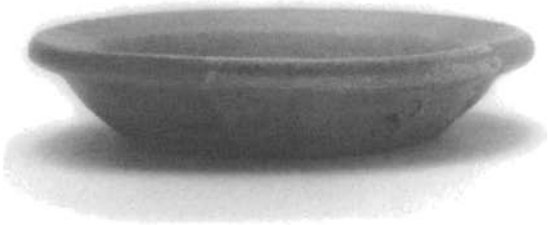
31

40

3区　出土遺物（1）

図版56

56



53

69

70

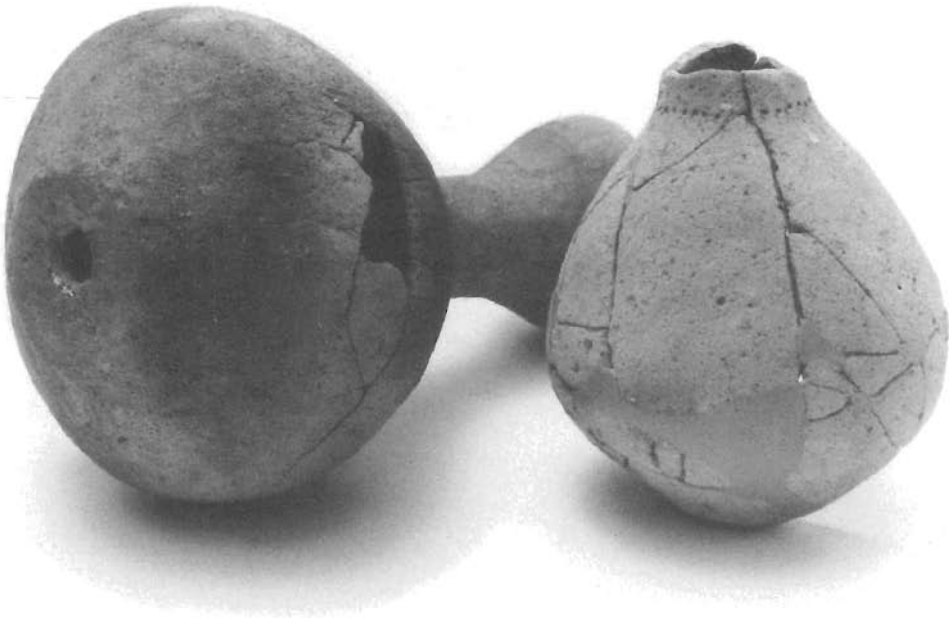
79

82

3区　出土遺物（2）

4区　出土遺物集合写真（1）

図版58



1
2
SZ401

4
5
7
SZ403

4区　出土遺物集合写真（2）

6

7

9

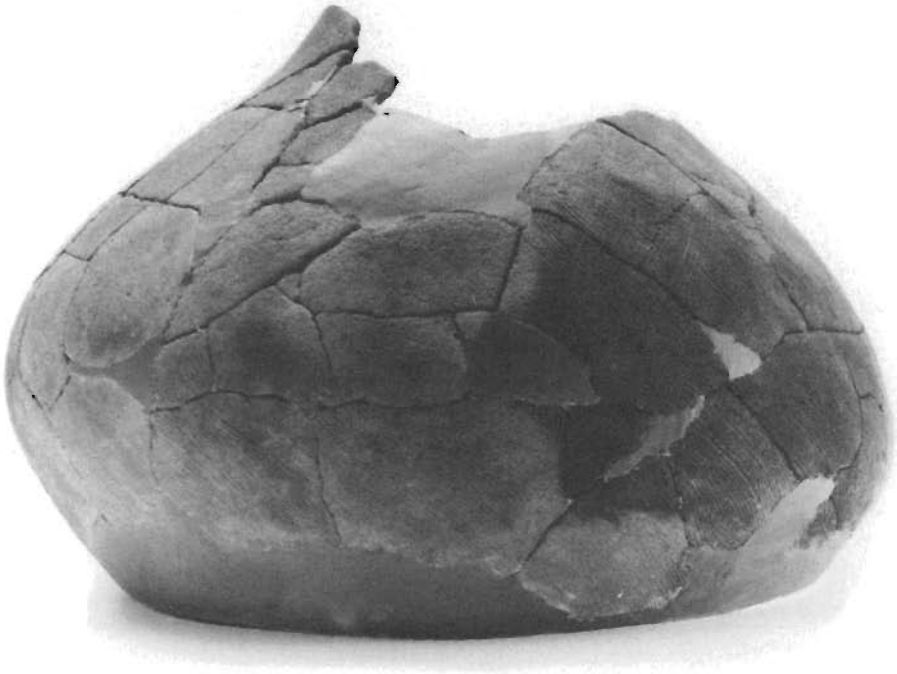
10

12

14

4区　出土遺物（3）

図版60

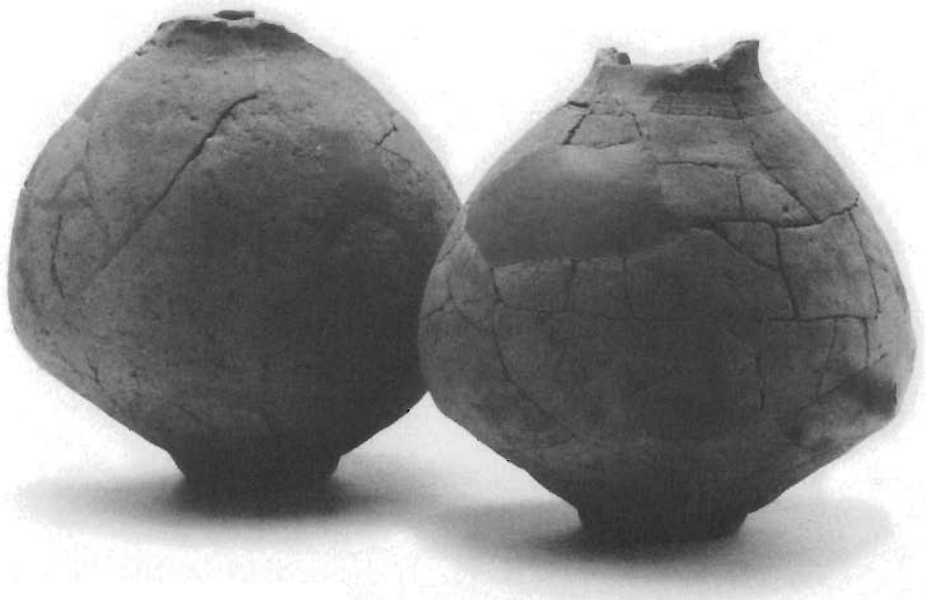


5

4

4区　出土遺物（4）

150
151
155
170



162
163

5区　出土遺物集合写真（1）

図版62

108

172

147

97

193
195
196

1

7

4

8

10～14

6区　出土遺物

図版64

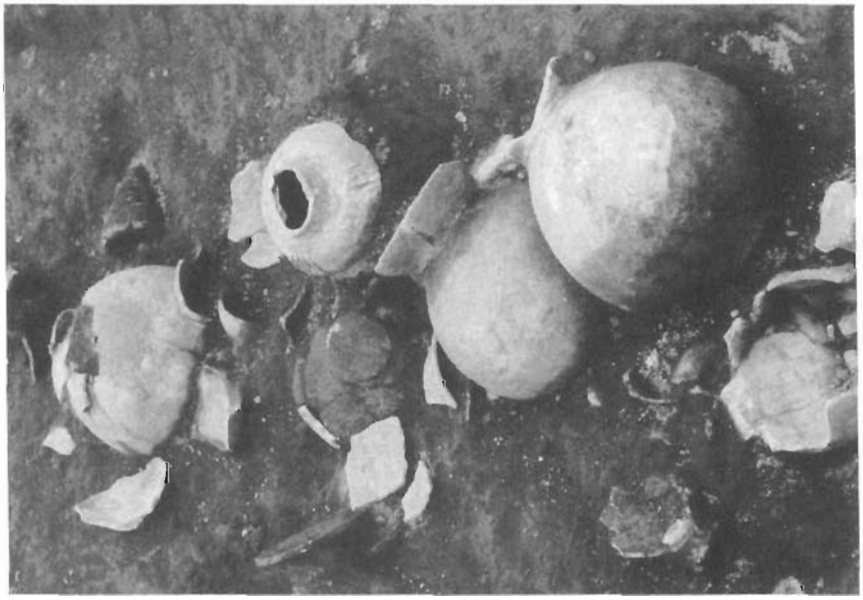
第１・２次調査地点調査風景

１号方形周溝墓１号遺構（完形率の高い土器が上層から出土した。北より）

１号方形周溝墓２号遺構（上層は破片が多く出土する。西より）

2号方形周溝墓4号遺構（完形率の高い土器が下層から出土した。北より）

2号方形周溝墓4号遺構（完形品はまとまって廃棄されている。西より）

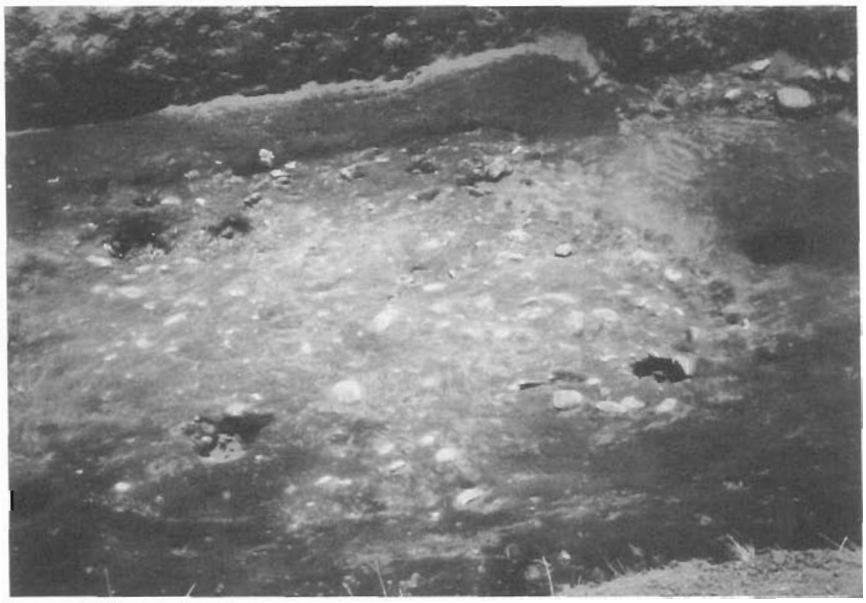


2号方形周溝墓4号遺構（壷形土器が主体である。北より）

図版66

2号方形周溝墓5号遺構（破片が多い。南東より）

2号方形周溝墓6号遺構土器棺（壷形棺で蓋も同規模の壷胴部下半を使用している。直立埋葬である。北より）



4号住居跡（隅丸形の竪穴住居である。南より）

6号住居跡（隅丸方形の小型の竪穴住居である。南より）

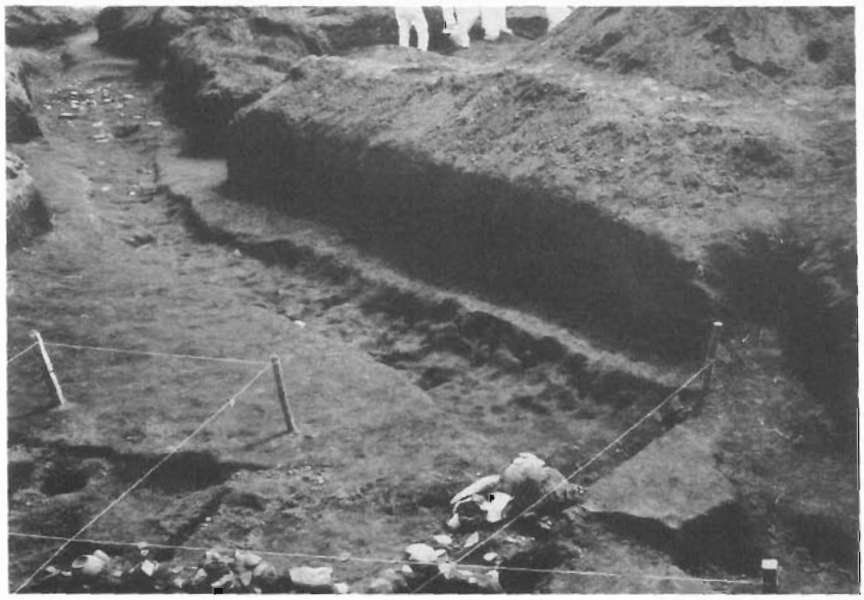
8号住居跡（隅丸長方形の大型の竪穴住居である。南東より）

8号住居跡土器出土状況（埋土上層より土器が大量に廃棄されていた。東より）

図版68

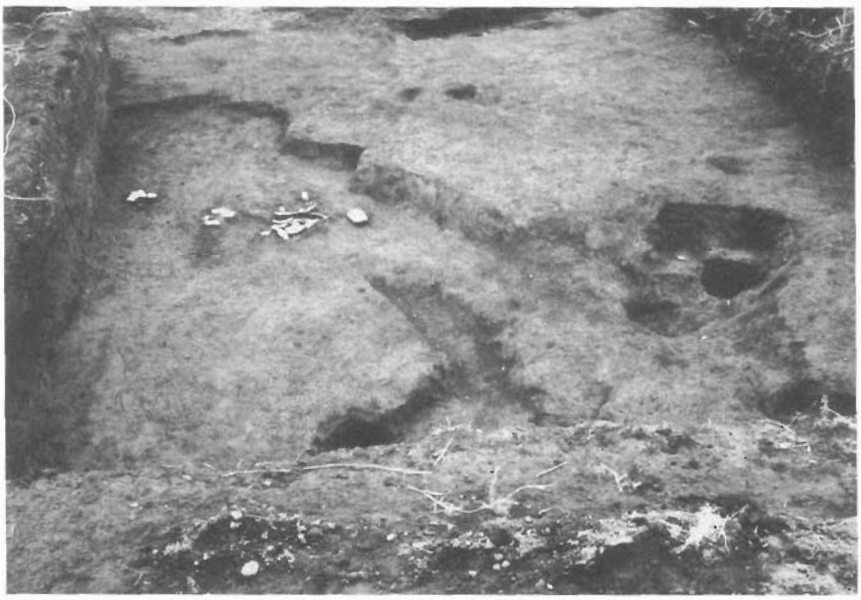
8号住居跡土器出土状況（破片が主体で高坏なども見られる。北より）

9号住居跡・溝状遺構（住居と溝は切り合うが新旧関係は不明である。東より）

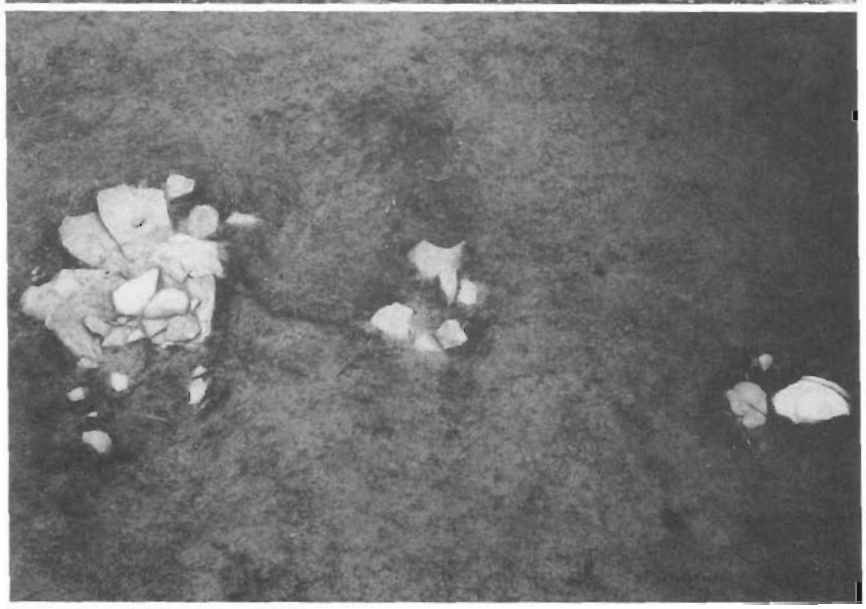


溝状遺構（住居群を区画する溝であるが、規模も小さく浅いため環濠ではない。西より）

5次調査区北半分（複数の竪穴住居が重複する。南より）



5次調査区南半分・16号住居跡（隅丸方形の竪穴住居か。南より）

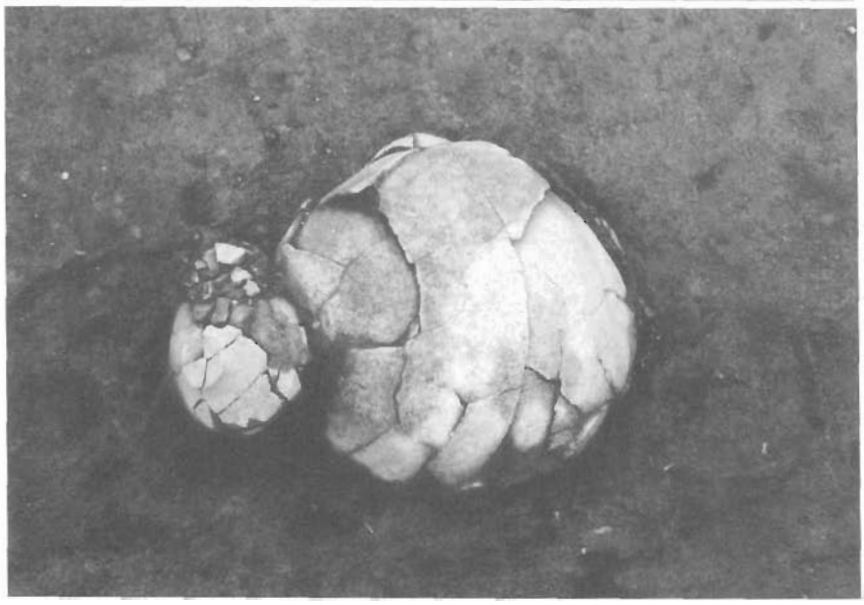


16号住居跡土器出土状況（北より）

図版70

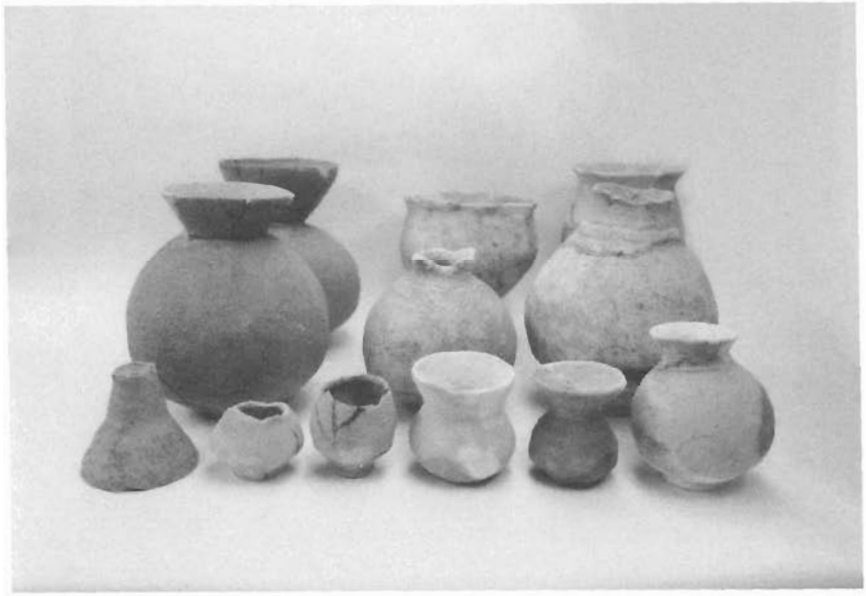
6次調査作業風景（北東より）

6次調査全景（土器が点在するが溝は近世である。西より）



1号土器棺（蓋に小型の土器を使用している。横向き埋葬である。東より）

1号方形周溝墓出土主要土器



2号方形周溝墓出土主要土器

6住居跡出土主要土器・6次調査土器棺1

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひがし　ばら　い　せき
書名	東　原　遺　跡
副書名	平成16～18年度（国）152号道路改良（交通円滑2B）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第173集
編著者名	鈴木京太郎　松井一明　本田祐二　中谷哲久　足立順司　井鍋誉之
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL054-262-4261(代表) FAX054-262-4266
発行年月日	西暦 2007年 2月 28日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
ひがしばらいせき 東原遺跡（A・B）	しずおかけん 静岡県 はままつししんはら 浜松市新原		39 43	世界測地系 34° 49′ 12″ 日本測地系 34° 49′ 0″	137° 47′ 49″ 137° 47′ 59″	200409～200702	10,981㎡	平成16～18年度（国）152号道路（交通円滑2B）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東原遺跡	墓地	弥生時代中期末～後期初頭	方形周溝墓8基・土器棺墓3基	大型壺・打製石斧・細頸壺・台付甕・受口状口縁壺	居住域と墓域の区分が分かる。
	集落	弥生時代後期中葉～後半	竪穴住居・土器集中遺構	単純口縁壺・複合口縁壺・折返口縁壺・台付甕・鉢・高坏・ガラス小玉・パレス壺・打製石斧・砥石・円盤状石製品・石錐	竪穴住居78軒検出。
	集落	奈良時代前半～中葉	竪穴建物10軒	須恵器・土師器・皮袋形土製品・横櫛・土製支脚・土錘・刀子・砥石・土馬・土製丸玉	焼失住居を検出。そこから大量の土師器坏が出土
	屋敷地・墓地	江戸時代	石場立建物・掘立柱建物・火葬墓・溝状遺構	陶磁器・硯・かわらけ・常滑産大甕・鉄銭・煙管・寛永通寶	堀で区画された屋敷地を検出。

要約

東原遺跡　弥生時代後期を中心とする大集落。居住域と墓域の境に空閑地を設けている。楕円形もしくは隅丸方形の住居を78軒検出。方形周溝墓の墓域内に土器棺墓が含まれる。方形周溝墓は四隅の切れるタイプで8基検出。

奈良時代前半～中葉にかけて竪穴建物を中心とした集落。建物内において皮袋形土製品や小型の坏を用いた祭祀が行われている。焼失建物内から大量の土師器坏が出土。供善形態・煮沸形態・貯蔵形態のほぼすべてが出土。

18世紀後半～19世紀前半にかけて堀で区画された屋敷地を検出。その区画内には礎石建物あるいは石場立建物を想定した。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第173集
東　原　遺　跡
平成16～18年度（国）152号道路（交通円滑２Ｂ）
改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
平成19年２月28日
編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒420－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261(代)
印 刷 所　㈲橋本印刷所
〒422－8046　静岡県静岡市駿河区中島390
TEL　054－286－3336